電子書籍

仏教伝来の道物語

ネパール・ルンビニー釈迦牟尼誕生池・母マーヤの体が無憂樹にふれて釈迦は誕生した

お釈迦様の仏法伝来の国々を訪ねてインド・スリランカ・パキスタン・中央アジア・中国・韓国・日本への伝来の道を辿ってみた。仏陀の聖地巡礼、釈迦の誕生地、覚りを開いたブッダガヤーの菩提樹の下・初転法輪を説いた鹿野苑・雨安居で留まった祇園精舎・法華経を説いた霊鷲山・涅槃となったクシナガラ等々の原風景を体感した。仏陀の教法はインド・ガンダーラ・西域・中国等へ北伝仏教(大乗仏教)が東漸し、やがて日本へ仏教伝来となる。また南に伝えられた南伝仏教(小乗仏教)は、スリランカ(セイロン島)を経て、東南アジアの国々へ海のシルクロードを渡り伝播した。南伝仏教はブッダの遺骨を納めた仏塔だけを拝礼する一仏崇拝の仏教となり現在に至っている。北伝仏教は伝来の過程に於いて、西域の国々のアニミズムと混淆し、更に中国に入り『論語』・『老子』・道教等の文化哲学で解釈された仏教は、現世利益の信仰となって終点の日本に伝来したのである。その仏教を日本民族はどの様に受け止めて来たのか、その過程を庶民的な感覚で国内の霊場や磨崖仏を探索した。諸々の国々の仏教伝来はどのような経路を辿ったのか、「仏教伝来の道物語」を観たい弥次馬願望で１０余年かけて探訪し、訪れた国々の仏跡や仏像を体感し、インド求法の玄奘三蔵や法顕の行路を交えながら現場報告の編集とした。

《全文章量はＡ４、横書き４３字×行数４０行×１６５枚となります》

池田　勝宣

はじめに

古代アジアの大きな文化圏はインド文化圏と中国文化圏であった。この２つの文化圏は同じアジア大陸にありながら、チベット高原やヒマラヤ山脈に隔てられ、まったく違った文化圏を形成した。この２つの文化圏の交流は、紀元前２世紀ごろ中央アジア横断の東西交通路が開かれた時代から始まる。西の終点はローマ、東は長安に到る東西の道は、西から金属類が東へ運ばれ、東から絹織物等が運ばれ、この道が後にシルクロード(絹の道)と呼ばれた。この東西交易路から大乗仏教の伝来を齎した。この大乗仏教伝来の道は、中央アジアから中国長安に入り中国の各都市へ広がり、そして朝鮮半島へ、やがて東の果て日本への伝来は、仏教公伝５５２年(５３８年説)に仏教伝来となる。

この北伝仏教(大乗仏教)の伝播は現在のインド北部からパキスタン、ガンダーラ、アフガニスタン、タジキスタン、ウズベキスタンと中央アジアの国々へ伝播、中国への伝播はカラコルム山脈を越えて現在の新疆省に入り、西域南道と西域北道の２行路から伝播した。又、北インドからチベット族と漢族の往来した茶馬古道(雲南省とラサを結ぶ)を経て雲南から四川省へも伝播した。これらの伝播路に於ける西域・河西回廊・四川省の石窟仏や磨崖仏等を探索した。

仏教は約２５００年余りの歳月を経て多くの国々のアニミズムや地母神を吸収と混淆しながら、北へ進み、伝来地の各民族たちは仏教を密教信仰として崇拝し、その過程でゾロアスター教・キリストの一派、景教と自然崇拝(アニミズム)と習合しながら仏教は中国へと伝播した。中国での仏教の理解は『論語』『老子』・道教等の思想で仏教を解釈し、中国仏教の成立をみた。後、更に東漸した仏教は高句麗・百済を経て日本へ伝来となる。そして我が国の祖先たちは、古代日本の八百万(やおよろず)の神信仰や先祖崇拝の信仰文化で仏教を理解したのである。

又、南伝仏教は、南インドからスリランカに伝播した仏教は、海のシルクロードを通って東アジアに向かい、ビルマ、タイ、カンボジア、ラオス、ベトナムへと伝播となる。この南伝仏教は、釈迦像だけを崇拝する仏教で、遺骨を祭る仏塔(ストゥーパ)を礼拝する上座部仏教(長老仏教)が定着した。一仏主義仏教の釈尊像だけを崇拝する南伝仏教と、北伝の大乗仏教は多仏像を崇拝する仏教拝礼の形となり現在に至っている。

チベット仏教(蔵伝仏教)は７世紀前半、インド北部シッキム州辺からヒマラヤ山脈を越えて、直接チベットへ伝播し、更にチベットから雲南へ、そして中国山西省五大山を経てモンゴル・旧満州方面へと広まった。求法に於いては中国の初期仏教法は渡来僧たちの布教活動だけでなく中国側から積極的に朱士行(しゅしこう)、法顕(ほっけん)、玄奘(げんじょう)、義浄(ぎじょう)らがインドへ経典や仏陀聖地巡拝と求法に走り、タクラマカン砂漠を越え、カラコルム山脈越え艱難辛苦を厭わず多くの年月を費やし言語の壁も乗り越えて、仏教の経典翻訳完成まで全霊を注いだ僧たちの往来道をも体感報告としたい。

２０１１年　師走　　池田　勝宣

目次

はじめに　１

第１章・インド編　４―２６
古代インド・お釈迦さまの生れる前のインド・ヒンドゥー教・ヴィシュヌの９番目がブッダという・聖なるガンジス川・お釈迦さま誕生・四つ住期・学生期・家長期・林住期・遊行期
何故に釈尊はバラモンの教えに従わなかったのか・聖地巡礼・釈迦誕生のルンビニー園
ブッタガヤー・苦行する釈迦像・鹿野苑・祇園精舎・霊鷲山（法華経の聖地）・王舎城
『法華経』を読む・クシナガラ（涅槃）・釈尊の荼毘塚と仏舎利と塔・アジャンタ石窟群
エローラ石窟群・仏教の三霊樹

第２章・パキスタン編　２７－３５
スワート地方・シャンカルダールの仏塔・ブトカラ遺跡の仏塔・山岳仏教都市タクテイ・バヒ・タキシラ仏教都市遺跡・大乗仏教の栄え・ガンダーラ美術と仏像の誕生・平山コレクション『ガンダーラとシルクロード』を観る
余話・パキスタン北部・フンザ地方・カラコルム山脈越え・国境審査

第３章・セイロン島から東南アジアへ伝播した南伝仏教　３６－４３
３－１・スリランカ・ボロンナルワ遺跡・シーギリヤ宮殿・仏歯寺
上座部仏教・南伝仏教・上座部（小乗仏教）・大乗部（大乗仏教）・説一切有部
３－２・タイの寺院・３－３・ラオスの寺院・３－４・ミヤンマーの寺院
３－５・インドネシアの寺院

第４章・中央アジア編　４４－５３
４－１・アフガニスタン・バーミヤーン大仏
４－２・トルクメニスタンの遺跡・ニサ遺跡・アナウ遺跡
４－３・ウズベキスタンの遺跡・テルメズの仏塔・ファヤーズテペの坐像
４－４・カザフスタンの遺跡
４－５・タジキスタンの遺跡
４－６・キルギスの遺跡・余話・ブルジェワリスキーを尋ねる・シベリア抑留考

第５章・玄奘三蔵天竺へ求法と聖地巡礼の旅立ち　５４－６６
玉門関・陽関・高昌故城・ベゼクリ千仏洞・西北インドへ・東インドへ
余話・ナーランダー寺院に日本人僧侶がいた・仏教聖地へ中国僧たちの求法
法顕の旅（『法顕伝』より抜粋）

第６章・中国編　６７－１１２
６－１・新疆ウイグル自治区・トルファン・クチヤ仏教遺跡・クムトラ石窟
６－２・河西回廊を行く・敦煌仏跡・敦煌莫高窟小史１７窟（ペリオ・能海寛・河口慧海）
大谷探検隊・東西千仏洞・楡林窟・蘭州・炳霊寺

６－３・日本文化の源流長安の古刹を尋ねる・香積寺・草堂寺・興教寺・華厳寺跡
青竜寺址・大興善寺・大雁塔・小雁塔・唐代に仏教以外の伝来
６－４・五台山の寺院・文殊菩薩・留学僧円仁・菩提僊那・大仏開眼供養会
『華厳宗』を読む
６－５・雲岡石窟・山西省大同
６－６・白馬寺・河南省洛陽市
６－７・龍門石窟奉先寺洞・奈良大仏・飛鳥寺・鎌倉大仏
６－８・四川省の仏像群を歩く・楽山大仏・蒲江飛仙閣摩崖・夾江千仏崖石刻
皇澤寺摩崖造像・広元千仏崖北山石窟・巴中石窟群・南龕摩崖造像
水寧寺石窟・閬中大仏寺・安岳石刻・円覚洞石刻・北山石窟・大足石彫刻
６－９・天台宗の聖地国清寺・浙江省
６－１０・中国禅の源流を観る・河南省

第７章・チベット仏教（蔵伝仏教）　１１３－１２２
チベット仏教・チベット仏教の尊像・モンゴル仏教寺院を探訪・フレーツァム（仮面踊り）
『チベット死者の書』から考える・民間信仰・オボー祭り・ポタラ宮

第８章・韓国編　１２３－１３７
華厳宗太白山浮石寺・『華厳宗縁起絵巻』・石窟庵・瑞山三尊石仏・釈迦の五印
弥勒菩薩半跏思惟像について・月精寺

第９章・日本への仏教伝来　１３８－１６２
東アジア仏教東漸を概要・盲目で来朝した鑑真・我が国への仏教伝来の背景
神仏習合・九州宇佐神宮・余話・相模鶴岡八幡宮大塔
日本に釈尊の遺骨がある
仏教と共に味噌醤油が伝来・日本へ「茶」を伝えた求道僧たち・白炭技術を伝えた弘法大師空海
日本の磨崖仏・熊野磨崖仏・普光寺不動三尊磨崖仏・臼杵磨崖仏・菅尾磨崖仏・緒方宮迫東磨崖仏・緒方宮迫西磨崖仏・頭塔・地獄谷磨崖仏・春日山磨崖仏・大門仏谷阿弥陀磨崖仏・狛坂磨崖仏
日本人庶民の信仰心・恐山信仰・賽の河原・西院河原地蔵和讃・山東京伝の佐比の河原

むすびに　１６３―１６５

《全文章量はＡ４、横書き４３字×行数４０行×１６５枚となります》

※　写真の出典は記載した。記載の無い写真は筆者が撮影とする。

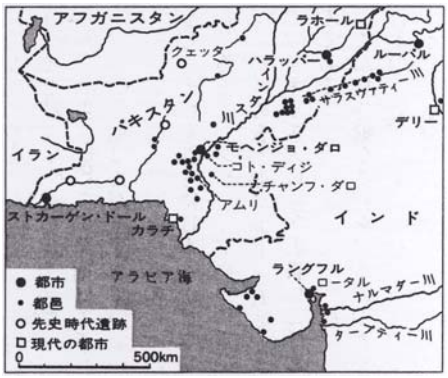
第1章・インド編

古代インド・お釈迦さまが生れる前の北インド

インドという名称は中国書では「身毒」「印度」「天竺」、ペルシア語の「ヒンドゥー」、ギリシア語の「インダス」「インディア」などはシンドゥの訛ったものであるという。インドという名称はアーリア人が「川」の意味に使っていた「シンドゥ」という語に起源している。彼らがインドで遭遇した最大の川、インダスの大河の流れを意味するようになり、時代をえて他の国の人々から「インド」と呼ばれるようになった。

インダス文明の地・現在のシンド・パンジャーブ州(五つの河川・前 2500 年―1000 年)に都市計画を持った文明が栄えた。この文明は全ての都市において独自の「度量衡」の制度が極めて厳密に守られていた民族で、古代都市はモヘンジョ・ダロとハラッパーの二大文明遺跡を残した。アーリア民族が侵入してくるまで、ドラヴィダ人、ムンダ人がインド北部栄えていた。

モヘンジョ・ダロ遺跡・自動小銃で警固している



インダス文明の遺跡の分布(『古代インド』中村元著)

アーリア民族(原始インド・ヨーロッパ語民族・コーカサス山脈の北方地帯の遊牧民)は、紀元前１５００年頃からヒンドウークシュ山脈越えてインドに侵入をはじめた。前１２００年頃にインド西部パンジャーブ地方に到達し、先住民の征圧と混交を繰り返しながら、遊牧生活から農耕生活に変遷して行く。遊牧民の血を引くアーリア人は、自然現象を神格化し、創造神・法律神などの多神教を信仰、神々への讃歌『リグ・ヴェーダ』の成立させる。リグとは「讃歌」、ヴェーダとは「聖なる知識」、従って「聖典」を意味した。司祭階級間ではこの「聖典」を親から子へ一語も間違えることなく口伝暗記伝承の歴史を辿る。現在でもバラモン(婆羅門・ヴェーダの祭司者)は１時間ぐらい「神への賛歌」を間違いなく賛歌を語り続けるという。『リグ・ヴェーダ』に収められた１２１８の讃歌のうち最も多くあげられているのは、雷神(雷鳴と稲妻を神格化)かつ軍神のインドラ(帝釈天と漢訳)の説話が全体の四分の一を占めている。インドラとはインド最古の聖典『リグ・ヴェーダ』における最大の神であり、金剛(堅固不壊で強力な武器)という武器を投じて悪竜ヴリトラ(巨大な大蛇)殺す英雄神なのである。インドラの後代神話では聖山の苦行を妨害し美女に心を奪われる神となり、この神が仏教に取り入れられ、仏法を守護する神、帝釈天(仏法の守護神)となるのである。

アーリア人(部族の宗教を忠実に守り奉じる者)と原住民ドラィダ人と混血融合し、宗教をも融合して、神々の力を導き出すアーリア人がバラモン(祭司者)となり祭祀を取り仕切った。この時代「ヴェーダ」によるバラモン教を規範とした四姓の身分制度がインド社会に成立し、階級は「色」を意味する「ヴァルナ」と呼ばれ、肌の色で身分が分けられた。バラモンを頂点として、クシャ

トリヤ(王侯、軍人)、ヴァイシャ(農民・商工人)、シュードラ(先住民に隷属的な奉仕と従属を強制)の四つの身分区分された。これらが今日まで続く細分化され数千といわれる「カースト制度」の継承される経緯となる。カーストは１５世紀インドに渡来したポルトガル語のカスタ(肌の色)に由来する。混血融合の宗教は土着神とも融合して多神教となり、蛇神崇拝、樹木崇拝はインドの諸宗教と民間信仰は今日まで影響を与えている。樹木崇拝は釈尊の誕生は無憂(むゆう)樹の下、悟りを開く時は菩提(ぼだい)樹の下、入滅する時は沙羅(さらさ)双樹の下と、樹木信仰が裏付けされる。

日本に仏教伝来と共に入ってきた四国金毘羅信仰の「コンピラ」は、ガンジス川の「鰐(わに)」のことである。金毘羅(こんぴら)はサンスクリット語の音写で、ガンジス河の霊漁(10 頁参照)、仏教では薬師十二神将の一つ、仏法を守護する夜叉神王、憤怒の姿とる。天空の神ヴァルナ(雷神インドラ・火神アグニと並ぶ)は水神として日本に来て「水天宮」となり、湖沼の女神サラスヴァティーは智恵弁才の女神となり、日本に来て「弁才天」となる。真言密教の護摩(ごま)は(ホーマ)サンスクリットの音写、神聖な火に供物を投ずる供犠(くぎ)が密教に取り入れられ、火はとくに供物を天に運ぶものとして尊崇された。この時代すでに宇宙全体の神々が成立して、一定の天則が維持される哲学が自覚されていたようである。因って、神々は天空に存在していて、光り輝くものと考えられていた。「天」はサンスクリット語のデバァの訳で神を意味する。バラモン教より仏教に取り入れられ 33 神、多くは自然現象を神格化したものである。又、モヘンジョ・ダロから出土した印章の中に半跏趺坐(はんかふざ)の瞑想の像があり、ヨーガ（神と人間を結び付ける行法(ぎょうほう)）の源流を示すものと考えられている。

日本に伝わる「天」という神々は『リグ・ヴェーダ』からバラモン教へ、そしてヒンドゥー教から仏教へ、そして北伝仏教(大乗仏教)へて日本に伝播したものである。『リグ・ヴェーダ』神々の讃歌の一部はヨーロッパへも伝わっている。

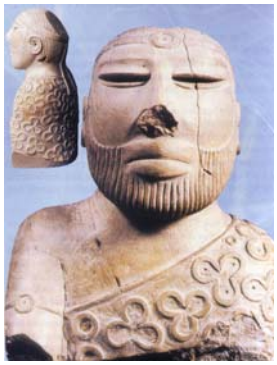
アーリア系の娘さん

ハラッパー遺跡・玄奘三も尋ねる

インダス川古代の要津(ようしん)サッカル

１９２１年パンジャーブ地方において青銅器時代の都市遺跡を発見した。翌年「死者の丘」を意味する「モヘンジョ・ダロ」で大規模な発掘の結果、前２３００年前の都市文明、大河の名をとって「インダス文明」とよばれた。最初の発掘遺跡を「ハラッパー文明」という。

１７８６年、アジアの古代言語の研究者ウイリアム・ジョーズは、サンスクリット語がペルシヤ語・ギリシア語・ラテン語・ゲルマン語・スラブ語などと親戚関係にあることを指摘した。１９世紀に入ると、ジョーズの指摘が証明され、インド・ヨーロッパ語比較言語学が誕生した。(参考文献『古代インド』中村元著・講談社・『仏教史』Ⅰ奈良康明著・山川出版社　『わかる仏教史』宮元啓一著・春秋社)



神官・モヘンジョ・ダロ
出土 17 ㎝・カラーチー国立博物館蔵

ヒンドゥー教・ヒンドゥー教には特定の教義と開祖はいない。人々はどんな思想、信条を主張してもかまわない。歴史的にみても、考えられるあらゆる宗教と哲学を取り入れている。唯心論(ゆいしん)も唯物論もある。厳しく苦行して解脱(げだつ)を得る方法もあり、快楽を肯定する修行法もある。つまり、ヒンドゥー教には、これがヒンドゥー教という教理はない。あらゆる思想、教理を呑み込んでしまう。信ずる神々はシヴァ神、ヴィシュヌ神、男神、女神がいて、教徒はこの内のどの神を信じてもよい。多様な神々の唯一絶対者の存在は宇宙創造ブラマン（梵天(ぼんてん)・ヴェーダ時代後期を代表する最高神、インドラ神に相当）が受け持ち、その維持はヴィシュヌ神、破壊はシヴァ神となる。異なる神を信仰しても、巡り巡ってこの３神に帰依することになる。善い行いをして功徳(くどく)を積むことは、死後、輪廻転生の考え方は全ヒンドゥー教徒に共通している。儀式と生活に於いて肉食をしない教徒もいれば、鶏や羊の生贄(いけにえ)を捧げる教徒もいる。ヒンドゥー教の「ダルマ=法」とは、「達磨(だるま)」とも音写され中国禅宗の南宋禅・北宋禅となり、日本へは南宗禅が伝来する。ヒンドゥー教徒はこのダルマを、生活の生き方として受け止めている。「ダルマ」の教えにはカーストの規則を守ること、断食、祭礼、通過儀礼、巡礼、毎日沐浴した後、16 の勤めからなる供養を行う。または独自のマントラ（真言(しんごん)）を唱え、民衆の「生き方」の維持を重要視して、村々の平和秩序に繋なげ、そのことにより個人の幸福が保証されるという教法となっている。さらに成人式・結婚式・葬式といった人生の通過儀礼（サンスカーラ）の社会習慣は守られ、ジャガンナートなどの霊場巡礼、ホーリー(３月、色水掛け祭り)などの祭りも盛大に行われる。

ダルマさえ守っていれば、誰彼となくヒンドゥー教で、思想・信条に関係はない。ヒンドゥー教は宗教であるが、宗教信仰を意識にかかわらず、この中にいればカースト構成員でありヒンドゥー教徒なのである。即ち、ヒンドゥー教とは人間生活の全ての生き方に合わせ、奥行きと幅と深さと広がりをもった宇宙的宗教なのである。

ヒンドゥー教の3大神・梵天・ヴィシュヌ神・シヴァ神・ヒンドゥー教の歴史的経緯は、アーリア民族が西北インドに侵攻してきたのは紀元前１５世紀、この地方の原住民を武力で征圧した。やがて武士階級、宗教儀礼を司る司祭級、一般大衆、原住民の奴婢階級の「四姓制度」が成立する。そしてアーリア人は自然現象や大自然現象を擬人化した神々を崇拝し、暁の神ウシャス、雷神インドラ、水の神ヴァルナ等になる。これら神は全てデーヴァと呼ばれ、光輝くものを意味した。

①ブラフマー(梵天(ぼんてん))

②ヴィシュヌ神

③シヴァ神

④インドラ(帝釈天(たいしゃくてん))

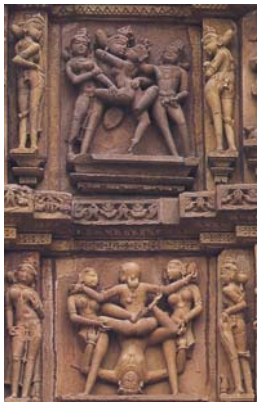
これらの神話や神々の讃歌が集められたものが『リグ=ヴェーダ』で、紀元前１２世紀頃成立し、その中にダシユと呼ばれる「鼻が低く、皮膚の色が黒く、雄牛のように厚い唇を持つ人」は

宗教面では、「供儀をおこなわず、異なった信仰を持ち、神を罵る人」また「男根を崇拝する人」たちであると強く非難をしている。宗教面から考えれば、一方的にアーリア人文化が原住民文化を呑み込んでしまったわけではない。両民族文化は混合変容する経緯となる。この相互変貌しながらこの宗教文化は紀元前１０－６世紀に築かれた。それはブッタが世に出る直前の時代となる。

⑤リンガ

⑥シヴァの息子ガネーシャ

⑦地獄王ヤマ(閻魔王)


⑧マハーデーヴァー寺院の外壁

① **ブラフマー**・ヒンドゥー教の３大神の一柱。ブラフマー神(梵天)が天地を創造しヴィシュヌ神がそれを維持し、シヴァ神が破壊すると考えられている。

② **ヴィシュヌ神**・３大神の一柱。右手に蓮華(れんげ)と棍棒(こんぼう)を、左手にホラ貝と円輪を持つ。ヴィシュヌはヴェーダ祭式に深く関係した。祭式おいてこの神は供犠(くぎ)(神へ生贄を捧げる)のもたらす恵みを表す。供犠のもたらす恵みとは一族の名声、国の繁栄意味する。地下の火、中空の光り、天空の太陽の３つと考え、太陽のエネルギーの具現である。

ヴィシュヌ派は最も神聖なる神を崇拝するのはヴィシュヌ派という。ヴィシュヌとは「広がる、行き渡る」という動詞の語根からつくられた語、「リグ・ヴェーダ」においては「太陽の光り輝く」作用を神格化した神。ヴィシュヌ神の信仰を拠りどころにしたのは、アヴァターラ(権化(ごんげ)・化身(けしん))の思想である。化身の意義は「もろもろの善を行うものたちを守るために、悪を滅ぼすために正義を打ち立てるためにこの世に出現する」と説かれている。基本思想には、古来の神々の２２種の化身があったというが、現代では、一般的には１０種(動物・人間・半人・魚・猪等)の化身が知られている。

③ **シヴァ神**・３大神の一柱。牛ナンディンに乗るシヴァ。リンガを起立させて畏怖相を表すシヴァ。シヴァ神を最高実在とするのはシヴァ派。『リグ・ヴェーダ』に現れる暴風神ルドラを、シヴァ神そのものとみなせば、シヴァ神の歴史は少なくとも３千年の昔に遡ることになる。獣たちに囲まれた獣王(パシュパティ)(シヴァ神)を連想させる神像が、インダス文明の印章のなかに見えることから、シヴァの起源はインダス文明期に遡ることになる。

『リグ・ヴェーダ』に登場するルドラ神は、邪悪なものを追い払い、善や利益を齎す神として崇拝されていたらしい。「ルドラ」の名を「罪や災いを追い払う者」「吠える者」とする語源説がある。ルドラ神は、文献に現れる最初期の時代から、凶暴で破壊的な一面と、病を癒し恩恵を施す慈悲深い神としての性格を持合せていたことになる。こうした二面性の性質は、やがてシヴァ神のなかに引き継がれ、その多義的な性格を形作って行く。ヒンドゥー教の二大神、シヴァとヴィシュヌは非アーリア人の土着信仰や神々を吸収しながら形成され、やがて、次第にルドラの名はシヴァにとって代わられ、シヴァが最高神として確立して行くのである。

（『ヒンドゥー教の事典』橋本泰元著・東京堂出版より）

④　**インドラ・**帝釈天と漢訳、因陀羅と音写。インドラへの讃歌は『リグ・ヴェーダ』の約４分の１を占める最大の神。金剛(ヴァジユラ)を右手に持つインドラは、悪竜ヴリトラを殺す英雄神、インドラはアイラーヴァタという象に乗り、東方を守護する。この神の信仰が仏教に取り入れられ仏教の守護神、帝釈天となる。(カトマンドゥ博物館蔵)

⑤　**リンガ・**の基本的イメージは起立した円筒である。起立した男根の図はインダス文明の印章にもみえる。男根起立は行者が射精を抑制している状態を示すといわれる。ヒンドゥー教徒はシヴァを常に人間に似た姿を表現するばかりでなく、円筒形のリンガをシヴァの姿の一つと考えている。リンガ=男根。リンガ崇拝は単なる現世利益・多産・豊穣を願う信仰ではない。リンガはシヴァの男根で、シヴァの一部という理念でない。シヴァ=リンガ崇拝は、リンガに注ぐ牛乳(聖なる牛の乳)を、我々には卑猥に見えるが、シヴァ神と人間との性行為の儀式であり、未来に新しく生活を生み出して行く礼拝と考える。(ニューデリー博物館蔵)

⑥ガネーシャ・ガネーシャはシヴァの息子。「ガナ」は眷属、「イーシャ」は主、つまりシヴァをとりまく眷属たちとなる。象面の神としてよく知られている。とくに東南アジアにおいては、この神は人々に親しまれている。この神は商売の神さまである。仏教に取り入れられ中国を経て日本にも伝えられ、聖天と呼ばれる。生駒の宝山寺等の寺院で尊崇されている。

⑦　**ヤマ・**ヤマは地獄の閻魔王、かつては天上に住むヴェーダの神々の一人ヤマであった。この時代は火葬が一般的で『リグ・ヴェーダ』の「葬送の歌」では、火神アグニは「不浄なる」屍を焼きながらヤマを王となす者たちの元へ死者を運ぶ歌となる。ヤマの額にはドクロが飾り付けられ、右手にはドクロの付いた棒を持つ。(デリー国立博物館蔵)

(①から⑦までのヒンドゥー教神々の引用は『ヒンドゥー神話の神々』立川武蔵著・せりか書房より)

⑧カンダーリヤ・マハーデーヴァ寺院壁画・9－13 世紀中部インドで勢力を持ったチャンデーラ朝が都を置いた所。中世には人に知られた場所であったが、その後荒廃し、１９世紀に再発見される。カジュラーホーの寺院建築は中世の北インド最も技術が最盛期にあたり、外壁にあらわされた高浮き彫りの彫刻は、人体表現は大胆に単純化し、北インド中世彫刻の典型となる。男女の交接を主題にして、宗教的至福を男性原理と女性原理の結合に求める宗教思想を啓示し、抽象化された人体表現は淫乱な感覚はない。世俗的な女性像で寺院を飾った点にヒンドゥー教の独特の聖と俗が窺がわれる。(世界歴史の旅『北インド』山川出版社より)

鬼子母神=ハーリーティー・サンスクリット語の漢訳で、詞梨亭と音写。《詞梨亭母の夫は鬼神王般闍迦(パーンチカ)。詞梨亭母には子供が千人もいた。王舎城の町にやって来ては幼児を奪い食い殺していた。釈尊の教化を受けて悪行を改め、釈尊の教えを守り、児の養育を助けることを誓神。日本伝来するとこの神は鬼子母神となる。伝わる話としては、他人の子供を攫い食べてしまう鬼子母神を教え諭すために、お釈迦さまは鬼子母神の子供を隠してしまう。鬼子母神は我が子がいないと探しまわり「お釈迦さま、子供を捜してください」と願いでた。お釈迦さまは「何をそんなに悲しむ、あなたは今までに他人の子供をさらって食べていたではないか。母親の悲しみは皆同じである。子供を返してほしければ今までさらった子供たちを返してあげなさい」と諭した。鬼子母神は「子供の母親の気持がとて

鬼子母神=詞梨亭・右ハーリーティー・ペシヤーワル博物館

もよく分りました。」と深く覚り、ハーリーティー（鬼子母神）は改心して子供を守る仏母になりました。》との釈迦の仏教説話となる。この話の裏には天然痘で死んだ子供たちの悲しい歴史があり、その病を救うための信仰説話が生まれたようである。（写真・右ハーリーティー、左夫バーンチカ、仏教に融合されて鬼子母神となる。２世紀・ペシャーワル博物館蔵・『GANDHARA』より）

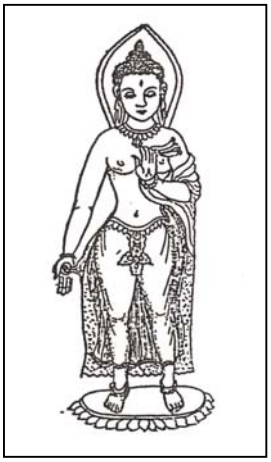
ヒンドゥー教における釈迦の順位・日本人には違和感があるが、ヒンドゥー教の歴史において釈迦はダシャーヴァターラ（神の１０化身）として知られている。１０化身のうち最も新しい、９番目の化身（神）とされている。仏教のジャータカ（釈迦の前世物語）は、菩薩の偉大な智慧のダルマ（教法）の王として、釈迦の前世ラーマ（インドの理想君主像）を描写している。プラーナ文献（ヒンドゥー教諸神の神話・伝説・讃歌等の聖典）では、釈迦はヴィシュヌの１０のアヴァターラ（化身・権化、不死の存在）の一つの神であり、９番目の神として崇拝されている。バラモン→バラモン教→ヒンドゥー教となり、ヒンドゥー教は多神教であり、インドに於いて仏教はヒンドゥー教の一派と認識されている。現インド憲法下では、シク教・ジャイナ教・仏教を信仰する人々も、広義の信仰に於いてはヒンドゥー教徒として扱われる。釈迦の入滅後、仏教はインドでは繁栄したが、大乗仏教の教義がヒンドゥー教に取り込まれると、仏教は活力を失い衰退を辿るのである。

仏教は何故インド母国で消滅したのか・仏教はインドに於いて、時の施政者の国家的仏教性格を有し、国家運営に長く協力してきた宗教である。農民たちには仏教に集まらず、商業工業者や交易業者を中心に信仰を集め、在家の居士（こじ）たちの喜捨による食事や精舎を建立させ、高位の僧侶たちは仏説話に専念した。後世の歴史家はそれを仏教教団の堕落ともいう。仏を供養する人たちは、国を司る人や交易者を中心に、その名前が石窟や壁画に残されている。ガンダーラ、西域、敦煌莫高窟等に釈尊の供養と称し、名前と人物図が壁画に描かれていることで判る。交易商人たちは商圏を安定させるために西域諸国や中国へ伝播時、同じ信仰も価値観も同じ、即ち同じ思想を持つことにより、安全と商売繁盛に繋げてきたのである。時代が下がり、仏教はヒンドゥー教の教義上類似性があったことで、インドでの仏教は衰退を早めた。苦行修行を求めるならば、ジャイナ教(ジナ教)在った訳で、釈迦の教法に従わずとも、インド大陸民は、仏教よりジャイナ教の選択をしたことは民族肌にあっていたのであろう。

ヴィシュヌの9番目の化身がブッダという

ヒンドゥー教の最高神ヴィシュヌが、仏教の創始者ブッダの９番目の化身であるとされる。『バーガヴァタ・プラーナ』や『アグニ・プラーナ』では次のように説明している。

《昔、神々とアスラとの闘いがあり、神々はアスラに敗れた。神々は「お助け下さい」と言って、イーシュヴァラ（自在）神に庇護を求めた。そこで、ブッダはシュッドーダナ（浄飯（じょうぼん））王の子としてこの世に生まれた。彼は悪魔ダイティヤたちを昂（たか）ぶらせ、ヴェーダの宗教を捨てさせたので、彼らは仏教徒となり、他の人々にもヴェーダを捨てさせた。彼は阿羅漢（覚者）となり、他の人々をも阿羅漢にした。人々はヴェーダの宗教を捨て、ヴェーダを尊重しない異端の者となった。（略）道徳を忘れたダスエたちがはびこり、宗教の仮面をかぶって宗教ではない



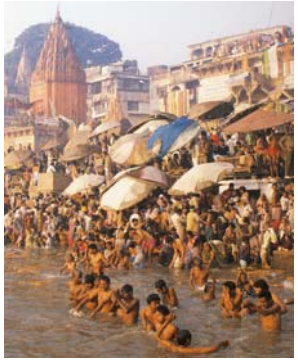
ブッダの化身

ものを説き、王をよそおったムレッチャ(野蛮人)が人間を食らった。この時、ヴィシュヌは野蛮人を滅ぼし、カーストと四つの生活階梯(階段)を確立させ、人々を真の宗教に導いたうえ、カルキ・ハリの姿を捨てて天にもどった。やがてカーストとアーシュラマ(人が階段を経るべく４住期)が確立する。》と伝えている。(ダスエ=意味不明)(『インド神話伝説事典』菅沼　晃著・東京堂出版より)

バラモン(婆羅門)・サンスクリット・パーリ語に相当する音写。インドカースト制度の最上位の僧侶階級。インドの法典によると、バラモンに課せられた義務は、ヴェーダ聖典を教授・学習・祭祀・布施の施しと布施を受けることにある。常にインドの宗教・文化・学問の担い手として重要な役割を演じてきた。

アーリア人に征服された先住民は隷属され、またアーリア人の司祭者と武士たちは優越した階級を形成し、四姓の階級制度の最上位に立ち、バラモン(婆羅門、司祭者)、クシャトリヤ(王侯・武士)、ヴァイシャ(庶民)、シュードラ(隷民)の四階級を四姓となる。ヴェーダ時代にバラモンが最上位を占め、ヴェーダに精通するバラモンは、神官として尊崇され、祭贄を仕切り、神を満足させ、信仰によってバラモン信徒たちを満足させ、バラモンは人間と天の世界を結ぶ指導的地位を独占した。因ってインド人を社会的に統一し、同一民族の自覚を持たせたのは実に司祭階級のバラモンであった。現在のカーストの数は４千種に達するという。

聖なるガンジス川・の北岸に６４ケ所の石の階段ある。ヒンドゥー教徒は、「死ぬまでに一度はベナレスにお詣りしたい」というのが全てのヒンドゥー教徒の強い願望なのである。ヒンドゥー教徒は、これを末期の水として使う。病人の臨終が近づいた時はこの水を綿に含ませて、その唇にしたすのである。ガンジス川側での荼毘にふし遺骨をガンジス川に流す、この儀礼を済ませば、残された肉親たちは、これで全ての生活が落着き、輪廻転生の信仰に安寧をいだく。ヒンドゥー教徒の沐浴は欠くことのできない神聖な儀礼で、ベナレスでの聖なるガンジス川に沐浴すれば、死後の世界「輪廻転生」のご利益が得られると固く信じられている。



バラナシ・ガンジス川の沐浴『禅の世界』より

ガンジス川の女神・ガンガーとはガンジス川のこと。ワニのクンビーラに乗る「母なるガンガー」は日本伝来して「金毘羅」となる。サンスクリット語・宮毘羅=倶毘羅とも音写される。ガンジス川に住む霊魚で鰐を神格化したものであるが、崇拝され仏教に取り入れられた。

左・鰐に乗る女神ガンガー・インド国立博物館(ウイキメデァより)

右・ニューデリー美術館(『ヒンドゥー教の事典』東京出版)

お釈迦さま誕生（ゴーダマ・ブッダ）要約で

「しゃか・釈迦」・・サンスクリット語（古代インド語）に相当する音写、仏教の開祖ゴータマ・ブッダと呼ばれることが多い。ブッダとは「真理を悟った人・覚者」という意味で、「仏陀」「仏」とも訳される。ブッダの生まれと入滅を、北伝仏教では紀元前 463 年―入滅が前 383 年の説。南方伝承では前 624―544 説となる。シャーキャ族（釈迦族）出身の聖者を意味し、釈尊（釈迦牟尼世尊の略）その異称。姓をゴーダマ（瞿曇・最上の牛の意味）名をシッダールタ（悉達多・目的を達成する）という。誕生地は現在のネパール南部、タラーイ地方のルンビニーで、彼らが崇拝した『リグ・ヴェーダ』はバラモン教の根本聖典（アーリア人の伝えたインド最古の聖典・神の啓示と信仰、バラモン教徒の精神生活の基本）における英雄「イクシュヴァーク・甘蔗王」（インドの古王、人類の祖とされるマヌの子で、仏典では釈迦族の開祖の名とされる）の後裔の神話的伝承もつことから、アーリア人の流れとも推定される。又この一族は代々クシャットリヤ（武人）の階級説ともいわれる。

シャーキヤ族の本拠はカピラ城（ネパール説とインド説があって、インド・ネパール両国が主張している）でコーサラ国（印度北部とネパール国境付近）に住んでいた。シャーキャ族が各村の首長となり、首長の合同協議して一つの共和体制のシャーキャ国となっていたらしい。東西 80 キロ、南北 60 キロ位の小農耕国で、隣国マガタ国の軍事力は、歩兵二十万、騎馬二万、戦車二千（戦車は二頭または四頭で台車を引く、右側に御者が、左側に弓を射る戦士が鉄製の鏃を射り、刀をふりまわす技術が優れていた）象軍三千といわれる。後年シャーキャ族もマガタ国に滅ぼされる。

釈尊（ゴータマ・ブッダ）の父親シユツドーダナ王で、母をマーヤー（摩耶夫人）の長子（太子）として 4 月 8 日に生れた。釈尊の生後 7 日後に生母を失い、叔母に育てられる。誕生の伝承は、マーヤー夫人に白像が胎内に入る夢を見て懐妊した。月満ちて出産のため故郷デーヴァダハへ向かう途中、ルンビニー園において無憂樹（樹木の名）の木の花を摘もうとした時、夫人の右脇から釈尊が誕生したと伝える。インドラ（帝釈天）が老婆の姿になって夫人の前に現われ、嬰児を受け止めて産水を注いだ。誕生児の釈尊は、四方に七歩づつ歩み「天上天下、唯我独尊」と唱え「われは世間の最上者なり」と宣言したという仏伝は古代より成立していた。仏伝では天から花が降り、竜が産湯を注いだという。小さな四阿（東屋）を花で飾りつけ、甘茶を誕生仏に注いだ。これが後世の花祭り、日本では灌仏会（降誕会・仏生会等）である。明治以降に「花祭り」となったという。

托胎霊夢・母の胎内に白象が入る夢を見て妊娠する

カルカッタ博物館蔵

出家・ブッダは 16 歳のとき、13 歳の従妹のヤソーダラーと結婚する。（妾もいた説も）青年ブッダは何に不自由のない生活を送っていた。一般的に出家の仏伝として、ある日、王宮東門から出ると、くたびれた老人がいた。またある日、南門から出ると、うずくまる病人がいた。またある日、西門から出ると、死者が横たわっていた。またある日、北門を出ると、出家修行者と出合い、シッダールタが尋ねると、「私は出家修行者です。衆生の苦しみを、いかに救済できるか、その修行をしています」と答えた。これを聞いたシッダー

ブッダと息子ラーフラの邂逅図

ルタは、出家修行生活こそが生・老・病・死を克服できる生き方と確信に至った。この話が後世の仏伝四門出遊である。シッダールタは、人生をインド人の風土哲学志向で深く考える人物らしく、人は老い、病み死ぬ苦しみ、この苦しみを覚る道を求める以外の法はないと結論に至る。彼は沙門(男性出家者)の生活に入り王家を捨て、妻を捨て、子供を捨て、２９歳で家出した。

ブッダと息子の邂逅の図・(息子ラーフラの図)ブッダにはラーフラ(羅睺羅)という息子が居り、成道の後、故郷に戻って家族と息子に面会する。ブッダ像は頭光背がうしろに付いているので判る。その直ぐ左下の子供がラーフラで、乳母がその肩と腰を支えるように両手を出して、腰をかがめている。子供との邂逅を描いていた理由は、ブッダはこの世の愛情を絶ち、子息を出家させようとしている図となる。この息子は釈迦の耶輸陀羅妃に授かった子供となるが、不実子説もある。釈迦の妃が妊娠したことを聞き「障碍(ラーフラ)ができた」と語ったことが伝わる。信疑はさて置き、現代感覚で申せば、父は教団の大尊者、妻や息子から見れば、家を捨てた身勝手な父親であったことに、複雑な心境を日本人は想像してしまう。釈尊はラーフラを舎利弗尊者(十大弟子・智慧第一)に預け、やがて息子は阿羅漢となり「羅睺羅」と名のる。釈迦の教えを怠ることなく求法し密行第一と称された。(「ブッダと息子邂逅図」インドアーンドラ・ブラデーシュ州アマラーヴァティー出土・３世紀。『古代インド』中村元著・講談社学術文庫より)

目覚めた人・ブッダとなる・当時、インド最強のマダマ国に、アーラーラ・カーラーマ仙人の瞑想家がいて、ブッダは彼の指導を受けたが、迷い苦しみは消えなかった。次ぎにウッダカ・ラーマッタ仙人の指導で境地は高まったが、何の解決を見出せなかった。ブッダは無思考の瞑想の極致、三昧(サンスクリット語=定・正定=心を一つに集中して動揺しない)の境地は単なる特殊な心理状態であるから、無思考の中には智慧が得られない。ガンダーラ美術の苦行像になった時、いくら苦行しても、苦しみや迷いを解決することはできない。ブッダは苦行林をあとにして、村の河で沐浴した後、村の牛飼いの娘スジャーターに乳粥(ちちがゆ)差し出され体力を回復した。(16 頁参照)そして、ブッダはアシュヴァッタ大樹の下に坐り、禅定(サンスクリット語の音写・禅・心静かに瞑想し真理を観察)に入り、やがて、ある暁に目覚めた人、ブッダとなり、解脱(煩悩からの解放)の境地、涅槃(仏教における修行上の究極目的・インド思想の解脱を目的)に到達し、成道となった。後、アシュヴァッタ樹は「覚樹・ボーディの樹」「菩提樹」となるのである。(参考文献『ブッダはなぜ子を捨てたか』・山折哲雄著・集英社新書・『わかる仏教史』宮元啓一著・春秋社)

四ッの住期(インド人の深層思想)

インド北部征服民族アーリア人たちのバラモンの教えは、バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャなどに属する者には人生の四住期制度の人生哲学がある。生涯にたどるべき人生の四階段、学生期、家十期、林十期、遊行期・・・そして死。ヒンドゥー教に同じ教法である。

学生期・・男子は８歳から 16 歳バラモンに入門し、師の家に住み込み、師と師の家族に奉仕、禁欲の生活、勤勉なヴェーダ学習「学生期」を三大義務とする。学生は師より早く起きる。常に師から一歩下がったところに身を置く。家族のための家事、晩には師の足を洗い、按摩をし、師を寝床に導いたのち、師の許可をえてから地面に臥して寝る。学生は、女性を見つめることや、女性に微笑みかけることも許されない。徹底した口授―復唱―記憶の授業で、２５歳位卒業。

家住期・・学業を終えた学生は、帰家式を挙げたあと父の許に帰り、第二の住期「家住期」に入る。家住期とは家業に従事し、結婚して息子をもうけ、父の死後あるいは隠居後に家督を継いで家族を扶養し、家長として宗教的、社会的義務を果たす期間である。ヒンドゥー教徒はアルタ(実利)、カーマ(性愛)、ダルマ(宗教的義務)を人生の三目的を実践するのが家住期で、５０歳位。

林住期・・家長として義務を果たし終えた者、孫も生まれる時期、家督を息子に譲って隠居する。隠居後に息子の世話になり留まれるが、より功徳の大きな生活を求める者は、祭火を携え、家を捨て、単独となりあるいは妻を伴い森に入る。そして林野に産する物だけを食べ、神や祖霊を祭りつつ、禁欲・清浄な生活を送る。これが第三の「林住期」で、７５歳位。

遊行期・・さらに人生の完成を求める７５歳位から涅槃まで「遊行期」に入る。遊行の行者は、単独で祭火も携えずに旅立ち、心の平静を保ち、解脱を求め、生死を超越する修行を努め、托鉢乞食しつつ放浪する。こうした生活を全うすることにより、解脱がえられることを求める。

家長の義務を果たしたあと、俗世を離れることへの憧れは、現代のインド人の間に根強い。インドの各地にあるヒンドゥー教の聖地でひたすら瞑想の日々を送る人たちの中に、かつては高級官僚や会社の重役であった者が意外に多いと聞く。究極の涅槃(死)は輪廻転生の哲学を怠りなく完成させる。・・日本人の思考ではおさまらない。(『古代インドの文明と社会』山崎元一著より)

何故に釈尊はバラモンの教えに従わなかったのか・古代のインド人たちは歴史書・地理書の類を後世に遺さなかった。現実の王朝史を忠実に記すことに情熱を傾けた古代中国人とは対照的である。おそらく、司祭階級バラモンという古代インド知的エリートたちが、この世に生まれた連鎖を、輪廻転生する霊魂の一時的な通過の過程が現世であると見たことによるものであろう。彼らにとっては現実を記録するより、現実を超えた神と共に生きることの方が重要であったのである。一方で古代インド人は膨大な量の宗教文献を後世に伝えた。これらを記録した著書はサンスクリット語(パーリ語は南伝仏教経典)のアーリア人で、現在のインド憲法下で１８の言語が認められている。(インド最大話者はヒンディー語、最も少数はサンスクリット語である。)

古代インド思想史全体から見れば主流はバラモン教(ヒンドゥー教)で、仏教・ジャイナ教は「非正統派」であった。農業社会が成立ともに、自然の災害から国と人民を守るための祭司は重要な指導者であった。司祭者バラモンはこの時代を捉え、祭司を複雑化させ、それらを独占の職とした。それは、自然界の諸現象を支配、神々を動かし支配したのがバラモン、即ちバラモン教なのである。バラモン司祭者は「人間と神との仲介者」「人間の姿をした神」「アーリヤ人の純粋な血を引く最清浄な存在」であった。バラモンがインド社会の階級制度を確立させた歴史となっている。階級（カースト・ヒンドゥー社会を構成する閉鎖的社会単位）身分制度の４階級がバラモンの教えによって出来上がった社会を構成させた。さらにバラモンは収入源として布施の功徳を強制し「神を供養によって喜ばせば、死後天国へ行ける」と説いた。そして最下層シュードラへの差別、「シュードラがヴェーダの読誦を故意に聞いたなら、かれの耳に溶けた錫と臙油(ベニバナ油)を流し込む。ヴェーダを唱えたならば、かれらの舌を切断し、ヴェーダを覚えたときは身体を切断する」と記述の歴史が残り、これほどまでバラモンはシュードラの身分の排除に厳しくした。シュードラはこのように差別された隷属民であったが、奴隷とは異なり自分の家族やわずかであるが財産も所有していた。

後期ヴェーダの時代に新しい宗教思想が生まれた。それは仏教とジャイナ教(インドの伝統的な禁欲主義の宗教)の誕生である。両宗教の創始者であるブッダとジナ(ジャイナ教)は共に人間存在の根本を探究し、業(行為・行動・心=運命論)、輪廻の世界を超越した解脱の境地を求めた。

ブッタの時代、北インドはアーリア人系のほか、チベット、ビルマなどから移住してきたクシャトリヤと自称した先住農耕民族が国家を形成の時期と重なるが、シャーキャ族はこのような先住民らしく、バラモンの優越思想に強く抵抗したのはこの辺にあるのかと思われる。それは樹木信仰、ナーガ(蛇神)、チャイティヤ(塚なし廟)の崇拝などの土着的な信仰が、バラモンを急には受け入れ難いものであったのだろう。

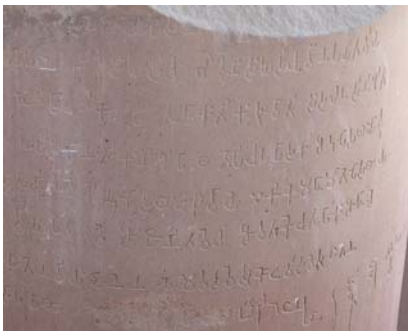
六師外道・ブッダの時代の前６－5 世紀頃、ガンジス河中流地域マガダ地方を中心に活躍した６人の思想家がいた。ヴェーダ聖典と祭祀を批判し、伝統的なバラモンと対立する沙門たちは自由思想家としていた。「長阿含教」が彼らの思想を伝え、ブッタの仏教哲学思想も彼等の中に入り、ブッダとジナ教(ジャイナ教)はバラモンに下層民とされるヴァイシャ、シュードラの階級者たちの生き方を代弁する思想哲学を、自ら実践で完成させて行く。そして、ブッダはヴァイシャ階級から布施により教団を成立させている。このヴァイシャ(商工者)がブッダの思想に共鳴し、シルクロード貿易で販路を広げる時、他民族であっても同じ価値観の仏教を唱えることは平和と繁栄に繋がるものであった。西域のオアシス国王たちは仏教の教えで国運営することが、政治が安定することを理解した。それは敦煌、楡林石窟の壁画などに寄進した国々の王たちの名前と自画像を描かせていることで判る。ジャイナ教は徹底した禁欲主義の行法をとり、仏教と同時期にインド東部で成立し、開祖はジナ(勝利者)となったという。六師外道の一人。

釈迦誕生のルンビニー園（ネパール）

ルンビニー園(藍毘尼園)・１９６７年ここを訪れた元国連事務総長ウ・タント氏の呼びかけにより、世界各国の協力を受けて仏教公園都市ができあがった。日本からの協力による「印度日本寺」や「仏塔」が建造されている。ここはまさに現代世界の仏国土聖地となっている。玄奘や法顕はこの藍毘尼園を訪れ、ブッタのゆかりの仏遺跡を巡拝し記述を残している。

釈迦誕生池・無憂樹の根元に祠がある・ルンビニー園

アショーカ王建造の石柱・ルンビニー園にはアショーカ王が石円柱にブラーフミー文字で、「神々に愛され、温容ある王は、即位灌頂(かんじょう)のち２０年を経て、みずからここにきて祭りを行った。ここでブッタシャカムニは生まれたもうた。ルンミニ村は税金を免除せられ、また八分の一のみを払うものとされる」と石柱碑文が残されている。



アショーカ王（前 268－238）の建造の石柱・フミー文字

釈迦のモニュメントの建物内部

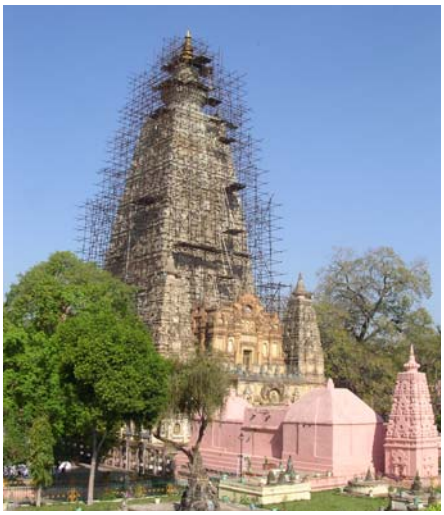
印度日本寺・財団法人国際仏教興隆協会　日本山妙法寺大僧伽日蓮系の団体　印ネ国境ゲート・ネパール側

ボードガヤー(ブッタガヤー)釈尊が悟りを開いた所

ブッタはボダイ樹の根本で禅定(ぜんじょう)（心静かに瞑想して真理を観察する）して、6 年間の苦行（タパス）で悟りを開き覚者(かくしゃ)となる。ブッタが啓蒙した菩提樹あった所に、アショーカ王が寺院を創建し、後、ボードガヤーのマハーボーディ寺院(54m)建立される。

時代は下って、12 世紀にイスラム侵攻によって寺院の菩提樹は焼き払われてしまったが、アショーカ王時代に、スリランカに移植された菩提樹の株分けが、里帰り樹が現在の菩提樹(クワ科・和名・インドボダイジュ)である。ブッダの悟りの由来、ボーディ、サットバア(サンスクリット語)は漢訳・菩提薩埵(ぼだいさった)、覚りの智慧、これを得た者が「仏(ぶつ)」であり、これを目指す修業者を「菩薩(ぼさつ)」という。

菩薩像は釈迦の修行の姿図が菩薩像となる。



ブッダガヤーの大菩提寺大塔・工事中

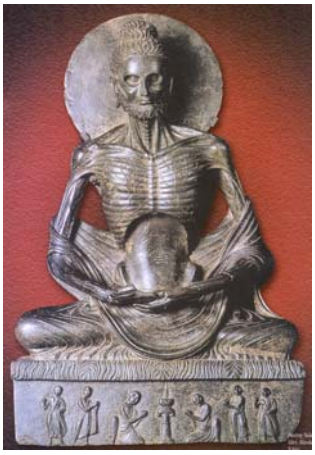
菩提樹の下で祈る信者・菩提樹の下は、ネパールや東南アジアの仏教徒信者の熱心な読誦(どくじゅ)が響きわたる様子は圧倒される。わき目も振れず、安らぎと安堵の読経は、民族の枠を越えて、人間の根源的な信仰を持つ喜びが伝わる。白人の瞑想者がいた。

マハーボーディ寺院内の釈迦像

寺院裏の菩提樹下

ヨーガを実修瞑想する僧

苦行する釈迦如来像・２世紀ガンダーラ彫刻。出家後の苦行で変貌した太子の肉体を写実的に表現した傑作の釈迦牟尼像である。ブッダの生まれは『セイロン記録』によると紀元前５６３年、歿年が前４８３年となる。ブッダはルンビニーのサャーキャ族に生まれる。サャーキャは仏教原文にオーク樹木に関しているが、権力のある地方豪族を意味する。２９歳で出家、３５歳の時ボードガヤーで教えを説き、８０歳クシーナガラで入滅となる。釈迦如来像・片岩・ガンダーラ２－３世紀。



断食のブッダ像『ＧＡＮＤＨＡＲＡ』Dr・Muhammad Ashraf・Khan 著より

ブッダの生涯の絵図(仏伝図)・ムルガンダクティ寺院に日本人画家、野生司香雪が 1935 年に描いた「ブッダの生涯」絵図がある。ブッダに搾乳婦スジャータが乳粥を差し上げる図絵を描いている。

野生司香雪(1885－1973)は香川県出身、日本画家の下村観山に師事し、昭和６年、インドに渡り荒井寛方のアジャンタ壁画の模写を手伝う。日本美術院院友・昭和４８年没・８７歳。

ブッダに乳粥を差し出す娘・比丘とはインドの男性出家遊行者の総称をいい、世俗な生活の一切の関わりを断つことが出家。世俗社会を断ち切る世界とは、生きたままの死別を意味し、出家者は路上に捨てられたボロ布(糞掃衣)を繕い、食べ物は乞食によって午前のみとし、屋根の下で寝起きしてはならない。頭陀袋を首に掛けた乞食は、衣食住の貧欲をはらう１２頭陀行修行(托鉢)は出家の本懐を意味する。家出したブッダは始め苦行によって解脱をえようとしたが、生死の極限状態に於いても覚りを達成できなかった。苦しみや迷いを起こす心を解決することは「智慧」であって、苦行では覚りを開くことはできないことに覚る。ブッダは苦行を止め森から出て、河で沐浴して体を清め、村の牛飼いの娘、スジャータが栄養のある乳粥をブッダに喜捨(施し)、ブッダは衰弱した生命を回復する。そして、明けの明星を見ながら遂に目覚めた人、覚者ブッダとなり、解脱の境地を覚り成道となる。(乳製品のスジャータは娘の名から由来という)

乳粥を差し出すスジャータの絵図

降魔成道・サーンチー第一塔(前１世紀・プラデーシュ州)の「降魔成道図」が描かれ、レリーフ左隅に菩提樹が修行中の釈尊を暗示している。アショーカ王が紀元前３世紀に建立したもの。降魔成道図とは、ブッダが菩提樹の下で悟りを開く刹那、魔王(第６天王波旬=悪魔)がさまざまな動物の頭を持つ魔衆を引き連れ邪魔をし、また３人の美女に誘惑させ、魔王の射た矢は空中で止まり、娘たちはたちまち老婆の姿になってしまった。この時ブッダは右手で大地を指差して悪魔を退散させた。この姿から左手で衣をとり、右人差し指を伸ばして大地に触れる(触地印)の印相が生まれた。密教では降伏法・調伏法が発展した。

降魔成道変相図・ガンダーラ・マラカンド・２－３世紀・灰色片岩 10、5×39 ㎝・菩提樹下で悟りを開かんとする太子を取り囲む軍勢は死を意味する魔王マーラとその部下達で、成道を阻止しようと襲ってくる。太子はこれを打ち負かして仏陀は覚者となるのである。（平山コレクション『ガンダーラとシルクロードの美術』より）

釈尊の伝道生活・悟りを開いた釈尊は、仏伝でいう「鹿の園・鹿野園」で苦行時代の５人友人に教えを説いた。以後の釈尊は４５年間の説法の始まりである。教えとは安らぎ、ニルヴァーナに達する四つの真理(四諦)、即ち「苦」「苦の起源」「苦の滅」「苦の滅にいたる道」であった。

釈尊は４５年間の遊行生活で雨季の３ケ月を過ごした安居(僧が一定期間留まって修行・伽藍)地は、シュラーヴァティーで２３回、次にラージャグリハ・マガタ国の８回、ヴァイシャリー、カウンシャビーなどの大都市に安居した。托鉢して食べ物を乞食生活するため東インドの都市近郊で過ごしたと伝わる。その生活で一日の内、比丘達への指導と説法していたのであろう。

初転法輪図・平山郁夫コレクション『ガンダーラとシルクロードの美術』より

霊鷲山の説教は「世尊は王舎城霊鷲山に 1250 人の比丘と共におられた」（20 頁参照）とあり、森や洞窟や火葬場での聞法の記録が残されている。説法教化の対象は、国王、豪商、社会的な地位の高い人、職人、不可触民などの下層の人たちも盗賊の輩もいる場で釈尊は法を説いていた。仏教は都市型の宗教として発達しこの原始仏教の性格は、財力ある商人・手工業者が土地を買い求めて建物を建て、仏教教団に寄進したのである。この時代すでに財力蓄積した商業資本家たちが存在したことが分る。この人々が仏教に共鳴して帰依して仏教教団に近づいたことは、呪力による支配や武力による支配でないことは商業資本家たちの意見の一致をみて、教団への寄進に繋がっていることになる。近世の発掘によれば、寄進者の考古学的遺品を見るかぎり、農民からの寄進者の事

例がない。仏教教団の盛衰はこれ等の商工業者たちに掛かっていたことになる。教団は農民層との融合が希薄であったことが､後世インドにおいて衰退するに原因がこの辺あったと考えられる。又、教団活動においては、インドでは宗教迫害の例はほとんど無い。いかなる宗教も自由に主張して布教活動が許され、仏教は特に特定の主義を押し付ける宗教ではなかった。

初転法輪図･ガンダーラ、２－３世紀、片岩・高３４、５ｃｍ×幅４９ｃｍ。鹿野苑で５人の弟子を前に行われた仏陀最初説法場面。台座前の車輪は仏陀の説いた仏法を象徴する法輪で、太陽神の戦車に由来する。鹿は鹿野苑を表す。上段には降魔成道図の敗北した魔王マーラの軍勢がみえる。

聖地巡礼･サールナート･鹿野苑（ろくやおん）ガンジス河中流域ベナレス北東７キロ

ダメークの仏塔・初転法輪の鹿野苑跡

初転法輪像・サールナート博物館蔵

釈尊が最初の相手を選んだのは、かつて共に苦労した５人の修行者たちであった。仏伝によると５人と出会った時、釈尊は満々たる自信に溢れていたと伝わる。法輪像の下に５人(６人見える)の修行者の姿が描かれている。現在のサールナート鹿野苑(ムリガダーヴァの漢訳)で、ブッタが成道の後に最初の説法を行った所、初転法輪で人の比丘はただちに釈尊の弟子となった。

ダメークの仏塔・12 世紀ごろの遺跡。この地域はガンジス河中流域でヒンドゥー教の聖地ベナレス北東７キロにあたり、ブッタはヒンドゥー教の聖地(宗教の激戦地)で、ブッダの説法の正当性を論じるためにこの地域を選んだと考えられている。

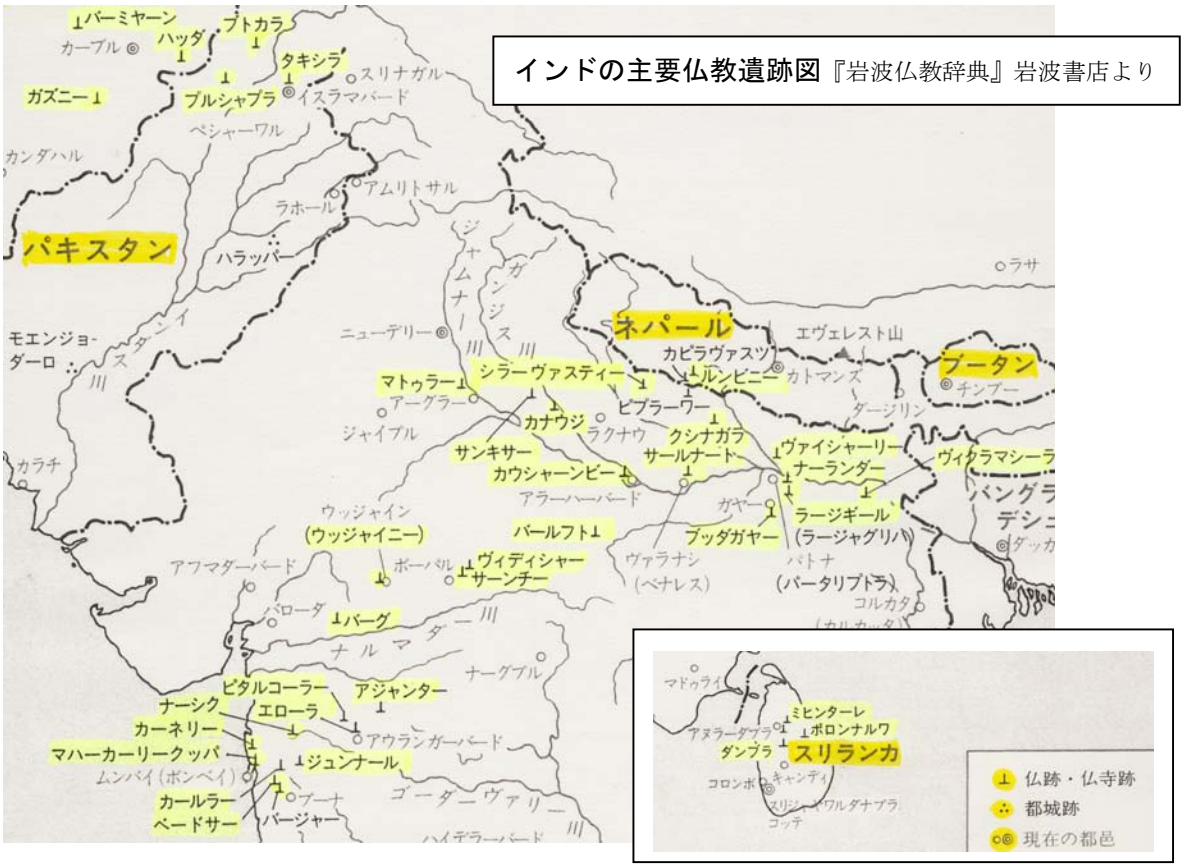
聖地巡礼･コーサラ国の都･シラーヴァスティー･祇園精舎

祇園精舎・(ジェータの園林、漢訳では祇陀園略して祇園)の朝の仏教徒による読誦が響く。ラクノーから東へ車で５時間、サイートに祇園精舎に行き着く。ネパール国境に近いラブティ河の南岸に位置し、シャカ族が従属したコーサラ国の首都があった所でもある。精舎とは修業僧が雨期(雨安居・屋根付き建物)の３ケ月を留まる宿坊のことで、仏伝によれば、シラーヴァスティーにスダッタ(須達多)という慈善心に富んだ長者がいた。貧しく孤独な人々をよく施していた。彼は熱心な釈尊の帰依者で「ジェータの園林・ジェータ太子所有」として、３２エーカーの土地を買い求め、比丘(男)、比丘尼(女)らの精舎（宿坊）を建て、教団に寄進したと伝わる。ジェータ太子の慈愛の満ちた協力が多大であったことが、祇園精舎の漢訳からも想像がつく。釈尊入滅後も精舎は発展し、5 世紀初め法顕が訪ねた時は伽藍９８宇(建物)あったと記している。更に２００年後、玄奘三蔵が訪れた時は興廃し一宇の伽藍が残っていたと記している。

『平家物語』冒頭の書き出しに《祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす、おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし、たけき者も遂にはほろびぬ、たとえに風の前の塵に同じ・・・》説得力のある歴史描写である。

祇園精舎・ネパール仏教徒による朝の読誦がおこなわれていた

舎衛城遺跡
祇園精舎の隣接地で釈迦族の時代に強国コーサラ国の首都があった所。



霊鷲山法華経の聖地

法華経の聖地 霊鷲山　　霊鷲山の頂は瞑想と坐禅場となる

この霊鷲山で釈尊は『法華経』を説かれた。日本では「鷲の山」「鷲の峰」とよばれる。王舎城に最初に建てられたカランダカ長者が寄進した**「竹林精舎」**がある。釈尊が死の直前まで滞在して説法していた所である。『法顕伝』に法顕は霊鷲山の仏跡に花や香を供養して悲嘆にくれ、《仏はむかしこの山でお経を説かれた。法顕は生きて仏にお会いできず、今はただその遺跡を見るだけである》と涙を流している。

仏教史上はじめて寺(精舎)が建立された所である。マガタ国の王の保護によって、王舎城の北側に精舎は建てられた。現在ここに日本人藤井日達聖人(1885－1985)が 1933 年マハトマ・ガンディーと出会い、非暴力主義に共鳴することによって開かれた「日本山妙法寺大僧伽」の新興の出家修行者を中心として構成された団体である。修行者は妻帯をせず、檀家を持たず、日蓮の「立正安国論」のもとに仏舎利塔建立と平和行脚を中心に活動している。筆者が当所を訪れた時は、住職より道場内に案内され、歓迎のお茶を一服の接待を受けた。色々とインドの旅の話を聞かせていただき、聖地巡礼の心休まる一時を過ごし、日本いるような閑静な時間に感動を受けた。釈尊の教えを母国インドの地に於いて実践している教団である。

竹林精舎跡

王舎城址

ラージギルにある日本山妙法寺

聖地巡礼・王舎城・ビハール州・ラージギル首都パトナから９６ｋｍ所。王舎城はラージャグリハの漢訳名。古代インドで強大であったマガダ国の首都の名。現在ラージギルと呼ばれている。五山に囲まれた霊鷲山は、ブッダが在世時のマガダ国最大の都として栄えていた。ブッダが最も長く居住していた所で、竹林園や霊鷲山などの頂上平場所がブッダの説法地とされる。『法華経』、『無量寿教』はここで説かれたと伝わる。多くの経典は「如是我聞」、私は釈尊にこのように聞いたという、文句で始まる。我=わたくしというのは、アーナンダ(阿難陀・釈尊のいとこ十大弟子）のことになる。

『法華経』「序品・第一」を読む・『大乗仏典』中村元編・筑摩書房より（序品=経典の前書き部分）

『法華経』初めの一部分を記載。《このように、わたしは聞いた。（如是我聞・是くの如く我々は聞いた）あるとき世尊は、王舎城の禿鷹の住む山（耆闍崛山・霊鷲山）に比丘衆一万二千人とともに住していられた。比丘たちは皆、尊敬さるべき者（阿羅漢）であり、もろもろの汚れはすでになくなり、本能にもとづく心の動揺もなく、さとりをひらき、もろもろの執着がなくなり、心はさとりにさえもとらわれぬ自在の境地に達していた。また、八万人の菩薩たちもいた。皆、この上ない正しいさとりに向かう心から退転せず、強固な精神力を持ち、自在に教えを説く力があり、不退転の法輪を転じ、無量百千の諸仏を供養して、諸仏のところにおいてもろもろの徳と智慧とを積み、常に諸仏に讃歎せられ、慈悲によって身を修め、よく仏の智慧に入り、大いなる智慧に達し、彼岸（理想のかなたの岸）に到り、その名はあまねく無量の世界に聞こえ、よく無量百千の生ける者どもを救った菩薩たちであった。（中略）

かれらはそれぞれ、仏の足を額に頂いて拝礼し、退いて一隅に坐った。そのとき、世尊は、四種の会衆にとりまかれて供養せられ、礼拝せられ、尊敬せられ、讃嘆（感心・ほめる）せられていたのであるが、このもろもろの菩薩のために、「無量義」とも名づけ、「菩薩を教える法」とも名づけ、「仏に護念（仏・菩薩を護る）せられるもの」とも名づけられる大乗教を説かれた。世尊はこの教を説き終わって、両足を組んで坐り、「無量義処三昧」に入って、身も心も不動の状態に入られた。このとき、天はマーンダーラヴァ花・大マーンダーラヴァ花・マンジューシャカ花・大マンジューシャカ花を世尊と大衆の上に降らし、仏の世界はあまねく六種に震動した。そのとき、会衆の中にいた比丘・比丘尼・在家信士・在家信女・天・竜・ヤクシャ（夜叉）・ガンダルヴァ・アシュラ・カルラ・キンナラ・マホーラガなどの、人間および人間でないもの、もろもろの小王・転輪聖王（全インド統一の大王）などの大群衆は未曾有の思いを得て歓喜して合掌して一心に世尊を見守っていた。そのとき、世尊は、眉間の白い捲毛（白毫相）から光を放って東方一万八千の世界を照らされた。その光はあまねく照らして下は阿鼻地獄（アヴィーチ）に至り、上は阿迦尼吒天（アカニシュタ天・色究竟天）に至った。それらの世界には、六種の世界に堕ちた生ける者たちが見えた。それらの世界に住んでいる諸仏が見え、諸仏の説かれる教えも聞こえた。また、もろもろの比丘・比丘尼・在家信士・在家信女がもろもろの修行によってさとりをひらくありさまが見えた。また、菩薩たちが種々の因縁により、種々に信じ理解することにより、種々の行為によって菩薩道を実行しているのが見えた。また、諸仏が世を去られたのちに諸仏の遺骨の上に七宝の塔を建てるのが見えた。・・・（後略）》つづきに関心のある方は『大乗仏典』お読みいただきたい。『法華経』にはチベット訳・漢訳の他、ウイグル語・西夏語・蒙古語・満州語がある。

インド仏教教団の消滅の歴史・インド仏教は最初から最後まで出家至上主義であり、世俗の善行を追求して出家教団サンガ（教団）への奉仕に努めれば、死後望ましい天の人に生まれ変わることができるという教えであった。都市型仏教の出家は、都市の裕福な在家信者からの布施を受けているにもかかわらず、在家の信者をおろそかにした。１１－１２世紀にかけてアフガニスタンのムスリムのガズニー朝とゴール朝が、何度もインド侵略を企てた目的は、寺院の寄進財産を奪うことにあった。仏教の精舎には仏なるための苦行修行よりも、財物を蓄積する仏教教団が成立していた。ヒンドゥー教やジャイナ教の寺院は、一般在家信者の強い抵抗で護られ破壊を免ぬかれ、１２０３年、ベンガル地方に残った最後の仏教出家教団ヴィクラマシラー寺院が壊滅破壊されて仏教教団はインドの大地から消滅した。（『わかる仏教史』宮元啓一著・春秋社より）

聖地巡礼・涅槃像・クシナガラ

釈迦涅槃像・(クシナガラ、ウッタル・プラデーシュ州)釈尊がクシナガラ城の跋堤河のほとり、沙羅双樹の間に入滅する様子を表し、仏伝中の重要な一場面である。仏教における修業上の究極の目的で、涅槃とは本来サンスクリット語の「ニルヴァーナ」、迷いのなくなった境地、煩悩の火が吹き消された状態の安らぎ、悟りの境地をいい、入滅・寂滅・円寂と漢訳される。

仏陀は頭を北にし２本のサーラ樹の間に右脇を下にして横たわり、《さあ、アーナンダよ、私のために２本並んだサーラ樹の間に、頭を北に向けて床を用意してくれ。アーナンダよ、私は疲れた。横になりたい。》と。アーナンダはサーラ双樹の間に、頭を北向けて床を設けた。右脇を下につけて、足の上に足を重ね、獅子座をしつらえて、正しく念い正しく心をとどめた。そして釈迦牟尼は修行僧たちに向い、《さあ、修行僧たちよ。おまえたちに告げよう。もろもろの事象は過ぎ去るものである。怠ることなく修行を完成なさい。》これが仏陀の最後の言葉であった。

釈迦涅槃像・涅槃堂

涅槃浮彫・タキシラ博物館２―３世紀

インドでは横臥法(身体を横向きに臥す)で、東は太陽が出る方角、南は死や悪魔の方角、北は楽園があると考えられていた。仏の終焉は、

《ブッダは比丘たちの生活は托鉢によって布施の供養を受けていた。かねてより鍛冶屋の息子、チユンダの家で布施供養を受け、その茸料理がいたんでいたのでしょう。腹痛にあえぐブッダの姿を見て比丘たちは「チュンダの布施の食事が悪い」と避難した。ブッダは「私は出家してから多くの食事の布施を受けてきたお蔭で、今日まで生かされてきた。その中でも、最初の供養と、最後の供養が最も尊いのである。最初の布施は乳粥を布施してくれたスジャータであり、最後の尊い供養者はチュンダである。供養してくれたチュンダに感謝していると伝えてほしい。」とブッダは言葉を残して入滅した。弟子たちはこの言葉を聞き篤く帰依した。》と伝える。

涅槃堂

沙羅樹の高木・３月中頃撮る

釈尊の荼毘塚と仏舎利と塔・（遺骨・サリーラ=舎利）

ラーマバールの荼毘塚・釈尊の遺体はマッラ族の祠堂のあるマクタ・バンダ寺で 7 日間供養された後荼毘にふされ、6 日間にわたり歌舞奏楽をもって供養したと伝える。跋堤河(ばつだいか)の辺(ほとり)で荼毘にふされ、沙羅樹の花が咲き、花びら降り注ぎ、香木の粉末が降り注がれ、天の楽器は供養するために奏でられブッダは静かに涅槃に入った。荼毘(だび)・パーリ語に相当する音写・闍毘(じゃび)・闍維(じゃい)ともいい、死骸を火葬することは古代インドでは一般的であった。

釈尊は跋堤河(ばつだいかわ)で荼毘にふされる

釈尊の荼毘(だび)塚

釈尊の舎利分骨は涅槃の報は四方の国々に伝えられ、各部族の比丘たちによる釈尊の分骨について争いが起きた。争いを静めたのはドローナというバラモンが「われわれは舎利を争うべきでなく、互いに忍耐して、舎利を平等に分けよう」と調停した。仏舎利は８部族に分けられ、それぞれの人々が仏舎利塔を建てた。１８９８年１月、ピプラワーで古い仏塔を発掘中に仏舎利の壺が出土し、西暦前３世紀を下らぬ文字で「シャーク・ムニの遺骨」であることが刻まれていた。

ヴァイシャリーの古塔跡内

保存のため屋根で覆われている

ヴァイシャリー塔・頭部に獅子像

ヴァイシャリー遺跡・アショーカ王が仏塔８４０００本を建立した内の１本という。塔の高さは１３ｍの頭上に獅子像がついている。アショーカ王(阿育王・在位前 268－232 頃)マウリヤ王朝の祖父チャンドラ・グブタが卑賤の身を起こして、前 317 年頃インド最初の大帝国を建国した。アショーカ王は王位の争いや、強国カリンガを征服した時１０万の犠牲者をだし、敗者に憎しみを抱き続けないように王は仏教に帰依、全土に仏塔を建造した。ブッタの死後 200 年後のことである。

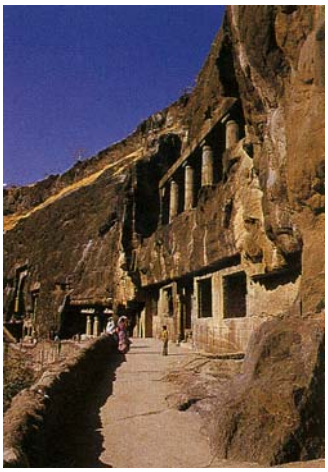
《チベットの文献に「ヴァイシャリーは街中が門や見張り台を備えた城壁で囲まれ、城内には建物や公園があり天国のようだ」とビハール州政府観光案内に説明があった。》

ブッダの４つの化身を表す・サルナート博物館

アジャンタ石窟群・（インド・マハーラーシュトラ州アウランガーバード北東 100ｋｍ）

アジャンタ石窟・デカン高原の台地をえぐって蛇行するワコーラ河の渓谷沿い、高さ７０ｍの岩壁に１,５ｋｍにわたって、紀元前１世紀から６世紀の間に造営された仏教石窟寺院３０窟の内、５窟が仏塔を祀ったチャイティヤ(祠堂)、僧房がある。前期窟(前１世紀―後１世紀)と後期窟は５－６世紀に分かれ、後期窟のほうが規模も大きく荘厳である。又、ヒンドゥー教・ジャイナ教の窟が３４窟彫られている。石窟に仏伝図や尊像の壁画は、グプタ時代の絵画が唯一の現存作例であり、全体として見事な石窟寺院となっている。１８１９年、虎狩りに来た英国軍人ジョン・スミスが偶然渓谷の窟群を発見以来、優れた仏教美術は世界を驚かせた。

アジャンタ東面・前１―後６世紀の造営



石窟群路(『AJANTA&ELLORA』より)

仏殿と前室・5―6 世紀『AJANTA&ELLORA』第２窟龍王と龍妃・５世紀(同)　第２６窟仏陀涅槃像・６世紀前半

アジャンタ石窟菩薩壁画は、西域から莫高窟へと、さらに東漸、そして我が国の法隆寺金堂壁画へ繋がりを強く感じる。(『AJANTA&ELLORA』より)

①第１窟蓮華手菩薩壁画　②同金剛手菩薩壁画　③敦煌・観音菩薩　④法隆寺金堂壁画

①アジャンタ石窟第１窟・蓮華菩薩壁画像、蓮華を手に持っている。②同金剛手菩薩壁画、宝石の冠をいだく。(『AJANTA&ELLORA』より)　③敦煌石窟第５７南壁中央説法図の東側の観音菩薩、唐初期。(『敦煌石窟の珍品』より)　④法隆寺金堂壁画ガラス乾板から甦る美、(日曜美術館より)

アジャンタ石窟壁画が日本に紹介された大正時代以降、**蓮華手菩薩像**は、法隆寺金堂の壁画(勢至菩薩像)との類似性を問われ、宝冠を頂いた菩薩像は、莫高窟の観音菩薩とも類似が見られる。

エローラ石窟群(インドのマハーラーシュトラ州・アウランガーバードから３０ｋｍ)

デカン台地の街道沿い岩山の斜面の２㎞わたり開削されている。５世紀―１０世紀の間に造像された仏教(１２窟)・ヒンドゥー教(１７窟)・ジャイナ教(５窟)の石窟寺院が３４窟(僧院・僧坊)ある。無数の精巧な彫刻をもつ巨大な寺院となっている。岩山台地を上から掘り下げて建造したもので、現場に立つと想像以上に大きい。(インド政府観光局案内書より)

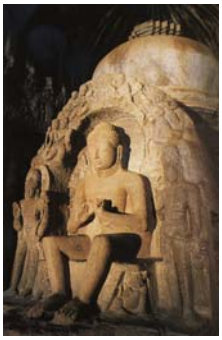
エローラ石窟群・１６窟

石窟群の内部

石窟寺院群は仏教寺院が最も古く、ヒンドゥー教、ジャイナ教の順で新しくなっている。エローラ石窟寺院は、初期の仏教寺院は己の救済を追究する思想の形となり、瞑想の空間としている。時代が下がるに従って、大衆を救う大乗的に変化し寺院も開放的な造営となって行く。７世紀前半に訪れた玄奘は「深い谷に、高い堂と奥行きのある建物は、窟を堀り峰に続き重閣、層台は厳石を背にして、石の仏像の高さ 70 尺、これは羅漢の願力が支えているのだ」と記す。

エローラ第１２窟・過去七仏(『世界美術大全集インド１』)

踊るシヴァ神・第２１窟



仏龕・第１０窟

過去七仏・第１２窟第３層の広間後壁のもの。転法輪印結跏趺坐仏が７体、禅定印結跏趺坐仏が７体、いずれもほぼ同じ様式の尊像が並べられている。**踊るシヴァ神**・６－７頁参照。(『AJANTA&ELLORA』より)**仏龕**・第 10 窟にある仏龕は、大ストゥーパの前の仏像である。室内は暗く、素人では写真はとれない。(『AJANTA&ELLORA』より)

仏教の三霊樹(樹木崇拝)・ 高貴な香り

無憂樹・樹木の名の音写、阿輪迦樹を意訳して無憂樹という。『過去現在因果経巻１』によればお釈迦さま釈迦国の王妃、麻耶夫人がルンビニーの花園で、ムユウジュの花(無憂華)を摘もうと

した時、釈迦が右脇からお生まれになった。

菩提樹・ブッダは苦行修行の果てに、大樹の下で悟りをひらいた。悟りをボダイ・菩提といい、覚樹・道場樹ともいう。後、菩提樹と呼ばれた。

沙羅樹・（沙羅双樹）釈迦の入滅時、クシナガラ郊外でブッダは自ら横臥して「アーナンダよ、床を用意してくれ、私はつかれた」といって涅槃に入った。その時、沙羅樹は季節外れの花が咲き、天から音楽奏でられ、天から栴檀の粉がふりそそいだという。

ムユウジュ・マメ科

印度菩提樹・クワ科

沙羅樹・フタバガキ科

尚、日本の寺院に植えられているのはドイツの菩提樹でシナノキ科、日本での沙羅の樹と呼ばれている樹はツバキ科のナツツバキで、インド沙羅樹とは異なる。沙羅樹はサンスクリット・パーリ語の音写、意訳して「堅固・高遠」という。沙羅樹はインド原産フタバガキ科の高木で淡黄色の小さな花をつける。（上記の３霊樹は千葉県・南房パラダイスで撮る）

紀元前 1500 年頃アーリア人が北インドに入った。インドの先住民族ドラヴィ人は地母神信仰・生殖器崇拝・樹木崇拝、その崇拝文化をアーリア人が受け継ぐ。ブージャージャの儀式の「ブー」はタミル語で「花」の意で、ブージャとは花を奉げるという意味となるらしい。

日本のナツツバキ

イメージ・ブッダ聖地巡礼の道・クシナガラへの途上・インドの風景は何時も霞がかかる

第2章・北パキスタンの仏跡を訪ねる

スワート地方・（パキスタン・スワット河流域・ペシャーワルから北東２２０ｋｍ）

玄奘の『大唐西域記』はこの地方の記述に、

《ウツデイヤーナ国(烏仗邦国)は周囲 5 千余里ある。山や谷が続き、川や沢が野に連なっている。穀物は播(ま)いてはいるが地味は豊かでない。葡萄(ぶどう)が多く甘蔗(かんしゃ)(砂糖黍)はすくない。土地は金、鉄を産出している。人の性質は臆病で人柄は嘘偽りがおおい。学問は好きであるが余りつとめず、禁呪(まじない)を学んでいる。1 千 4 百の伽藍(がらん)があったが、多くはすでに荒廃している。昔は僧徒が 1 万 8 千人いたが、今は減少している。みな大乗を学び禅定を事としている。善く教文を誦(とな)えはするが、あまり深くは意義を究(きわ)めていない。》と記している。

ガンダーラ地方はクシャーナ王朝の第４代カニシカ王の都があった所。中央アジアの大月氏国(トルクメニスタン付近)が２世紀頃に西北インドから中央アジアを支配する大帝国を打ち立てた。カニシカ王は仏教の保護者でガンダーラ地方は大乗仏教が繁栄し仏像が造られるようになった。

シャンカルダールの大塔(仏舎利塔)

ガレガイの磨崖仏

ブトカラ遺跡の仏塔

シャンカルダールの仏塔(上軍王塔(ウッタラセーナ))・スワートに残る最大のブッタの舎利を祀る仏塔。この塔は３－４世紀頃建立されたもの。直径１２、８ｍ、高さ２７ｍのストゥーパになっている。

玄奘は『大唐西域記』に、《大河の東に高さ６０余尺の上軍王が建てた塔がある。昔、如来がまさが入滅されようとする時、人々に「私が涅槃(ねはん)に入った後に、ウツデイヤーナ国の王に宜しく舎利の分け前を与えるべし」と告げられた。入滅後、諸国王将が同量に分けようとする時、上軍王が後れてやってきたので、辺鄙(へんぴ)の王を軽んじる論が出た。この時、天人たちは如来の御遺言を重ねてはっきり言ったので事なく同量の分け前に与(あずか)り、本国に持ち帰り丁重にこの塔を建て祀った。》と記している。

創建当時は黄金に輝き、基壇には仏像がはめ込まれていたらしい。『大唐西域記』には上軍王塔と記述され、８つにブッダの遺骨が分けられ、その一つがここに納められたということになる。塔とはストゥーパのこと。仏教における崇拝の起源は、仏陀の死後その遺骨(舎利)を祭るストゥーパに供養と供物が捧げられた。この仏塔はスタインによって発見されている。

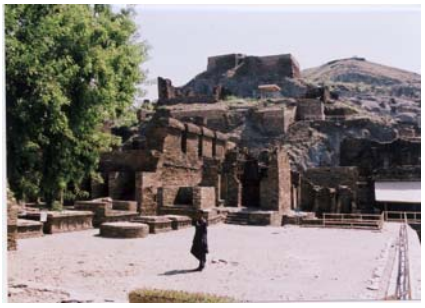
ガレガイの磨崖仏・スワット河流域の道路沿いの崖に３ｍほどの坐仏像。顔の部分は崩れてしまっているが、結跏趺坐(けつかふざ)(足の組み形)と禅定印(ぜんじょういん)(手の組み形)は残っている。磨崖仏の周辺の眺望は実に素晴しい田園風景である。

ブトカラ遺跡の仏塔・スワートを代表するガンダヘラ遺跡となる。紀元前２世紀頃、アショーカ王によって建造された直径１７ｍの基壇の大ストーパとなる。８世紀―１０世に造営された構造物が現在残されている。仏陀像、菩薩像等の塑像が首部はないが残っている。大ストーパの回りには２００数個の小ストーパあるという。仏院遺跡は古代のウディヤーナ国の首都。宋雲の記す陀羅寺に比定され５－７世紀中国の巡礼僧たちが訪れている。『宋雲行記』の該当ケ所に「城の北に陀羅寺があり、浮図(塔)は高く大きく、僧房はたくさん立ち並んでいる。寺内には金像が六千体とりまいている」とある。

スワット地方・画面左側の道脇にガレガイ磨崖仏が、磨崖仏から見下ろす景観は絶景なり

山岳仏教都市タクテイ・バヒ遺跡遺跡・イスラマバードの手前１７０ｋｍ

タフティ・バヒ遺跡



同所僧房跡

ストゥーパ基壇のレリーフ

タクテイ・バヒ遺跡・２世紀から５世紀かけて仏教文化が花開いた地方となる。遺構は尾根続きに３３ｈａに渡って広がり、ガンダーラの創世・展開・成熟・終末期を見ることができる。メイン・ストゥーパと居住区の間には、３０の仏像を祀った小御堂が並んでいたという。遺跡は四方の山々に広がり、当時は山岳仏教寺院都市であったといわれる。この遺跡から出土品は全てペシャーワル博物館に展示されている。

タクテイ・バヒ遺跡のマンダーン県の日本語解説板を要約する。

《タクテイ・バヒとは「丘の上の泉、井戸」の意味で、丘の頂上に２つの井戸の遺構があり、町と遺跡にこの井戸に由来している。遺跡は２世紀から５世紀にかけて、この地域に仏教文化が花開いた様子を今に伝える。遺構は丘の山々の尾根に３２、９ｈａわたって広がり、ガンダーラでもっとも壮大な遺構である。この遺構は1907年―1911年にハーグリーブスによって発掘され、その遺物はペシャーワル博物館に展示されている。ここではガンダーラ美術の早期から末期の様式を見ることができる。遺構は主塔院・奉献塔院・三塔の室・三面僧房・瞑想室等あり、ガンダ

ーラ風の石積みでつくられている。》とある。

北インドに進出した仏教は、ガンダーラ地方でギリシア文化と混淆して、紀元１世紀前後には仏像が誕生した。仏像の歴史的経緯は、ペルシア、ギリシア、クシャーナ、ササーン、インド、土着文化の混淆して誕生したことが解る。

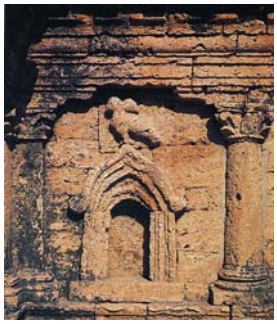
タキシラ仏教遺跡群・古代都市遺跡

タキシラ遺跡群の歴史は紀元前６世紀まで遡る。紀元前３２６年、アレクサンダー大王はペルシアを制圧し、さらに東進しインダス川の肥沃な土地を治め、「タクシャシラ」は切り出された石の都の意、即ちタキシラであった。大王はタキシラを制圧した後、タキシラはインド西北部を統一したマウリヤ朝をも隷属して、西方と東方の異文化の十字路でガンダーラ美術を生み出す。５世紀、タキシラはフン族(エフタル)の侵略を受け仏教寺院は破壊された。

パキスタンの都市ラワルビンディの北西約３２キロにわたる**シルカップ古代都市遺跡**となる。ビール丘、タキシラ、シルカップ、シルスフの三つの都市遺跡が時代順に並んでいる。この都市は紀元前１世紀から後１世紀、バクトリアのギリシア侵入まで栄えた所である。

中の写真、仏塔跡の基壇はイランに起源をもつ**双頭の鷲のレリーフ**が刻まれ、ギリシア系民族の血を引く人たちが文明都市をつくり、高度な文明十字路であったことを物語る。この古代都市文化が仏像の出現させ、ガンダーラの仏像はギリシア文化の影響を強くうけ、仏像の顔は西洋的な面立ちと長髪で出現したが、やがて古代インドの技法を受け継いだマトゥラーの仏像の出現にいたって、やがてブッタの神格されたお顔は「螺髪(らほつ)=頭部髪様式」を有する仏顔となる。

シルカップ・双頭の鷲の仏塔基壇



双頭の鷲・基壇レリーフ

シルカップ古代都市遺跡

発掘で釈迦の仏舎利銘がある

タキシラのカーラワーンＡ１堂内のグリハ・ストゥーパでは、深い円形の穴の中に、カンジュール石で舎利室をつくり、その中に金製の容器の中に骨片が入っていた。容器と一諸に水晶・真珠・ガーネット・ガラス・トルコ石などがあり、注目されるのは、造塔銘を記した銅版一枚が出て、銘はカロシュティ文字で次ぎのように書かれている。

《アゼースの１３４年、シュラーヴァナ月の２３日に、優婆夷(うばい)(女信者)で、バードラパーラの妻であるチャントラーブヒーが、兄弟のナンディウァルダーナ、息子のシャーマとサチッタ、娘のダルマー、嫁のラジァとインドラ、シャーラの息子のジィーヴナンディンと共に、チャダシーラー(タキシラ)のグリハ・ストゥーパの中に舎利を納めた。説一切有部の愛用によって、町の供養のため、一切有情の供養のため、涅槃に達成

仏舎利塔・タキヒラ
片岩・２－３世紀

できることを願って。》と刻まれてあった。

このアゼースはサカ族の王で、アゼース紀元を紀元前５８年とすると、１３４年は紀元７６年にあたる。「涅槃」とは生存中に涅槃を得たものは生存の制約から完全に離れたことを意味する。ストゥーパは火葬骨を納さめた墓の一種であるが、仏陀の涅槃後、アショーカ王が遺灰を８舎利のうち７つを発掘して、８万４千の塔に分納した一部であった。

仏塔礼拝図・浮彫 3－4 世紀ガンダーラ出土・片岩高 28 ㎝・ドイツ・インド美術館『世界美術全集・中央アジア 15』

ストゥーパ・漢訳仏典では卒塔婆（そとうば）と音訳。仏塔=ストゥーパ。日本に於ける三・五重の塔建造物の頂きに「相輪（そうりん）」があるのは、ストゥーパの原形を表している。

大乗仏教の栄え・北方インドでは多くのストゥーパや寺院がつくられ、仏像制作もクシャーナ王朝の第４代君主カニシカ（迦膩色迦）が仏教を保護した。カニシカは仏教の説法を聞き、仏教に帰依したという。盛んになり大乗仏教も栄えた。

カニシカ朝小月氏は現在のトルクメニスタン周辺にいた遊牧民で、中央アジアの侵略戦線過程で、ギリシア文字を用いたようである。「大王」はインドから、「統王」（帝王の血統・皇統）はイランから、「天子」は中国取り入れたという。

アマラーヴァティー大塔の浮き彫り・マドラス州立博物館

クシャーナ朝の王・カニシカ１世の金貨・右表・左裏・平山コレクションより

カニシカ王像

アマラーヴァティー大塔・バールフトの浮彫り、紀元前１―２世紀に石灰岩に彫られ、南インド独特の繊細な作風。大乗仏教はストゥーパを崇拝する人々のあいだから生まれた。

カニトカ1世の金貨・表・左手に三叉の戟（ほこ）を持ち、右手を拝火壇にかざす、焔肩の国王立像、銘・諸王の王、クシャン族。裏・頭光、身光のある、右手施無畏印の仏陀立像。銘・ブッダ・２世紀。

カニシカ王胴体像・遊牧民族シシヤーナ族の王者の風格が偲ばれる。２世紀前半、マトゥラー付近出土。マトゥラー博物館蔵。この像の外套のすその部分に「大王、王中の王、天子、カニシカ」という銘文がある。膝（ひざ）の下におよぶ長い外套は、皮の長靴はクシャーナ族の服装の特色で、右手王の笏杖（じゃくじょう）を持つが、王権を示す矛かもしれない。左手に鞘飾りのある佩剣（はいけん）を握っている。全体として遊牧騎馬民族出身の王者の理想を示している。（マトゥラー博物館蔵）

ガンダーラ地方の歴史経緯・健駄邏（けんだら）と音写。インダス河の西方、現パキスタンのチャールサッダ。カニシカ王の在位、紀元１４４－１７３年と想定する。『後漢書』の「西域伝」によれば、《貴霜翕侯（クシャンきゅうこう）（クシャーナ朝の初代君子）の丘就卻（きゅうしゅうげき）（大月氏王クジュラ・カドフィセス）

が貴霜王を名乗り、安息(バルティア王国)から高附(カーブル国)の地を奪取し、濮達、罽賓(ガンダーラ)を征服して支配した。丘就卻が80余歳で死んだ後、その子、閻膏珍(ヴィマ・カドフィセス)が王となり、天竺(インド)を滅ぼして隆盛となった。》とある。

カニシカ王が仏教を信奉し保護・援助したことは、仏典にあることなので事実である。貨幣に仏陀像が登場するのはカニシカ王時代からである。しかしカニシカ王は仏教のみ信仰していたわけでなく、シヴァ神・スカンダ(軍神、韋駄天)火神、風神の貨幣も出土している。カニシカ王が保護した仏教は、伝統的な保守仏教の説一切有部(部派仏教・前1世紀半ば上座部から派生)であった。カニシカ王の保護した仏教は中国や日本に伝播した大乗仏教との直接の関係は薄いと考えられている。

ガンダーラ美術と仏像の誕生・ブッダの没後５００年を経て、パキスタン北部のガンダーラ地方(現ペシャーワル周辺)に、釈迦も訪れこともない地にガンダーラ仏教美術誕生した。紀元１、２世紀に仏像がこの地方から生まれ、このガンダーラの地方にはインド系・ペルシア系・ギリシア系・中央アジア遊牧民族が流入していた。この混合した各民族の宗教にも受け容れられる思想は、インド人の抱いた理想的な仏陀像、ヘレニズム世界の哲学的な人間思想の像、ギリシアオリユヨンポスの神々からの人間像を加味しながら仏像は生まれたのである。

①釈迦如来立像1−2世紀　②弥勒菩薩立像2−3世紀　③釈迦如来立像3−4世紀　④釈迦菩薩坐像2−3世紀

①から⑦写真と解説は『世界美術全集・中央アジア15巻』小学館より

①釈迦如来立像・ガンダーラ、マーマーネ・デーリー出土、片岩・高92、7cm。ペシャール博物館。ガンダーラの仏陀立像としては極めて端正な作品の一つである。頭部の大きな頭光で飾られているのは、釈迦如来が普通の人間とは異なる存在を強調している。頭頂部に大きな肉髻があり、如来の超人的特質の一つである。本来、頭髪を紐で束ねたものにすぎなかったものが、叡智と涅槃の象徴となった。彫りの深いアーリア系の顔貌に特色がある。

②弥勒菩薩立像・ガンダーラ、シクリ出土、片岩・高120㎝。パキスタン、ラホール博物館。

この菩薩は仏滅後５６億７千万年後にこの世に誕生する未来仏で、現在は兜率天(欲界における六欲天の第４の天部)に住んでいると経典は説く。その像容は釈迦牟尼菩薩と同様に、インド人王侯の姿を模しているので、下衣と上衣をまとい、首飾り・胸飾り・腕輪をつけ、サンダルを履いている。

③**釈迦如来立像**・ガンダーラ、タフティ・バイ出土、片岩高 222ｃｍ。ラホール博物館。

大型の如来像で、頭光は欠損している。頭髪と肉髻の描写は渦巻き状の螺髪で表されていて、髪を束ねたものでなく、頭の骨と肉が隆起したものに変化していることがわかる。螺髪はグプタ朝下インドの如来像に多く見られる。ガンダーラ如来像の巻き毛の頭髪がしだいに螺髪へと変化していったものと考えられる。

④**釈迦菩薩坐像・(樹下観耕図)**・ガンダーラ、サリ・バロール出土、片岩高 69ｃｍ。ペシャーワル博物館。釈迦菩薩像=樹下観耕ともいう。菩提樹の下、結跏趺坐(跏は足の裏・趺は足の甲・足の表裏を結んで坐する)の図となる。一人瞑想するジャンプー樹の下に座り、「一心禅思三昧」にしたり、この世の超越した境地に到達する。この仏伝は台座の右端に農夫が犂をつけた牛２頭を使って畑を耕作の描写、中央に香炉、二人の供養者、さらに左端にも釈尊に礼拝している供養者がいる。釈尊の異次元の存在を示し、胸飾り・首飾り・腕輪など当時のインド王候の外観を模している。ガンダーラ美術の傑作である。

⑤釈迦如来坐像・１－２世紀

⑥釈迦如来坐像２－３世紀

⑦弥勒菩薩坐像２－３世紀

⑤**釈迦如来坐像**・ガンダーラ出土、片岩高 52ｃｍ、ベルリン・インド美術館。頭光は大きいが、その上部が水平に切られているが、本来は円形であると思われる。円形の頭光は人間界とは異なる次元を意味し、光明の世界を象徴して神々の住む世界を現す。台座は唐草文を縦に施した布で覆われ、その上にクッションを置いて釈迦牟尼が両足を組んでに結跏趺坐(跏は足の裏、趺は足の甲、両足の甲をそれぞれ反対の腿の上に乗せる座り方)している。台座の左右に獅子頭が配され、獅子座となっている。

⑥**釈迦如来坐像**・ガンダーラ、サリ・バロール出土、片岩高 75ｃｍ。ペシャーワル博物館。

説法印を結んだ釈迦如来の坐像である。右肩を露出して大衣をまとっているが、これは説法印の如来像の典型的なスタイルで、通肩(袈裟着方、両肩を覆って着る)に対し、偏袒右肩(右肩を肩脱ぎにし左肩のみ覆う)をしている。大衣は両足の下方の部分では、大きなループを描き、右側の襞のいくつかが波打ち、その下方が扇状に開き、如来仏像の大衣の典型的な表現である。

⑦**弥勒菩薩坐像**・ガンダーラ、サリ・バロール出土、片岩高 88ｃｍ。ペシャーワル博物館。

獅子座に結跏趺坐した弥勒菩薩を表している。豊な頭髪は８字形のループを描き、眉間には白毫相(仏の３２相の一つ、眉間から光明を放つ長く白い巻き毛)が円形突起で表し、両目はやや伏し目、口髭が浮彫りされている。両手は説法印を結んでいる。台座の正面に菩薩を礼拝する６人の供養者像の描写があり、寄進者一家を表しているのかもしれない。

菩薩像の誕生・慈悲にもとづく菩薩行は一般の人々にはなかなか実践しがたい。そこで在家の人は諸仏・諸菩薩に帰依しその力によって救われる。その諸仏のうちでも東方にいる阿閦仏、西方にいる阿弥陀仏の観念が生まれ、釈尊の入滅後５６億７千万年後にこの世に現れる弥勒菩薩である。やや送れて薬師如来が信仰された。諸仏が信仰され、また菩薩も超人化してその救済力を観音菩薩・文殊菩薩・普賢菩薩に求められた。これらの諸仏・諸菩薩に帰依信仰することによって凡夫は救われると説くのである。こうした諸仏・諸菩薩に信仰が高まり、その像体を具体的な表現したい崇拝の願望が多数の仏像、菩薩像が造り出されて行く経緯となる。

大乗仏教の発展・伝統的な諸派仏教は、自らを山奥で、自分自身の解脱を求めて、ニルヴァーナ(涅槃)に入ることを目指し修行をした。しかし、理想の涅槃を追求する生活は、自ら自身のみの涅槃を求める修行専念は小さな乗物、小乗仏教者だと大乗仏教者は蔑すんで攻撃した。大きな乗物派の大乗諸派教団は、涅槃のみを目指す小乗諸派の修行僧を利己的・独善的であると責めた。彼等は自らの至福のみ欲し、他人の幸せを考えない小乗仏教者であると攻撃した。大乗仏教は慈悲の精神に立ち、生きとし生けるもの(衆生)すべての人々を苦から救う、「仏心とは大慈悲これなり」『観無量寿経』を目指した。大乗とは、生きとし生けるものを輪廻の世界の苦しみから救う教で、大乗は自分だけが彼岸(かなたの目指す理想の境地)の世界に達するのではなく、まず衆生を救済しなければならない。大乗仏教は利他行=慈悲行を実践する僧を菩薩と称した。菩薩は身を捨てて生きとし生けるものを救いだす思想が大乗仏教なのであると確信となる。

平山コレクションの『ガンダーラとシルクロードの美術』を観る

①三尊像・3 世紀・ガンダーラ
出土・H59 ㎝×巾 43 ㎝

②菩薩半跏思惟像3、4 世紀
片岩・H33 ㎝×巾 25 ㎝

③弥勒菩薩交脚倚象・2,3 世紀片岩・H63 ㎝

① 脱ぐ着衣法(偏祖右肩)、説法を表す手勢(転法輪印)、蓮華座はインドに由来する。二菩薩を両側に配した三尊形式はガンダーラに始り、東方へ伝播した。

② **思惟像は**思いをめぐらす菩薩を表す。蓮華を手にすることから観音菩薩であろう。両側の花網を手にした者たちはこの作品の寄進者。亡くなった祖先の死後に極楽への願と祈り。

③ 足首を交えて坐り方は騎馬民族の王侯に由来し、中央アジアに広く見られ、頭頂に結ばれた髪はギリシア青年の髪型を模している。左手には水瓶を持っていたのであろう。

①から③までの解説は『ガンダーラとシルクロードの美術』平山郁夫コレクション・2002 年より掲載。

余話1・パキスタン北部からフンザ地方からカラコルム山脈越え

カラコルム・ハイウェー・中国新疆ウイグル自治区と、パキスタン北部のカラコルム山脈を横断道路で、クンジュラブ峠４６９３ｍを通り国境を横断する１３００ｋｍ道路が結んでいる。

パキスタン国境ゲート

カラコルム・ハイウェー

フンザ川インダス川合流点・右ヒンズークシ・左カラコルム・正面ヒマラヤ山脈

玄奘は 18 年間の遊学を終えて、帰路にこの付近の道を通過帰国している。現在のハイウェー道を選べば、ギルギット、フンザをえて西域南道に向かう。周囲の山々は 3 千ｍから 7 千級の氷河に囲まれた秘境の地は夏期でも雪が降る。フンザ周辺は２０世紀中頃まで自治小王国が存在して、政治はミールと呼ばれる藩王政治であった。19 世紀末から 20 世紀初頭この地方へロシア帝国が南下を始めたが、英帝國軍はロシアを北に押し上げた。そして英国はフンザミール王を中国の新疆カシュガルへ追いやり、ミールの弟に座を継がせ、傀儡(かいらい)政権を打ち立たてた秘境の地である。現在ミールの末裔はパ政府の保護のもと王族として続いている。

『漢書』西域伝には《長安を去る 9950 里、戸は 490、口(人口)は 2733、勝兵 740 なり。山居して石間に田し、白草あり。石を累(かさ)ねて屋をつくる。民は手を接して飲む。小歩馬を出し、驢(ろ)ありて牛無し》と記され、当時のカラコロム山脈 5 千ｍ級の山越えは「ヤクの鼻から血を出させて、血圧を下げながら峠を越える》と『西域伝』は伝える。

チラースの岩絵・インダス川沿いにある仏像とストゥーパ(塔)

中パ国境クンジュラブ峠・４９４３ｍ

チラースの岩絵・岩絵の描かれた時代は紀元前後から１０世紀の長期にわたって、ガンジス川沿いの渡しなどに見られる。往来した隊商・仏教徒・遊牧民が祈念や道標に残されたものなのだろうか、マウリヤ朝の仏教保護政策時代の岩絵がインダス川沿いに３万点残されているという。

余話2・国境審査・陸路での国境を通過する雰囲気は国の政治状況下によって異なる。新疆からパキスタン入国ゲートは実にのんびりとしていた。インド、ネパールも同じようなであった。しかし、新疆ウイグル自治区のイーニンから、カザフスタン・コルゴスへの入国は３時間の緊張した検問手続きを受けた。ウイグル族とカザフ族が仲良くなることは、漢民族が困るらしい。

インド圏に入って何時も思うことは、欧米からの観光のご婦人達は、皆そろってサリー衣に着替えることである。その理由はおそらくインド・ネパール・パキスタンなどはホテル以外にトイレが無いことを計算にいれているからだろう。実例は、ペシャーワルの大都会で男性がクルタパジャマで堂々とご用足しを見たことがある。さらにその衣裳の凄さはブッダ・ガヤー駅構内の線路上で、半跏思惟像の如く佇んでいるご婦人を見た。「電車が来たら危ないではないか」と心配したところ、心配無用、なんと線路上で御用たしだったのである。サリーは体を屈(かが)めてもスッポリと身を包み、魔法のサリー衣服には舌を巻いた次第である。

余話3・ワガー国境(国境閉鎖式)・パキスタン・ラホールから約３０ｋｍ離れたインド国境の町ワガーで、国旗降納式が毎日行なわれる。フラックセレモニーは、両国民と観光客が集まり、国歌や掛け声を出して義兵を大声援する。国境を閉鎖する夕暮、双方の国境警備隊員は自国兵士の勇者の儀式を華々しく国民に見せる。パキスタン側から「パキスタン、ジンダーバード(万歳)」と勇者儀仗兵に大声援をおくると、今度は奥側の赤い扇型の冠を被ったインド儀仗兵に、インド国民から天が割れるほどの声援がおくられる。その両国民の大声援に両兵士たちは、大きく手ふり、足を高々と上げ、そのキビキビした動作は、両国境警備兵の鼓舞した勇者の姿を両国民に強烈に見せるのである。イ・パ両国の側に居る観光客も互いに熱が入り大声援をおくる。何故か不思議な血の興奮を覚え、やがて夕暮となり儀式は終了、一日が暮れるのである。

ワガー国境ゲート・手前がパキスタン国の義兵は黒冠帽子、門より奥がインド国の儀兵は赤冠帽子

モヘンジョ・ダロへの途次・パキスタン人たちは本当に日本人贔屓(ひいき)である。バスの中より。

第3章・セイロン島から東南アジアへ伝播した南伝仏教

3－1・スリランカ(セイロン島)・ポロンナルワ遺跡

ポロンナルワ遺跡のガル・ヴィハーラ涅槃像・立像・坐像３仏

ワタダーゲ円形仏塔・ポロンナルワ

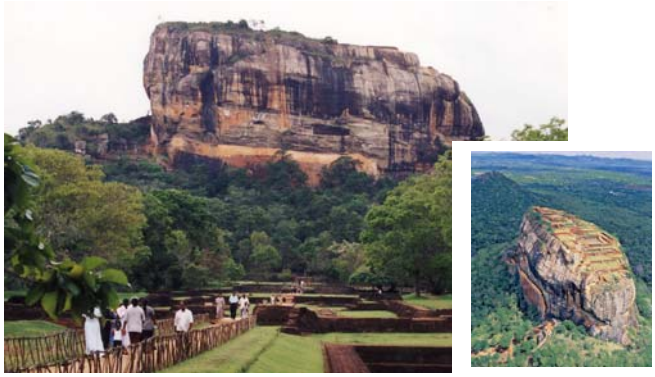
紀元前３世紀、アショーカ王(阿育王)の命により、インドからセイロンに派遣された開教使が建立した寺院が上座部仏教の発祥地となる。その上座部仏教のマハーヴィハーラ派(三蔵=律蔵・経蔵・論蔵の伝統的な注釈を保存する学問を高めた派)が栄えた。後、５世紀にインドのブッダゴーサが来島して上座部仏教教学を確立し、その後、南インドのタミル人の進出によってヒンドゥー教や大乗密教が栄えたが、１２世紀パラッカマーバーフ王がポロンナルワで上座部仏教を復興し繁栄した。

ポロンナルワに仏教都市は、シンハラ王ウィジャヤバーフ１世の孫、パラークラマ・バーフ１世が灌漑用貯水池など多くの建築物を建設して繁栄した。スリランカの仏教は、ミャンマー・タイ・ラオス・カンボジア等の仏教と同じ南伝仏教の上座部仏教を伝える指導的な立場となる。インド大陸から渡来した勇猛果敢な獅子の如きシンハラ民族が未開の先住民を征服してセイロン島に建国した。スリランカの上座部の伝承は、西インド教団の布教活動によって釈尊への礼拝を、偉大な釈尊の足跡を象の足跡にたとえ在家信者の生活に信仰の喜びを与えた。この教えにセイロン王は満足し、家臣と共に仏教に帰依したと伝わる。

ガル・ヴィハーラの釈迦涅槃像・涅槃像１４ｍ、立像７ｍ。仏陀が涅槃に入ってしまったので、一番弟子のアーナンダが悲しみに暮れている姿だという。スリランカ中部の古都、ポロンナルワ仏教遺跡の仏教美術は世界的に評価の高い。１３世紀の中頃に衰退して、その後は忘れられていたが、１９世紀に発見の経緯となる。仏教都市ポロンナルワから、ビルマやタイへ僧侶を巡拝して、東南アジアへ南伝仏教を伝えた仏教都市となっていた。

シーギリヤ宮殿・ライオン岩と呼ばれる所。宮殿の入口はライオンの足爪が階段入口に造形で造られている。バスでジャングルを過ぎると、面前に岩山がそそり立つ様は驚きである。この伝説の宮殿物語は、5 世紀後半、１１年間この地を統治した狂気の王、カーシャパは父を殺害し王位を奪った若き王子は平民出身の母からの出身、腹違い弟のモッガラーナは王族の血筋で、王権継承を持つ弟の復讐を恐れたカーシャパは、狂気とも思える岩山の頂上に宮殿をつくり、王位権を岩山で政権を維持した。しかし、１１年後、弟モッガラーナはインドから軍勢をもって宮殿を陥落させ、弟は王権を取り戻した。時は移ろい、異母兄弟の王位権争いは忘れられ、ジャングル

の中に埋没した。シーギリヤ・ロック宮殿が発見されたのは、カーシャパ王が死んでから約１４００年の後のことで、イギリス植民地時代の１９世紀後半であった。狂気の王とされるカーシャパの宮殿建築技術は、水の管理術、要塞の設計は当時の土木工学技術の高さを現代に伝える。狂気王とされるが、現代から見ても岩の上に宮殿を造営した能力は高く評価される。狂気王の宮殿は世界的に有名となり、スリランカ観光の名所となり外貨を稼いでいることでも分る。



シーギリヤ・ロック宮殿は頂が宮殿跡・上空から見る　　シーギリヤ・レディ岩絵（観光案内より）

シーギリヤ･レディの岩絵･フレスコ画･シギリアロック宮殿壁を２０分ほど登ると、シーギリヤ・レディの岩絵が描かれている。よくもこのような断崖絶壁面に描いたものと、只、只感心する。目もくらむ絶壁を鉄骨の足場を登って行くと壁画がある。古代人はどのようにして、描いたのだろうか考えさせられる。しかし、５世紀の美人画は信じ難いほど美しく神秘的である。

スリーマハーの菩提樹・スリランカ最古の都があったアヌラーダブラにあるスリーマハー寺院にある菩提樹は、紀元前３世紀、アショーカ王（阿育王（おくいくおう））がブッタ教えを帰依し、シリア・エジプト・マケドニア等に派遣し、平和と共存共栄を図るために使者を送り、ブッタのシンボルとしてブッダ・ガヤーの菩提樹の株分けを贈った。この菩提樹は南方の仏教僧に崇拝され、２３００年の寿命を保っている。後、ブッタ・ガヤー寺院の菩提樹はイスラム軍の侵攻で焼失したが、ここ地より菩提樹がガヤー寺院に里帰りしている経緯となる。

スリーマハーの菩提樹　　ルヴァンヴェリセーヤ大塔

ルヴァンヴェセーヤ仏塔･２世紀の建造の仏塔で高さ５５ｍとなる。建造当時は１１０ｍあったと伝わる。白い円径の仏塔の枠上に、点のように見えるのは人の姿である。見た目以上の大塔の大きさが知る。

キャンディの仏歯寺・仏歯寺は世界の仏教徒あこがれる聖地でもある。南インドのカリンガ国の娘ヘーマ・マーラーとその夫ダンクによってセイロンへもたらされたのは西暦 301 年という。釈尊の左犬歯が伝わる。セイロン王キッ・スリー・メヴァンナ(在位 296－324)に仏歯がおくられた。セイロン国を統治することにおいて、仏歯の守る寺院を建立して、仏教王権の継続に役立たたせたのである。後、キャンディ王朝ダルマ・スリヤ一世が 1590 年代にキャンディの地に仏歯寺を創建、盛大な仏歯祭を開催した。それ以来、仏歯祭は国家の行事として今日まで続いている。

ダンブッラ石窟寺院・紀元前 1 世紀に創建された。歴代のシンハラ王朝国家安寧の祈願寺院であった。ダンブッラとは、「水が湧き出る岩」という意である。ユネスコの世界遺産にも認定。マハー・ラージャ・ヴィハーラの意は「偉大な王の寺」という。岩洞の内部は巾約５２ｍ、奥行き約２５ｍとなる。入口に大勢の信者が手を合わせて坐していた。

仏歯寺

ダンプラ石窟寺院

マハー・ラージャ・ヴィハーラ寺内部

ブッタの教義・ブッタはブッダ・ガヤーの菩提樹の下で、6 年の苦修行で悟りを開き成道となる。仏陀の教えを深く実践するならば悟りを達成して成道となる。すなわち仏になることができる、という教えである。あらゆる苦難を修めても、生・老・病・死の苦しみと執着が残る。いくら修行を積んでも、執着の解決を実現しなければならない。出家修行すれば生活手段を失い、日々の食べ物は他人に依存する乞食生活をしなければならない。

男の出家修行は「比丘」、女を「比丘尼」と云い、この本来の意味は「食べ物を乞う者」仏陀の教えを在宅で信奉する男「優婆塞」、女を「優婆夷」といい、語義は「出家修行者に仕える人、接待する人」という仏教教団を構成する関係が出来上がっていくのである。

戒律は「戒」と「律」の合成語で仏教教団(僧伽・原義は集団、集会を意味し、サンガと呼び仏教で採用されて、修行者の集まり、教団と称される)の修行規範を示す用語。「戒」とは修行を働きかける自発的な精神をいい、「律」は僧伽の規則となる。在家信者は仏教を修行するとき、仏・法・僧の三宝(教主=仏陀・教え=法、ダルマ・教団=サンガ)に帰依し、比丘に五戒(不殺生・不偸盗・不邪婬・不妄語・不飲酒)を授かる。「戒律」平たく言えば、修業者の自発的な生活規律となる。入団時に受ける具足戒は、比丘に二百五十戒、比丘尼に三百五十戒の条文となっている。

仏陀の教えの記憶を確認する結集・比丘たちの聖典編纂会議のこと。比丘たちの記憶を再確認する。仏陀の入滅後１００年頃、ヴァイシャーリーにおいて７００人が１回目の結集開催となる。２００年後、第２回結集はパータリプトラにおいて１０００人で開催された。第３回結集はカニシカ王の元で、カシミールにおいて５００人で開催。第４回の結集が伝えられている。

上座部仏教・ブッダの入滅後１００年して「律」の解釈などの意見が対立し、教団は保守的な上層の上座部と、進歩的な大衆部とに根本分裂した。上座部は教理・戒律に伝統を重視する傾向が強かった。その後も分裂を繰り返し、スリランカの説一切有部は、今日までスリランカ上座部として存続している。南伝仏教は釈迦・仏塔・仏像のみを礼拝する一仏主義仏教の信仰となっている。その外に経量部、化地部、法蔵部、正量部等があるらしいが、「部」派の宗派の歴史経緯について筆者の能力では遠く及ばない。

セイロンの大乗仏教・西暦紀元前後からインドに広がった仏教新理念形成の変革運動との思想活動が興る。この活動はインドにおいて、紀元前後から修行者や在家信者からの大乗仏教運動が興っている。3 世紀にはこの動きがセイロン島に波及し、島の北部に紀元前一世紀に建造された寺院は、アバヤギリーヴィハーラ(無畏山寺)においてセイロン正統派マハーヴィハーラからアバヤギリ派へと独立した。大乗仏教は、密教と同じ仏教の同一線上にあったが、宗教思想は異なっていた。大乗(大きな乗物、あらゆる衆生を乗せて悟りに導く教え)と、小乗(小さな乗物・南伝仏教)の違いは律蔵(教・律・論の一つ・僧伽(教団)の生活規則の規範書典籍をさす)そのものにあるのでなく菩薩を礼拝時に大乗経典を読経するか否かの根本問題であった。観音菩薩を礼拝するときは仏陀の帰依から離れ、密教においては大日如来に礼拝することになる。大乗と小乗の分裂は思想哲学の根本にあった。島の史書によれば大乗を信奉する僧たちは国王の命令でインド本国へ追放された記録が残る。

サンガの部派分裂・大乗とは「大きな乗物」の意味であり、大きな教えとは、多くの人々を救済する教え、勝れた教えの思想をかかげる。ブッダが入滅してから１００年ほど過ぎた頃、仏教内部の戒律(僧伽の修行規範)をめぐって意見の対立が激しくなった。ブッダの教えは、布施を財蓄積してはならないことになっていたが、時代が下がると、教団の中に布施の金銀財を貯め込み、金貸し業まで手を出している教団も現れていた。ヤサという保守的な比丘が、布施の名目で金銀を受け取る現場を見てしまい、これを告発して大問題に発展した。サンガでの規律問題となり、規範にふれる１０の問題を再審議したが、長老たちによって否決されてしまった。不満の改革派の多くの比丘たちは挙って分裂し新派を結成した。ここに保守的な長老集団の上座部と、ブッダの規範を守る改革派と根本分裂をした。このような形態の教団を部派仏教と呼ばれた。スリランカに伝えられた仏教は、仏陀の教えを忠実に伝えるテーラヴアーダ・上座部長老派仏教あった。仏教は仏陀の入滅後、教団の上座部と大衆部とに分れ、分裂が分裂を繰り返し、一世紀初頭には大小 30 の学派となった。その結果、旧来の伝統的仏教は一般に小乗仏教と呼ばれ、これ等の諸派は仏教の正統派を自任し、大乗仏教を無視した。

南伝仏教・スリランカ・ビルマ・タイ・カンボジア・ラオスなどの国々に現存している仏教の総称で「南伝仏教」といい、これは西域・中国・朝鮮・日本等に伝わった仏教が「北伝仏教」と呼ぶ。南方諸国ではみずから「上座部仏教・長老仏教」(テーラヴァーダ)と呼び、その由来はスリランカへ仏教伝来は紀元３世紀頃とされる。マハーヴィハーラ系統の上座部仏教の源流が伝わっているからである。紀元後５世紀にインドのブッタ・ゴーサがセイロンへ来島し、上座部仏教教学を確立させた。この上座部仏教が１１―13 世紀に東南アジアへ海のシルクロードを伝わり伝播したのが、現在の東南アジアの仏教となる。その特色として、礼拝する仏像は釈迦像だけで、釈

尊の遺骨を祭るストゥーパ=仏塔崇拝となり一仏主義となってる。その反対に大乗は多仏主義(多種の仏像崇拝)と云われる。※パーリ語はスリランカ中心とした南伝仏教教義に使用された言語。

上座部(小乗仏教)・仏陀の入滅後１００年後、「律・教団規則」の解釈の意見対立し、保守的な上層を上座部といい、進歩的な大衆部とに根本分裂をした。上座部側の思想は、釈尊の仏説教義を修行して阿羅漢(究極の悟りを開いた僧)になることが最終目的なのである。

大衆部(大乗仏教)・自らの完成に目指しながら、救いを求める衆生を救うことこそが釈尊の教えである。自らの悟りを開き阿羅漢となり、衆生を救済して自己に菩薩修行をつみ、最終的に菩薩になることが、釈尊の真の教えである。

説一切有部・分派仏教の中で最も優勢であった分派。紀元前１世紀半ば上座部から派生したと考えられる。未来・現在・過去の法として区別される。五蘊か瞬間瞬間に変化しながら持続する。五蘊とは色・受・想・行・識の総称。色は物質、受は事物を感受する心・想は思い描く心・行は心の意志・識は識別、判断、５つの心の働き、五蘊相続説を唱えた。(以上『岩波仏教事典』より)
(五蘊=いっさいの存在を五つのものの集まりからなる・蘊=集まりの意)

菩薩・サンスクリット語・悟り(菩提)を求める衆生(薩捶)の意味と解釈される。釈迦が前世において、特に自己犠牲を中心とした「行」が六波羅蜜が組織されて大乗仏典に受け継がれる。六波羅蜜とは、大乗仏教において菩薩に課せられた６種の実践徳目いい、布施=財施、持戒=戒律を守る、忍辱=苦難に堪える、精進=たゆまず仏道を実践、禅定=瞑想により精神を統一、智慧=真理の見極め悟りを完成させる智慧をいう。大乗仏教に於いて最高の悟りを求める心、菩提心を起し、自らの修行の完成と一切衆生の救済(利他)の為に、六波羅蜜を実践完成して成仏を目指す人はすべて菩薩なのである。ジャータカや仏伝に菩薩の徳を強調されたのが「般若経」で、これを初期の大乗経典が集大成をした。

セイロンの部派仏教・釈尊が入滅後１００年後、マウリヤ王朝のアショーカ王(阿育王)の治世に、仏教教団は教義の解釈などから争いが起こり、ブッダ以下の伝統をそのまま守ろうとする保守的な「上座部」と、進歩派の自由主義的な「大衆部」とに分裂し、この両者よりさらに多くの部派が分裂して行く経緯となる。これらの諸派が分立した時代の総称として、日本では明治以降の学界で「部派仏教」と呼ぶようになった。古い文献に出てくる名称ではない。具体的な分派の事情は南北両伝で異なり、ブッダ入滅後１００年後、戒律に関する１０の新しい意見をめぐって仏教教団内で対立が起こり、上座部の長老たちがこの新見解を否定したとする点は一致している。

北伝仏教・北インドからガンダーラを経て、中央アジア、中国に伝わり、さらに朝鮮・日本などに伝播した仏教を北伝仏教という。歴史的にはマウリヤ王朝のガンダーラ統治に始まり、ギリシア系やサカ族の支配を経て、クシャーナ王朝に中国と直接境を接するようになり、急速に中国への流入が始まった。教義上は北インドに勢力をもった諸部派、説一切有部の系統が優勢となり、後に大乗仏教が加わることになる。又、チベット経由の新しい仏教が、モンゴル・中国東北部にまで広まった。この系統はカシミールやネパールを通じて直接にチベットに入り、チベット語に

翻訳された「チベット大蔵経」の聖典が９世紀、敦煌を通じて中国に伝わっている。

東南アジア編

3－2・タイの寺院・マハーヴィハーラ派上座部仏教が１３世紀に渡来、スコータイ王国において上座部仏教の優位が確立して現在に至り、仏教の守護たる国王のもとで絶えることなく隆盛を保っている。アヤタヤー遺跡群は、チャオプラヤー川、パーサック川、ロップリー川の３本の中州に集中している。国を守る守備からの運河での防衛と平和を祈る仏国土となっている。アユタヤ王朝・ナーラーイ王時代(1351－1767)はラオス・カンボジア・ビルマも領域の一部で、アユタヤは川の港として貿易で開け、上座部仏教の信仰の宗教都市でもあった。１７６７年ビルマに侵攻されアユタヤ王朝が崩壊、このときアユタヤの寺院は破壊された。現在のタイ国の仏教徒（上座部）はおよそ９５％ととなる。２０世紀初頭のサンガ統治法制定により、サンガは国家統制のもとに置かれ、サンガの長は国王によって任免（にんめん）されている。

アユタヤ・ワット・マハタート

ワット・ヤイ・チャイ・モンコン

ワット・マハタート・14 世紀、仏陀の聖骨を埋葬するために 1374 年に 3 代目ボロム・ラチャシラツト 1 世が建立した寺院と伝えられる。当時、黄金色に輝く仏塔で、高さ 44mあり、1633 年にプラサート・トン王が修復して高さ 50mに造営され、後年ビルマ軍の侵攻により壊されてしまう歴史経過を辿る。

ワット・ヤイ・チャイ・モンコン・1357 年、アユタヤを建都した初代ウートン王がセイロンに留学中の修業僧たちが瞑想のために建てた寺院。塔の周囲をぐるりと囲む鮮やかな黄色の衣を纏った数十体の仏坐像のほか、釈迦涅槃像がある。

3－3・ラオスの寺院

１４世紀半ばにカンボジアから上座部仏教が齎された。１６世紀中頃以降ビルマの支配下でのビルマ仏教の影響を受けた。１９４５年以来、社会主義体制になってからも民衆の仏教信仰は衰えていない。

タートルアン・ラオス最高の寺院

ワット・マイ・スワナプーマハム

朝の托鉢

タートルアン寺院・高さ４５ｍの黄金の塔。中に仏陀の仏舎利が納められている。国内外からの信仰の要になっている。外壁の一辺は約８５ｍの正方形からなり、その中庭に一辺約６０ｍの正方形の土台をもつ塔が建っている。３世紀頃、インドからの仏戒律の一行が、ブッタの遺骨を納めるために、タートルアン寺院を建立したと伝わる。１５６６年にセタティラート王により、四方を四つの寺院に囲まれた建造物としたが、現在は北と南の寺院が残ってる。北の寺院、ワットタートルアンヌアはラオス仏教界最高位の僧侶の住まいとなる。

ワット・マイ・スワナプーマハム・1796 年に建立された寺院。五層の屋根はルアンパバン建築様式で造られている。「ワット=寺、マイ=新しい、スワンナプーン=黄金の国土」。ラオス仏教芸術建築を誇る華麗さである。本堂の壁に「ラーマーヤナ」（古代インドの大叙事詩の一つ、詩文芸の祖とされる）のレリーフが詩情豊かに描かれている。

3－4・ミヤンマー(ビルマ)の寺院

１１世紀中頃にアノーラタ王が国家を統一し、上座部仏教の僧と三蔵を招請して以来、歴代王の信奉のもとで国家的な隆盛をみせた。８０年代にはタイにならってサンガ組織が構築され、８８年からの軍事政権下では強力な政治力のもとでサンガの制度化が進んでいる。

カックー遺跡・伝説では老夫婦が夢で「この地に埋まる仏像を掘り出せ」とお告げがあった。なかなか見つかえることができなかったが、ある日、猪の群れが地面を掘り返し、そこから仏像が現われ、その仏像でパゴダを祀った塔が始まりという。紀元前に建てられたパゴダの周りに、１２世紀、仏塔を信者に寄進させ、現在ではこの場所に 2500 ヶの仏塔があるという。

シュエダゴォン・パゴダ・ヤンゴンの街中にある。パゴダとは仏陀の髪や骨や歯を納めた仏舎利塔のこと。この地にパゴダが作られたのは 2500 年前という。伝説ではモン族の商人がインドで仏陀に会い８本の髪をもらい、モン族王に献上した。この聖髪がパゴダの始まりという。この伝説はシュエダゴォン・バゴダから１８８０年に発見された碑文に刻まれていたという。この碑文の制作は１４８５年と記録されている。

カックー（仏塔）遺跡

シュエダゴン・パゴダ

3－5・インドネシアの寺院

ボロブゥール寺院・ジョクジャカルタ北西４０ｋｍの所にあるインドネシア最大の仏教建造物。

８－９世紀初頭のシャイレーンドラ朝(750－832)時代を示す、方形６層基壇、１２０ｍの上に円形３層基壇をのせ、円形壇上には小塔を配し、その頂上に大塔を置く。全高３１・５ｍの安山岩切石の構造物。この構造物の意味については現在で議論が続くが、一つの立体曼荼羅と理解されている。寺院全体の方形の回廊壁面は、過去現在因果教、ジャータカ・仏伝（釈尊が菩薩修行時の善行物語）華厳経入法界品などを題材にしたレリーフが彫られている。各回廊の東西南北に大日・阿閦・宝生・阿弥陀・不空成就の五仏と、印相をもって総計５０４体の坐像がある。ボロブドゥールに象徴される大乗仏教(密教)の隆盛であるが、仏教とシヴァ教融合などの独特のヒンドゥージャワ文化が開花したことは明瞭である。後、イスラーム教の到来で仏教は衰退する。

ボロブドゥール寺院の仏舎利塔

ボロブドゥール仏教寺院

般若波羅密多菩薩坐像・東部ジャワ州マラン県出土。東部ジャワ期彫刻を代表する逸品として有名な像。左肩の蓮華の上に置かれた経巻にも象徴されるように、蓮華座の上に座して印を結ぶ菩薩は、卓越した智の最高の境地を示している。

本像はシンガサリ朝の創始者、ケン・アンロック王の妻であるケン・ドゥドゥスの肖像であると伝えられる。この伝説に基づけば制作年代は１３－１４世紀と思われる。安山岩１２６㎝・ジャカルタ国立博物館。

般若波羅密多菩薩坐像『世界美術大全集 12』より

余話・プランバナン寺院・インドネシアのジャワ島中部にあるヒンドゥー教寺院遺跡群と、ボロブゥール寺院遺跡が並んである。インドネシアを代表する壮大な両寺院遺跡である。プラバナン寺院はマタラム国のバリトゥン王(在位 898－910)による建立と伝わる。後、１５４９年の地震により崩壊をした。１９３７年より修復作業が続けられている。地震による崩れた火山岩の膨大な寺院建築石材を再加工していたので、その手伝いをさせてもらう。

復旧石材加工作業させてもらう右筆者(石張１級)

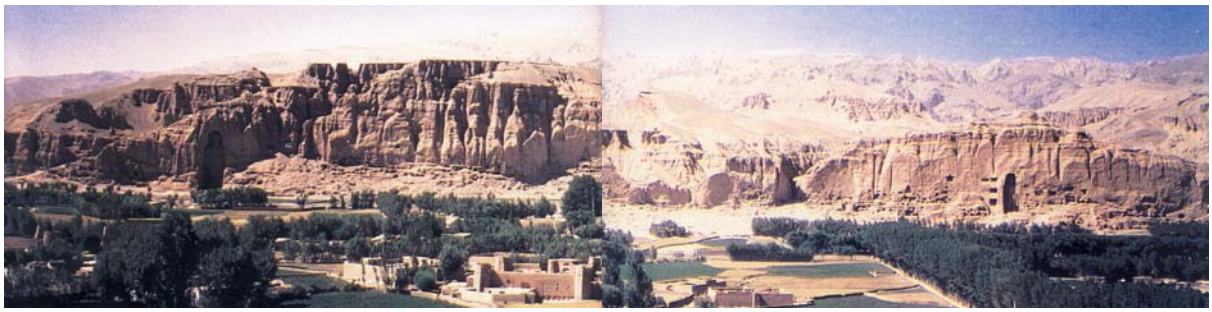
イスラム教・プランバナン寺院

第4章・中央アジア編

4－1・アフガニスタン・中部・バーミヤーン大仏

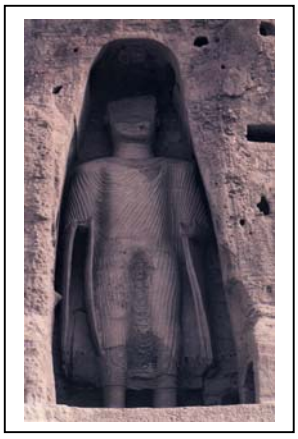
バーミヤーン(梵衍那国・首都カブール西北約２００ｋｍ)はアフガニスタン中央部、ヒンドゥークシ山脈西部に開けた東西に長い小盆地。唐代(618－907)に「梵衍・望衍」の音写がある。１世紀からバクトリアによって石窟仏教寺院が開削され始めた。６世紀後半から、南北を結ぶ交通路上の要衝となり、巨大な仏像が彫られ、百神を信仰する仏教王国が繁栄したが、１２－１３世紀にイスラム化した。崖行２ｋｍの断崖に７００余の仏教石窟と２体の東西大仏立像が存在していたが、２００１年にタリバンのイスラム原理主義過激派がこの２体の大仏を爆破して国際的な非難を浴びた。

唐代の玄奘三蔵の『大唐西域記』に、《**梵衍那国**は東西二千余里、南北３百余里で、雪山の中にある。人は山や谷を利用し、その地勢のままに住居している。国の大都城は崖に拠り谷に跨がっている。宿麦はあるが花・果は少ない。牧畜によく羊・馬が多い。気候は幹寒烈であり、風俗は剛獷である。(略)伽藍は数十カ所、僧徒は数千人で、小乗の説出世部(小乗二十部大衆部の分裂最初のものとみられる)を学習している。》と記述している。



バーミヤーン遺跡全景・右側西大仏・左側東大仏・両者は 850mほど離れている(『世界美術大全集・15 巻』)

大仏については・《王城の東北山の阿に立仏の石像の高さ百四、五十尺(西の大仏)のものがある。金色に輝き宝飾がきらきらしている。東に伽藍がある。この国の先の王が建てたものである。伽藍の東に鍮石(真鍮)の釈迦仏の立像の高さ百尺余(東の大仏)のものがある。身を部分に分けて別に鋳造し合わせてできあがっている。》玄奘はバーミヤーンで半月間逗留している。



破壊される前の写真・西大仏５５ｍ・東大仏３８ｍ(『世界美術大全集』より

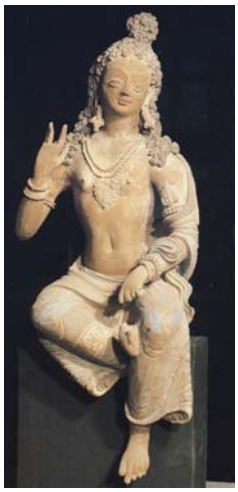
大涅槃像があったと伝える・《城の東二、三里の伽藍の中に仏の入涅槃の長さ千余尺ある臥像がある。この国の王はここに無遮大会(釈尊の法要会)を設けるごとに、上は妻子より下は国家の珍宝に至るまで喜捨し、役所の倉庫が空になると、さらに自分の身をば布施する。》と記している。

千尺の涅槃があったと記されているが、現在はこの大涅槃は幻となっている。

西大仏 55 メートル、玄奘は大石仏を見て《王城の東北、山の阿に立仏の石像、高さ 140－150 尺のもある。金色にかがやき、宝石がきらきらしている。》と記し、玄奘が見た時代の「金色晃曜、

宝飾焼爛(かんらん)」は、色彩が豪華に飾られていたらしい。実は筆者はアフガニスタン旅を旅行会社に相談したところ、個人手配旅行はＯＫですが、旅行の保険は保険会社２０社で受ける形となると言われた。全て個人責任の旅行となるが、手配はできるとのこと。筆者は一歩前に出る勇気が無く取り止めた。

菩薩像・７－８世紀



菩薩像フォンドキスタン出

フォンドキスタン遺跡の出土の菩薩像

菩薩像・壁画・Ｈ６３㎝・７－８世紀、フォンドキスタン仏教遺跡より出土。指先に青い睡蓮(すいれん)の花を持つ姿(左)はアジャンタ石窟の第一窟の蓮華手菩薩像を彷彿させる。頭冠にイラン文化の影響を窺え、フォンドキスタン(バーミヤーンから東へ約１００km)の仏教遺跡像は特有なしなやかな肉体美が表現されている。(『アフガニスタンの美』谷岡清著・小学館より)

4－2･トルクメニスタンの遺跡

メルブ遺跡はカラクム砂漠の黒い砂といわれ、３５万平方ｋｍの中にあり、中央アジア最大の遺跡で、オワシス都市として１１－１２世紀に繁栄した。現在のトルクメニスタンとなる。世界遺産となっている。トルクメニスタンではマル・マルイ・マリイと呼ばれている。

仏教最西端のメルブ遺跡･紀元前６世紀からアケメネス朝ペルシャに隷属し、オアシス都市として繁栄する。古くはマルギアナと呼ばれ、遺構は円形の日干レンガで建造された城郭「エルク・カラ」で知られ、１２ｈａの都市であった。紀元前２―３世紀パルティア時代に、エルク・カラは約２ｋｍの方形の城壁ギャウル・カラが築かれ、十字に交差する都市であったと伝わる。ギャルウル・カラはサーサーン朝の滅亡する７世紀まで続き、メルブには紀元１世紀頃に仏教が伝播したと考えられる。城壁の東南の隅に仏寺跡とみられる遺跡がある。他にも仏塔や僧院跡が残されていて、８，５㎝の仏像の座像と、経文が発見され、経文は白樺樹皮にサンスクリット語で書かれていたという。仏教伝播はメルブの都市が最西端で、ここの仏像は「最果ての仏像」呼ばれる。時代は下って１２世紀末、モンゴル・チンギス・ハーンの領土隷属要求の伝達特使が殺害されたため、１２２１年にモンゴル騎馬軍団に攻め込まれ、１００万を越える国民が皆殺しとなり、その後、メルブは廃墟となる。

メルブ遺跡

グヤ・ウルクカラ仏教跡

大キズカラ

大キズカラ・キズカラは７世紀、サーサーン朝ペルシャ一族の居城という。語源はトルコ語のキズカレ=乙女の城からの意という。女性を囲ったハーレムとも言われ、諸説はあるようだ。

『岩波仏教辞典』第２版　岩波書店より

ニサ遺跡・イランとの国境の山、コペット山脈が一望できる丘に遺跡はある。紀元前３世紀から紀元３世紀にかけて、中央アジア・メソポタミア・イラン・アフガニスタンまで制覇した騎馬民族の国で、ローマ帝国も恐れをなしたパルティアの都であった。

ニサ遺跡奥コペット・ダー山脈

左の丸いレンガ柱は神殿の丸柱

仏教寺院跡出土・国立博物館

アナウ遺跡・アシガバードから南東約１２ｋｍの地点にあるアナウ遺跡は、新石器時代より人が定住した痕跡がある。地層からは彩文土器・羊の屠殺場跡・石に文字が刻まれていたものも出土している。１５世紀にティムール朝の地方総督が、龍の装飾で造ったセイットジュマール・アッテゼィン・モスクで知られていたが、１９４８年の地震で崩壊した。

アナウ遺跡

同所遺跡

4－3・ウズベキスタンの遺跡

ヒワの街・古代ヒワはウズベキスタンのザラフシヤン川下流の諸オアシス都市に位置する。６－７世紀、ヒワの街は強固な軍隊を持つ商業都市であった。１４世紀、中央アジアの覇者となったチムールの出身の地。チムールの子孫が作った建造物が、その栄華を物語っている。左奥にヒワのシンボル、カタル・ミナルの塔は２６ｍ、シルクロード交易の独占したソグド人の街でもある。チムールは、中央アジアでのモンゴル帝国のテュルク系軍事指導者で、チムール朝の建国者である。モンゴル部族の一派バルラス部の出身、宗教的にイスラム化したモンゴル貴族の家系に属し、チンギス・ハーンの子孫の王女を妃に娶り、チンギス家の娘婿を称した。後、1370 年にチムール家の隆盛により、チムール家の支配による「チムール朝・チムール帝国」となる。最盛期には北東、東トルキスタン、南東はガンジス川、北西はヴォルガ川、南西はシリア方面まで及び、かつてのモンゴル帝國の西南部地帯を制覇したのでチムール帝國と呼ばれた。

ヒワの内城イチャン・カラ・太陽とブルーのタイルが艶やか

テルメズの仏塔・テルメズには多くの仏教寺院跡がある。加藤九祚先生の「日本・ウズベキスタン共同テルメズ仏跡調査団」によるストゥーパを掘り当てたという。玄奘の記述に《伽藍は十

余ケ所、僧徒は千人・・》と記す。(『三蔵法師のシルクロード』朝日新聞社)

①釈迦如来頭部・粘土・化粧漆喰。３９×２９×２３ｃｍ、ダルヴェルジン・テパ仏教寺院・２－３世紀・ウズベキスタン芸術学研究所。表面を化粧漆喰仕上げ、螺髪(らほつ)がつけられた頭部。

②菩薩像胸部・粘土・化粧漆喰。９６×９５ｃｍ、同上・テパ仏教寺院・２－３世紀初期(クシャン朝)。ターバンを巻き、首飾りや胸飾りを付けた王侯貴族の姿の菩薩像。(『偉大なるシルクロードの遺産』遺産展・2005 年・偉大なるシルクロードの遺産展実行委員会より)

テルメズの仏塔

①釈迦如来頭部

②菩薩像胸部

アクサライ宮殿・チムール像

ファヤーズ・テペの坐像・２－４世紀ウズベキスタン・ファヤーズ・テペ出土・石灰岩で高さ７２㎝。タシュケント・ウズベキスタン歴史博物館蔵。ウズベキスタン南部には、アムダリア川とスルハン川との平地がテルメズ市を中心に広がっていて、現市街の西方に残る旧テルメズの郊外にいくつかの仏教遺跡が存在し、その伽藍址ファヤーズ・テペの礼拝堂から発掘された。ガンダーラのように片岩でなく石灰岩で製作されている。この作品はインドの馬蹄形アーチの下で、禅定印を結んで瞑想にふける釈迦如来を表ししている。上方の樹木は葉が多く、迦如如来を暑い太陽から守っているので、ブッダ・ガヤーで悟りを得たことを表していると云われる。左右の二人は仏教に最初に帰依した在家信者とも、又、アーチを支える柱の柱身には、バクトリア装飾でよく用いられる「溝彫り装飾」が施され、柱頭にはアカンサス(ハアザミ)の葉が刻まれている。(写真は『世界美術全集・15 巻』小学館より)

ファヤーズ・テペの仏像

リャビハウズの桑の大木

ブハラ・アルク城

余話・リャビハウズの桑の大木・日本ではまず見る事ができない桑の大木である。樹齢は分らないが大人３人抱えの大木がある。中国が絹の本場とされるが、絹の発祥地は中国でなく中央アジアであるという現地の強い声を聞くことがある。確かにこの桑大木を見ると、論より証拠というところか、不確実であるが中央アジアで養蚕が始められ、工業技術レベルの高い中国で絹織物生産加工を取って代わられたのが「絹の歴史」ではないのかという話がある。中央アジアの「絹発祥説」には、この桑の大木を見て納得いった次第である。

ブハラのアルク城・アルクは「城」の意という。アルク城は歴代ブハラ・ハーンの居城。紀元前４世紀頃から塞(とりで)がつくられていた所。７世紀には女王フタハウタンがここに城を築き、アラブ軍と戦ったという。モンゴル軍襲来時代の破壊と残虐な歴史を今に伝える。現在の城は１８世紀のものであるが、１９２０年にロシア軍の攻撃に陥落し、藩主は米国へ亡命して、子孫は現在米国に居られるという。城内売店に当時を偲ぶ古写真が売られていたので買い求めた。

4－4・カザフスタンの遺跡

タラス川の戦い・タラス川(塔拉斯河(タラスかわ))は天山山脈の北西麓に源流を発し、キリギス国内、カザフスタン南部を通過して北西に転じ、砂漠の地中に消える。７５１年、キルギスのタラス付近で、唐の安西四鎮節度使(せつどし)であった高仙芝(こうせんし)とイスラム帝国軍との間で、タラス河畔の戦いがあった。この戦い高仙芝が石国(せきこく)(古都タシケント)を侵攻したことにより始まり、両軍数万の大軍勢で戦ったが、唐軍は大敗した。この時、唐軍の捕虜から、多くの紙漉き職人がサマルカンド(ウズベキスタン東部)へ連行され、中国の製紙技法が、西側へイスラム圏に伝わる歴史的戦場跡である。

オトラル遺跡・オトラルはテペと呼ばれる丘の上に遺跡がある。１２１８年、チンギス・ハーンはホラズム王国の街オトラルに隷属の使節団を送ったが、オトラル城主は使節団を皆殺しにあったが、２人は逃亡し国へ報告をした。激高したチンギスは、大騎馬軍団を組みオトラルの城を壊滅させた。城主の耳に溶かした錫(すず)を注ぎ込んだと伝わる。イスラム圏王は軍隊の衝突を避け、外交で国を維持する文化を持っていたが、中央アジアを征服する騎馬民族は、一度の交渉で降伏しなければ、国民を皆殺しにする「恐怖心を植えつける」戦術で侵攻する騎馬軍であった。

タラス川の戦い址・夕映え

オトラル遺跡

4－5・タジキスタンの遺跡

ペンジケント遺跡・ソグド人は中央アジア・ソグディアナ地方(ウズベキスタン・タジキスタン周辺)のイラン系の民族で、宗教的にはゾロアスター教、マニ教、ネストリウス派キリスト教を信仰していた。ソグド人の交易は、唐の長安まで及び、シルクロードのオワシス都市をソグド人が抑えていた。唐代の史書に「深い目と高い鼻、紫の髪に緑色の眼」と胡人(こじん)と記している。ソグド人はお客をもてなす社交的な人たちであったと伝えている。ソグドの社交性は、交易に生かされ、匈奴、突厥、ウイグル、中国などの民族間の国際的な交易活動していた。日本の法隆寺にある香木の焼印はソグド文字であるといわれる。聖徳太子の時代に伝わる沈香(じんこう)・白檀(びゃくだん)が、ソグド刻印品が日本の国までやって来た壮大な交易ドラマを想う。香として焚(た)く薫(かおり)香料材は仏具や櫛(くし)などに利用され我が国では珍重された。香木は東南アジアの産出というから、交易民ソグト人は、海との交易も範疇(はんちゅう)にあったことになる。

ソグド人・玄奘の『大唐西域記』の「窣利人」について《素葉より西に数十の弧城があり、城ごとに長を立てている。命令を稟けているのではないが、みな突厥(トルコ系民族)に隷属している。素葉城から羯霜那国(ウズベキスタンのシャフリサブス)に至るまで土地は窣利と名づけ、人も「窣利人」という。文字・言語もその名称に随って「窣利文字・窣利語と」称している。・・・。》またソグド人を商胡と呼び、《体つきは大きいが、性格は臆病であり、風俗は軽薄で、詭詐がまかり通っている。おおむね欲ばりで、父子ともに利殖をはかっている。財産の多いものを貴しなし、良いもの賤しいものという区別がない。・・・》と、あるが、イラン人が書いた図書に「ソグドの住民は客をよくもてなし社交的である。そこは快適と繁栄に満ち、温和で信心深い人が多い」と好意的で、好感を持たない中国人とは対照的である。

古代都市ペンジケント遺跡

ソグド人の絵図・ルダキ博物館

アジナ・テパ出土涅槃仏・国立博物館

玄奘は破葉城で「突厥の葉護河汗」に現新疆自治区の高昌国菊氏王の熱烈な応援で、バラモン（インド）に行くなら、葉護河汗にあうよう勧められている。菊氏王から、黄金百両、銀銭３万、絹など 500疋、馬 30 匹、クーリー（労働者）２５人、２４国の献上書を受けている。玄奘がタムリ盆地より直ちにパミール越えをして印度に入らず、大きく迂回路をとった要因は、突厥の葉護可汗の元において、西域諸国への旅程の安全保障の裏づけを取ることに有ったと考えられる。葉護可汗と玄奘は別れた直後(657 年)に唐の皇宗軍に攻められ葉護可汗は殺されていた。

アジナ・テパ出土涅槃仏・タジキスタン国立博物館。全長１３ｍの涅槃仏が出土している。タジキスタンやウズベキスタン南部の町テルメズなどに仏教遺跡が点在している。

4－6・キルギスの遺跡

シイク・クル湖・『大唐西域記』は《天山山脈を越えて４百余里で大清池についた。周囲は千里あり、・・》

イシク・クル湖・天山山脈の北側にある。標高１６０９ｍの高所、水深７０２ｍ、面積６２３６ｋ㎡、琵琶湖の９倍、塩分濃度０、６％、８０ほどの河川が流入しているが、そこから外に流れる

川は無い。中国の呼称は熱海(ねつかい)という。塩湖であるため冬でも凍結しない。湖底には古い時代のオワシス都市跡があったらしく、現在でも青銅器や土器が見つかるという。

玄奘は**大清池(イシク・クル)の記述を**《山を行くこと凌山から四百里(葱嶺(そうれい)・パミール・天山山脈の主峰)で大清池に着いた。周囲は千余里あり、東西は長く、南北は狭い。四面は山に囲まれ、多くの河川の水流がここに集まる。色は青黒みを帯び、味は塩からくもあり苦くもある。大きな波がはてしなく、荒い波は沫(あわ)だっている。竜も魚もともに雑居し、不思議なことがおりおりおこることがある。それで往来する旅びとは供えものして福を祈るのである。魚類は多いが、敢(あ)えて魚を捕獲するものもない。》と記述している。

破葉城跡(すいやぶじょう)（アク・ベシム）

同跡に仏像台は蓮華彫刻が出土

鱒のクンセイ売店

アク・ベシム・素葉水城(スーヤーブ)・玄奘の『大唐西域記』《大清池(イシク・クル湖)の西北に行くこと五百余里で素葉(スーヤーブ)水城(オワシス都市トクマク)に至る。城の周囲は六、七里で、諸国の商胡(しょうこ)(ソグド商人が中心)が雑居している。土地はキビ・麦・葡萄によく、気候は風寒く、人々は細毛の織物や粗(あらい)毛織物を着ている。》と、記述している。スーヤーブのことを玄奘は「素葉水城」と書くが、唐代の資料には「砕葉(すいやぶ)」「素葉」と表記がある。唐の賈耽(かたん)の『皇華四達記(こうかしたつき)』によると「熱海(イシク・クル)から西へ１５０里で砕葉城河口に至る。８０里で裴羅行軍城(パラサグン)・・・また西４０里で砕葉城」とあるのでバラサグン・西方のアシベシムが砕葉城となるらしい。(砕葉城の地図 54 頁参照)

蓮華台坐(れんげ)・余談であるが、右上写真、鱒の薫製(くんせい)を食べたら天下一品の味でした。アク・ベシム資料館で仏蓮華坐の写真を撮ってもよいかと聞くとＯＫの返事であったが、２０ドル払えと言われた。おばちゃん、なかなかやるね。

余話　1・ニコライ・ブルジェワリスキーを尋ねる

ロシアの地理学者・西域探検家・動物植物研究家・野生馬研究は有名である。探険家ヘディンに影響を与えた人物として知られている。ブルジェワリスキーはこの地イシク・クル湖辺りで終焉となる。「イシク・クル湖の岸辺、波の洗わぬところに埋めて欲しい」遺言通り湖の東岸のカラコルに埋められている。

ブルジェワリスキーの墓・石碑の右側に石杭の囲いが彼の墓である。彼は西域探検中、隊員には「絶対生水は飲まないように」と、隊員に厳重に注意していたが、自身、魔がさしたのか、岩溜まり水を飲み、腸チフスとなり５１歳で死去した。ブルジェワリスキー(1839－88)は４回に渡り、中央アジア探検を精力的に行なった。若きブルジェワルスキーの写真には、故郷スモレンスクとあった。

ワリスキーの墓(資料館史料より)

ブルジェワリスキーの碑　　若きブルジェワルスキー　　ブルジェワリスキー資料館

ブルジェワリスキー資料館(ニコライ・przhevalsky『イシク・クル湖の記憶』より)

キルギスからウズベキスタンへの途次

余話　2･日本人将兵シベリア抑留考･昭和２０年終戦時、旧ソ連が占領した満州、北朝鮮、千島列島、樺太にいた日本軍人、軍関係者、一般人を含む６０余万人の日本人が、ソ連領内の千ヶ所の収容所に連行され強制抑留させられた。劣悪な生活環境の収容所において辛酸をなめ、わかっている死亡者は６万から７万人と言われ、いまだに未帰国者３７万人がいるともいわれる。近年の調査によれば、２７２万６千人の内、約１０７万人がソ連各地に送られて強制労働を強いられたという。１９４５年８月１９日、関東軍総参謀長、秦彦三郎中将と極東ソ連軍総司令官ワシレフスキー元帥との停戦交渉において、抑留日本軍将兵の労務提供の密約が交わされた「密約説」を問われている。この「密約問題」を保坂正康氏が『文芸春秋』1987 年５月号に「瀬島龍三の研究」がある。(瀬島龍三・大日本帝国陸軍・陸軍中佐)

「ソ連の理不尽さと無法によって、６０余万人の将兵と民間人が辛酸をなめた。その原点がこの停戦協定にあったと主張する人々がいる以上、瀬島は公的な立場で、歴史的な交渉に立ち会った当事者として、協定の全容を明確に語るべきではないか」と述べている。日本の天皇制を最後まで反対したソ連邦は、日本軍人６０万人の労務提供と相殺で了承したことになっている。

『シベリア強制抑留の実体』「日ソ両国資料からの検証」阿倍軍治著・彩流社によれば、抑留者は全体で７７万２４００人に及び、１９９２年以後に、ロシア政府が労働証明書を発行にいたるが、日本政府はシベリア抑留将兵に現在までに賃金支払いをしていないのである。全国抑留者補償協議会は２００６年１０月、未払い賃金補償を再度、日本政府に求めている。

①ウズベキスタン・タシケント　　②カザフスタン・アルマイト　　③モンゴル・ウランバートル郊外

①　ウズベキスタン・タシケントのヤッカサライにある日本将兵の墓地と石碑。ウズベキスタンに１３ヵ所の墓地に８１７名が眠っている。（２万３千人配属という）

②　カザフスタン・アルマトイにある日本人墓地慰霊碑。（１６ヶ所・１万人が配属という）

③　モンゴルには１０ヶ所に１万４千余、８００人を越える死亡者の内、６１４人の姓名が判明している。碑には「モンゴルに安らかに眠ってください」と刻まれている。訪問時に日本人グループと一緒になり、そのご婦人たちが童謡「ふるさと」を何度もハモって、霊に捧げていた。「日本の婦人はなんと優しい心根か！」その心根に思わず涙が溢れた。

アリシェル・ナヴォイー名称劇場・ウズベキスタン・タシケント

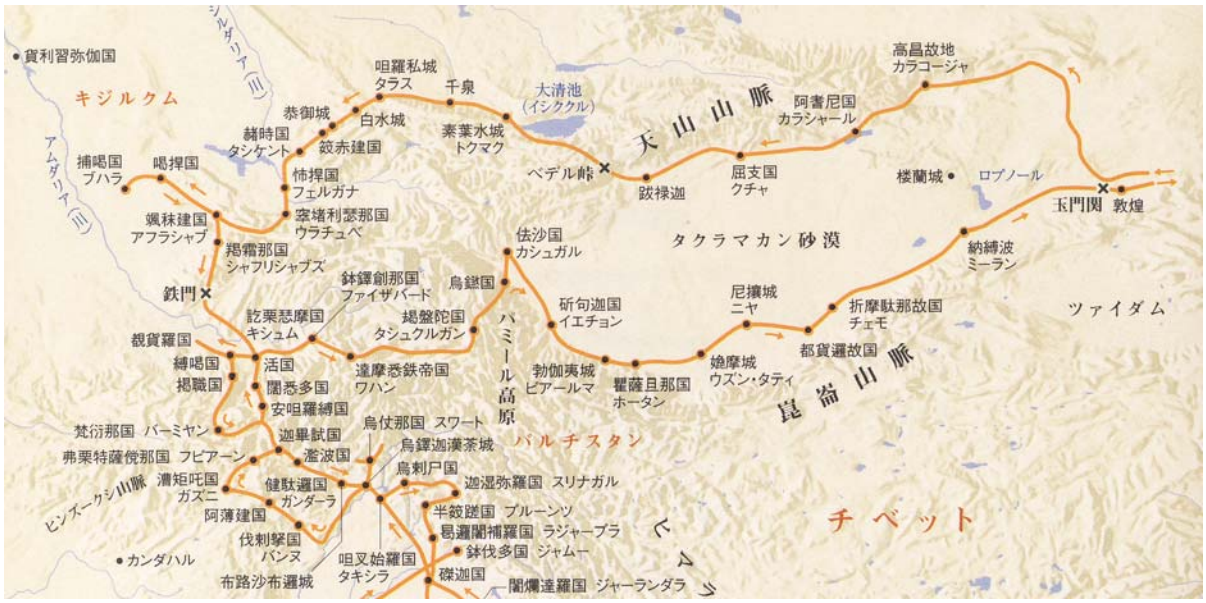
劇場正面左側の奥壁面にプレート碑文に「１９４５年から１９４６年にかけて極東から強制移送された数百名の日本国民が、このアリシェル・ナヴォイー名称劇場の建設に参加し、その完成に貢献した。」と刻んである。親善のため「日本軍捕虜」の文字は不可とした経緯があるという。1966 年タシケントに直下型大地震で街は被災したがこの劇場が残ったことで有名となる。

（『シベリア強制抑留の実体』阿倍軍治著・『中央アジア捕虜記』山崎俊一著・『もうひとつの抑留』藤野達善著『ウズベキスタンの桜』中山恭子著等がある）

第5章・玄奘三蔵天竺へ求法と聖地巡礼の旅立ち

『大唐西域記』は略して『西域記』ともいう。西暦６４５年、太宗(唐朝２代皇帝)の下命を奉じ、弟子の弁機の編集により完成する。中央アジア、インド等１３８カ国の仏教・仏跡・気候・風俗・歴史・地理・産物・伝説等の詳細見聞録である。玄奘は現地に入国しない国々の情報を集めた伝聞国をも編集(全 12 巻)されている。

生い立ち・三蔵法師の諱は緯、字は玄奘、俗姓は陳氏・河南省陳留県の人。祖父の康は学問に優れ、北斉に仕え国子博士(官署名・教育行政庁官)となり、周南(河南省洛陽県)に奉ぜられた。父の慧は英傑、経学(儒家古典の解釈者)に通じ、身の丈八尺、見目麗しく、人々から郭有道(後漢の学者)のようだと評された。玄奘は４男で、１１歳にて『維摩経』『法華経』を暗唱、法師 20 歳で僧職授任式を受け、あまねく各地の高僧を尋ね、つぶさに聖典を訊ねても、陰に陽に答えが異なりよく解らない。そこで法師は『瑜伽師地論』(ヨーガの禅と定)をインドへの求法計画たてたが、当時の唐代での出国は固く禁じられていた。人は彼を諫めたが法師は西域へ求道の願望が強くその旅立ちを強行、貞観３年(629)法師 28 歳の門出あった。(『大慈恩寺三蔵法師伝』長沢和俊著より)



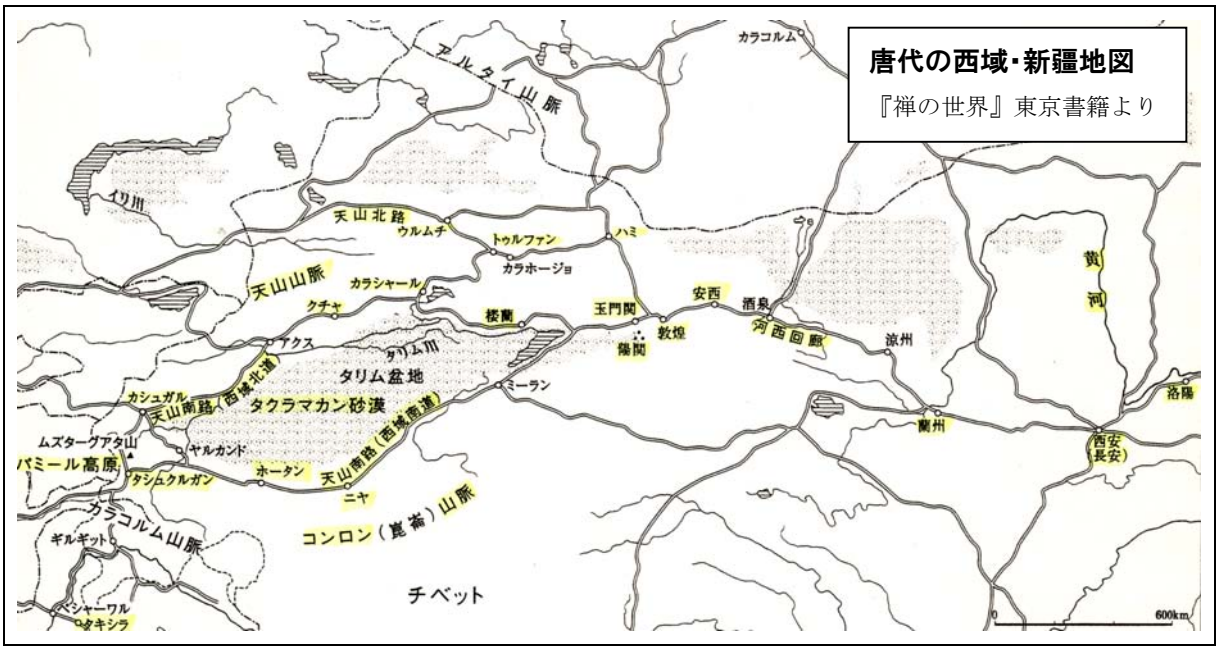
(『三蔵法師のシルクロード』朝日新聞社より)

玉門関・『旧唐書』(945 年)に長安から玉門関を３７６８里(当時の里=４４０m)を計算すれば、約１６５８ｋｍとなる。

日本の本州並のキロ数となる。

玉門関は于闐国(うてん・現和田)から採取された崑崙の玉が漢土に輸入される関所で、その玉・絹織物の交易隊商を匈奴から守るための関所であった。

玉門関・陽関周辺は漢民族の西の果て『地球の歩き方』より



☆西域南道=敦煌→陽関→楼蘭→和田→莎車→喀什→北インドへ。☆西域北道は天山山脈の南側を通っているため天山南路とも呼ぶ=玉門関→哈蜜→吐魯番→烏魯木斉→伊寧方面と庫車からカシュガルへつながる。

玄奘三蔵『大唐西域記』の旅の始まり・現在の新疆ウイグル自治区・トルファン周辺の阿耆尼国(焉耆・カラシャール地方)古代の高昌国となる。玄奘は長安→蘭州→涼州→瓜州→伊吾(現新疆ウイグル自治区)→高昌国→屈支国→天山山脈越え、天山山脈の北側の道で「天山北路」と呼ばれ、この山脈を横断して、素葉水城(キリギス)→颯秣建国(ウズベキスタン)へ入って行く。

(参考『大唐西域記』水谷真成訳・東洋文庫・『仏教文化の原郷をさぐる』西川幸治著・ＮＨＫブックスより)

最西端の玉門関

陽関の烽火台

玉門関途上に狼煙台が残る

玉門関・漢民族の西の果て、敦煌より西北９０ｋｍの所。異民族との関として、漢・唐代と２度に渡り建造された。漢の武帝が匈奴からの防衛のため、西域の通交のために烽火台を築いた。

陽関の先は異民族の西域国となる。６１歳の法顕・２６歳の玄奘・３７歳の義浄もこの関所を越えて行く

陽関・陽関は玉門関の南にあったことからこの名が残る。敦煌より西南７０ｋｍ。前漢時代は陽関都尉(漢代の軍司令官・太守を補佐)の郡都(郡とは軍管区のこと)が、魏晋代は陽関県が置かれた。宋・元以後は海の交通路に取って代わり、陸路交通が衰退し関所が破棄される。
『法顕伝』の「沙河・鄯善国(楼蘭)」に《沙河(大砂漠)を渡った。沙河中はしばしば悪鬼、熱風が現れ、これに遇えばみな死んで、一人も無事な者はいない。空には飛ぶ鳥もなく、他には走る獣もいない。見渡すかぎり行路を求めようとしても拠り所がなく、ただ死人の枯骨を標識とするだけである。》と一望沙千里の景観を伝える。

中央アジアへ・玄奘は一人でゴビ砂漠を横断、一滴の水も無く、砂漠をさまよい、ひたすら菩薩に祈り、あやうく命を失いかけるが、玄奘は**伊吾**(現哈密)に辿りつくことができた。ここで、**高昌国**(仏教の最も発展した麹氏高昌国時代 499－640)王にあい、国王の熱烈な歓迎を受けて、**高昌国**の都に入る。喜捨を受けた後、王から往復２０年分の費用と西突厥の葉護可汗や西域２４国への紹介状と、通訳の少年僧をつけて送ってもらう。この時代の西域求法僧たちは、現代の旅行者のように予め旅費を用意した訳でなく、行き先々の有力者の喜捨を求めていたことが分る。当時の旅行計画は、道中の安全の保障を、国主からの御墨付きを受けることが一番の旅の安全となる。旅の費用計画をも喜捨の良し悪しで行動を決めることが、最も安全な方法であったのである。又雨期３カ月間の参籠修行の安居期(教団で過ごす)として利用滞在した。

玄奘三蔵像
東京国立博物館蔵

一行は**亀茲国**(クチヤ)から雪どけの**凌山**(現ベデル峠)越えたが、７日間の難行程で１０人が凍死者を出し、牛馬も倒れた。西突厥の葉護可汗にも大歓迎を受け、長期逗留を望まれたが固辞した。可汗は西トルキスタンへの手配もしてくれた。**素葉城**(キリギス・シイク・クル湖)からタラス・タシュケント・サマルカンドを結ぶ天山北路を西に進む。**康国**から南へ、鉄門を越え、ようやくオクサス川(アムダリア川)に到達。アムダリアから**活国**へ向かい、さらに**縛喝国**(現バルク地方)へ、ここは仏寺１００余り、僧徒は３０００人みな小乗を学んでいた。玄奘はこの寺に１ケ月滞在、インドの**磔迦国**から巡礼に来ていた小乗に熟知した僧慧性と親交を深める。『大唐西域記』の紀行は玄奘法師が笈(おい)を背負いバラモン国への目標は三宝(仏・法・僧)の真義を質す『瑜迦師地論』の会得と聖地巡拝にあった。

正面は天山山脈・玄奘三蔵は山脈の向うの高昌国からキリギスの素葉水城にやってきた・キリギス側から撮る

高昌故城・高昌国（トルファン東 45 ㌔・５－７世紀）は漢人王朝の拠点であった。高昌国には３８２年に仏教が伝来。麹嘉（在位 498－521）子孫９代の麹文泰（623－640）に至る王国で、土着民はイラン系で、仏教とゾロアスター教が隆盛となる。高昌国は玄奘が天竺遊歴中の６４０年、唐軍に滅ぼされる運命でもあった。国王は玄奘に「高昌国に留まりここで仏法を講授してください」と懇願されたが、玄奘は「大法を求めて婆羅門へ行くのです」と、謝して固辞した。それならと、王は黄金一百両、銀銭３万、絹など５００疋、馬３０匹、労働者２５人、２４国への封書（旅券）、綾絹５疋と果物２車を受けた。又、西突厥の葉護可汗宛てに献上品を持参させた。『大唐西域記』の記述には国々の軍事事情の記載がないのは唐政府の指導によるものなのか。

高昌故城址（南北 1650m×東西 300m）トルファン市西へ 10ｋｍ・３世紀は車師国・６世紀麹氏高昌国となる

ベゼクリク千仏洞・（楼蘭とトゥルフアンの中間）洞は６世紀麹氏代に開削され、９世紀中頃、西ウイグルがトルファンを支配していた時代の仏教石窟が残されている。**屈支**（現庫車）にある語学の天才、鳩摩羅什の像がある。父はインド人、母は亀茲国王の妹、９歳で出家、母と共に葱嶺（パミール高原）越え、西北インドの罽賓国（カシュミール）へ、仏教・医学の勉学留学をする。

縛喝国からヒンドゥ・クシュ山脈（インド人をよせつけない高嶺）を越えて、天下の渓谷に**梵衍那国**に入り、国王自ら玄奘を迎え、宮殿に於いて歓迎を受ける。バーミヤーン国には法相（仏教学派=自己及びこの世界の諸物事は我々の認識の表象にすぎず、認識以外の物事の実在しない）によく通じた二人の高僧がいて、「脂那（中国）の遠国に、これほどの高僧がいるのか」と感心され、厚遇を受けた。この国で玄奘を驚かしたのは、王城の東北に高さ１５０尺の仏立像（バーミヤーン大仏）であった。この国の先王が建てたもので、金色に仏像は輝いていた。東にも１００尺の仏像が、さらに東方にある長さ１０００尺の仏の涅槃像があって、その荘厳さは胸に迫るものがあると記している。しかし、この涅槃像は現存していない。

ベゼクリク千仏洞・２００１年筆者

ベゼクリク千仏洞遠望（『新疆仏教芸術』新疆大学出版社）

西北インドへ・バーミヤーンで１５日間を過ごし、**迦畢試国**から**濫波国**へ、インドの境域・気候・風俗習慣・文字・産物などを調べ南北文化圏の境界を迦畢試国より以北をインド域外とした。**那揭羅曷国**の都城は今のジェラバード辺り。城の東南に３００尺余りの仏塔があり、アショーカ王が建てたものと記している。

仏陀の聖跡の中で特にゴーパーラ竜王の石窟の謂われを聞いている。《昔、石窟に悪竜が住んで人に害を与えてので、仏陀が中天竺から空を飛んできて、これをしずめた。今でも仏陀の影が洞穴に残っている、と。石窟の案内を求めたが応ずる人は無く、ようやく一人の少年が案内してくれた。数里程行った所で、５人の山賊が現れ、山賊は「何処へ行くのか」、玄奘は「仏影を拝しに石窟まで行く」と答えると、賊は「このあたりには山賊が多いということを聞かなかったのか」と、玄奘は「それは聞いた。しかし、私は仏を礼拝しょうとしているところ、たとえ猛獣が満ちていても恐れません。あなたたち賊とはいえ、人間ではありませんか」と返答し、山賊たちも発心して礼拝することになった。案内の老人が「この中を真直ぐに進むと岩壁に突き当たる。そこで５０歩ほど後戻りし、真東に目をこらせば、仏の御影が見える」と言った。言われた通りすると、如来の影が岩壁に輝き出てきた。仏身と袈裟は赤黄色で、膝から上は、はっきり見えたが、蓮華の座から下はぼんやりとしていた。仏陀の左右や背後に菩薩や聖僧の供奉する姿も見えた。山賊に火を持ってこさせて焼香させ、明かりを照らすと、仏影は消え、灯を消し、もう一度拝むと仏影は現れた。礼讃文(褒め称える)を唱え花や香を供えているうちに仏影は消えた。》と記す。

健馱邏国の東にインダス川が流れ、その都城は今のペシャワールにあたる。西方と中央アジアの文化の交差点はガンダーラ美術を生み出し、玄奘が訪ねた頃、国は衰え王家も絶え、迦畢試国の属領となっていた。ペシャワールの東南に、仏教に帰依したカニシャカ王が建造したという仏塔があった。この仏塔は総高４００尺、基壇部は周囲１里半、高さ１５０尺、その上に金銅の相輪２５層が建っていたと玄奘は記している。シャー・ジー・キー・デリー(ペシャワール市内)の発掘で有名なカニシュカ大塔(クシャーナー朝３代王)がこれである。

さらに東南へ進み、インダス川を渡って**烏杖那国**に入る。もとこの国にはスワート川の両側に寺院が１４００も建ち並び、僧侶も１８０００人を数える仏教の中心地であった。玄奘が訪れた頃はすでに仏教は衰え、ヒンドゥー教徒が雑居していた。インダス川を南へ渡りタキシラへ向う。

悠久のインダス川の夕映え

咀叉始羅国は今のタキシラで、古来より西方や中央アジアとインドを結ぶ交通の要衝として開け、古代インド数学の中心の位置をしめ、仏教の盛んな地であった。玄奘が訪れた時分、国はすでに衰え迦畢試国から迦湿弥羅国の属領となり、寺院も荒廃し僧侶もわずかに残っていた。

迦湿弥羅国(カシミール・インド・パキスタン・中国国境・８千m級の山間)では国王の叔父が馬車で出迎え、王宮で招待された。王城には寺院が１００カ寺、僧侶五千人、アショーカ王が建てた仏塔が４つ、いずれも仏舎利が納めてあった。中国僧、仏図澄・鳩摩羅什・法護らはここで修行したという。玄奘も２年滞在して、僧　弥 法師に経論を学ぶ。

礫迦国、濫波国、至那僕底国、闍 爛達羅国は省略。**秣菟羅国**は現マトゥラーで、中部インド西北に位置し古来より西方への交通の要で、バラモン・ジャイナ・仏教の聖地であった。この地方はガンダーラと並んで仏教彫刻が盛んに制作された地でもある。

秣菟羅国から東北の**薩他泥湿伐羅国**を経て更に４００里、**窣禄勒那国**、ここは仏寺が五寺、僧侶が１０００人、小乗を学んでいた。**羯若麹闍国**はインド最大の勢力を持っていた。玄奘は《羯若麹闍国は周囲四千余里、国の大都城の西はガンジス河に臨み、その長さ二十余里、幅は五里、城郭・城池は堅固で高壮な家々が、相列なり花咲く林や池は光鮮かで鏡のごとく澄んでいる。》と記す。都城はガンジス川を望み、玄奘は曲女城と訳し《城の西北の窣堵波(塔)は無憂王が建てたものである。如来が昔、ここで７日間諸種の深妙の法を説かれた。その側には過去四仏の座所および散策された遺跡の所がある。さらに如来の髪や爪(を納めた所)の小窣堵波がある。》と。

ガンジスを渡り**阿踰陀国**に、仏寺１００余り、僧侶三千人、大乗、小乗も兼ねて学習している。**阿耶穆佉国**から**鉢羅耶迦国**へ入る。《城中に天祠がある。この祠に１銭を喜捨するならば、その功徳は他所に千金を寄付するにまさる。祠の前に一本の大きな樹がある。木影はみっしりと覆っており、食人鬼がこの樹に住んでいる。それ故その樹の近辺にはたくさんの遺骸がある。もし人がこの祠の中に入るならば、身命を亡くしてしまわないものはない。怪しげな言葉に誘われるともいい、また神の誘いともする。昔から今日に至るまで、この迷信に変わりはない。一人の善男子が樹に登り下の友人に向かって「私は今まさに死ぬでしょう。以前はでたらめだと思っていたが、今は真実であることを体験しました。天仙たちが伎楽を奏し、空から私を出迎えてくれています。今この霊験あらたかな所から、このつまらない身を捐てます」善男子は身を投じようとした。親友たちは諫めたが、叶わず、友たちは衣服を地に敷き詰めた上に落ちた。暫くして蘇生すると「ただ空中に天仙たちが招いているのが目に入るだけであったが、きっと邪神に引かれていたので、天界の音楽を聞くことができなかったからだ」と語った。》(『三蔵法師のシルクロード』)

釈迦の聖地巡礼地は田園風景となる

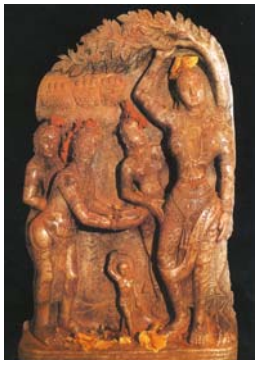
（『三蔵法師のシルクロード』朝日新聞社より）

憍賞弥国は周囲六千余里。国の大都城は周囲三十余里。土地は肥沃で粳稲、甘蔗がよく茂っている。その昔、仏の信者のウダヤナ王が統治していたところ。城内の故宮には大精舎があり、栴檀でつくった仏像が祀ってあった。城内の東南隅には、ゴーシラ長者が仏陀のために建てた精舎や浴室の跡があって、仏陀の髪と爪を納めた仏塔があった。

コーシヤーンピー国から東北へ進み**室羅伐悉底国**に入る。経典で舎衛国として知られ、有名な祇園精舎のあった所である。この地のスダッタ長者が精舎を建て、仏陀とその弟子たちの住まいに寄進してくれた精舎である。玄奘三蔵が訪れた時はすでに荒廃し、東門の左右にアショーカ王が建てた７０尺余の石柱があり、左の柱頭には法輪、右の柱頭には牛の彫刻がのっていた。また城内には仏陀の時代に活躍した勝軍王の宮殿の跡や、王が仏陀のために建てた法堂や仏陀の乳母のための精舎の跡なども見た。仏寺は数百あるが荒れはてていた。僧侶も少なく小乗の正量部を学ぶ者ばかり外道は盛んであった。

祇園精舎跡・朝の祈り

東インドへ・舎衛城から東南に向かい仏陀の生地**劫比羅伐窣堵国**（ネパール）に来た。玄奘が見たものは荒廃した王城の宮殿跡で、釈迦の父浄飯王の正殿もあり、母摩耶夫人の寝殿にも精舎が建ち、その中に浄飯王、摩耶夫人の像があった。誕生した悉達多太子を仙人占った所、太子がシャカ族の青年と角力競技をした所。又城の四門から老人・病人・死者と出家を見た所を教えている。ルンビニーの森と池と無憂花樹を見た。近くにアショーカ王が建てた石柱が地面に折れて倒れていた。



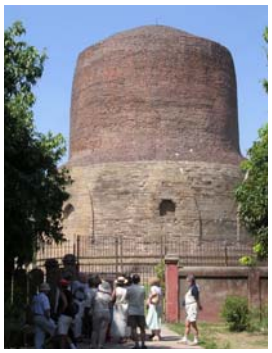
無憂樹と釈迦誕生

藍摩国(ネパール国境)は荒れ果て廃墟となっていた。邑の住民も稀である。この国の先王が仏陀の入滅後、舎利を分配されて手に入れ建てた塔が、不思議なことに時々神妙な光が燭くことがある。

拘尸那揭羅《城郭が崩れ落ち村里はさびれている。故城の煉瓦の基礎は周囲十余里ある。住民は稀少で町は荒れ果てている。沙羅林を訪ねて、樹は槲に類して皮は青白く葉は甚だ光沢がある。四本の樹が特に高い。如来が寂滅された所である。そこの大きなレンガ造ずくりの精舎の中に如来の涅槃の像が、頭を北にして横臥して作ってある。傍に窣堵波があり、無憂王が建てたものである。基壇は崩れ傾いているが、なお高さ２百余尺ある。前に石柱(現存していない)が建ててあり、如来寂滅の事蹟が・・・》記してある。

クシナガラ・沙羅双樹

婆羅痆斯は現ベナレスを訪ねる。《周囲四千余里、大都城西はガンジス河に臨んでいる。仏寺が３０余、僧侶３千余人、小乗正量部を学んでいた。仏陀が最初に説法したという鹿野苑(現サールナート)につくと、僧侶千５百人もいる立派な寺がありアショーカ王が建てた大塔や石柱もあった。》サールナートから**戦主国**へ、《周囲２千余里、ガンジス河に臨み、住民は安楽にして土地は肥沃、気候は温和、風俗は純朴・・・》(国名の意は原語は湿婆神の称説、ベレナス東方５０マイル、の意はイスラム化の名称)



サールナートダーメーク塔

吠舎釐国に着く。《ここは仏陀が維摩経を説かれた所で入滅後 100 年、７００人の僧侶が集って第２回の結集を行なった所である。かつて仏寺は数百もあったが、今は僅か３，５寺を残すのみで僧侶がほとんどいない。・・・》ここはヒンドゥー教が隆盛であった。

ガンジス河を南に渡り**摩揭陀国**に着く。《仏陀の時代、ビンビサーラ王一族が統治した強大国で、仏陀も王舎城を中心に説法を教化した所である。》玄奘が最も深く心を打たれたのは、仏陀成道の菩提樹の下にある金剛座前に額衝いた所である。今の**仏陀迦耶**である。《菩提樹の高さ５０尺金剛座を見る人はほとんどいなかった。》と記している。

仏陀が成道になった菩提樹の下にネパール仏教団体が読経をあげていた

更に《仏法をすて外道に走るものが多いためだ。金剛座の南北の隅には東向きに立つ２つの観自

在菩薩像があった。この像が没すると仏法も滅びると伝へれているが、現に南の像は胸の所まで地面に埋まっていた。玄奘は五体を地に投げてかなしみ、「仏陀が成道されたころ、私はいずこをさまよっていたのでしょう。今仏法が衰えはじめたこの時期になって、初めてこの聖所に来ることができるとは、なんと罪深い身であろう」と号泣した。》

仏法求道の旅は、西域を越え、中インドの仏陀の聖跡を訪ねた旅であったが、玄奘が見たものは、仏法の衰退と、多くの寺院や遺跡は荒れ果て、異教徒の寺院が多く、わずかに残る仏教寺院は小乗教徒ばかりであった。玄奘は仏法が衰え、末法の世にいたる世を認識せざるを得なかった。玄奘は厳しい危機意識を持ってナーランダー学問寺に留学した。玄奘は**那爛陀寺**の名称について次ぎのように記述している。《古老の話によれば、この伽藍(寺院)の南の菴没羅(果実マンゴー)の林中に池がある。そこに住む竜の名を那爛陀といった。その傍に伽藍を建てたので竜の名を取り寺号とした》という。ここで玄奘は大乗諸学を究め、インド論理学を学び大乗の徒からは「大乗天」、小乗の徒からは「解脱天」と呼ばれた。(『大唐西域記』東洋文庫・平凡社『仏教文化の原郷をさぐる』西川幸治著より)

余話・ナーランダー寺院に日本の僧侶がいた

5 世紀初頭グプタ王朝シャクラーディトヤ(在位 415－455)王の創建。この寺院は世界最初に仏教大学を設立となり、仏教の隆盛をみた。戒賢・護法・護月・徳慧・堅慧・光友・勝友・智月らが輩出し、玄奘や義浄もここに逗留して学んでいる。寺院は１４世紀頃まで存続したようである。

ナーランダー寺遠望

又、日本人の僧侶の記録が中国側の唐人段成式の『酉陽雑俎』に記載がある。それは日本の僧侶が仏教聖地を訪ねた顛末がある。平安初期、高岳新王(真如親王・桓武天皇の孫)一行はインドに向かって出発したが、高岳は不運にもマレーで遭難死去インドへ辿り着いたのは金剛三昧のみとなった。金剛は無事に引き返し、長安に住んでいた正式な記録が残っている。

金剛が語った話しとして、「玄奘はインド人に尊敬され、当地では玄奘の鉢と履が大切に保存されている。また、インドのナーランダー寺院は大変不衛生で、食事をしている時、蠅がすごくたかってくる・・・」と記述があるという。金剛三昧は、平安時代、インドの釈迦聖地へ巡礼に行き、そこで仏典を学んだ唯一の日本人であるが、彼の足跡が日本の仏教典籍のどこにも記載されていないのは甚だ遺憾なこと著者は述べている。(『シルクロード全史』王鉞・金連縁訳より)

玄奘・法顕の帰路はパキスタン北部からカラコルム山脈越えて中国長安へ

インドの修学の目的を果たし、トルキスタン乾燥地帯を通って一路長安へ。現在はカラコルム・ハイウェーが中国新疆ウイグル自治区とパキスタン北部カラコルム山脈を横断して結ぶ道路、クンジュラブ峠４６９３ｍを通り国境を横断する１３００ｋｍの道路交通の難所となる。

玄奘は１４年間の遊学を終えて、復路にはイスラマバードからヒンズゥークシ山脈を越えて塔什庫爾干を通り、カシュガルから「西域南道」を通り、ヤルカンド、和田、ニヤ、チエモ、ミーランから敦煌へ帰路を通過したらしいが正確には判らない。現在のコースを考えればイスラマバードからチラス→ギルギット→フンザ→クンジュラブ峠からタシュクルガンに出て「西域南道」から敦煌に向かうのが一般的となる。法顕は３９９年の『法顕伝』の記録では、長安→敦煌→タクラマカン砂漠からパミール高原に出て、カラコルム山脈を越えてフンザ、ギルギットを経てガンダーラに達している。玄奘はヒンズゥークーシュ山脈を越え、カラコルム山脈を越え、現中国新疆ウイグル自治区に入り、タジク族の住むタシュクルガン(標高 3100m)に入ると石頭城が、漢の時代では蒲梨国、魏晋代では疏勒国等。644 年帰国の折、玄奘も立ち寄っている国である。

タシュクルガン・石頭城址

方形基座・中国最西の仏塔

白馬塔

石頭城・漢代では蒲梨国、魏晋代では疏勒国と呼ばれた。**中国最西仏塔**・カシュガル北東３０ｋｍの所にある。４－５世紀に作られたもの、高さ１０ｍ。**白馬塔**・鳩摩羅什が経典などとともに乗ってきた白馬が敦煌で死んでしまった。馬の供養塔で敦煌郊外ある。

仏教聖地へ中国僧たちの求法

４世紀から８世紀にかけて、インドへ渡り後世に名を残した僧が１６９名いる。中国僧の初めて求法の旅をした朱士行（中国僧・３世紀中頃西域まで遊学）であった。東晋から宋代（317－479）かけては、法顕、智厳、宝雲、智猛、法勇などがいる。

法顕は巡歴した各国の仏跡、宗教、風俗、地理などを簡素まとめたのが『法顕伝』があり、玄奘三蔵は『大唐西域記』である。法顕は生没年未詳・東晋の僧・山西省の人。中国に伝わる「戒律」類の不備を憂慮し、３３９年、６１歳のころ同士１１人と長安を発ち、約14 年間のインド求法の大旅行で修学し、４１２年に一人で無事帰国したのは７４歳であった。仏馱跋陀羅と共に『摩訶僧祇津』など６巻を訳し、法顕の『法顕伝』は当時のインドや中央アジアの実情を伝えた貴重な書『大唐声域求法高僧伝』がある。法顕は敦煌から鄯善に至る 1500 里の道中は沙河と呼ばれ流沙の沙漠が続くタクラマカンを渡った時の状況を記している。

法顕の旅・『法顕伝』より抜粋・（『法顕伝』長沢和俊訳・東洋文庫より）

鄯善国から沙河（ゴビ砂漠）を渡る。《沙河中はしばししば悪鬼、熱風があらわれ、これに遇えばみな死んで、一人も無事な者はない。空には飛ぶ鳥もなく、地には走る獣もいない。見渡す限り

行路を求めようとしても拠り所がなく、ただ死人の枯骨を標識とするだけである。》と記す。

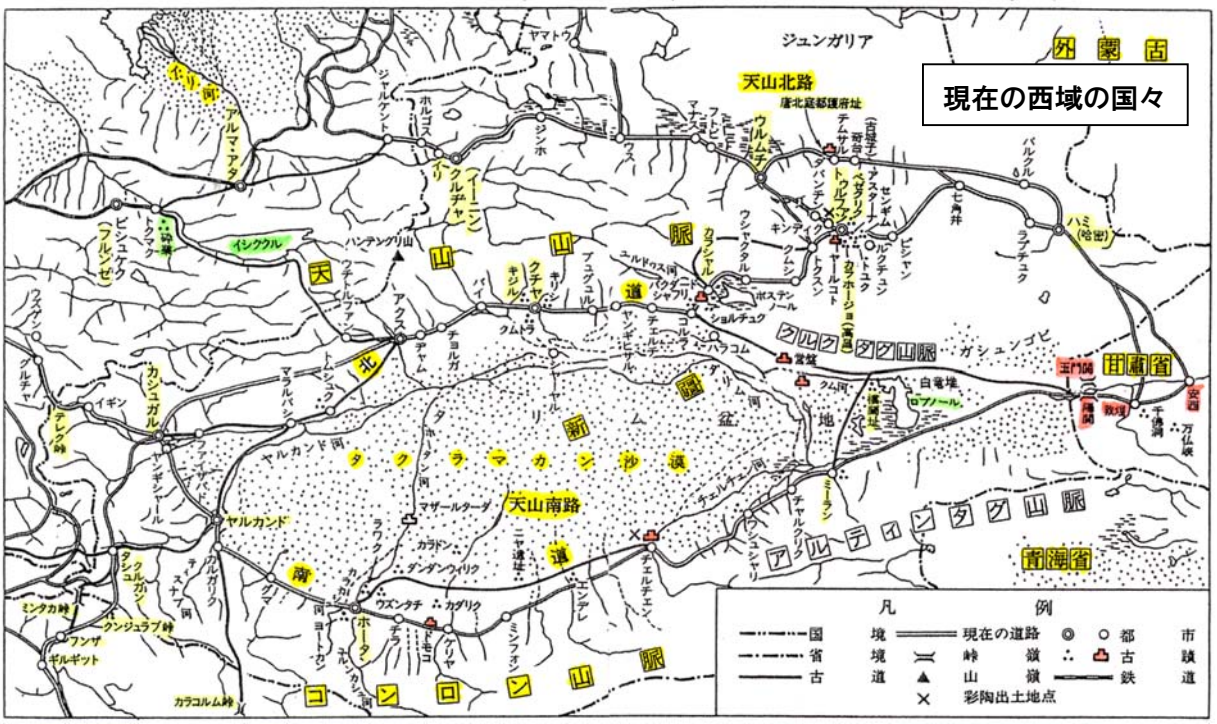
法顕は生没不詳であるが８６歳説で入寂と推定すると、法顕の出発は３９９年(６４歳)、帰国は１４年後の４１２年(７７歳)、生年は３３５年頃と推定。２、３年の誤差があるが西域に向かったのは、６０歳を過ぎ、帰国は８０歳になる年齢と思われる。現代で考えても驚異的な大旅行である。東晋代の山西省の人。中国に伝わる「戒律」類の不備を憂慮し、３３９年に長安を立ち、西域・インド求法中、仲間は病没したり、インド国に永住したりして、セイロン島に着いたときは法顕一人という。長安を出発して６年で中インドに至り、滞在すること６年、帰還には３年を要して青州(山東省)に漂着した。凡そ遊歴する国数３０国、２年後に旅行記を記録し、人々は《まことに古今稀有の人かな。大教東伝以来、いまだに身の危険を忘れて法を求めた、法顕のような人はいない》と賞め称えた。後、インド・西域諸国へ旅する僧侶たちや商人たちの旅行手引書ともなり、後世のスタイン探検家たちの歴史や風俗の手引き書とされている。帰国後、仏駄跋陀羅と共に『摩訶僧祇律』など６巻を訳した。

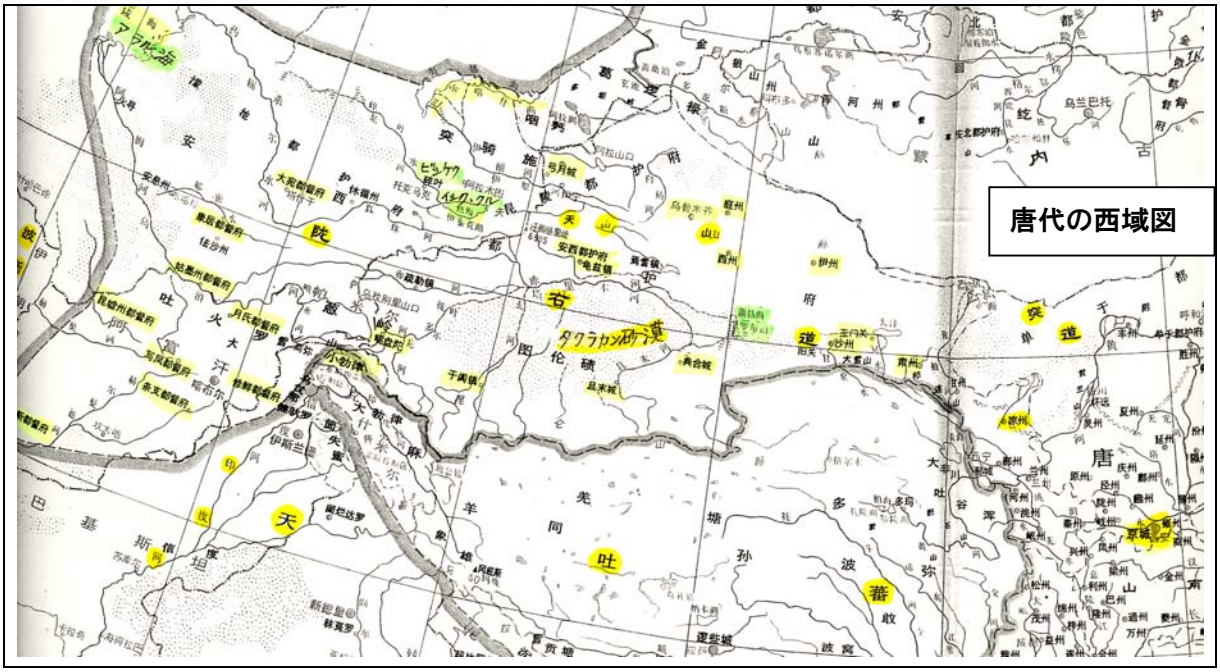
蜃気楼はこのように見え、近づくと消えまた現れる、敦煌から西へ３０㌔位のところ

鄯善国はロプ・ノール湖畔に栄えた楼蘭国。『漢書』「西域伝」には《鄯善国、もと楼蘭と名づく。王は扜泥城に治する。陽関を去る１６００里(704ｋｍ)、長安を去る6100里(2684)、戸は１５７０、人口万４１００人、兵士２９１２人いる。地は砂漠で田は少なく他国の田に依存し、民は畜牧に従い、水草を逐っている。驢馬ラクダが多い。》と記す。

う夷国から西南方に進む、《この行路中には住む人も無く砂漠旅行の艱難、経験した苦しみは、とうていこの世のものとは思われなかった。こうして旅すること３５日、于闐国に至ることができた。》と記す。う夷国は湖北岸のカラシャール・トゥルファンとクチャ結ぶ・漢代は焉耆国・『大唐西域記』では阿耆尼国となる。于闐国は現ホータン(和田)となる。

于闐国の行像を見学する・法顕らは行像(仏像を宝車に乗せ練り供養・仏誕会)を見学の希望があったので３カ月の間滞在した。《４月１日から城内や道路を掃き清め、道筋を綺麗に飾る。その城門の上には大帳幕を張って立派に飾り、王と夫人采女らは皆その中に住まる。瞿摩帝寺(牛糞の意)の僧は大乗学で王が啓重する所で、一番先に行像を行う。城から３、４里離れ所で像を載せた四輪の車を作る。高さ三丈あまり、その有様は行殿のようで、七宝で飾りたて像が車の中に立っていて二菩薩がこれに侍り、これら菩薩諸天はみな金銀や玉細工した像が門から百歩の所にくると王は天冠を脱ぎ新衣に着替えて、はだしで華香をもち家臣を従えて像を迎え、頭面礼足(仏足を最高の敬礼する)して散華、焼香する。こうして一僧伽藍が一日ずつ行像が行なわれる。１日から始まり、１４日に行像が終る。(略) 葱嶺(パミールは野生葱が採れたことの由)以東の六つ諸王は、所有する高価な宝物はほとんど供養に用い、王自身が用うることはすくない。》と。





地名注釈・ハミ=哈密国・トゥルファン=高昌国・ウルムチの上=焉耆国・クチャ=亀茲国・カシュガル=疎勒国・ヤルカンド=莎車国・ホータン=于闐国・チャドータ（ミンフォン）=精絶国・ミーラン=楼蘭・キリギスタン=烏孫国・ウズベキスタン=大宛国・トルクメニスタン=大月氏国・カシミール=罽賓国（ガンダーラ地方）・アラル海=奄蔡・インド=天竺・（新疆は日本の面積４・５倍）（地図上段は『シルクロードを知る事典』長沢和俊編・東京堂出版。下段『中国歴史地図集』「隋・唐・五代十国時代」上海中華印刷・中華人民共和国地図より）

中インド・マトゥラー国・(摩頭羅国)《ヤムナー川の両側に２０の僧伽藍があり、僧３０００人とたいそう盛んである。およそゴビ砂漠以西のインド諸国では、国王はみな厚く仏法を信じている。（略）霜雪もなく、人民は豊楽で戸籍や官法もなく、王治には刑網を用いず、罰金を払わせるだけ、悪逆な陰謀をはかっても、その右手を切るだけである。》と記す。

コーサラ国・抱薩羅国に舎衛城がある。シュラーバスティーの音写。サーヘトマーヘトが祇園精舎の跡。法顕は精舎を、《城の南門を出てすぐに長者須達の建てた精舎がある。精舎は東向して門戸を開き、戸の両廂に二つの石柱がある。左柱上には輪形を作り、右柱上には東向して牛形を作っている。池の流水は清浄で林木はよく茂り、多くの花々は咲きみだれ欝然として美しい。これが祇洹精舎(祇園精舎)である。(略)衆僧が出てきて法顕に「あなたは何処の国からきたのですか」法顕は「漢の地から来ました」それを聞いて衆僧は感嘆して「奇しいことよ。辺地の人がよくも法を求めてここまで来られたものだ」そして「われらの諸和上(和尚)あい承けて以来、いまだかって漢の道人がこの地まで来たのは見たことがない」》と記述している。

ルンビニー園・(ネパール)は釈尊が誕生した所。城の東５０里に王園がある。園の名は論民という。摩耶夫人は池に入って洗浴し、池を出て北岸を歩むこと２０歩、手を上げて樹枝をつかみ、東向して太子を生んだ。太子は地に落ちると七歩あゆみ、二竜王(釈迦誕生の時天より甘露雨を降らせた)が太洗浴の池は、いま衆僧が常にその水を取って飲んでいると法顕は伝える。

クシナガラ城・拘夷那竭城の北に沙羅双樹の林間、希連河(ガンジス川の支流)のほとりに世尊がここで頭を北にして般泥洹(仏が入滅)した処、および須跋(仏の最後弟子) が最後に得道した処、金棺に納めて世尊を七日供養した処、金剛力士(金剛神)が金杵を放た処八王(８カ国の王)が舎利を分けた処などがある。これらの諸処にはみな塔を起て、僧伽藍がありことごとく存在している。

王舎城・王舎城は中インド・マガタ国の首都、現ラージャグリハ。付近に迦蘭陀竹園(竹林精舎)、霊鷲山がある。法顕は城跡を見て、《仏の説法はすでに破壊し、わずかに摶(煉瓦)壁の基礎だけが残っている。法顕は香華、油燈を買い二人の老比丘に頼んで送ってもらい、耆闍崛山(霊鷲山のこと)に登り法顕は華香で供養し、燈火を燃し続けて、慨然として悲嘆した。

王舎城址

やがて涙を収めて、「仏は昔ここに住み、首楞厳(首楞厳三昧経)を説かれた。法顕は生きて仏にお会いできず、ただ遺跡の諸所を見るのみである」と。》万感の想いを記している。そこで石窟前で首楞厳経を誦(空読み)した。旧城の北を出て行くこと３百歩、道の西にカランダカ竹林精舎があり、今も現存して衆僧が掃き清めている。

ブッダガヤー・この処には林木(苦行林)がある。《ここから西行三里で、仏が水に入って洗浴し天が樹枝をさしのばし、それを掴んで池を出られた処に到る。また北へ二里余行くと、弥家女が仏に乳糜(乳粥)を奉じた処に行くことが出来る。さらに北へ二里行くと、仏が石の上で粥を食べた処でその石がいまなお長さ６尺、高さ２尺が残っている。》と記述している。

菩提樹の木陰で外国仏教徒達の講話がみられる・ブッダガヤーで撮る

第6章・中国編

6－1・新疆ウイグル自治区・新疆ウイグル自治区に１３民族いる。漢代、唐代には漢民族が支配し、１３世紀はモンゴル帝国の支配となる。１６世紀ヤルカンド汗国（ジュンガル系のチャガタイ）が支配、１７世紀はジュンガルの支配、１８世紀は清朝の支配下となる。清朝時代の守備兵士の残留子孫が、満州族が２万人・シボ族(女真族一派)３、５万人が今日に至る経緯となる。

トルフアン・ベゼクリク千仏洞・南北朝時代から元代まで開削(かいさく)され、高昌回鶻(ウイグル)時期にも盛んで、大量の回鶻供養人像がベゼクリク壁画に残され､その最も特色となる。吐魯番(トルファン)市から東へ５０ｋｍ、火焔山(かえんざん)の麓を流れるムルック河の断崖に、ベゼリク千仏洞は「装飾された家」と呼ばれ５００ｍに渡って造営されている。仏像は全部で８３窟、石窟は５－６世紀の高昌王国時代に開削され、１３世紀にイスラム教が侵入するまで７００年間造営は続いた。又、マニ教の絵が描かれた窟、景教(けいきょう)(キリスト教一派)の痕跡ある窟、密教図像窟もある。これらの壁画には漢字、ウイグル文字の題記があり、両族の縁戚(えんせき)関係を知ることができる。２０世紀初頭、諸外国の探検隊の手によって発見され、窟の情報を聞きつけた欧米の探検隊によって壁画は持ち出され石窟は荒廃した。

（資料『シルクロード・新疆仏教藝術』新疆大学出版社・『西域国寶録』トルフアン市）

吐魯番(トルファン)市・ベゼクリク千仏洞

回鶻高昌王像(『寶録』)

第１６窟・楽人図

回鶻高昌王像(ウイグルこうしょう)・宋代・第４５窟壁画・両側に「勇猛な獅子にして全国を統一する九姓の主、全民蒼鷹侯(そうようこう)、回鶻(ウイグル)特勤の像」と回鶻文に題記がある。頭に戴く桃形の冠は回鶻貴族の特徴を示す。

楽人図・画中の楽器は曲頸琵琶(きょくけいびわ)（四弦系）太鼓、鼓板(こばん)、横笛等で古代高昌楽の重要な楽器。

火焔山(かえんざん)・千仏洞の奥の山。『西遊記』で牛魔王と孫悟空が戦った山のモデルとなった山である。標高 850、山全体が赤色砂岩の山となっていて、木一本なく乾燥した熱い山並と、ベゼクリク千仏洞との想像が『西遊記』を生み出した舞台となった所。

火焔山

供養礼仏図(『西域国寶録』より)

十六国の王子挙哀図(『新疆仏教芸術』より)

供養礼仏図・晩唐・ベゼクリク第 20 窟壁画。この図は中央に立仏があり、傍に(左下)商人と駱駝と驢馬がいる。赭色を主調とし、回鶻人の好んだ色調である。２０窟はドイツ探検隊が大部分剥取持ち去りとなった窟となっている。

十六国の王子挙哀図・十六国の王子の挙哀図(副葬品)紀元前 9 世紀―12 世紀 196×260 ㎝。

１９６４年トルファン、ベゼクリク石窟３３窟から出土。十六国の王子図。王子の形像は中国化像になっている。通天冠（天に通じる王冠）を頭に戴いているのが漢族帝王、突厥(ﾄﾙｺ系)、吐蕃(チベット系)、ウイグル等の各民族の王子がいる。１枚の宗教画、貴重な歴史風俗画である。

クチヤ(亀茲国)・現在は庫車、キジル石窟がある。

キジル石窟・はクチャの南６０ｋｍ、拝城県の克孜爾郷にある。中国の四大石窟の一つで、269 窟ある。中国では最も早く開削された、最も西の大型石窟で、魏、晋代に開削されたが、３－８世紀には破棄されている。塑像(粘土像)・建築・壁画などで構成されている。洞窟の壁画の題材は本生・因縁・仏伝の説話が目立つ。天相図・伎楽飛天・供養人画に特徴がある。

キジル千仏洞(『新疆仏教芸術』新疆大学刊)　**鳩摩羅什銅像**(『寶録』)　**技楽飛天図**(『寶録』より)

鳩摩羅什・(344－413・語学の天才)はこの地区の生まれ。 仏教翻訳家としての訳教数は３００巻を長安で訳す。父がインド人、母が国王の妹と語学に恵まれた環境。大乗仏教の発展を推進した。

技楽飛天図・ギジル第８窟、７世紀。隋唐時代・亀茲石窟の飛天の代表作。男の飛天は五弦の琵琶を弾き、女の飛天は花盤をを抱え花弁を撒いている。両飛天とも造形が優美、飛天は仏の国で散花奏楽を専門とし、仏に対する供養を表している。

４８石窟・飛天(『新疆仏教芸術』新疆大学出版社)　**１７窟の主室　弥勒説法図**(『新疆仏教芸術』)

48石窟・飛天・後室天井の天界に描く、涅槃に向かって供養している。手を合わせ花の皿を持て二人とも飛天している。**17窟の主室・弥勒説法図**・主室の前壁の上に描く、弥勒は兜率天宮に住まわり、両側に法を聞く衆菩薩がいる。

庫車は・天山北道に位置するオアシス都市で『漢書』「西域伝」は亀茲国である。亀茲では１世

紀ごろ仏教が既に伝来しており亀茲出身の鳩摩羅什の行動から推定すると、４世紀以前には仏教が盛行していた。『鳩摩羅什伝』によると「時に亀茲の僧衆１万余人」とある。玄奘三蔵はインド求法の途次に亀茲国を訪れている。《伽藍は百余箇所、僧徒は５千人余で、小乗教の説一切有部を学習している》玄奘が訪れた貞観２年(628)亀茲国は西突厥の支配下となっていた。６４７年唐が攻略２年後安西都護府を置く。亀茲が唐に完全に影響下に置かれるのは玄奘が訪れた数十年後となる。亀茲には西域でも最も多くの石窟寺院が集中していて、２０世紀初頭フランスのペリオにより、6－8 世紀の塑像、壁画などが国外に持ち出されている。

金剛力士(『西域国寶録』)

金剛力士･ギジル第７７窟、４世紀頃、金剛力士は払子(古代のハエ叩き法具)を掲げ、金剛杵(古代の武器・法具)を握り、仏の傍で護法の責を果たしている。ドイツ探検隊壁画を剥取した。クチャ第二の大石窟はクチャ県の西約２５ｋｍ渭干河東岸の崖にある。１１２窟が残存、第一期は亀茲王国時期５－６世紀、ガンダーラの影響を受け、後期には中国様用式の影響を強く受ける。

ドーム型天井の壁画(『新疆仏教芸術』より)

菩薩画(『新疆仏教芸術』より)

ドーム型天井の壁画･クムトラ新１窟、5 世紀頃。ドーム型天井の方形窟。中心に大きな蓮華、１１本の梯形の条幅が放射し、その中に仏と菩薩が交互に描かれている。

菩薩画･新２窟、５世紀頃。宝冠を戴き、上半身裸で花縄を持ち、姿態が淑やかである。

石幢･高昌故城Ｅ遺跡出土、５世紀北朝時期高さ６６㎝・幢の龕には深い浮き彫りの仏像がが８体と弥勒一体があり、みな禅定印を結ぶ。円形の経には「増一阿含経」の文３５行が陰刻、下部に天人一体と八卦の符号が陰刻されている。高昌文化では仏教と黄老道教が融合して一体となっている。

(石幢は石塔の一種六角、八角石柱と仏龕、笠、宝珠など・日本へ室町期伝播している。

黄老=黄は黄帝と老は老子の思想)

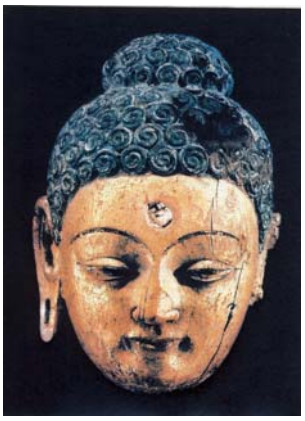
木彫仏坐像(『新疆仏教芸術』)

石幢

木彫仏坐像・高昌城出土、7－8 世紀。高さ１５㎝、仏は蓮華の上に座り、背光の外縁には連環忍冬文(連ねる唐草模様)が彫られている。ドイツ探検隊の発掘。

漢民族の仏教を受け入れ方・仏教が中国に伝来時、漢民族は外国の宗教に対して抵抗があったらしい。胡族(敦煌から西の民族指す)の仏教僧たちが漢民族思想の老子・荘子・道教等の思想で仏教を融合させ理解したことが漢民族の仏教の発展につながる。漢民族は現世利益の仏教として信仰を受け容れたのである。

仏像の変遷・ギリシャ風・中央アジア風・中国風変遷となるが、朝鮮半島百済・高句麗の影響を受けたが日本の仏像である。又、観音の王冠はペルシア・西アジアからの影響が見られる。日本の鬼子母神像もこのあたりから誕生といわれ、ザクロ右手に持って、左手で子供を抱く姿は子孫繁栄といわれるが、鬼子母神誕生は疱瘡で子供達を大量になくした過去の背景が、観音の霊力で衆生を救う思想となる。観音塑像はペルシア方面からの古代宗教の混淆と考えられる。私見ではあるが、王冠をつけた像は、西域から来た仏像と考える。(下記頭部仏像『新疆仏教芸術』より)

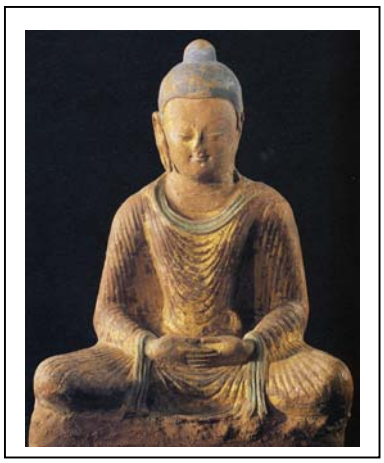


菩薩頭部塑像・トゥムシュク東寺出土・６世紀頃 38 ｾﾝﾁ・木彫仏頭(同)・６世紀 12・5 ｾﾝﾁ・菩薩頭部泥塑像・シクシン仏寺出土

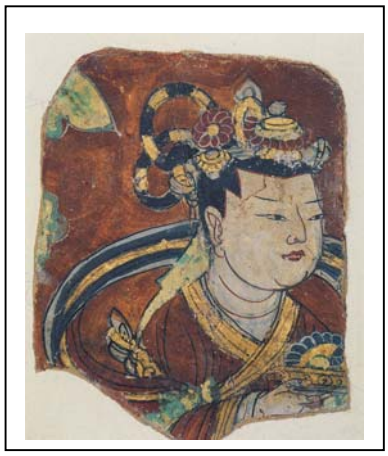
ドイツのトルファン探検隊・1902 年 12 月初め第１回探検隊がトルファンに入る。ドイツの探検隊は初回より世界を驚かす発見となった。第２回は 1904 年－1905 年、第３回は 1905 年―1907 年、第４回は 1913 年―1914 年、第一次世界大戦勃発の直前で終了する。

「Erben der Seidenstraße・シルクロードを継承」
『ＵＳＢＥＫＩＳＴＡＮ』1995 年より
edition hansjörg mayer(版ハンスヨルクメイヤー社)
(ドイツ語 Google 無料翻訳サービス利用した)
右の写真は第３回ドイツのトルファン探検隊員、
(1905 年 12 月から 1907 年４月のメンバー)
正面中段座すアルベルト・グリューンウェーデル、
最右側アルベルト・フォン・ル・コック。

1902 年から仏教学者グリューンウェーデルを主斑とする探検はトルファンに於いて、壁画・塑像群・古文書・工芸遺品多数を獲得し本国へ持ち帰った。



③ブッダ坐像



①観音菩薩　　②菩薩表現

①トルファン地域 8、9 世紀。高さ 51、5 cm×22、5 cm。唐時代の仏教文化の影響を受けている。インド美術・ベルリンの博物館蔵。

②紙に描かれた菩薩の教典。9、10 世紀。H25、8×13 cm。インド美術・ベルリンの博物館。

③仏坐の瞑想像。粘土・8 世紀。坐高 43、3 cm。ホッチョ(高昌故城)眉毛と重質の幅広い顔が特徴。インド美術・ベルリンの博物館。

④壁画。スカーフ女神とある。トルファン東南センギム(高昌故城)

④飛天

諸仏の周囲を飛行遊泳し礼賛する天女。19 世紀・H19×W15 cm。インド美術美術・ベルリンの博物館。

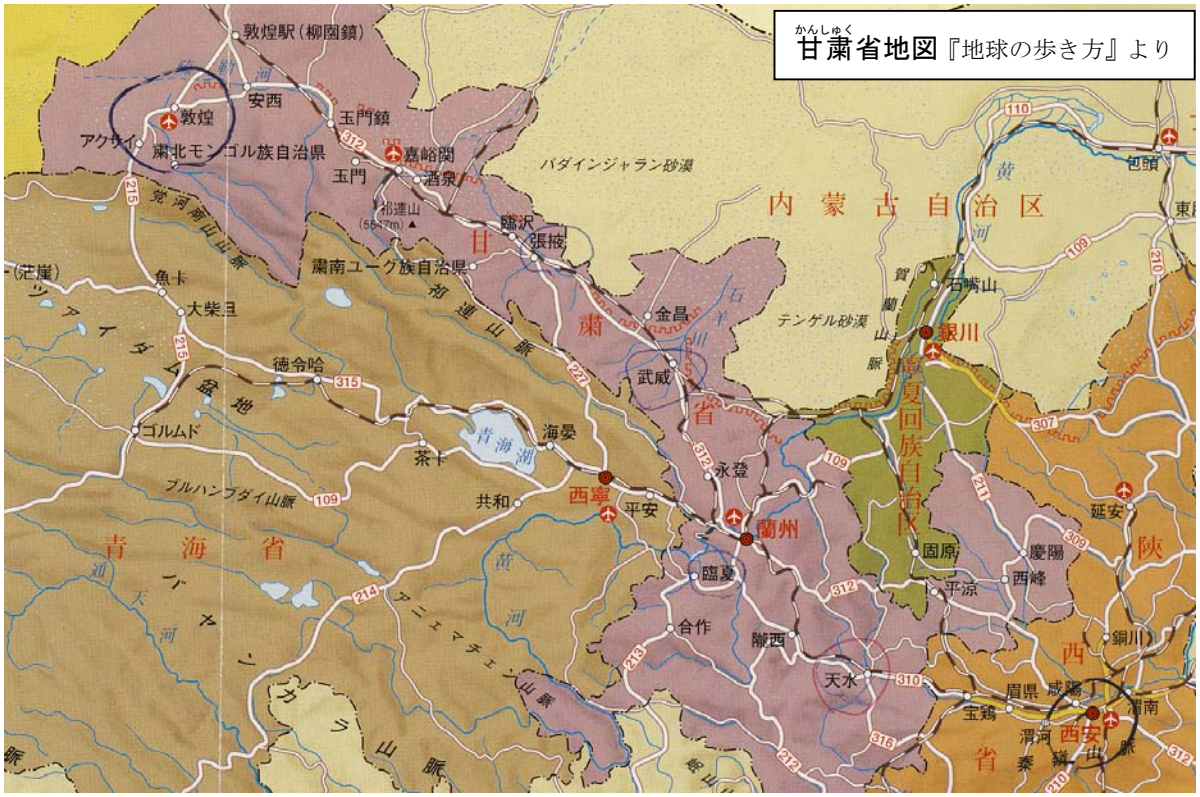
新疆タジク族自治区へ向う途上

6－2・河西回廊を行く(甘粛省)

中国甘粛省の黄河以西の地域は、古来より河西地方と呼ばれていた。「河」は「黄河」を指し、「河西」とは黄河の西の地方という意味になる。西安(旧長安)、蘭州で南路と北路に別れ嘉峪関

で合流し、北の玉門関(ホータンの玉取り締まりの関所)、南の陽関(玉門より南にあるので陽関)その要に敦煌がある。敦煌の雨量は年／39、6ミリ弱、蘭州は年／211、2ミリ、西安は年／579、9ミリとなり敦煌は大変乾いた地方となる。敦煌から西安まで約 1900ｋｍ。黄河を渡ると祁連山脈が東西 1500ｋｍ・幅 400ｋｍ・万年雪の４千m級の山々が連なる乾燥の大地となる。河西回廊の乾燥大地は１５００年有余の間、乾燥が莫高窟の塑像・壁画は護ってきた。

砂漠の真ん中、辺境の敦煌莫高窟は２千年以上の昔、漢の武帝(在位前 140―前 87)の時代から造営される。殷・周の時代には「羌戎」(チベット系民族)と呼ばれた遊牧民族がいた。秦(前 475－前 207)の時代には「月氏」(中央アジア民族)が敦煌辺に居住していたが、漢代初め「匈奴」が月氏を駆逐し、匈奴はこの敦煌を治めた。敦煌を追われた月氏は現トルクメニスタン周辺で「大月氏国」(カニシカ王は小月氏に属す)を建国する。当時の漢帝国は匈奴に反撃する力はなく、毎年、絹や食料を貢納して、匈奴が漢国土に侵攻しないように融和策を保っていたが、やがて前１２９年、漢は匈奴に対し数十万の遠征軍をもって匈奴を打ち破った。武帝は前１１５年、武威・酒泉の二郡置き、前１１１年、張掖・敦煌の二郡を領有し、漢帝国は「河西の四郡」を成立させた後、三国時代の漢・魏・晋代と漢民族の領有歴史経緯となる。(郡とは軍管区のこと。中国での省は、直轄市・自治区・特別行政区となる。県は県級市・自治県・区となり郷は鎮・郷となる。)



甘粛省地図『地球の歩き方』より

敦煌莫高窟の創建については諸説がある。３６６年に鳴沙山の断崖に初めて一窟が掘られたのは、前秦の建元２年(366)、西方から旅をしてきた沙門楽傅(僧)という人が岩の間から光が射すのを見て、ここに一窟を開いたと伝わる。その後、北魏、西魏、北周、隋、唐、五代、宋、西夏、元の各時代経て千年間にわたり開削が続けられた。大泉河に沿って、１６００㍍の長さわたって五層の石窟群が４９２窟からなる千仏伽藍となる。壁面は４万５千平方ｋｍ、供養人の題記は７千件、仏像２４１５体が保存されている。敦煌莫高窟を有名にしたのは、第１７窟の蔵教洞から数万点の仏教経典や仏画や古文書が発見された。蔵経洞は１９００年、道士の王円籙によって発

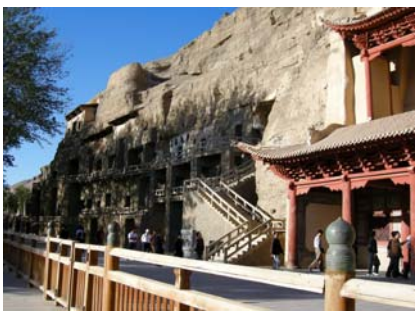
見され、１９０７年に英国のスタインが蔵経洞の典籍１万を手に入れたことから始る。この蔵経洞は１１世紀初頭、西夏が敦煌を征服、その時窟口が塞がれていたため難を逃れ、発見されるまで９００年間の長き間眠り続けていたのである。これより敦煌学が興った。

敦煌は仏教芸術の宝庫・（『敦煌石窟の珍品』敦煌市より・仏像・壁画面白そうな仏龕を紹介）

敦煌は沙州と呼ばれた所、乾燥の大地に石窟群はある。敦煌莫高窟は西千仏洞、安西仏洞、東千仏洞、水峡石窟、粛北蒙古族自治県の５つの廟石窟、及び一つの廟石窟と玉門昌馬石窟が含まれている。現在洞窟は５５６個、壁面は５万百十平方メートルあまり、色彩塑像は２７００体余、各種写本書は４－５万件等々が残されている。西暦３６６年から造営され、北涼十六国から元、清まで約千年の歴史を経ている。題材は菩薩・弟子・天王・力士・僧侶・天獣・飛天・伎楽天など塑像や壁画等に造営されている。

奥の山は鳴沙山、麓にある敦煌莫高窟東側からの眺望（『敦煌石窟の珍品』敦煌市より）

敦煌莫高窟・建内に大仏が７階まである



莫高窟の正面左側洞窟

鳴沙山

交脚弥勒菩薩・第 275 窟・西壁。この洞窟は十六国の時期に建造され、宋代に修復された。この絵に描いた交脚弥勒菩薩は莫高窟に現存する初期塑像の中に、最大な一尊の弥勒菩薩で高３・４ｍである。弥勒像は右手傷付き、左手を膝に置き「与願印」し、手の掌を上にし、足をくみ、二つの獅子座に坐り、頭に三珠宝冠をかぶり、鈴のネックレスをかけ、瓔珞をつけ、腰にはヒダのスカートを纏い、スカートには泥のしわを貼り更に線模様が彫られる。菩薩は端正な顔つきを

し、酒脱で俗離れている。これは莫高窟の初期塑像の傑作的な代表作の一つである。
(与願印=仏が衆生の願いを聞きとどけ、成就させることを示す印相。右手・左手を外に向けて下げ、指先を垂れる形をいう。施願印・施与印・満願印ともいう。瓔珞=珠玉を連ねた首飾りや腕輪・仏教を荘厳する飾り具・寺院内の宝華状の荘厳をいう。)

北涼421－439年交脚弥勒菩薩第275窟　　盛唐712－781年・西壁龕内の佛壇・第328窟

西壁龕内の仏壇・第328窟。この組の彩色塑像はもともと９体であったが、今８体残っている。というのは、龕内南側の外端にあった供養菩薩一体が1924年アメリカのフアルナーに盗まれ、ボストン博物館にあるからである。中央の唐塑像の高さ２・１９m。これらの優れた塑像は、敦煌石窟の唐時代塑像における最も傑作的な代表作である。(龕 =仏像を納める厨子)

描かれた題材は・北魏初期の石窟は仏伝物語が多く、北魏晩期の窟は西王母・白虎・朱雀や中国古代神話の世界も出現した。隋唐時代には題材は豊富になり、『阿弥陀経』『維摩経』『華厳教』などの各種経典の内容を絵にした変相図、すなわち説法図には、荘厳された宮殿、唐代の華麗な宮殿をみることができる。唐代後期には不安定な世相を反映して各種の観音菩薩多く見られる。敦煌莫高窟はインド様式を伝承した初期から、元代に至る約１千年の塑像や壁画の芸術を直接見ることができる。それは華麗な荘厳した仏国土であり、極楽浄土をめざしたものであろう。

敦煌石窟の蔵経洞17窟の発見・この１７窟の中にあった数万件の経巻、文書、絹絵が発見されて、一躍世界に有名になり、敦煌石窟物語が始まるのである。時は２０世紀初頭、世界の探検家たちは、ユウラシア大陸の未確認地帯に、英国・仏国・ロシア・日本が凌ぎを削った。英国のスタイン探検隊、仏国のペリオ探検隊は他国に先駆けて仏典宝物を手にいれたのである。

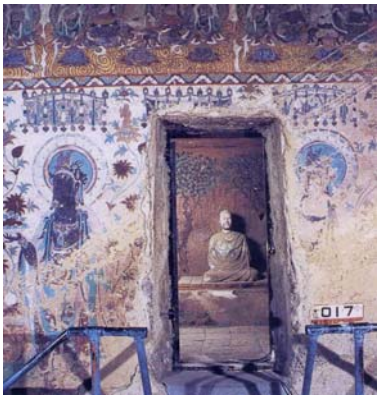
第17窟・北壁・高僧像・洪ベン・ここは有名な蔵経洞で、大中５年(紀元８５１年)に造られ、数万件の経巻、文書、絹絵など保存されていたのを、１９００年に発見された。１７窟の入口は第１６窟歩道の北壁に有り、第１６窟の地面より１m高い処に１７窟はあった。１７窟の洪ベン高僧の塑像は元々その中に置かれてあった。この塑像は高さ９４㎝、趺座を組み、両手を腹の前に置き禅定印(坐禅時の両手を結ぶ)をし、体に袈裟を着け、顔つきが豊満で、鼻柱が高くあごが広く、目が光り、顔から見て、学者のような高僧である。これは敦煌石窟の唯一残された高僧像である。
(ベンという字は、「恐」の下の「心」がない、字下に「言」と書く)

第17窟・北壁・近事女・洪ベンの背壁に絵図が見える。近事女は唐時代以前「優婆夷」(女性信者)

と呼ばれ、家で五戒修行を受け、高僧に仕えた女性である。絵中の近侍女画像は洪ベン高僧塑像の左側の壁に描かれ、男の扮装をし、顔がふっくら、眉や目が綺麗で、挙動が端正で右手に杖を握り左手に長いショール(女性の用肩掛け棒か)を上げ、枝葉の茂った菩提樹の下に立つ。この絵の運筆が細く力強く、顔つきが生き生きとしね唐時期の傑作した人物画である。

(五戒=戒・習慣、不殺生・不偸盗・不邪婬・不妄語・不飲酒)

謎の第17窟・は高僧洪ベンの死後、その遺骨を納めるために造営されたことが、敦煌文書の中に「蔵経洞」と記されている。この窟には大量の古文書を隠すために、坐像は第３６２窟に移されていた。王道士が莫高窟で貴重な古文書を発見したという噂を聞きつけ、タクラマカン砂漠を移動中の英国人スタインが大量に古文書類を買い上げた。二番手の仏国のペリオは中国語力が堪能であったので、その諸経典類の宝物価値を見抜き大量の仏典古文書を持ち出すことに成功した。



１７窟・近事女(『敦煌石窟の珍品』)**・第１７窟・高僧像・洪ベン**　　**第１７窟入口前(同)**

敦煌莫高窟小史・20世紀初め欧米・ロシア、そして日本も参加

敦煌莫高窟が世界に広まったのは、石窟よりもそこに蔵する仏典の古文書類の発見であった。最初の発見者は莫高窟に住み着いていた王道士であった。その後、英国のスタイン、フランスのペリオ、日本の大谷探検隊の橘瑞超、ロシアのオルデンブルクなどが続々と敦煌に来て敦煌文書類を持ち去った。その結果として敦煌文書類は世界中に分散し、敦煌文書は漢語以外にウイグル語、コータン語、ソグド語、トカラ語、サンスクリット語、ヘブライ語など数多くの胡語の文書が含まれていた。これらが歴史、言語、宗教、思想、文学など多方面に貴重な世界的な研究資料となっている訳である。

１７窟の蔵古文書類の謎は、小説『敦煌』井上靖著での推察は、その①説は、１１世紀の前半に敦煌東方に興った西夏に攻撃され、その難を逃れるために文書を窟の中に隠し、土封蔵として装ったものが、それが時を得て忘れられ、２０世紀初頭に突然に発見された説となる。②説は、諸寺院で不用になった教巻などをしまって置く倉庫代わりの蔵の説。③説は蔵教洞の主な仏典・供養具などは、元々、三界寺という敦煌の特定の寺院に属し、ここが寺の蔵教庫であった説が有力で、現在のところ最も説得力があるのは最後の③説と考えられる。

筆者も室内を見て８畳位の部屋で、高さ３m位、この室に入るには、１m位の段差があって、倉庫の使用には不向きと思える。確かに、①説の戦乱急を要する時に、隠そうとした人間の行動心理には当てはまる室内ともいえる。③説の一般的に使用しない仏典や供養具などを、蔵として使用していた部屋が、歴史を経て忘れ去さられた、という説が妥当かと思われる。

17 窟蔵書を調べるペリオ　　王圓籙道士　　ペリオ隊の撮影の敦煌石窟(『中国之韵』より)

古文書を調べるポール・ペリオは中国語が堪能であった彼は、王道士から 5000 点の古文書を手に入れた。ペリオの古文書調べはスタイン隊が撮影したもの。(古写真『敦煌遺書』より)

ポール・ペリオ・(フランス東洋学者・探検家 1878－1945)中央アジア探検家。1906 年、軍医と写真家を連れて、中国領トルキスタンは入る。探検隊一行はウルムチ滞在中に敦煌出土の法華経の古写真を見て、探検家の直感であろうか、敦煌へ急行する。前年に英国探検家オーレル・スタインが敦煌莫高窟から１万点の仏典古文書を持ち出されていたが、残された古文書を、莫高窟を守っていた王道士と交渉して蔵経洞に入ることを許された。３週間調査と、流暢な中国語で経典類の買収交渉に成功した。９０ポンド(５００両)で買い入れた中に、新羅僧・慧超(704－787・印度へ密教学求法者)の『住五天竺国伝』(五天竺=中インド)が含まれていた。

鎖国のチベットへ大蔵経典を求めて入西蔵した明治の日本僧たち

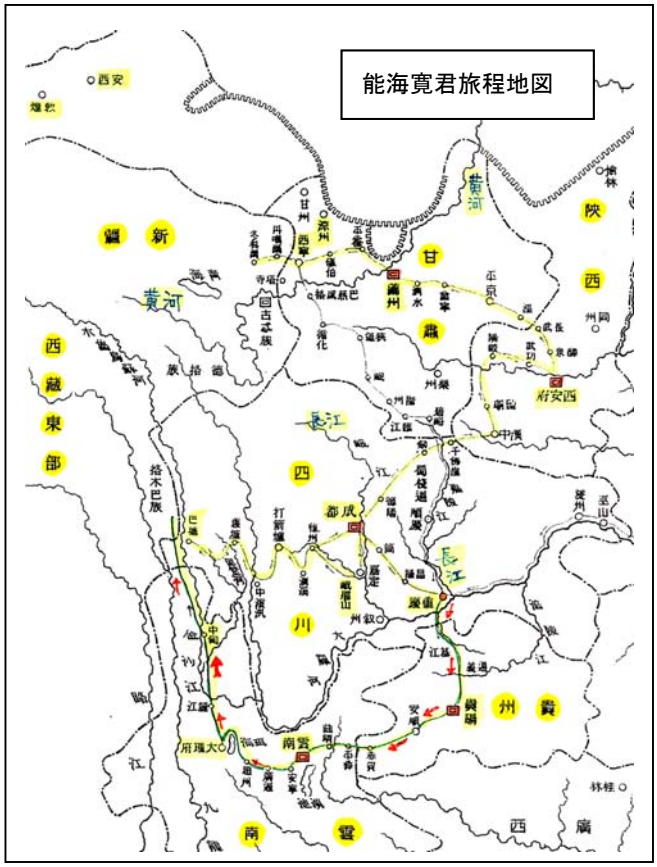
能海寛・(1868－1903？島根県浜田市金城長田の天頂山浄蓮寺に生まれる)浄蓮寺は真宗大谷派に属す。大蔵教の経典を求め、英訳経典を世に出す目的で、当時鎖国であったチベットへ仏教巡礼探検を目指した。河口慧海より１年余り早くチベットへ入国する。明治３２年(1899)大谷大学教授・寺本婉雅とともに、四川省のパタンからチベットに入るが身の危険のため断念する。翌年、新疆からチベットに入るが旅費を盗難のため断念する。

明治３４年、雲南省の大理府から「今からチベットに入る」との手紙を発信した後に行方不明となる。能海もチベット大蔵教の経典を求めて入ったのである。最後の音信は明治３４年４月１８日付け南條文雄氏宛ての書簡を最後に消息を絶つ経緯となる。

(能海寛資料は『求道の師・能海寛』隅田正三著より・「能海寛研究会」〒697－0211・島根県浜田市金城町波佐イ 394・波佐文化協会内・筆者も会員です)

能海寛師顕彰碑の碑文・《法名法流・石峰と号す。明治元年島根県浜田市金城町長田に生まれる。１２歳で得度し、慶応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の練磨をなす。郷里にあっては地方史を編纂して和歌を詠み、益田市沖の高島にて寺子屋を開設する。哲学家、探検家、宗教家として釈迦直伝の大蔵経の経典を求め、当時鎖国中のチベット国へ、チベット求道のため身を挺し、探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の経訓を残す。その苦難の３４年の生涯に般若心経西蔵文直訳一巻などを遺著として永遠に伝う。S57・6・6・建立》とある。

能海寛君旅程地図・『能海寛遺稿』大正６年より。この地図は、編者が故能海君の日誌と通信文中記載の旅程とにより作ったものである。初めは長江を上り、重慶より山峡ケ険を遡り成都より娥眉山に登り、入蔵の第一関門、打箭爐（ダルツェンド）を通過し第三関門、巴塘（はとう）に進みしも、ここにて進蔵を拒絶せられ引返して成都より西安府に入り、蘭州を経て青海に出でしも、茫々無人の高野は、単独にて進蔵すること能（あたあ）ばず、更に重慶に引返し、路を転じて貴州雲南に入り、遂に大理府以西の阿甸子の蛮地に於いて生死不明となったのである。（寺本婉雅記）



明治３４年２月２１日、重慶出発。４月１６日、雲南省の大理着。この地に３日滞在し、奥地の麗江（リチャン）への出発を前に有名な「身命を惜しまず」の一文を書いた。

「不惜身命、今や極めて僅少（きんしょう）なる金力を以て深く内地に入らんとす、歩一歩（ほいっぽ）艱難を加え、前途気遣はしき次第なれど、千難万障は無論、無二の生命をも既に仏陀に托し、此に雲南を西北に去る覚悟なり、重慶より連れて来りし雇人を当地より重慶へ返すに当り内地へ書状を託す、今後は多分通信六ケ敷かるべし、明日出発、麗江に向はんとす、時に明治３４年４月１８日なり」これが、能海寛という旅人の絶筆となった。以後、能海寛の姿を見た人はいない。

打箭爐（ダルツェンド）・巴塘（はとう）は現在の四川省センゼ・チベット族自治州・東部となる。（『能海寛遺稿』大正６年・能海寛追憶会・代表寺本婉・復刻版・五月書房より）

能海寛

「能海寛師顕彰碑」島根県浜田市・浄蓮寺内

昭和５年の河口慧海

河口慧海（えかい）・(1866－1945)泉州の堺に生まれる。仏教学者・黄檗宗（おうばくしゅう）の僧。明治２３年、２５歳の時、一切経蔵を読み始め、今ある経文はサンスクリットの原書からの漢訳したものであることに疑問を抱いた。その漢訳は訳者によって解釈がかわる。その信頼できる大乗経の仏典はチベットにあり、それを研究するには鎖国のチベットに入らなければならない。そして３２歳、当時鎖国のチベットへ行くのは「馬鹿だ、気違いだ」といわれた。チベット大蔵教を求めて明治３０年(1897)

インドに渡り、シッキム州・ダージリンからネパールに入る。日本人として初めてチベットへ潜入し、２年間滞在した。第１回入蔵を記した『西蔵旅行記』は当時のチベット風物を貴重に伝えている。英訳版は海外でも評価が高い。帰国後はチベット訳仏典、仏教研究、大正大学でチベット語を講義した。（『チベット旅行記』講談社学術文庫・『中央アジア探検史』白水社より）

チベット大蔵教・8 世紀以後に、主にサンスクリット語仏典をチベット語に訳出して編纂された仏教経典の集成したもの。インド本国において紛失、散逸してしまった後期仏教の経典翻訳を多く含み、サンスクリット語からチベット語に置き換えた翻訳しているため、母国インドに原本が残っていない経典は、チベット訳から戻し翻訳すことによって、原本を推定することができるのである。収められている教典は最も多く、とくに密教教典は中国、日本に伝えられていない経典もある。その経典を求めて、日本の能海寛、河口慧海らが鎖国のチベット国に入り、チベット大蔵経の原本を求めることに命をかけたのである。それ故に世界の仏教学研究者からはチベット大蔵教は研究経典として求められていたのである。

チベット仏教・7 世紀前半に後期密教の仏教はインドから直接チベットへ伝えられ、ティソン・デツェン王の７７９年、サムイェー大僧院の本堂完成の折、インドのナーランダー大僧院（那爛陀寺）の長老シャータラクシタによって、6 人のチベット僧に「説一切有部」の具足戒が授けられ僧伽（教団）が発足した。以来、訳経経典には「現象世界を時間と空間とに分け、それぞれを実体視する無明（煩悩の根源）によって執着し、苦しむものに「無自性」（空）を説き、利他行（一切衆生の救済）を勧める中観（真理を観察）の教えが普及した。第７章でチベット仏教を述べる。

大谷探検隊・１９世紀末から２０世紀初頭にかけて、ヘディン(スウェーデン)、スタイン(英)、ペリオ(仏)、ル・コック(独)、ロシアも含む探検隊が中央アジアへ「内陸探検隊の時代」となっていた。日露戦争の８年前に、西本願寺は２０歳過ぎの青年をロシアに留学(ロシア国の偵察も含まれていたと推察)をさせていた。この当時、アフガニスタンに駐留していた英国軍が、ロシア軍の南下を警戒し、英国はインドからアフガニスタンに入るロシア人等を厳しく監視していた。

明治初年の廃仏毀釈政策により、西本願寺の光瑞の父明如(宗祖親鸞より２１代目)は、岩倉使節団に同行、ヨーロッパに学び、近代国家における政治と宗教のあり方を模索していた。西洋学を学んだ大谷光瑞らは、西洋列強諸国はアジア植民地化して行く過程をよく確認していた。列強国はその先達にキリスト教の布教に始まり、その布教国に軍事拠点を置き、やがて本隊が駐留して植民地化して行く過程を学び、アジアはキリスト教の列強国に呑み込まれてしまう危機感を身近に知ることになる。アジアの仏教を護ることは、日本を護ることに繋がり、日本国の大陸進出思想と相いまって行動と重なる。ロシアはユーラシア大陸の東西を結ぶベリア横断鉄道の建設が始まる。(1850 年―1904)ロシアの意図はアフガニスタンに駐留していた英国を追い出し南下の目標であったが、英国軍事力の強烈な抵抗にあい、ロシアはその矛先を極東に向けた。そのロシアの行動が、やがて日本との日露戦争(1904)に繋がる経緯となる。

大谷光瑞２７歳

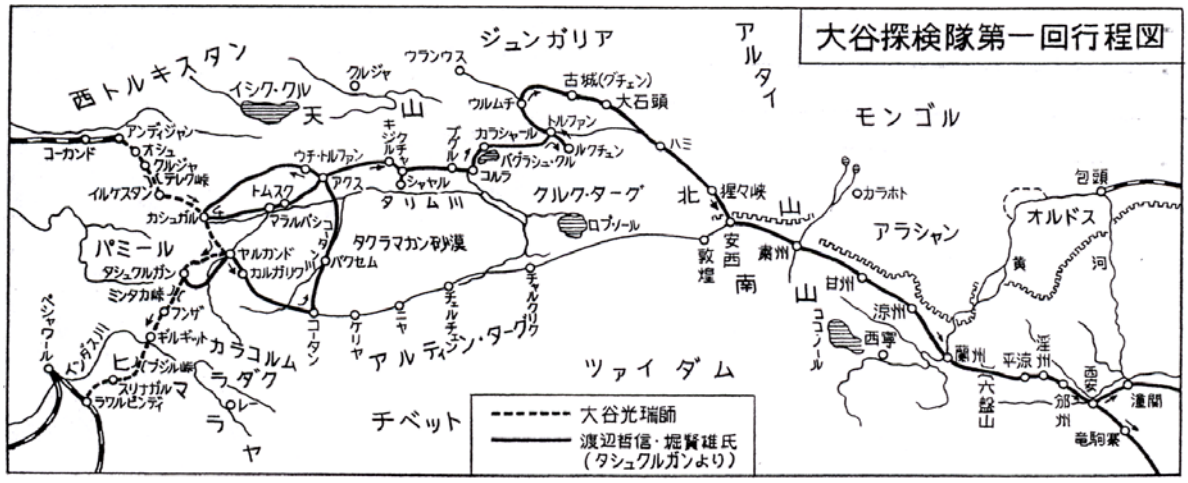
このような状況下に大谷瑞光はロンドンに留学中であったが、キリスト教列強国に仏教遺跡を先に調査されることは許すことが出来なかった訳である。1902 年８月帰国の途中、ロシアを経由して新疆に入り仏蹟調査に入る。一行はカシュガルに於いて、送電柱の間隔を測量している事を、現地人から英国

駐留軍に報告されている経緯となる。日本隊の測量の目的を英国は知りたがっていた。

当時の西本願寺は相当な財力を有し、この財力をもって１９１４年まで探検隊を第３次探検の派遣となる。1915 年、探検隊が収集した古文化財が齎され、上下二巻で『西域考古図譜』の図版を刊行する。その序文に、「西域は是れ仏教興隆し、三宝流通せる故地なり。特に新疆の地たるや、印度と支那の通路に当たり、両地の文化の接触せし処にして、又、実に仏教東漸の要衝たり。然れども、此地に於ける教法の衰亡は、既に久しき以前にして、往昔の状況、今や得て知る可からず。予、夙に此の地を始めとして、所謂中央亜細亜に対する学術的踏査の忽諸(消滅)に付すべからざることを知ると雖も、其の実行の機会に至りては、之を獲ること能はざりしもの久し、明治３５年８月、予、英国倫敦に在り・・・」（後略)。

(参考文献『大谷探検隊とその時代』白須淨眞著・『仏の来た道』大谷探検隊 100 周年記念上山大峻著より)

大谷光瑞・(1876－1948)浄土真宗本願寺派２２世法主・京都生まれ・１８９９年留学先ロンドンから帰国途上、仏跡調査探検を計画した。明治３５年(1902)光瑞は４人と共に、モスクワ経由で新疆にはいる。これが第１次探検隊。明治４１年(1908)、第２次探検隊は橘瑞超、野村栄三郎を北京・新疆・インドに入る。明治４３年(1910)、第３次は橘瑞超、吉川小一郎を新疆全域に調査させる。大谷光瑞法主は多田等観(1890－1967)・青木文教(1886－1956)をチベットへ送りこんでいる。1899 年、ローマで第 12 回国際東洋学会においてヘルンレ、ラドルフによって中央アジアの古文書が発表された。ついで 1902 年、ハンブルクでの第 13 回国際東洋学会で「中央アジア及び極東の歴史学的、考古学的、言語学的、土俗学的研究の国際学会」が成立した。かかる世界の学会の動向に、この地方に関心をもっていた大谷光瑞が見逃すわけがない。かくて明治３５年、３年間ロンドン滞在を打ち切り、大谷は４名の随員ともにフランスからロシアのペテルブルグに入り、ピョートル大帝の銅像と、大探検家ブルジェワルスキーの銅像を見て感激している。



『日本人の冒険と探検』長沢和俊著・白水社より

東・西千仏洞・安西県

東千仏洞・安西県、莫高窟から東へ１４８ｋｍ、安西楡林窟から東南へ７５ｋｍの地点。長子山北麓の峡谷両岸に開鑿されている。草創は西夏時代、西夏３、元３、清２となる。東側９窟、西側に１４窟、壁面や塑像があり、西夏５窟、元１窟、清３窟となる。観光客は少なく、洞窟に入ると、中国美術模写(修復員)の男女若者６人位が、楽しげに修復絵図に専念していた。

余談話だが、ここにいた美術員は一般中国人と異なり、大らかで感性豊な美術員で、日本でい

えばマンガ画家・芸術家のような人で、中国人では珍しく商人臭くない人たちと見受けた。この窟内は撮影禁止のため智慧を使えば何とかなると考えた。筆者は石材輸入で中国各地へ訪れた関係で、中国人の気風を色々知っていたので、「お金を出しますので、写真を撮らせてください」とガイドに交渉させたのですが、不可でした。この美術員には大変失礼な言い方であるが、このような立派な中国人がいたことに内心驚いた。まずＯＫの答えをもらえると期待していたのですが、ゴメンナサイでした。司馬遼太郎は中国人について「日本人はまじめ」「中国人は商人」という名言を述べられてことを知っているからだ。やはり中国大陸は広い、なぜかすがすがしい感動を受けてしまった。左手前下に見える黒い車が、筆者の案内車となる。

東千仏洞・洞内で６人画家が壁画の補修していた

西千仏洞・何処も窟内は撮影禁止

２窟・南壁・菩提樹観音

２窟・東壁北側・三面八臂観音

２窟・東壁南側・供養菩薩

（写真は『敦煌石窟の珍品』敦煌市・『安西楡林窟』敦煌研究院編より）

菩提樹観音・この菩薩は片手を上に挙げ、片手を下に垂らし、淨瓶を逆さに握り、餓鬼に甘露を施す。体を曲げ、優美な踊り姿になっている。西夏期 1036－1227。

三面八臂観音・敦煌石窟の一つである東千仏洞第２窟の東壁北側の西夏時期に描かれた三面八本腕観音像であり、チベット仏教の密宗の内容である。西夏時代の珍しい密宗絵画である。

供養菩薩・西夏時期に描かれた供養菩薩である。この菩薩の顔つき、座り方は皆、莫高窟第４６５窟南面の元時代に描かれた供養菩薩と似ている。指折りの密教絵画の一つである。

西千仏洞・西千仏洞は敦煌市の西南から３５ｋｍの党河北側の崖にある。西千仏洞の開鑿の記録はないが、現地の推察よれば、西行修業する僧が陽関へ向かう時、西の山を見ると涅槃仏の形をした山並を見て造営が始まったのではないか。（『敦煌三大石窟』東山健吾著・講談社選書メチエより）

洞窟は２２窟、晩唐時期に造られ、五代、宋、ウイグル時期に再建された。

西千仏洞・第19窟・この洞窟は五代に造営された丸いアーチ型で大変珍しい型の仏龕である。正面に釈迦坐像と脇侍となっている。

窟頂南披・第16窟・この説法図はウイグル期のもので、人物が線描き流暢で色彩が清新で、ウイグル期の秀作である。勢唐期 712－781。

西千仏洞・第１９窟・仏龕・仏坐像北壁・五代期

同第１６窟・窟頂南披・説法図・回鶻（ウイグル）

榆林窟（ゆりんくつ）・窟内撮影禁止『安西榆林窟』敦煌研究院編より・名の由来は榆（にれ）の樹による

西安県西南７５ｋｍ、踏実河（とうじつかわ）渓谷に位置する。ゴビの砂漠を深く削って渓谷をつくる。ここも造営に記録はない。上下二重構造で洞窟は全部で４２窟。唐代から元代までまでの塑像１０００体余が残っている。石窟の形式から判断して唐代４窟・五代８窟・宋代１３窟・ウイグル期１窟・西夏４窟・元代３窟・清代９窟となる。代表的なものは２５窟、３窟、２９窟で「西方浄土変」「観無量寿経（かんむりょうじゅきょう）仏変」に描かれる浄土の世界は唐代芸術の傑作である。

榆林窟外景

第 15 窟・前室頂南端・伎楽天・唐

第３窟・西壁北側文殊変中・西夏

第２９窟・東壁南側・金剛・西夏

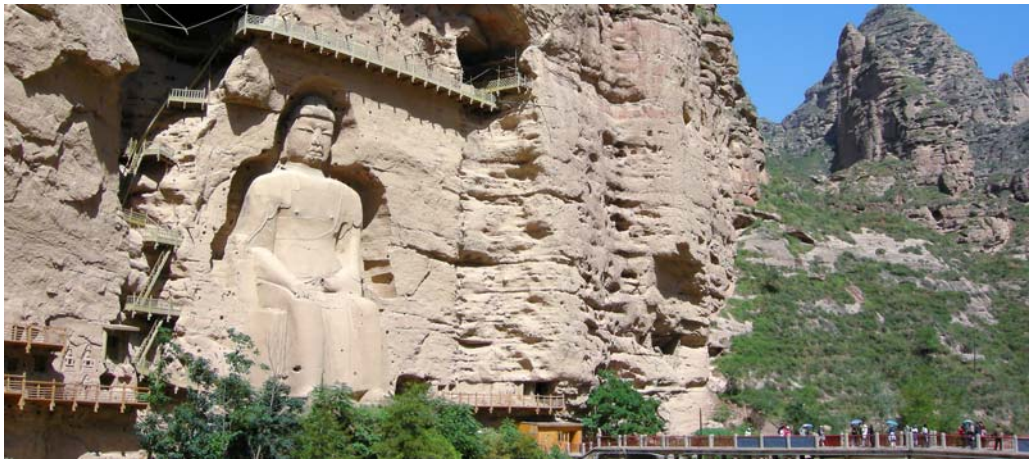
第２５窟・南壁・大勢至菩薩・唐

蘭州・炳霊寺（れいへいじ）石窟

水に浮かぶ大仏は蘭州から南西に１００ｋｍ劉家峡（りゅうかきょう）ダム（黄河と大夏河の合流）から西へ流５０キロモーターボートで５０分。炳霊（ビンリン）とは千仏、十万仏を意味するチベット語で、炳霊寺は龍興寺、霊岩寺とも呼ばれている。黄河北岸の切り立った窟に２キロ、１８３の石窟がある。西秦（385－431 年）から清（1636－1912 年）にかけて刻まれている。炳霊寺大仏高さ２７ｍ。

現在、保存されている西秦、北魏、北周、隋、唐の各時代に掘られた窟龕（くつがん）は１８４個ある。仏像６７９体、泥塑像８２体、壁画が約９００㎡、仏像の大きいものは２７ｍ、小さい仏像は２０ｃｍとなる。この中に中国最古の仏像が、西秦の建弘元年（420）の年号の入った題記がある。

169窟壁画（大仏の真裏）・ダムの上より４０ｍの高い崖壁にあり、中国では最も早い洞窟の一つである。窟の高さ１６ｍ、幅２７ｍ、奥行き１５ｍ、２４個の仏壇が掘られている。その中では、六つの仏壇は建弘元年（420）の墨書での前書きがあり、中国の石窟造営では、最初の造像前書文と推定されている。１６９窟は主に無量壽経・法華経・維摩詰経・華厳経などの仏経造像と壁書から見れば、当時、大乗仏教が盛んであることが判る。造像６８尊、壁画１５０㎡、これらは「西方三聖」「十方（じっぽう）仏」「阿育王（アショーカおう）因縁物語」など西域の影響をうけている。１６９窟の北側に残る仏説法図、無量寿仏、弥勒菩薩、飛天などの壁画があり、この窟は法顕（ほっけん）がインドへ行く途中、夏安居（げあんご）のために３ケ月滞在した窟と伝わり法顕供養という題字も残る。この地はシルクロードへの黄河の渡河拠点であったが、時代は海路に変わり近年まで忘れられた石窟でもあった。



炳霊寺大仏・２７ｍ・１６９窟は正面の左上階段を登る

169 窟・仏説法話・西秦代

３１窟一仏二弟子二菩薩

蘭州にある玄奘三蔵像・渡河点

三蔵法師像・『西遊記』でお馴染の三蔵法師蔵で、像の後方は黄河、長安から７２０ｋｍきた所、法師はここ白塔山前の黄河を渡って蘭州の町に入った。羊の皮で浮き袋の筏で渡る。写真の法師像の奥が黄河となり、右山頂に見える塔は、チベットよりチンギス・ハーンの元へ使者僧がこの地で病死した。その供養塔と伝わる。（169 窟、31 窟『**甘粛永靖**炳霊寺石窟』重慶出版社より）

6－3・日本文化の源流古刹を訪ねる・長安（現西安）

香積寺・西安市の南１７ｋｍ、長安県神禾原に千年の古刹、香積寺がある。この寺が中国浄土教の祖の一つである。南は滈河、北に樊川に接し、滈河と潏河の合流点にある。この付近は終南山の北麓にあたり風向明媚な所である。香積寺の風光をを詠んだ王維の詩、「香積寺を過う」に、

知らず香積寺、数里雲峰に入る、古木人経無し、深山何処の鐘ぞ
泉声奇石に咽び、日色青松に冷かなり、薄暮空潭の曲、安禅毒竜をせいす

西安市・浄土宗香積寺山門

訳は「話に聞く香積寺は、何処にあるとも知らず、雲のかかる峰々に、数里も分け入ったが、人の通う小道は絶え、年月を経た古木がうっそうとしている。山の奥深く、どこかで鐘がなっている。それを目当てに進んで行けば、渓流の水音が聞こえ、日の光は冷ややかである。薄暮の暗がりの中に、ひっそりと座禅をしている僧がいた。」（『仏教の来た道』鎌田茂男著・講談社学術文庫）

俗にいう日本の「講釈」はこの香積寺から講釈はここから出ているという。

浄土宗香積寺大雄殿

大雄殿前

善導の供養塔１１層

弥勒菩薩（布袋）

香積寺は唐の高宗の永隆２年（681）善導大師（613－681）の供養塔が建てられたことから始まる。現在は十一層、高さ 33 米。奈良の来迎寺に善導大師の坐像が、また京都の知恩院にも善導大師の画像がある。（慧遠334－416・中国浄土教の祖になっている）

善導（613－681）は、姓は朱氏、中国山東省のうまれ、幼少より出家して経典を唱えた。二十歳で道綽に師事した。善導はある時、「念仏すれば往生することができますか」と尋ねた。道綽は「蓮華の花を持って七日間行道して、その蓮花がしぼまなければ往生することが出来るでしょう」と答えた。七日たって蓮の花はしぼまず、善導は力を経て念仏三昧の悟りを得たという。善導の徳を仰ぎ、信者の中に「いま仏名を念じています。必ず浄土に往生できますか」と問うと、善導は確信をもって「念仏すれば必ず浄土に生まれことができるでしょう」と答えた。その人は善導を礼拝し、口に「南無阿弥陀仏」を唱えながら、柳の木に登り、西に向かって合掌し、身を地面に投じて死んだという。（『続高僧伝』）。開祖曇鸞・２祖道綽・３祖善導となる。

善導の師道綽は、「阿弥陀仏は西方に浄土がある。浄土とは命の故郷にほかならない。身も心も

放ち身を仏の命に投げ入れるのが浄土教の信仰である」、と。師の教えからどうしたら救われるか。「仏の本願に望めば、意は衆生を専ら阿弥陀仏の名を称せしむにあり」と。善導の教えは称名念仏で、浄土教の称名念仏こそが、救われる道であると示したのは善導に始まる。

東岸(現世・娑婆)とは苦難に満ちた世界であり、西岸は極楽浄土である。水の河は貪愛であり、火の河は瞋りと憎しみである。阿弥陀仏の勧めによって念仏する者のみ、極楽浄土に入ることが出来る。善導の二河白道のたとええは絵に描かれ、日本の浄土信仰をすすめる上で大きな役割はたした。鎌倉時代の法然は、「偏えに善導一師に依る」、善導の教えによって日本の浄土宗を開いたのである。善導の浄土教は日本の法然、親鸞に大きな影響を与えた。

二河白道・極楽浄土に往生願う人の入信から往生に至る道筋は、「二河」は南の火の川と、北の水の川。火の川は怒り、水の川は物欲の世界、その間に一筋の白い道が通っている。両側から水火が迫ってくるが、一心に白道を進むと浄土にたどり着く。煩悩にまみれた人でも、念仏一筋に努めれば、悟りの彼岸(極楽浄土)に至ることができる。

草堂寺・鳩摩羅什が翻訳に従事した寺・(西安市の南 50 キロ)

草堂寺(ツァオタンスー)ともいう。元々は後秦時代５世紀初め逍遙園の中にあった寺院であったが、寺院はいつ頃か草堂寺と呼ばれるようになった。現存する建物は明、清代に再建されたもので、クチャ出身の名僧鳩摩羅什がインドから持ち帰ったサンスクリット語の経典をこの寺で翻訳をした。97 部 427 巻、1347 巻を翻訳した羅什は語学の天才であった。４１３年、７０歳で入寂。羅什の翻訳経典には『法華経』『阿弥陀教』『維摩経』など大乗仏教の経典がある。羅什以前にも多くの経論が翻訳されていたが、意味が明確であった。羅什の翻訳の『法華経』によって天台宗が成立、『阿弥陀教』によって浄土教が、『中論』によって三論宗が夫々成立したのである。

鳩摩羅什について・亀茲国の羅什の名声は西域諸国に響いていた。前秦の符堅は羅什の名声を耳にして、将軍呂光(焉耆国等を 382 年河西地方制圧)を亀茲国を攻めたて、亀茲王を殺害し、羅什は呂光の捕虜となり、涼州に１６年間留まる。４０１年涼州を平定した姚興(後秦の第２代皇帝)に迎えられて長安に入る。姚興は言う「大師の聡明なること天下に二人といません。法種を絶やすことは出来ない」と言って美女 10 人をあてがわれた。羅什は僧房に住まず官舎で美女と共に暮らし翻訳に専念した。

羅什は講説に際し「臭泥の中に蓮華を生ずるが如し。ただ蓮華を採りて臭泥を取るなかれ」と自らの生活を語り聞かせた。結果として羅什の性格が幸いし、膨大な教典の翻訳が出来たのである。語学の天才・鳩摩羅什は教典の翻訳者は、東晋の 344－413 年亀茲国（新疆省）に生まれた。父はインド人鳩摩羅炎、母は亀茲国王の妹、羅什は７歳で出家、９歳で出家した母とパミール高原を越えて、西北インド罽賓国(カシュミール)へ行き、仏教と医学を学ぶ。４０１年長安に来た羅什は、千人の沙門に講義を粛然と行った。

羅什が翻訳した教典は『法華経』『阿弥陀教』『維摩教』などや、大乗仏教の『中論』など空の教えの教典、『大智度論』百巻などがある。羅什が最も力を注いだのは般若系の大乗経典と中観の翻訳であった。草堂寺には羅什の墓と墓誌がある。中観派とはインド大乗仏教哲学において、唯識派と並ぶ２大派である。竜樹(150－250)は小乗仏教から大乗仏教に転じ、空の思想を説いた。中国・日本の諸宗はすべて竜樹の思想を継承している。

草堂寺の門

草堂寺の大雄宝殿

鳩摩羅什の廟・八宝玉舎利殿

鳩摩羅什の墓塔

羅什舎利塔（廟の中）

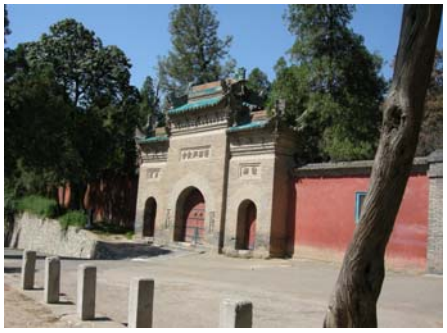
墓誌に羅什の系図と名が

草堂寺の釈迦像

興教寺・玄奘三蔵の遺骨が埋葬されている・（西安市南２０キロ）

秦嶺山脈東南のに終南山の峰々は西安の南２０ｋｍ、風光明媚な所。北麓には興教寺や華厳寺跡、香積寺がある。興教寺には五層の玄奘供養塔があり、この塔は玄奘の遺骨が６６９年にこの地に改葬された時に建立。境内に大雄宝殿、蔵教院、慈恩塔院が、唐代の３つの舎利塔がある。

終南山の山並・西安の南方・2000 から 2900ｍが続く



興教寺の山門

①玄奘三蔵舎利塔・23 米（遺骨が埋葬）

②弟子の基師塔

③玄奘の弟子の側師塔

①玄奘三蔵・漢族　②基師塔は高窮基・祖先胡族　③側師塔は円測・朝鮮族、基が法相宗開創

華厳寺跡・西安市の南へ１５ｋｍの所。この終南山の山麓に広がる高原の丘に、華厳宗の祖師の墓塔がある。華厳宗開祖の杜順と第４祖の澄観の塔がある。興教寺の近くの赤茶けた丘陵に、華厳宗の大伽藍があった所という。昭和１０年頃日本人仏教学者結城令聞博士がここに訪れた時は杜順と澄観の塔の間には「唐華厳寺」の額を揚げた堂宇あって、和尚が一人住んでいた。と記述がある。筆者は訪ねたがガイドも判らず、雑草の荒地で、行き着くことはできなかった。後日色々捜してみたら『禅の世界』奈良康明・沖本克己著・東京書籍にその写真はあった。２つの墓塔のうち、奥が杜順の塔、手前が澄観の塔。華厳宗改組杜順(557－640)この地で８４歳にして入寂したと伝わる。

華厳宗開祖杜順と澄観の塔

華厳宗・唐代の始め杜順によって開かれた。第２祖智儼(602－668)よって学問的に体系化され、華厳宗の教義が生まれた。多くの弟子に法蔵や韓国の華厳の開祖となった新羅僧義湘らが知られている。(『仏教の来た道』鎌田茂雄著・講談社学術文庫より)

青竜寺址・真言宗開祖空海が留学した寺

西安市の南東・鉄炉廟村に青竜寺の遺跡がある。恵果・法潤・義操・義明・法全・義真・義舟等の密教の碩匠が輩出した。青竜寺は唐時代日本の弘法大師空海が恵果和尚から密教を伝授された寺である。寺の創建は隋代 (582 年)、唐の景雲２年(７１１)青竜寺と改称され、北宋の８４５年廃寺となっている。空海が留学頃の青竜寺は北には興慶宮(唐代の宮殿)や大明宮(長安城の北側城壁に設置された宮殿)が見え、南には彼方に終南山の山並が見えていた。近年の発掘は 1956 年、1973 年、1980 年の３回に渡り行われ、遺跡を確認した。現在日本の真言宗や四国 4 県の協力によって空海記念堂や記念碑など建立され、恵果・空海関係の資料が展示されている。

「青竜寺の案内」解説から紹介。青竜寺は長安城内の新昌坊に位置し、仏教密宗の有名な寺院であった。この寺院が隋の開皇２年(582)に建立されたもので、唐の竜塑２年(662)観音寺として再建されたが、唐の景雲２年(771)に青竜寺と改称された。会昌５年(845)全国的に廃仏事件が起こり、青竜寺も廃棄され皇家の内園となったが、元祐元年(1086)以後、廃墟となった。

青竜寺は高僧恵果が密教の重要な道場の一つとして、仏法を求める内外の僧が訪れた。とくに日本国の僧侶、空海・円行・円仁・恵運・円珍・宗睿たちが前後にして、青竜寺で仏法を学んだ。とりわけ密教阿闍梨嗣を受け継いだ空海は業績抜群であった。８０６年、帰国して日本で真言宗を開祖となり大師と呼ばれた。(阿闍梨=密教で伝法灌頂、阿闍梨の位を授ける儀式)

又、円仁の『入唐求法巡礼行記』会昌元年(841)５月３日の条に、恵果の弟子の法潤より受法を受けその記述に、《この日、青竜寺に於いて供養を設ける。便ち勅置本命灌頂道場(天子の本命星を指す)、北斗七星中の本命星を祈念して灌頂(阿闍梨より法を受ける儀式)を受けて花を施す。始めて胎蔵毘盧遮那経大法を兼ねて蘇悉地大法(胎蔵大法を受けた後に再行する秘法)を受けたとある。

密教の教えはインドで生まれ、唐代に８世紀インドから伝来した。大日如来を本尊とし、太陽の光をモデルとし、偉大なる輝ける光明が万物を照らすことを意味する。その根本経典は

『大日経』と『金剛頂教』とがある。『金剛頂教』は不空三蔵訳の『金剛頂一切如来真実摂大乗現証三昧大教王教』が有名である。この経典は７世紀に出現し、８世紀には今日の形に整えられたと云われている。略して『金剛頂教』、悟りの境地としての金剛界曼荼羅を説いたものである。『金剛頂教』が金剛界曼荼羅を説いたのに対して、『大日経』は胎蔵界曼荼羅を説いた。この二つの経典によって密教が成立する。

陀羅尼・総持・能持と漢訳する。経典を記憶する力、善法を保持する力を原義とし、呪文の意として用いられた。日本へ伝来以来ダラニは光明真言法（正式名称は不空大灌頂光真言という密教の真言）という儀式が成立し、罪を滅ぼし、病を癒し、死去して後の冥福を祈る「ダラニ」は「オン・アボキャ・ベイロシャノウ・マカボダラ・マニ・ハンドマ・ジンバラ・ハラハリタヤ・ウン・ソワカ（蘇婆訶）」と呪文する。仏教へ取り入れられた「オーム」は（聖音・呪文）祈祷語で、密教の真言は冒頭の「オン」とし、末尾のスヴァーハーが「ソワカ」となる。「空しからず、一切を遍く照らしたもう大いなる印を有するものよ、宝と、蓮華と、光明とを転らしたまえ、スヴァーハー」と唱えられ神呪が入っていてこれらは雑密と呼ばれた。（『大乗仏典』中村元編・筑摩書房）

『金剛頂教』『大日教』は翻訳されることによって純密とよんでいる。この唐代に伝えられた純密が日本の空海に受け継がれて真言宗となった。中国に初めて密教を伝えたのは帛戸梨蜜多羅で中央アジア人、４世紀に中国に渡来し『大灌頂神呪経』を訳し密教の呪法を中国につたえた。この後、阿地瞿多、善無畏（インド系）と続き善無畏の弟子、義林の孫弟子の順暁が日本の伝教大師最澄に密教を教えた。最澄は順暁から受けた密教を日本に伝え、日本の天台密教は天台の密教を「台密」と呼び、又真言宗で行われた密教は「東密」と呼ぶ。

善無畏に続いて金剛智（671－741・南インドの人）が渡来して金剛智は長安の大薦福寺（西安にある仏教寺院）に灌頂道場を開き、密教僧を育成した。その弟子のなかに一行と不空がいた。善無畏と金剛智の功績を受け継いだのが、中国密教を大成させたのが不空三蔵（705－774）である。不空三蔵は唐朝三代の帝王、玄宗（唐第６代皇帝）、粛宗（第７代皇帝）、代宗第１１代皇帝）の帰依を受け、王のための灌頂を授けた。帝王は不空に開府儀同三司（準大臣）・粛国公という官名を賜り、食邑三千戸を下賜となる。不空の弟子、含光、慧超、恵果、慧郎、元皎、覚超の６人がいて、その中の恵果に空海（774－852・真言宗の開祖・弘法大師）が師事した経緯となる。

空海は長安へは留学は密教を学ぶために恵果を訪ねた。恵果（？―805）は既に空海の留学に来ることを判っていたという。空海も夢枕に恵果に会ったことを伝え、恵果は余命幾何もない時期に、最も遅れてやってきた僧空海に、３ヶ月間の短期間に密教秘法の全てを授けてのである。

授法を伝えた恵果は、師の不空三蔵から授かった宝物や供養具などを空海に与え、「早く郷国に帰り、もって国家に奉り、天下に流布して蒼生（人々）の福を増せ。然らば四海泰く、万人楽しません。」と言い諭された。異国の天才空海に秘法を伝授した半年後、恵果は示寂した。

沙門空海は真言第八祖の阿闍梨となり、帰国後、国家と民衆のためにと諭された。恵果より空海に伝えられた密教は日本において真言宗は開花した。

「御請来目録」・の中味は経典１４２部２４７巻、梵字真言賛が４２部１４巻、論疏章（注釈）３２部１７０巻、仏像、曼荼羅、法具等である。同時代の留学僧は経典・論書・仏像ぐらいであったが、空海の持ち帰った多彩であったことは、今までの仏教とは一線を画した自負があったものと思われる。密教は経典や注釈書を読んで理解するものでなく、梵字真言を唱え、曼荼羅を飾り、

法具を並べての真言密教ダラニの祈祷語は、他の仏教教団より迫力が際立ったことに違いない。

梵字=インドで使用されたブラーフミー文字の漢訳名、真言=密呪（みつじゅ）・秘密語、賛=賛美の言葉

青竜寺･空海と恵果の出会いの寺

青竜寺・雲峰閣

四国四県の布施による空海の記念碑が建立されている

恵果像

恵果空海記念館･記念館は日本の真言宗や四国四県の協力によって記念館が建立されている。資料展示館には日本語の流暢なお嬢さんが、空海や恵果のことについて説明をしている。奥の室内で商売熱心な中国僧が経典等を販売している。四国遍路を終えた方々が、ここ青竜寺に巡礼に来られる人が多いというお話です。**空海自筆の書画･**「莫道人之短修況自之長」の訳は、「人の悪口は言わない、自分の上手な事も言わない」とお嬢さんは説明してくれた。

資料館案内のお嬢さん

空海の書「莫道人之短修況自之長」

空海資料館内

余話･阿倍仲麻呂･は７１７年１９歳で唐渡し、長安京で儒学、法律、文学、数学を学び、科挙（かきょ）の試験にも合格、唐の朝廷に仕える役人となる。李白とも親しかったという。仲麻呂の能力に期待した唐朝廷は、仲麻呂が１７年間の務めにもかかわらず、帰国を許してもらえなかった。７３０年、日本からの遣唐使船が着き、これが最後の日本に帰る機会と願い出て、やっと帰国を許されたが、不運なことに、仲麻呂の乗った船はベトナムへ流され、仲間は現地民に殺されたり病気で亡くなったりたりして、仲麻呂たち十数人が長安に帰り着く有様で、その結果、不運な仲麻呂は日本へ帰る機会もなく長安で一生を終えた。帰路の送別の宴でよんだ歌は有名である。

天の原　ふりさけみれば　春日なる
三笠の山に　出でし月かも

吉備真備（きびのまきび）･は阿倍仲麻呂と一緒に２３歳で唐渡した。１７年間の留学生活を終えて、仲麻呂と一

緒に中国を出発したのであるが、真備は別船に乗り込んだため無事日本に帰国できた。幸運の真備は帰国後、右大臣の橘諸兄の片腕となって働く。仲麻呂と真備は留学生の代表者であるがその一生は大きく違ったものになった。

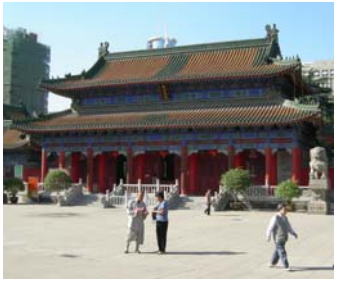
２００７年１２月１９日千葉日報に日本人留学生**「井真成」**の唐時代の墓誌の拓本が中国で公表された記事が出た。墓誌によれば、７３４年に３６歳で死去。７１７年に１９歳で唐渡、１７年間勉学に励み客死した。後に「尚衣奉御」(尚衣局の責任者)という官位を贈られた。気賀沢保規明治大教授によれば、阿倍仲麻呂が志半ばで逝った友のために、真備が玄宗に懇願したのではではなかろうか、公的に葬るには官位が必要だったのであろうと語る。これは「日本への外交的配慮」とも考えられる。墓誌の「魂は故郷に帰ることを願う」という末文には留学生らの強い望郷の念がにじんでいる。

唐代の井真成の墓誌

大興善寺・遣唐使の留学生が学んだ寺・(西安市内)

密教発祥の地、インド僧善無畏(ナーランダ寺院へ留学僧)、金剛智(南インドバラモンの出身、音訳で跋日羅菩薩、真言８祖中第５祖)、不空金剛(不空三蔵と尊称)たちが密教を伝授した歴史ある寺である。不空三蔵が大興善寺に灌頂道場を設けることを唐朝に願い出た。その目的は安寧と息災増益の現世利益ため、唐朝に反乱分子を降伏させるため、不空の密教が国家仏教の性格を強く持っていた。この大興善寺は隋の文帝が開皇２年(582)に創建した国立大寺院であり、その性格は唐にも受け継がれ、長安における最も盛隆の寺院一つである。隋時代から外国からの翻訳僧たちがここ大興善寺に集まり、善無畏、金剛智、不空三蔵らも翻訳し、唐代の三大翻訳寺で、日本人の留学僧も多く訪れている。大興善寺が荒廃したのは、武宗(唐第１８代皇帝)による会昌の廃仏(845)の時は徹底した破壊された。その後清代に復興され現在にいたる。

大興善寺の山門



大雄宝殿

空海の像

仏舎利塔

大興善寺の中庭

円仁の『入唐求法巡礼行記』開成５年(840) ９月６日の条に、《大興善寺に元政和尚(元政は恵果の法孫で恵則の弟子。円仁は師より灌頂を受け、金剛界法・諸尊法を伝授した)とあり。深く金剛界を解し事理(平等的な真理)相解す。彼の寺に西国の難陀三蔵(インド僧、経・律・論三蔵に通じる)ありと雖も多く唐語を解せず。》とある。大興善寺は大雁塔る大慈恩寺と並んで現在の西安市を代表する仏教寺院である。上の空海の像は日本の空海同志会が贈るとあった。

大雁塔・(塔の高さ６４ｍ慈恩寺)西安市

大雁塔は６５２年に唐の高僧玄奘三蔵が印度から持ち帰った教典や仏像などを保存するために皇宗に申し立て建立したものである。名の由来は菩薩の化身として雁の群から地上に落ちて死んだ一羽を、塔を建てて埋葬したことによる。大雁塔の高さ 64 米、玄奘がインドから持ち帰った経典や仏像など保存するために 652 年に建立された。僧３千人がいて、**僧房 1897 室と伝わる。**塔は黄土煉瓦で積み上げられ柱が無いという。

西安市にそびえる大雁塔前の公園・左・玄奘三蔵像　　小雁塔・薦福寺(絵葉書より)

小雁塔・（塔の高さ 43、３ｍ薦福寺） 西安市

西暦 684 年に建立された薦福寺。塔は 707 年。薦福寺は唐代の高僧義浄(89 頁参照)ゆかり寺でもある。円仁の『行記』開成６年(841)正月４日の条に《国忌。先帝の為に薦福寺(則天武后が６８４年建立・この寺内には慈恩寺の大雁塔と共に名の知られた１３層の小雁塔があることで知られる)に勅して行香(焼香)せしめ奉る。》記述している。

玄奘・(602－664)は６２９年長安を出発し、ナーランダ寺でシーラバトラ(戒賢)に師事して唯識論を学び、梵本657 部を持ち帰る(645)。玄奘以前の翻訳を旧訳といい、玄奘の翻訳を新訳という。中国仏教翻訳者である竺法護・鳩摩羅什・真諦・義浄・不空などの訳教三蔵が翻訳した経論の総量が４６９部１２２２巻、玄奘一人で７６部１３４７巻の教典を訳している。

玄奘はインドから唯識派の教籍を多く中国へ齎した。この唯識仏教はインドの仏教の中でも勝れた仏教哲学で、これにもとづいて成立したのが**法相宗**である。この法相宗を宗派として開いたのは慈恩大師基である。基は慧沼(668－723)・智周(中国法相宗第３祖)に伝えが中国法相宗の正系である。

法相宗は日本に４回の伝えがあり、第１回、６５３年に道昭が玄奘に師事して伝えた。第２回目は６５８年に入唐した智通(斎明天皇 658 年入唐)、智達(智通と共に入唐)が玄奘に学ぶ。第３回は７０３年に智鳳(新羅僧、奈良法興寺にて法相宗を広める)、智雄(新羅僧)が智周(中国法相宗

第３租)に学ぶ。第４回は７１６年に入唐した**玄昉**が智周から学ぶ。日本伝来の法相宗では、第１伝と第２伝が元興寺伝、第３－４伝を興福寺伝と呼び、南都６宗の一つの大きな勢力となる。

義浄・(635－713) 唐代の法相宗僧・三東省出身・37 歳のとき法顕・玄奘のあとを慕って広州から海路インドに渡る。25 年にわたり 30 余国を巡り 695 年に落陽にかえる。帰国後、翻訳に務め、『金光明最勝王教』『孔雀王教』など 56 部 230 巻を訳出した。また著書に『大唐西域求法高僧伝』『南海寄帰内法伝』があり貴重な文献となっている。

中国へ仏教の伝播の要約・中国へ仏教の伝来は紀元前１世紀頃の前漢の時代とされる。仏教初伝の記録は『魏志』巻 30 に引用されている『魏略』に、「昔、漢の哀帝の元寿元年(前 2)博士弟子景盧、伊存の浮屠教を口授するを受く。復立と曰うは、其の人なり」とある。

漢の哀帝(前漢第 12 代皇帝・前７年)の元年に、大月氏国の使者伊存が博士弟子の景盧に仏教を口授したことを伝えている。明帝(後漢第 2 代皇帝 57－75 在位)の時代に信仰者などが文献上には現れるが、前漢時代、張騫によって西域が開通されて後中国に伝播したのだろう。後漢の桓帝(後漢 11 代皇帝)の時代に活躍した安世高、支婁迦讖が『道行般若教』などを訳した。この２人の訳教者に続いて竺仏朔、支曜、安玄などが渡来した。

三国時代、呉の建国に勢力を振るった呉の孫皓(呉の第 4 代皇帝 264－280)は大変乱暴天子で、衛兵が数尺の金像を見つけたので孫皓に献上した。孫皓はこの仏像を厠へ置いて４月８日の灌仏会の時、皇帝はこの仏像に小便をかけて大笑いしたという。ところが其の晩に陰嚢がはれて激痛、喚きだした。周りの取巻きがどうしたと聞けば、仏像に小便をかけたということで、仏像を御殿の中に迎え、香湯で洗い、焼香し、懺悔をしたらやっと治ったという伝承はある。俗に日本で言うところの「みみずに小便をかけるとオチンチンが腫れる」の言葉を思い出した。

末法思想の出現・中国に於いて浄土が成立の過程は、その背後に末法思想がある。西暦４４６年、北魏の太武帝(北朝北魏の第 3 代皇帝)が仏教を弾圧して仏教徒を還俗させ、寺院を破壊し、経典を焼いた。これを「北魏の廃仏」と呼ぶ。仏教には元々末法観の考え方があり、３つの時代があり、その時代とは、正法５百年、像法千年、末法万年のこと云う。釈迦が入滅後５百年間は釈迦の教えが正しく実行されるので正法という。次ぎの千年間は釈迦の教えは守られるが修行して悟りを開くことができなくなる時代。「像」という字は似せるという意で、像法の時代はまだ正法の時代に似ている。末法万年とは釈迦の教えが全く実行されなくなり、悟りを求める人がいない時代を指す。南北朝時代の北魏の廃仏があり、急激に仏教が滅びるという末法意識が生じ、それより末法万年の到来という考え方が生まれた。この末法思想を強く意識したのが南岳慧思(515－577)である。慧思は多くの仏教経典が焼かれたため、経典の教えを永遠に残すため、慧思と弟子の静琬は石に文字を刻む以外ないという、結論から造られたのが房山石経(石や瓦に経文を刻む)である。房山は北京市の西南郊７５ｋｍの所、現在までに発見された仏教経典は全部で１千百２２部、３千５百７２巻が残る。大乗経典が大部分となる。

唐代に仏教以外の諸宗教の伝来・唐の文化は当時世界の最高水準に達していた。唐文化は西方からシルクロード経ての東西貿易の富みで大帝国を築いていた。長安から東は朝鮮・日本、西は中央アジア、ペルシア、インド、イランまでの商人や留学生が長安には１万人以上集まり、胡姫(西

域の踊り子)の踊りと音楽にサライ(宿・駅・馬屋)は毎夜熱気に包まれていたと伝える。

景教・大秦景教ともいう。ネストリウス派キリスト教を中国での呼称。コンスタンチノープルの司教がキリスト教の神性に対し、人間マリアの「神の母」の称号を不認したために４３１年に司教の座を追われ異端の宣告を受けた。この一派は東方に逃れシリア、メソポタミアに入りイランで栄えた。ササン朝ペルシアでは国教のゾロアスター教に迫害を受けたが、国王の保護によりアフガニスタン、東トルキスタンに伝播し、７世紀に中国へ伝わる。唐の太宗(2代皇帝)の貞観９年(635)にペルシア僧阿羅本の伝道団が長安に入り、経典の翻訳と布教を勅許された。３年後、諸州に波斯寺を置き、後、則天武后は熱烈な仏教信仰のため景教は衰えたが玄宗の保護よって盛り返した。右の「大秦景教流行中国碑」は７８１年に建立されたものが明末代に発見された。景教の影響が浄土教にあると云われる。景教碑は漢文とシリア語で記されている。
(『天平の客・ペルシアの謎』李家正文著。『シルクロードを知る事典』長沢和俊編)

大秦景教流行中国碑
西安碑林博物館で撮る

ゾロアスター教・古代イランの宗教。教祖預言者ゾロアスターは前７-６世紀の人。アフラ・マズダを最高神として７天使を配した宗教。教えは善神アフラと悪神ダエーヴァの信仰を基礎にしたもの。光明と知恵の神アフラ・マズダを唯一最高神とする。５世紀、中国では祆教(拝火教)とも呼ばれ、隋唐時代に胡人の往来により各地に祆祠(拝火殿堂)が建てられ、それら胡人の取り締まりに薩宝(ウイグル語・サルトパウ・隊商のリーダー・祆教統率者)という府(官職)置かれた。
西暦８４５年会昌の廃仏で景教と同様に弾圧された。

マニ教・３世紀の初頭ペルシア人のマニによってメソポタミアで創始された宗教。創始者マニは２１６年バビロンに生まれ、ササン朝初頭ゾロアスター教、キリスト教、仏教などの諸宗教の要素を混合宗教となる。基本的にはゾロアスター教の変形したものか、経義は善悪二元論からなる。マニの殉教はキリストの殉教に準じられマニ教圏はシリア、エジプトなどへ伝播、７世紀には唐まで伝わる。ウイグルの新疆に広まり、マニ経典・マニ教文字文が出土している。

マニ教寺院の壁画・教祖マニと教徒

マニ教壁画・唐代、高昌故城のマニ教寺院址から出土。左側の鍍金の葉飾りの教冠を戴いている人物が、教祖のマニ。白色の長袍を着て首周りと前襟に深色の広い帯状の飾りを付けている。その後ろに僧衆が袖に手を入れて立ち並び、皆白衣冠で、長髪が肩まで垂れている。教主と僧衆の顎の下に赤い紐が結ばれ素朴さが現れている。

マニ教経巻挿図・五代・268×20、5㎝ソグト文で書写された経巻、２体の楽人が描かれている

6－4･五台山寺院･山西省五台県・文殊・普賢・観音・地蔵は中国４大菩薩の聖地

五台山は山西省東北部の五台県にある東西南北五峰からなる霊山である。峰の連山は２５０キロに及び、五つの峰は３千m級の山々五峰をいい、東方より、東台・北台中台・西台の南谷に大華厳寺、竹林寺などの諸寺院が、その南方に南台がありさらに諸院が南西に連なる。

五台山が中国仏教の文殊・普賢・観音・地蔵の４大名山となっていて、五台山は中国仏教の聖地でもある。伝説としては、冬は極寒、春は大風、夏は寒冷地で人々が苦しんでいた。文殊菩薩が伝教にこの地を訪れ、東海の竜宮城にある「歇竜石」（何百年かけて海中から引き上げた石が涼風を吹かせる）を手にいれれば、この地の気候が良くなり安住地になると聞かされた。そこで文殊菩薩は竜王に頼んだが、なかなか聞き入れないので「人々を苦しみから救うためにほしいのだ」と説得すると、竜王は老いた和尚では大きな石は到底運べないだろうと思い「歇竜石は大変重いが、一人で運べるなら差し上げます」と言った。文殊菩薩は呪文を唱えると石はあっという間に小さくなり、袖に入れて五台山に持ち帰った。歇竜石を谷間に置くと五峰山は涼しい高原になり、谷は清涼谷に、この地に建てた寺は清涼寺といい、五台山は清涼山と呼ぶのである。

清涼山･は炎暑のインド国から見れば、涼しい極楽土に思え、清涼なる所が理想郷考えられ、現地の高原を知るよしもないが、漠然視としてヒマラヤ山系を須弥山と考え、その奥地の清涼池から四大河の源流思想が考えられ、それが西域地方に存在する極楽郷が生まれ、東北の五台山を指したものか明らかではないが、北魏代から五台山を清涼山とする信仰が生まれる由縁となる。

五台山の仏教は唐代から天台・唯識・浄土・禅・密・律宗のほか、チベット族、モンゴル族、満州族に信仰されている蔵伝仏教（チベット仏教）がある。五台山菩薩頂に黄色文殊、羅侯寺に白色文殊、顕通寺に緑色文殊、塔院寺に黒色文殊、殊像寺に五色文殊がある。文殊は般若の化身で、般若は諸仏を生み菩薩を保護することから、文殊は諸仏の母親であり七仏の師になるという伝説を生んだ。しかし、仏教には「二尊不並化」と云う決まりがあるから、文殊は釈迦牟尼の左侍従になり、釈迦牟尼と共に講教説教していた。文殊は諸仏の知恵を象徴とし、インドで生まれた実在の人物とも伝えられている。五台山は漢族、チベット族、モンゴル族、満族の仏教聖地であるが、東方諸民族徒に於いても共通の文殊菩薩信仰となっている。（『入唐求法巡礼行記』Ⅰ・東洋文庫『五台山』一百八寺遍路・中国山西科学技術出版社より）

五台山入り口

大白塔（仏舎利塔）『五台山』より

文殊菩薩・文殊はサンスクリット語「マンジュシュリー」の音写。舎衛国(シュラーヴァステイー・19 頁)のバラモンの家に生まれて、釈迦十大弟子といわれ、釈迦の代理として教説もした。文殊師利の略で、訳は「妙吉祥」「妙徳」など、智慧を司る菩薩、初期の大乗経典・般若経典は仏に代わるほど盛んであった。特に般若経典との関係は深く、入滅後に実在した菩薩とも、又、無

限の過去に悟りを得た仏、初期般若経典の形成に関与した人物とも、理想化された菩薩となる。

文殊菩薩は獅子に騎るのが一般的。この形は当初からのものでなく密教が伝播する８世紀頃からと云われる。日本に於いては、文殊菩薩は釈迦三尊仏の左脇侍(正面右)として獅子に乗った姿で表現され、智慧を完全にそなえて説法を行なう。とくに「空」についての智慧が文殊菩薩の特性であり、これから「文殊の智慧」の語源の由来となる。釈迦三尊の右脇侍(正面左)は悟りを象徴する普賢菩薩で、後代の彫刻では獅子に乗る。

①交脚文殊菩薩（顕通寺）

②五色文殊菩薩・『五台山』

③騎獅文殊尊像（国重文）平泉町中尊寺

(①『禅の世界』東京書籍、②『五台山』山西科学出版社、③平安後期・ヒバ材、H70、6 ㎝・中尊寺の五台山文殊は 12 世紀半ば頃、我が国五台山文殊像の中でも最も早いもの。五台山は都の北東方、平泉は我が国の都の北東方、清衡は平泉を日本の五台山にしょうとしたのかもしれない。『みちのく古仏紀行』大矢邦宣著・河出書房)

五台山へ留学僧円仁・慈覚大師（794－864）ともいう。天台宗山門派の祖。下野国都賀郡壬生町の豪族壬生氏の生まれ。838 年五台山に巡礼。五台山を巡歴し法照流の五会念仏を学ぶ。次ぎに長安に入り、元政阿闍梨・義真阿闍梨・法全阿闍梨から胎蔵・金剛界・蘇悉地の三部大法・灌頂を伝授される。847 年帰朝。日本に伝来して無い仏典３７巻を書写する。円仁が承和７年(838)五台山に巡歴し密教を９カ年学び、比叡山に台密の基礎を据え、総持院を建立して天子命祈願の道場とし、五台山の引声念仏を導入して比叡山浄土教の発祥となった。

円仁の『入唐求法巡礼行記』(東洋文庫Ⅰ・Ⅱ)によれば承和７年(唐暦開成５年)（８４０）４月２８日。円仁は五台山の麓、普通院に到着して中台の頂きを万感の思いで眺望する。

《４月２８日、平谷に入って西行すること３０里。巳時(１０時)停点、普通院山門に到り、始めて中台の頂きを眺望す。これ即ち文殊師利(菩薩)の居られる所の清涼山、五台山頂の中台なり。地に伏して遥かに拝礼し、覚えず涙を雨のごとく流す。遠く五台頂きを望めば、なだらかな頂には樹木は見えない。便ち宿泊所普通院に入って文殊の像を礼拝す。西亭の壁上を見れば「日本国内供奉翻経大徳霊仙、元和１５年９月１５日この爛若(精舎・寺院)に到る」と。院中の僧らは日本国僧の来たるを見て、奇異とし同じ日本人の壁上の題文を以って知る。故に之を記録す。》と。

普通院・は唐代の宿坊として用いられた寺。五台山の普通院では巡礼者の僧俗を問わず宿泊、粥飯を提供してくれた寺院となる。円仁も衣食住に安心して求法に打ち込めたことでであろう。

又、『円仁唐代中国への旅』ＥＯライシャワー著に、

《円仁は神聖な峯の一つが目に入るやいなや、地面に頭をつけてそれを礼拝した。「文殊菩薩が

我々の利益のために姿を現された・・・金色の世界」のこの光景をまのあたりにして「目に涙が溢れて抑えることができなかった」》と。又、五台三山で行なわれる精進料理について具体的に例示している。開成５年５月１６日の記述に、

《精進料理が峰々で整えられるときは、僧俗男女、大人子供を問わず、食べ物はすべて平等に供された。昔、大華厳寺(現在の顕通寺)で平民男女、乞食や貧乏人がすべて来て食事を受けた。しかし、喜捨する施主は不愉快になった。「私がはるばる山坂を越えてここまで料理を配膳したのは、山の僧衆に供養したいためである。このように世俗な人々や乞食が来て、私の食べ物を受けるのは意としない。」僧たちが施主をなだめて人々に食べ物を与えていると、妊婦がやってきて、「私のお腹中の子供はまだ生まれていないが、子を一人と数える。なぜあなたは子にも食を与えないのか」施主は反論する。「あなたは馬鹿である。胎内の子供を一人と数えるべきであっても、子はそれを要求しないではないか」と。婦人は「私の胎内の子供が食を得ないならば、私も食べない」といって食堂を出て行った。婦人は堂の外に出ると、その婦人は途端に文殊師利に変身し、光を放ち目がくらむばかりの明るさで堂を満たした。金色の毛をした獅子に跨り、大勢の菩薩に囲まれて空高く舞い上がった。数千の人々は地にひれ伏し、彼等は悔い改め声を上げて泣き、雨のような涙を流し、声をそろえて「大いなる聖(ひじり)、文殊師利菩薩」と、声が涸れ、喉がかわくまで叫び続けたが、菩薩は再び戻り給わなかった。以後、供養が贈られ、精進料理が整えられるときは僧俗・男女・大人・子供・貴賤・貧富を問わず平等にすべての人々に供給されるようになった。」》と著している。

竹林寺・円仁は８３８年に留学僧となり入唐した。当時、竹林寺は法事隆盛により高僧輩出の原因でこの寺院で１５日間泊まって、その弟子である惟正・惟暁に白玉戒壇で具足戒律を受けさせた。開成５年(840)４月２６に五台山に入り、同年７月１３日に山を出て竹林寺に半ケ月住み、竹林寺の天台経理・儀規・祭礼仏事の教本を写した。(『五台山一百八寺遍路』山西科学技術出版より)

竹林寺日本僧の碑

竹林寺・明代の釈迦仏塔

現顕通寺(大華厳寺)(『五台山』山西科学技術出版より)

『入唐求法巡礼行記』《５月１日、天晴れる。停点(ていてん)(滞在処)より西行１７里、北に向かって高嶺を過ぎ、１５里行きて竹林寺に到って昼食す。同、１４日、夜、惟正(ゆいしょう)、惟暁(ゆいぎょう)は数十人共に遠来の沙弥(しゃみ)と共に白玉の戒壇(かいだん)に於いて具足戒(ぐそくかい)を受ける。》(戒壇=戒律を授ける儀式)

具足戒(ぐそくかい)(僧の戒律)とは一人前の僧になるための大戒(だいかい)(大乗戒・菩薩戒)を受ける。教団に属するものは戒を守ることを要求される。比丘(びく)(男)には２５０戒、比丘尼(に)(女)には３４８戒を受ける。(日本では正式の授戒は鑑真の入朝後、鑑真によって初めて行われた)円仁は竹林寺で１５日間滞在とある。竹林寺はインド・ラージギル王舎城の竹林精舎(20 頁参照)を見た法照(唐代の僧・五会念仏法師と呼ばれた)が７７０年に五台山に入り竹林寺を創建し、五台山の浄土経の中心となった。

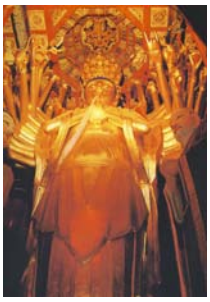
《同、１６日、早朝、竹林寺を出て谷を尋ねて東行すること１０里、東北に向かって行くこと１０里、大花厳寺(大華厳寺)に到り庫裡(寺の台所・庫院)に入って住す。》とある。

大華厳寺・則天武后の時『華厳経』８０巻が翻訳されたので(695－6)大孚霊鷲寺から大花園寺に改め、更に後、大華厳寺と改めたとあり、円仁が入山の５０年前(776－790)という。『五台山』では、「則天武后時代は『華厳教』の中に「大華厳寺」という記載がある。明代に入って、明太宗がこの寺院を建てるよう勅命して「大顕通寺」の額を賜った、とある。

又、『仏教の来た道』鎌田茂男著・講談社文庫・によれば、「創建は後漢の時ともいわれ、北魏の孝文帝のときに再建され、大浮霊鷲寺といわれた。唐の太宗が重建、則天武后の時に拡張されて、大華厳寺と称した。後、明の太祖が修復して大顕通寺の額を下賜し、顕通寺となり現在に及んでいる。」と記述がる。円仁が長期逗留した「大華厳寺」は現在の「顕通寺」ということが判った。円仁の逗留した「大華厳寺」が見つからないので、しつこく捜した次第である。

竹林寺・日本僧の碑・五台山から西南７ｋｍの所。大雄宝殿の正面に「日本天台入唐求法沙門円仁慈覚大師御研鉆之霊跡」と碑文があり、裏面に「昭和１７年４月仏誕生日日本天台法孫末学金剛仏子上阪泰山和尚建之」の字が刻んである。

金閣寺



千手千眼観音菩薩

東台の頂きを遠望・(『五台山』より)

又、円仁は西北の金色露台の寺「**金閣寺**」にも泊まっている。金閣寺は莫大な資金があって、金で仏閣を飾ったので金閣寺と呼ばれた。五台山の寺院はみな文殊菩薩像を祀っているが、金閣寺だけに**千手観音像**が祀られている。円仁は五台山を去る時、東台の頂きに登り、そこで見た「**那羅延窟**」(東台の頂き右側の下辺り)から水がぽとぽとと落ちるのを見て、円仁は「竜の隠れ家にふさわしい」と描写している。

五台山から日本へ来朝した菩提僊那・(704－760)

『今昔物語集』「婆羅門僧正為値行基従天竺来朝語第七」日本古典文学全集 35 に、《今昔、聖武天皇、東大寺ヲ造テ開眼供養ジ給ハムト為ルニ、其時ニ行基ト云フ人有リ・・》とある。

司馬遼太郎著『街道を行く』「異国の人々・奈良散歩７に菩提僊那の記述をみる。

《鑑真より１７年も先にはるばる日本にやって来た高僧がいた。南インド、バラモン階級の生まれ名を「菩提僊那」と言った。東大寺大仏開眼供養会の導師をつとめ、つまり大仏の眼に墨を入れる役である。「大仏開眼供養会式典」では、筆を菩提僊那が持ち、筆に長い紐(縷)が繋がれ、その紐に聖武太上天皇、光明皇太后、孝謙天皇天皇以下高官たちがその紐を力強く握り、盧舎那仏像のありがたさに感涙にむせんだのである。センナは南インド(中インド)のうまれで、出身階級カーストの最高とされるバラモンであった。このため後の奈良の人々は「婆羅門僧正」呼んでいた。バラモン教徒という意味ではない。仏教徒であった証拠に、彼は唐の五台山大華厳寺に生

身の文殊菩薩が出現したとき彼は唐の五台山大華厳寺に生身の文殊菩薩にあうために、はるかな中国に向かうのである。すでにインドでは仏教が衰え、かわって中国で栄えていた。

中国の仏教は、インド産のなまの仏教でなく、中央アジアの思想風土が生みあげた大乗仏教だったから、センナは仏教の原産地の人ながら、異質の仏教の国である唐にあこがれた、ともいえる。このあたりセンナは仏の申し子のような善人を想像させる。当時、奈良にあっては仏教楽として伎楽教楽として伎楽(仮面楽)が演じられていてその面の多くが、いまも正倉院にのこっている。そのなかに、鼻が天狗のように長いバラモン面というのがある。演劇上の約束ごととしては善人を表している、といわれている。センナも、そういう人物だったのではあるまいか。かれは、中国へわたる途中、インドシナ半島付近で海難に遭い、林邑国(ベトナム)の人物に救われた。この林邑人の名は、漢字表記されたものしかつたわっていない。仏哲という。仏哲（フッテイとも）はインド人で、真珠を採取するために林邑にきていたのだが、センナに惚れこみ、家業を捨てて共に入唐した。やがてともどもに五台山大華厳寺にはいり、「生身の文殊菩薩はどこにおられますや」と、聞きまわった。きかれて中国僧たちは当惑したろうが、誰かが、「文殊菩薩はもうここにはおられない、日本にゆかれた」と、答えたらしい。記録では夢告ということになっている。》と記述している。

婆羅門伎楽面・正倉院

行基が行基菩薩と云われる由縁・は次ぎように『今昔物語』にある。

《行基は婆羅門に歌を贈る、「霊鷲山(20頁参照)の釈迦仏の御前でかねてお約束をした、そのお約束にたがわず、お会いすることができましたなあ」との歌に、婆羅門の返歌は「迦毘羅衛(釈迦が居た都城)の地でともにお約束申したかいがあって、今、あなた文殊菩薩(行基のこと)のお顔を拝しえましたことよ」と答えたのである。これを聞いて人々はみな、行基菩薩は、さては文殊の化身だったのだということがわかった。》とある。(林邑楽仏哲の挿絵は『天平の客ペルシャ人の謎』より)

林邑楽・カンボジジア・ベトナム

抜頭

胡飲酒

陵王・岩手県で撮る

（林邑楽の仏哲の挿絵は『天平の客ペルシャ人の謎』より）

奈良の大仏建立の経緯・聖武天皇の大仏建立は、唐の則天武后(在位 690－705)の大仏発願にならったものである。『華厳教』の理念によって、東大寺を中心にして全国６８ヶ所の国分寺を置き、国家統一を目指とした。聖武天皇が盧舎那大仏鋳造の動機の一つは、あの広嗣の乱(藤原広嗣が太宰府で起こした乱)の起った天平１２年(740)の２月に難波宮に行幸し、河内国大県郡(大阪府柏原市)の知識寺に詣で、盧舎那仏をみて「朕も造り奉らん」と決心されたと『続日本紀』は伝えている。知識寺の「知識」とは仏に結縁するために財物と、労働を持ち寄って造寺・造仏・写経な

どを行なう集団をいう。この地区は古くから百済・新羅の渡来系氏族によって仏教が栄えた地域で、華厳教による盧舎那仏がいちはやく造られ信仰されていた。

聖武天皇は都を近江の紫香楽に移し、甲賀寺を造営して模造の大仏の鋳造骨格は仕上がったが、彼の心は落ち着かず、更に奈良（ナーラは韓国語邦の意）の若草山の麓に造営された。仏体に用いられた銅・錫は約２５０トン、蓮華座は１３０トンの大仏は造営されたが、像に塗る金が日本に無いとされてきたが、その金が陸奥国小田郡(宮城県遠田郡涌谷町)の国守、百済王敬福によって天平２１年（７４９）に発見された。

『続日本紀』に黄金９百両(１３キロ)献上し、「陸奥国始めて黄金を貢る。ここに幣を奉りて畿内七道の諸社に告ぐ・・」と記され、年号を「天平」から「天平勝宝と改元し、大赦や税の免除を行われた。これを聞いた越中国守、大伴家持は「天皇の御世栄えむと、東なる陸奥山に金花咲く」の歌を万葉集に残した。そして、東大寺の信仰教義は聖武天皇の発案による華厳教の「盧舎那仏大仏」の建立をみたのである。

大仏開眼供養会・天平勝宝４年(752)４月９日、大仏開眼供養の日で、当日の様子を『東大寺要録』第２巻によれば、まず１０２６人の高位の僧たちが、玄蕃頭の外従五位下秦忌寸首麿と右中辨の従五位上県犬養宿禰古麿に先導されて南門より参入し、次に開眼師である僧正菩提法師が輿に乗り、正五位下賀茂朝臣角足と従五位上阿倍朝臣嶋麿に迎えられて東から参入するなど東西より法師・従四位の朝臣が参入する。聖武天皇、光明皇后は東大寺布板殿に座し給う。一同着座の後、開眼しである菩提僧正が仏前に進み筆をとり、筆の先には２００ｍの縷(ひも)がゆわいつけられていて、上皇はじめ貴族や知識の縁者などが縷を握らせ、参拝者たちの開眼の感動を手に通して味合わせたのである。開眼の作法が終わって、唄、散華、梵音、錫杖と声明が続き講師による華厳教が講説された。続いて南門から美しい装飾の楽人が列をなして参入する。左右に分かれて舞が奏でられた。大歌女、大御儛３０人、久米舞４０人、楯伏儛４０人、女漢会躍歌１２０人、跳子１００人、唐古楽一舞、唐散楽一舞、林邑楽三舞、高麗楽一舞、唐中楽一舞、唐女一舞施袴２０人、高麗楽・三舞、高麗女楽、現代風に言えば日本・久米舞、韓国・高麗楽、中国・唐古楽、林邑楽(ベトナム)の民俗舞踊が奉納された。都合１万人の僧侶、貴族、高位の一般人の前で開眼供養が終了したのは夕方と伝え、聖武天皇は奈良の京において国際的な大仏教祭典を行なった。『続日本紀』に「佛法東帰より、斉会(僧尼を招いて食事を供する法会)の儀、未だかってかくの如く盛んなるはあらざるなり」と記し、その如くであったであろう。

婆羅門僧正菩提僊那の供養塔・霊山寺

中央聖武天皇・右上段センナ

右下段行基・左下段良弁

絹の縷と筆・正倉院宝物殿蔵

奈良市西郊・霊山寺にある菩提僊那の供養塔・菩提は Bodhisena の音写名。(704－760)奈良時代

に日本に来た南インド僧。婆羅門僧正(バラモン最上階級出身)菩提センナは天平宝字４年（７６０）５７歳で入寂。奈良市西郊、霊山寺、登美山右僕射林に埋葬とあるが、近年、菩提センナの墓とされる所が発掘されたが、遺物はなく供養墓と考えられている。

華厳宗・大乗を代表する経典の一つ。漢訳では『大方広仏華厳教』を略して『華厳経』と呼ぶ。チベット語訳は「仏の華飾のと名づけられる広大な教」となり、仏たちが無数になる高僧だけでなく、一般民衆の知恵の真理を求める。中国五台山を華厳教で重視される「文殊菩薩」の聖地とする信仰が早くから広まり、華厳の本尊・毘盧遮那仏は梵語バイローチャナの音訳で、意味は「光明・遍照」の意、真言密教では「大日如来」と訳し、太陽の光明を崇拝した仏教中の最高仏の名が、毘盧遮那仏なのである。

華厳宗は唐時代に成立した宗派で『華厳経』から成立した宗派である。『法華経』と並ぶ大乗仏教経典である。『華厳経』は無限に大いなる仏を説いたものである。中国で翻訳された『華厳経』の経典に、「東晋・仏陀跋陀羅訳・６０巻」「唐・実叉難陀訳・８０巻」「唐・般若三蔵訳・４０巻」がある。さらにチベット語に訳された一種類は８０巻の『華厳経』に相当する。

『華厳経』第一章「世間浄眼品」読む・『大乗仏典』中村元編・筑摩書房より

第一・寂滅道場会(釈迦が悟りを開いた仏法修行道場)第一章・世間浄眼品のはじめの部分。

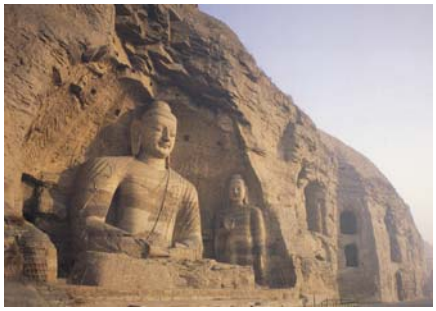
第一章は、仏がはじめて悟りをひらかれたときの光景である。悟りを開くや否や、仏は華厳経の教主ヴィルシャナ仏(光・太陽の意味・華厳経の教主で三世十万の宇宙と同体で、シャカ仏もヴィルシャナ仏と一体である)と一体になられる。仏をとりまくおおくのものどもが、ひとりびとり起ち上がって仏をほめたたえるが、それが悟りの内容を暗示する前奏曲になっている。

《このように私は聞いている(如是我聞)。ある時、仏はマダカ国の寂滅道場におられた。仏が始めて悟りを開かれたとき、大地は浄らかとなり、種々の宝や花をもって飾られ、かぐわしい香りがみちあふれていた。また、はなかずらが仏のまわりをとりまいており、その上、金・銀・るり・はり・そんご・めのう・しゃこなどの珍しい宝石がちりばめられ、多くの樹木は、枝葉から光を放ちあって照り輝いている。このような光景は、仏の神通力によって現われたものである。仏はこの獅子座に坐って、最高の悟りを完成されたのである。仏は、過去現在未来の真理がすべて平等であることを悟り、その智慧の光はすべての人々の体の中に入り、その妙なる悟りの音声は世界のすみずみまでいきとどいている。それはあたかも虚空をいくように、なにものにもさまたげられることがない。仏は平等の心ですべての人々によりそっておられ、すべての人々の行いを知っておられる。その智慧の光は一切の闇を除き、無数の仏の国土を現わし出し、いろいろな方便を用いて人々を教え導かれる。

仏は、普賢ボサツ、普徳智光ボサツなど数限りのないボサツたちと一緒におられる。このボサツたちは、昔ともに修行したヴィルシャナ仏の友だちであり、すべてのすぐれた徳を完成している。かれらはボサツの修行をなしとげており、智慧の眼は明るくすきとおっていて、過去現在未来を洞察している。心は寂かに統一しているが、一たび真理を語りだせば広大な海のように尽きることがない。すべての人々の心の動きを知っており、それに応じてその悩みを除いてやり、また、どんな事柄でもそのなかに入って、よくこれを経験し、捨てるべきものは捨て、取るべきものは取る。すべての仏の世界に遊び、浄土を建設しょうという願いを起こし、無数の仏を礼拝し、供養し、自分の体は仏の功徳で充ち満ちている。・・・(略)》(「品」呉音・章・編=分けたもの)

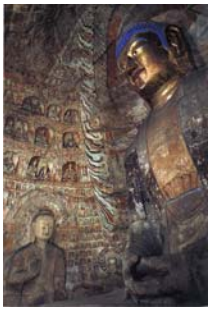
6－5・雲岡(崗)石窟・山西省大同県

雲岡石窟・は山西省大同市西部１６ｋｍ、武周川の断崖に１キロに渡って造られている。西方からの仏像様式の影響強く受け、５世紀から６世紀北魏を興した遊牧民・鮮卑族が、皇帝を釈迦と同一視することで、皇帝の権威を高めようと試み、北魏の皇帝５人を模した大仏を建立した。現在残されている洞窟は５３カ所、大小仏壇は２５２カ所、石窟寺院群である。北魏の４６０年頃に造営されたもの。中央石窟郡は第５－第１３窟となる。最初期の沙門統の曇曜が主となって開削した石窟である。曇曜の開削した五窟はガンダーラやグブタ朝の様式の影響を受けている。シバ神のインド神々、釈尊の生涯を描いた仏伝図、釈尊の生前物語、盧遮那仏、阿弥陀仏、弥勒、観音菩薩、維摩、文殊などの造像当時は色彩に輝いていたという。後の、雲岡石窟の像制作文化は、龍門石窟などに影響を与えている。２００１年世界遺産に登録となる。



雲崗石窟２０窟・大仏仏坐像(『禅の世界』)

第３窟・釈迦三尊坐像



第５窟・后室主仏及び西壁

雲崗石窟20窟・は露天大仏となっている。尊仏は釈迦如来で完全な形で残っている。顔はふくよか、慈悲に満ちて、雲崗石窟で最も代表的な仏像である。像高１３・７ｍ、結跏趺坐(趺=足の甲・結=交差・跏=反対足の太股の上に乗せる)座像、右袖には袈裟をは織っている。異常に長い福耳(２・６ｍ)を持っている。

6－6・白馬寺・河南省洛陽市

中国へ初めて仏教伝来の伝承のある白馬寺は、洛陽市、東１２ｋｍの郊外ある。後漢の明帝の永平年間(58－75)に、摂摩騰、竺法蘭が四十二章経などを白馬に背負わせてインドから来たので、明帝は中国で初めて寺院を建立し、それらの経典を安置した。その因縁から寺の名前を白馬寺と名づけられた。

白馬寺(『禅の世界』より)

竜門石窟 1998 年・右側李氏左筆者

盧舎那仏像奈良大仏モデルか

しかし、中国への仏教初伝は白馬寺ではない。北魏(386－534)の頃に北朝の中頃広まったらしい。伝説による白馬で経典が運ばれた由によって、寺の門前には２頭の白馬が、笠法蘭の墓もある。現在の白馬寺は明の嘉靖(かせい)年間 (1522－1566)、清代にも改修されている。

それでは中国に仏教伝来し最初に仏教を信奉したのは、後漢の明帝、異母弟の楚王英である『後

漢書』巻４２の楚王英の伝記「楚王英が黄帝と老子とともに外来の仏陀を一緒に祀った」とある。この時代仏教は中国古来の民間信仰との融合し不老長寿と福を招く現世利益の宗教として受け容れられた。中国の皇帝では、後漢の桓帝(在位 147－167)は仏教の教義ではなく、仏教を不老長寿にと願い黄老(黄帝と老子の思想)の信仰と現世的な利益を求めたものである。仏教はどこまでも現世功利を授かる思想の信仰であるから、後漢時代の社会に受け容れられたのである。

6－7・竜門石窟・河南省洛陽市から１３キロｍ離れた所

洛陽市の竜門渓谷崖の南北１ｋｍに及び、両面に石刻してある。竜門石窟は唐代の像が３分の２、北魏の像が３分の１となっている。竜門石窟の最高傑作像は盧舎那大仏である。６７５年完成の奉先寺洞は、則天武后の後援により高さ１７ｍの大盧舎那仏、２菩薩、２仏弟子、２神王、２金剛力士の偉容を誇る。寺額は高宗皇帝の親筆である。だが８世紀前半までで、以後は衰える。盧舎那大仏は則天武后のお顔に似ていると云われ、仏像というより美人女性のお顔である。奈良の大仏の原型は、龍門石窟の、中央の本尊こそが奈良の大仏のモデルになったと伝わる。

たしかに竜門石窟の盧舎那大仏は、則天武后のお顔といわれるように、女性のお顔である。

竜門石窟奉先寺洞遠望(『世界美術全集・東洋編』より)

竜門石窟奉先寺洞・は龍門西山の中央の中腹に開かれている。唐代を代表する高宗と則天武后によって開削された大摩崖像龕の奉先寺である。唐・上元２年(675)。地上から２０ｍの高さの山腹に、幅３３・５ｍ、奥行き３８・７ｍ、高さ４０ｍに盧舎那仏以下の９尊の大像を彫り出した。特に中央の毘盧遮那仏の坐高は１７ｍ竜門を代表する。則天武后の武周期は唐代の最盛期で、万仏洞、大万洞、高平郡王洞、などが造営された。唐代後期になると、竜門石窟の造像は衰退し、造像の題材も極楽浄土を願う阿弥陀仏と共に、現世の苦難を救ってくれる地蔵、観音菩薩が多く彫られる。人々の願いを込めた石窟寺院は、仏国土を目指し、極楽浄土表現したものである。

それでは奈良大仏と竜門石窟奉先寺洞の盧舎那大仏がモデルと云われているので再確認しみます。感覚・感性・直感は読者のご判断願います。

奈良大仏・東大寺の本尊、高さ１６ｍ。聖武天皇の発願で天平１７年(745)に制作が開始、天平勝宝４年(752)大仏開眼供養会が行なわれた。

鎌倉大仏・神奈川県鎌倉市長谷の高徳院(浄土宗)の寺院。創建年は不明。開基不詳。台座より高さ１３・３５ｍ、銅像１２１屯(宋の銅銭による制作)与謝野晶子の歌「鎌倉や御仏なれど釈迦牟

尼は、美男におは(わ)す夏木立かな」は有名である。

飛鳥大仏・奈良県高市郡明日香村にある蘇我氏の氏寺で、日本最古の寺院。本尊は釈迦如来。創立者は蘇我馬子と伝える。創建６０６年、像高４・９m。

①奈良東大寺盧舎那仏像

②鎌倉大仏・阿弥陀如来像

③飛鳥寺・釈迦如来像

①奈良大仏『仏教を歩く』朝日新聞社より。②鎌倉大仏『フランス士官が見た近代日本のあけぼの』2005 年・アイアールディー企画より。1876 年 2 月フランス軍事顧問団の一員として陸軍養成担当教官ルイ・クレットマン(25 歳・26 ケ月間滞在)が来日、日本各地を撮影。明治９年(1876)4 月箱根、熱海、江ノ島、鎌倉の旅で撮影したもの。1994 年、ルイの孫が明治黎明期の写真 497 点を発見する。③飛鳥大仏『飛鳥寺と聖徳太子』岡本精一著より。

我が国最初の本格的寺院・飛鳥寺・奈良県高市郡明日香村

飛鳥寺は蘇我馬子(？―626)によって創建された日本初の本格的寺院である。蘇我氏の氏寺として６世紀から７世紀初頭にかけて造営された。法興寺または元興寺と呼ばれた。「法興」とは「仏法興隆」の意味であり、隋の文帝が「三宝興隆の詔」(三宝=仏・法・僧。仏教教団を盛んにしなさいという命令)を出した５９１年を「法興元年」と称したこととの関連があるという。

『日本書紀』によれば飛鳥寺(法興寺)は用明天皇２年(587)に蘇我馬子発願したが、当時、排仏派代表の物部守屋と対立していたが馬子の勝利帰結となる。推古天皇１３年(605)４月の条に、天皇が聖徳太子、大臣の蘇我馬子や諸国王の発願し、銅仏、繡仏(布地に刺繍した仏像)二体、「丈六仏像各一躯」(一丈六尺の仏像)を作ることを止利仏師に命じた。この時、高句麗の大興王が６０５年に、倭国天皇が仏像を作ることを聞いて黄金３百両を奉じるとある。大仏の完成は翌年１４年(606)に銅像を法興寺金堂に安置した。飛鳥大仏・法隆寺の釈迦三尊像も北魏の影響を受けているとされるが、飛鳥大仏は百済系の止利仏師が、百済仏教と中国南朝の影響を強く受けていて、飛鳥大仏の衣文には南朝の影響が見られ、顔立ちは北魏系とも云われるが、源流は百済にある。

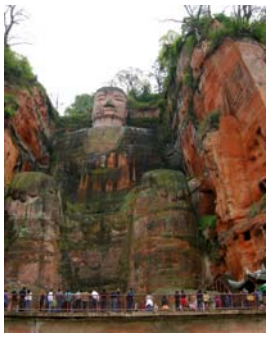
百済の瑞山の三尊磨崖仏に似ていて、百済や中国南朝の仏像と飛鳥仏は同系だといわれている。飛鳥寺の伽藍は塔(五重塔)を中心として、北に中金堂、塔の東西に東金堂、西金堂が建ち、１塔３金堂式伽藍となっていた。建久７年(1196)に伽藍は焼失して衰微した。

飛鳥大仏は創建時に据えられた石造台座は、発掘の結果、台座は創建当時から動いていないことが判明、この台座は花崗岩(御影石)ではなく、竜山石(兵庫県高砂市産出の凝灰岩)製であった。銅造の仏像を石座の上に安置したのは当時の技術では銅像の重量を支える銅台座が造れなかったと云われている。

6－8・四川省の仏像群を歩く・（２００８年５月１２日四川大地震発生、写真撮影は同年３月２４日から４月３日までのもの、従って仏像が地震崩壊の箇所は多々あると推定される。）

四川省の石窟は晩唐(836－907)から宋代(960－1279)にかけて造営され、安岳石窟や大足石窟群の宝頂山石窟、北山摩崖像群は密教の教えを反映した造像が見られる。峨眉山と宝頂山こそ四川省を代表する仏教の霊山なのである。

峨眉山と楽山大仏・四川省峨眉市の南西に位置にある。峨眉山は四川盆地と青海・チベット高原との中間地帯にあり、山の形が細長く美人の眉のように伸びているのでそう呼ばれた。楽山大仏は大きい石彫刻の弥勒仏の座像で、唐の玄宗帝(６代皇帝)元元年(713)に開削が始まった。９０年を費やし、高さ７１ｍ、頭は１４、７ｍ、耳の長さ７ｍの全景は大渡河から見ることができる。世界一の四川省の弥勒菩薩坐像は、西域からの伝来でなく、雲南省を経由して仏教・仏像が入ったと考えられている。(中華人民共和国国家旅遊局・峨眉山楽山大仏の案内より)



楽山大仏を川舟より撮る

楽山大仏を頂で撮る

３７ｃｍの肉髻と光背がある仏像

37cmの仏像・楽山大仏の背後に漢代に造られた麻浩崖墓に、仏像が彫られている。高さ３７ｃｍ肉髻を持ち円形の頭光があり、袈裟をかけ、結跏趺坐している。墓道の門柱に、陽嘉３年(134)の彫字がある。又、四川省では４世紀に造られた仏像が見つかっている。

蒲江飛仙閣摩崖・四川省蒲江県は成都の西南７０キロ、西蔵(チベット)への玄関口で、四川盆地西側に位置し、前漢時代より塩と鉄の産出した土地である。１４箇所摩崖石刻跡が現存している。その中で最も窟龕（仏像を納める厨子）数が多く優れているのが朝陽湖鎮にある飛仙閣摩崖石刻である。大部分が初唐後半から後蜀にいたる約３世紀間に造像されたものである。

飛仙閣摩崖仏群

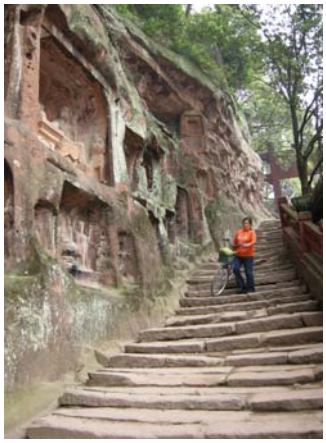
飛仙閣摩崖仏

飛仙閣摩崖造像

飛仙閣摩崖仏群

夾江千仏崖石刻・は四川省青衣江の岸崖にある千仏である。唐代から開削され始め、石刻の中には大中１３年（859）の題記も見える。各種２７０刻があり、弥勒仏Ｈ２・７ｍもある。残念なのは文化革命時、多く破壊を受け、痛ましい石刻が多くある。

夾江千仏岩入口



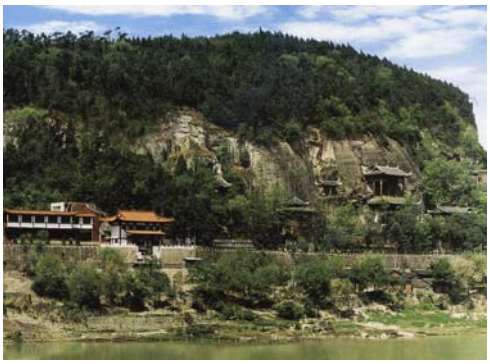
夾江千仏崖石刻群

夾江千仏崖石刻

皇澤寺摩崖造像・四川省広元市嘉陵江の西岸・烏竜山麓皇澤寺は中国史上唯一の女性皇帝は広元で生れた殿内には武則天の像があり、それで皇沢寺と改名した。大仏殿の一階には則天武后が祀られ、２階にこの摩崖仏がある。３８窟のこの像は大変見事にできている。１９５４年にこの寺より出土した石碑に後蜀広政２２年（959）と刻まれ、「大蜀利州都督府皇澤寺唐武則天皇后武氏新廟記」、後に「則天壩白沙里」が刻まれている。

皇澤寺石刻三尊像正面

同・三尊像



皇澤寺・現地ガイドブックより

広元千仏崖摩崖造像・広元県から４ｋｍ離れた嘉陵江東岸千仏崖の石像は南北朝の時に造営された。隋唐時代に多く造られた。その後、１５００年造営が続き、古代より「歴代石刻芸術博物館」と呼ばれ、仏教造像の規模が大きく保存状態もよい。石像は７０００体が残っている。清代の石刻の題記には１万７千体の仏像があったとある。

四川省で最大の広元千仏崖

大仏窟菩薩・北魏

早期密教造像・７１０－７１２年

巴中石窟群・安岳県から西方約３ｋｍ、力島村大雲山山頂。現存仏像は 3061 体、宋代。

阿弥陀如来三像・宋

菩薩像・唐

巴中石窟群入口

南龕摩崖造像・は四川省巴中市より２キロの所にある。唐代の仏像が多数残り、毘芦遮那仏、極楽浄土、毘沙門天など合わせて１００体ある。その彫刻レベルの高さ重慶の大足に並ぶ。現地案内の説明による。磨崖仏(摩崖仏)四川省は摩崖仏とある。

南龕摩崖造

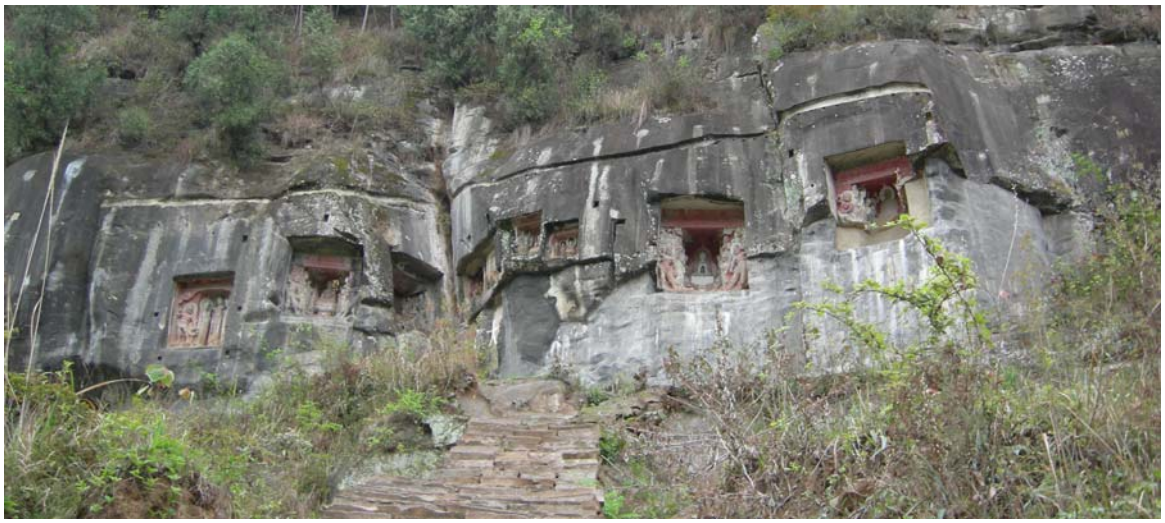
南龕摩崖造像・唐時代の仏像

同

南龕摩崖造像群入口

水寧寺石窟・は巴中市より東へ３０Ｋｍの所。

ここには宋時代の仏像があり、特に天龍八部窟は最も優れた彫刻です。一般開放でなく囲いの中にあり、現地管理案内者の許可を得て見学となる。そのため石窟整備環境は特にすぐれている。石像は宋代のもので、８ッの石窟に巴中の石刻では最も優れた芸術性の高い彫刻が並ぶ。仏像に感心のある方に納得の行く仏像群である。



水寧寺石窟群（天龍八つの部窟がある）

水寧寺石窟群

天龍八部窟・宋時代の仏像

石窟入口に子供達が集まる

閬中大仏寺・成都から東に約３００ｋｍ、大像山の絶壁に彫られている。明・清時代の街並み残る古都。大像山には唐代の大仏や北魏代の石獅子が残る。長江の支流嘉陵江が流れている。三国志の張飛が納めて没した地となる。

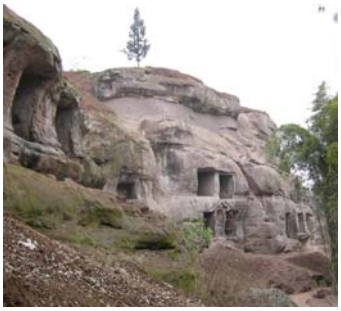
大仏寺山門

閬中大仏

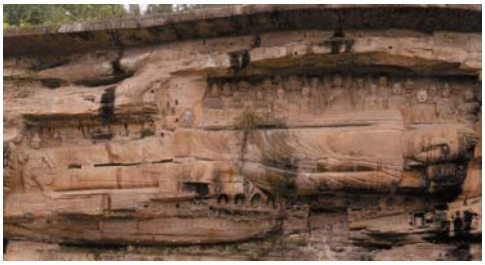
同・観音菩薩

安岳石刻・は県内に凡そ３００箇所に分布している。芸術性が高い石刻群は７箇所位ある。臥佛院は安岳県町から３９キロ離れた八廟鎮に位置し、唐代の紀元７２３年から彫られ、５代まで続く。現在残る仏像は１６１３体、仏経文字 40 万字、洞窟１３９個。中でも唐代に彫られた釈迦涅槃像（臥佛）は全長２３ｍ、中国一と言われる。（修復中のため写真が不可・地区の案内書による）

臥佛院石刻

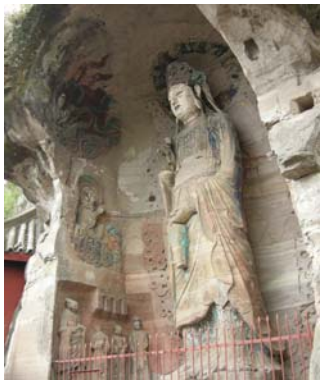


臥佛院跡



臥佛院・釈迦涅槃像２３ｍ

円覚洞石刻・は安岳県町から１キロの金花村に位置し、現存仏像 1933 体、洞窟 103 個、石碑 26 個、唐代 5 代十国時代、宋代の仏像がある。その代表が**蓮花手観音**と**毘沙門紫竹観音**である。



円覚洞・観音菩薩

同・蓮花手観音

同・円覚洞仏像

北山石窟・大足市から北へ１、５ｋｍ

北山は唐代末期、昌州の長官であった韋君靖(892)が、食料を貯蔵と兵士の駐屯させた場所。韋君靖碑に北山石刻が造営されたのは８９２年になるという。その後、五代十国（907－960）、北宋・南宋（960－1279）の時代を経て２５０年かけて完成した。摩崖石刻は尊像が 4360 体、釈迦

仏、阿弥陀仏、薬師仏、地蔵菩薩、観音菩薩、文殊菩薩である。１２５号龕に「数珠手観音」は、やや斜めに立ち頭に花飾りの冠を戴き「媚態観音」と呼ばれ「東方のモナリザ」とも言われる。

韋君靖･唐代末期に四川省東部を管轄する韋君靖が兵を駐屯させた要塞、韋君靖がある。

北山石窟の中

第１０号・釈迦牟尼仏・晩唐代

第１２５号・数珠手観音像・宋代

昆盧洞･安岳県、見事な昆盧洞の釈迦応身仏と紫竹観音がある。

釈迦応身仏・昆盧遮那洞・見事な作像

昆盧洞・紫竹観音菩薩（盧舎那=毘芦遮那）見事な作像

大足石刻･（重慶市大足県・1999 年世界文化遺産登録・９世紀―１３世紀の大乗仏教石仏）

大足石刻は９世紀―１３世紀の大乗仏教石仏が壁面に彫られている。宝頂山には大仏は約５００ｍにわたり、高さ２０ｍの断崖に大仏龕（厨子）３１、仏像１万体と巨大な立体絵巻となっている。敦煌、雲岡、龍門石窟に継ぐ中国晩期石窟芸術の代表である。本当に凄い作像である。

黄金の千手観音石刻像

六道輪廻図・（六種の世界は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天道）

唐代晩期景福元年（892）から南宋（1127－1279）末期にかけて造営した。計５万点の彫刻は殆ど仏像を主に、道教、儒教に関するものもあり、４０カ所の石洞窟に分布している。**広大宝楼閣**は北山、宝頂山の第４号懸崖にある。上には広大宝楼閣（西天極楽浄土）下には宋の名僧趙智鳳の青

年、中年、老年時代の３つの塑像は竹林の下で修業し成仏して西天に昇った趙智鳳を描いた。

千手観音石刻像・宝頂山の第８号岩壁にある。面積８８㎡にわたる巨大な塑像は一面の岩壁に彫り上げた。高さ３ｍの観音菩薩は、１００７本の手が団扇状に蓮華台に座る観音の後に広げている。掌（てのひら）に一つの目が現れ、光り輝く。日本の千手観音より豪華で華やかです。

六道（ろくどう）輪廻図・宋・宝頂山３号。衆生が、六道の世界に生死をくりかえして迷い続ける、流転輪廻とも云われる。仏法は「友情が相継で限りない。人々が六道に輪回する。その応報は業（ごう）(行為)に決める」と認め、転輪聖王は牙が口の外まで伸ばす。目を怒らして転輪を回している図。

大足（だいそく）石刻華厳三聖像

華厳三聖像・宋、宝頂山の第５号懸崖にあり、面積１２０㎡の壁には、高さ７ｍの仏像が岩壁から約４ｍ斜めに突き出し立っている。中央は大日如来、左は文殊菩薩、右は普賢菩薩で華厳三聖と併称される。三仏像は手に５００ｋｇの法器を持っているという。歴史を経て今も落ちないのは、その袈裟が塔の重量を地面までに引いていて、建築力学を巧みに利用している。

この華厳三聖像は本当に見事な仏像である。

上段・大足石彫刻・父母恩重経変像。下段・地獄経変像

6－9・天台宗の聖地・天台山国清寺・浙江（せっこう）省

中国では古代から霊気のある山岳を信仰し五岳が定められた。北岳恒山（山西省）、東岳泰山（山東省・五岳の一つ）、中岳嵩山（河南省・五岳）、西岳華山（陝西省・五岳）、南岳衡山（湖南省・五岳）がある。その五山の一つ南岳衡山は長さが南北数百里に及び、その山系は大小７２峰があるといわれ、祝融、天柱、芙蓉、紫蓋、石廩の五峰が有名である。南岳の山中には多くの名称古跡があり、寺も数寺ある。その寺の一つに福厳寺がある。

この寺に天台宗の第一祖である慧思禅師の墓塔がある。慧思は南岳に福厳寺を開いた人で、この慧思禅師の教えを受けて天台宗を開いたのが天台大師智顗（538－597）で、南岳大師慧思の高弟智者大師といわれている。智顗が天台山に籠もって『法華経』の精神と、竜樹の理論を体系づけて天台宗の教えを作ったのである。（575 年頃）。天台山は浙江省天台県にあり、上台、中台、下台の天の三台星に応じているので天台山という。天台山は昔から道教の仙郷として知られていたが、東晋代から次第に仏教の寺院が造られ、智顗が入山して国清寺の前身の寺が建てられた。智顗の没後、弟子灌頂は智顗の言行を記録して後世に伝えたばかりでなく、天台山国清寺を創建した。唐代には天台宗は振るわなかったが、唐の中頃、湛然が天台宗の再興につとめ、弟子の道邃は天台山国清寺を盛り立て中国の仏教霊地を不動にした。

この道邃にまみえたのが日本からは唐代は最澄、円珍、円載など天台学と禅を学んだ。宋代では成尋、栄西、重源(平安・鎌倉初期の僧)などの多くの僧が天台山をおとずれている。

天台山国清寺の山門（『禅の世界』東京書籍より）

国清寺（『禅の世界』より）

円珍・（814－891・天台宗・讃岐の人）は８５３年国清寺に入る。円仁、円載は 838 年国清寺に入る。円珍は長安で密教を学んだ後、国清寺に戻り、自ら資金を出して一房を復興した。最澄が求法者の滞在修行する国清寺の僧房が荒廃していることを憤慨していたのを知っていたから、円珍の修復した僧房は天台山国清寺日本国大徳僧院と呼ばれた。

最澄・(767－822 年)桓武天皇の天台振興の志により、804 年、還学生として入唐、台州及び天台山で天台第 7 祖道邃や行満から天台の秘法を受け、翛然から禅、道邃から菩薩戒を受けた。さらに越州で順暁などから密教の秘法を受け翌年帰国。日本における天台宗の開創者。

竜樹・(150－250 年)ナーガールルルジュナの漢訳名、初期大乗仏教を確立した大論師、南インド生まれ、当時の部派仏教と初期大乗とを学んで大乗に傾倒し多くの経典に通暁した。特に「空」の思想を確立し、それ以後の大乗仏教はその影響下にあった。インドでは彼の「空」の思想は中観派によって展開され、竜樹はその祖とされる。（一説には竜樹は架空の人物とも）

道教・中国古代よりの民間信仰。不死長生・現世利益を求めた。中国の思想史で道教の語が初めて現れるのは『墨子』の「儒者は（天命説を）以って道教と為すも、是天下の人を賊する者なり」「天下の生くる所以は、先王の道教を以てすればなり」孔子がまた『論語』において「罪を天に獲れば祷る所無し」など上帝鬼神の明威を恐れ畏み敬虔に祭祀祈祷を行い天（上帝）の意志で

ある」と理想社会を実現する道をもとめた。(墨子=紀元前5世紀後半から4世紀前半の古代思想家)

6－10・中国禅の源流を観る・河南省・湖南省

永平寺・京都五山・鎌倉五山・茶道・華道・武道に、日本文化は中国禅の大きな影響を受ける。中国禅は漢民族の庶民生活の中から生まれ、坐禅の精神を生活の中に取り入れ、中国独自の宗教に発展させた。中国の老荘(老子と荘子)思想で、インド禅定思想や「空」の教え『般若経』と混淆し、漢民族が生活の営みから禅の精神文化を完成させた。

禅の本位は、文字や言葉によって悟るものではなく、自らの本性を自覚し、自らが仏となり教法を覚る。師と弟子がお互いに合い、師が心を安定と統一させることによって生れる叡智を、弟子に以心伝心する。即ち、知識による理解でなく、師から直接体験行動の中から真理を自覚させ、自己本質の仏性を悟らせる「見性成仏」(自己の本性を見得し悟りを得る)禅行とする。

達磨・歴史的にはよく分らないが、波斯国(ペルシャ)の生まれとも、南インドとも云われる。般若多羅(達磨の師)の法を継承して中国にやって来たという。河南省の嵩山少林寺(495年他孝文帝が建立)に入る。少林寺は達磨を初祖として禅宗が始まり、初唐、太宗(第２代皇帝)を助けて功績があって以来、少林寺は少林寺拳法をも形成して、今日まで世界に禅と拳法を広めている。

嵩山(中国五岳の一つ)の五乳峰に達磨洞の逸話が残る。達磨は洞窟で面壁の坐禅をひたすら９年続けたという。ある日、坐禅中の達磨の前に求道者が訪ねてきた。その日は雪が深く、求道者は雪中に立ち仏道について尋ねた。求道者の名は慧可(487－593)(禅宗の二祖)であった。達磨は慧可の質問に一切答えなかった。雪に埋まる慧可は、求道の決意を示すために、自らの臂を切断し、その仏法修業の心証をみせた。「慧可断臂図」は室町時代の雪舟の傑作である。

達磨の没年は５３６年、４９５年の説がある。又、毒殺されたとも云われている。禅思想を確立した６祖慧能は頓悟(修行の段階を経ず一挙に悟りを開く)主義の立場に立った。北方で活躍した禅僧神秀は漸悟(順序を追って修行して悟りを開く)主義の立場をとった。慧能の禅は南方で栄えたので「南宗禅」、神秀の禅を「北宗禅」と呼ばれる。

中国禅は南宗禅から優れた人材が多く輩出し、後に日本へ伝わったのは南宗禅が、曹洞宗、臨済宗、黄檗宗の３宗繋がるのである。(『仏教史』Ⅱ山川出版社より)

福厳寺の磨鏡台・湖南省南部にある南岳衡山に南台寺、福厳寺の禅寺がある。禅宗第６祖の慧能の弟子、南岳懐譲(677－744)と馬祖道一(707－788)の禅問答をした岩と伝えられる、磨鏡台の名所がある。道一が坐禅ばかりしていたある日、

懐譲が「おまえさん、坐禅ばかりしているが、一体、坐禅して何になるんだ」と言うと、道一は「私は坐禅をして仏に成ろうと思っています」と答えた。すると懐譲は何も言わずに磨鏡台に１枚の瓦を持ってきて、それを一所懸命に磨きだした。それを見ていた道一が、「和尚さん、なにをしているのですか」と言うと、「見ての通り、瓦を磨いて、鏡にするのだ」と答えた。すると道一が「和尚さん瓦をいくら磨いても鏡にはなりませんよ」と言ったところ、懐譲は髪を容れず、「坐禅をいくらしても仏に成ることはできねえぞ」と言った。

道一の懸命な没頭坐禅は、坐禅に縛られていたのである。その道一の執着心を取除くために懐譲は瓦を磨いてみせた。懐譲によって悟り開いた道一こそ後の禅界の英傑、馬祖道一である。

慧可断臂図・雪舟筆国宝(斉年寺蔵)(『仏教史』山川出版社より)

手前二祖慧可・初祖達磨三祖図『禅の世界』東京書籍

磨鏡台(『禅の世界』東京書籍より)

永平寺を開いた道元禅師の修行・道元禅師は中国浙江省の太白山天童寺において如浄禅師に師事し、悟りを開いて日本曹洞宗を開いた。南宋代、１２２３年に九州博多から、船で現寧波の港に停泊中に、阿育王寺(中国禅宗五山一つ・浙江省)の典座(炊事係長)が上船してきた。典座(炊事係り)は６１歳の老僧で、椎茸を買うと、日暮れに直ぐに寺に帰ろうとしていた。道元は話しでも聞きたかったのであろうか、夕食をして行くように進めたが、老僧は「自分がいなければ、明朝の食事の支度ができない」と言って断った。道元はその理由を聞くと「自分は老人で、この職を務めている。老人としてこれを修行している。どうしてこれを他人に譲ることができょうか」と答えた。道元はこの老僧の真意は理解できなかった。

道元は天道寺において６８歳の用和尚から本当の修行について学ぶのである。ある日、用和尚が真夏の炎天下で茸を干す作務(禅宗では労働のことを作務という)をしていた。竹杖をつき、笠もかぶらず、髪は白く、背骨は弓の如く曲り、その痛ましい動作に道元は「誰かに手伝わせたらどうですか」と言ったところ、用和尚は「他はこれ吾にあらず」と答えた。自分の修行はどこまでも自分の修行であって、他人の修行と関係がない。

道元はこの老僧の言葉を聞いてはっと気が付いたが、それでも「こんな暑い日中にやらなくても、涼しくなってからでも」と言うと、用和尚は「更にいずれの時をか待たん」と答えたのである。

口訳にすれば「明日は死ぬかも知れない。この只今の修行を明日にのばすことはできない。今日できなければ、明日やればよいと言うことは絶対に許されない」と、禅の心を述べた。道元禅師はこの用和尚の出会いで、全く違う修行を知り、一筋の道が見えてきたのである。

宝慶２年(1226) ３月のこと、午前二時深夜、如浄禅師は太鼓を打って衆僧を集めて普説(修行者に教説)した。その時「杜鵑(ホトトギス)が啼き、山竹が裂ける」という言葉を提起して、弟子たちに見解(深く真理の見方)を求めた。道元禅師はこの夜を想い出して「この夜は、微月わずかに楼閣よりもれ聞き、杜鵑しきりに啼くといえども、静閑(静かなさま)の夜なりき」と記している。(『正法眼蔵』諸法実相巻)

ある日、如浄禅師が僧堂に来て、居眠り坐禅僧を叱咤した。この声を聞いて道元禅師は、豁然(開ける様)として身心脱落(身心の本来の姿にたちもどる)、大悟徹底(一切の迷いをうちくだき真理一体になる)して如浄禅師の印可を受けた。宝慶２年(1225)の夏安居のときであった。(『仏教の来た道』「禅の源流」より要約)

第7章・チベット仏教(蔵伝仏教)

チベット(西蔵)へは６世紀から１４世紀にかけてインドから密教が直接に伝播した。チベットには古代より民族宗教としてボン教があった。ボン教はシャマニズム的な呪術を重視する宗教、仏教との習合によりラマ教(チベット仏教)というチベット独自の仏教となる。秘密法によって悪魔を調伏し、多くの奇跡をおこし人心を引きつけ、呪術的な性格がチベット民族に受け、密教がチベットに定着した。因ってチベットには経典・仏像・仏画等が膨大に残されている。

インドに於いて仏教が消滅する寸前にチベットへ伝来したので後期密教の特長がみられ、旧教のニンマ派との習合してチベット独自の後期密教として今日に至る。チベットでの仏教の伝来時、サンスクリット語の経典からチベット語に置き換える形での翻訳されたのがチベット語経典となる。古典の大蔵聖典(経蔵・律蔵・論蔵)は仏典研究者の対象となっている。

７世紀後期、ティソン・デツェン王の７７９年、サムイェー大僧院の本堂完成の折、インドのナーランダー大僧院の長老シャーンラクシタによって、６人のチベット人に説一切有部(40 頁参照)の具足戒が授けられ、僧伽(寺院)が発足した。また、８世紀末以後、サンスクリット語仏典をチベット語に翻訳集大成したものが『チベット大蔵経』である。この『チベット大蔵経』を求めて日本の能海寛、河口慧海が明治 33 年前後に鎖国のチベットへ潜入した経緯となる。(75 頁参照)

チベット仏教は、恐ろしい形相の忿怒尊や男女の抱擁する仏図が特徴で、チベット仏教の諸国への伝播は、チベット系民族のブータン、インドのシッキム、ラダック地方、ネパール等となる。チベット以外ではモンゴル、ロシア内のブリヤードなどがチベット仏教を信仰国となっている。１３世紀の中頃は元朝、１７世紀初頭は清朝、満州族やモンゴル族はチベット仏教高僧(活仏・生き仏)たちを使い、北京、五台山、内外モンゴルや中国東北部にチベット寺院を建造し帰依した。

チベット仏教がラマ教と呼ばれる経緯は、１８世紀前半にキリスト教の痕跡を尋ねてチベット入りした神父が、チベット仏教の知識がないままラマ教と呼んだに由来する。ラマとは師僧を指し、御霊神「ラ」生命の根源、「マ」は託された人意味、１９世紀前半に西洋の学者が密教では師と弟子の関係を重視したことから、チベット仏教の特徴であると誤解されたことによる。中国ではチベット仏教の僧を「喇嘛」と呼んだ。

チベット国ではインド仏教直系のゲルク派(黄帽派)、カギュ派(派が多い)の二大勢力をはじめ、サキャ派(4 大宗派・赤帽)、ニンマ派(4 大宗派・赤帽)となる。チベット仏教が中国山西省の五台山(天台宗、唯識宗、浄土宗、禅宗、密宗、律宗)に寺院を構え、チベットから直接に伝播したチベット仏教は元朝、清朝を経てモンゴル国(内・外)、満州族に信仰されて行く。

チベット仏教の4大宗派・１９５９年のチベット動乱以来、チベットの仏教は、かってない試練の時期を迎える。文化大革命中に６千の寺院が破壊され、貴重な文献や美術が失われたという。

ゲルク派・チベット仏教４大宗派の一つ。１５世紀初頭、ツォンカパがチベット仏教を改革、厳格な持津的・道徳的経義をとる。ツォンカパの開いたガンデン寺を総本山とする。ゲルク派は、最高指導者ダライ・ラマがチベット国王を兼ねていたため、チベット動乱(1959)以後は最も苦境に立たされた。ツォンカパはチベットの宗教改革者・ラマ教黄帽派の祖。黄教。

カギュ派・チベット仏教における新訳経典の先駆け教義派。開祖に当るマルパ訳教師は在家の秘教行者で、在家者は白い衣を身に着ることから「白派」と漢訳された。チベット動乱以後は、第１６カルマ黒帽ラマ(活仏最古の名称)、カルマ・ランジュン・リクペードルジェ師(1942－81)が

カギュ派全体の管長に任命された。黄教。

サキャ派・後期密教の経典の一つ「金剛喜タントラ」をよりどころにした派。チベット仏教の古い流れを伝えている。赤帽をかぶることから赤帽派と呼ばれた。チベット動乱後、主な指導者は国外に亡命して寺も衰退した。黄教。

ニンマ派・インドの行者パドマサムバヴァはチベット仏教の開祖に遡る。８－9 世紀のチベットでは仏教の浸透を妨げる土着の神々いた。神々を調伏して仏教の守護神にすることが求められた。ニンマ派の翻訳経典は古教典で、呪術に傾倒していること、土着のボン教の影響を受けていることが上げられている。そのため新訳の経典のゲルク派からは批判を受けた。ニンマ派には光線に乗って旅をする、空に舞い上がることや、死者をよみがえらせるなどの行法がある。後期密教の代表的経典「大幻化網タントラ」をよりどころの派。このニンマ派寺院も文化大革命に大きな被害を受けた。紅教。

ボン教・チベットで古代より続くシャマニズム的な民族宗教で、その起源は古く、人類最古の文化の一つに数えられている。ボン教は体系を構築するさい、インドからの仏教の用語を用いたことで、チベットの宗教の独自性がないと言われているが、実際には仏教の中に見当たらない独特の要素があることが知られている。ボン教とチベット仏教は互い混淆しながら発展した歴史的な宗教の経緯となる。チベット国内と、北インドにボン教の僧院があり、又、今日、ボン教はチベット学や中央アジア学の研究対象の一つとされている。

チベット仏教の尊像・パキスタンでチベット仏教の写真集を買い求める。その写真集より紹介します。『Sacred Buddhist PaInting・神霊な仏教徒と仏画』lustre press roli books より

①白色ターラー菩薩

②釈迦牟尼と二侍者

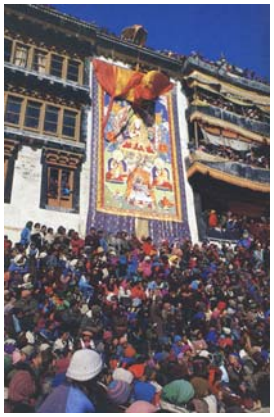
③時輪曼荼羅・タンカ

①白色ターラー菩薩・19 世紀後半、白い蓮華の茎を持つ蓮華座に座る。ターラー菩薩は、観音菩薩の瞳から生まれた美しい女神で、観音の救済に漏れた衆生を、残らず救ってくださる菩薩としてインドで広く信仰された。観音のように絶大な救済力が弱く、時としては願いが叶わないことがある。当初から重要な尊格ではなかったが、美しい女性の姿態に観音や文殊などの男性の大菩薩に勝るとも劣らないほどの信仰を勝ち得た。大乗仏教思想の発展に伴い、７世紀以後、女性も成仏できる思想が生まれ、仏と同格の地位にある仏母という尊格が誕生し女性尊となった。チベットでは女児が生まれると、ターラー菩薩にあやかり「ドルマ」（ターラー菩薩のチベット名）という名前をつける習慣があったという。「白色ターラー菩薩」は延命・長寿・無病息災など、「緑

色ターラー菩薩」は商売繁盛・利殖・蓄財の効験があるという。よく見ると、額、掌、足裏に目がついている。

②釈迦牟尼と弟子・彼の二人の偉大な弟子。彼らの知的かつ神秘的な力は現在の儀礼に及ぶ。

③時輪曼荼羅(カーラチャクラ)・タンカ・曼荼羅の中央に描かれているのは「時輪金剛」(16 世紀カーラチャクラ)である。マンダラはサンスクリット語の音写語、意味は壇(祭場)・聚集・輪円具足とも訳され「円状のもの」をさす。大乗仏教が発展により悟りの境地を自らの心の内に銘記、抽象的な観念を曼荼羅と称し、仏の世界を心に映ずる曼荼羅を出現させる。「仏たちの聖なる世界」「宇宙の縮図」という言葉で明される。密教の世界では大宇宙は仏であり、仏の世界への導きの設計図となる。主に、チベットやモンゴルに伝播し、壁画や懸幅の「**タンカ**」となる。タンカはチベット文化圏(中国チベット自治区・ネパール・ブータン・モンゴル等)で発達し布に描かれた仏教画を寺院や内外の祭壇に掛けられる。



タンカ『チベット死者の書』

④時輪金剛

⑤ラクタヤマーリ

⑥六臂大黒天

④時輪金剛・１９世紀のカーラチャクラ。時輪金剛=カーラチャクラ尊サンスクリット語でカーラは「時間」、チャクラは「輪」をいい、時間の流れをいい、一切の悪に打ち勝つ力を持つ最強の仏、妃ヴィシュヴァ・マーターを抱いた図像で表し、父母が一つになり真の悟りを得ることをしめしている。

⑤ラクタヤマーリ・１７世紀後半、黒のタンカの美しさはピンクと青の光り。「ヤマーリ」とはヤマ(閻魔)とアリ(敵)の合成語で、「死神ヤマの敵」という意味となる。チベット仏教ではヤマーリには、青色ヤマーリ・赤色ヤマーリの二種が知られている。ラクタヤマーリは眉間に第三目を有し、水牛に乗り一面二臂で身色赤色の妃ヴェーターリーを抱擁する一面二臂像となる。チベットでは１４－１５世紀にかけて、ラクタヤマーリが多数制作された。鋳造仏像としては、ロシアのエルミタージュ美術館に、明の永楽年間(1403－1424)の銘記するものが所蔵されている。

⑥六臂マハーカーラ(大黒天)・３つ顔を持つ翼を持ち、６つの武器を持つ。１８世紀、マハーカーラはサンスクリット語でマハーが「大」、カーラが「黒」、あるいは「時」を意味することから、日本では「大黒天」と訳される。インドの起源の神で、日本に伝来して、神話の大国主命と習合

して、打出の小槌を持ち、背中に袋を担ぐ図像が成立した。チベットに於いては、仏教以前のボン教と呼ばれた土着の神と習合したと言われる。マハーカーラは本来ヒンドゥー教のシヴァの神との関係が深い神であったが、８－９世紀に入り、仏教の守護神となった。又、図像は一面二臂・一面四臂・一面六臂・八面十六臂などがある。チベットでは、マハーカーラが仏教を外敵から教団を守る護法尊とされている。したがって宗門や寺院の守護神として祀る寺院は多い。（①―⑥絵図と一部解説は『神聖な仏教徒と仏画』、解説引用は『チベットの仏たち』田中公明著・方丈堂出版より）

モンゴル仏教寺院を探訪

ガンデン・テンツェリン寺・は通称ガンダン寺という。モンゴルのウランバートルにある仏教の寺院である。この仏教寺院は１８３５年にジエブツンダンバ５世によって創建。ジエブツンダンバ８世の病気祈願のため観世音菩薩を建立した。１９３４年、ソ連邦の圧力でモンゴル国は１万７千人の僧侶が処刑され、ファシストの手先、反革命分子とされたラマ教僧８００の寺院のうち７６０寺が破壊され、１９３７年に１１万人いた僧侶は翌年には１１００人になった。現在の観音像はエルネト鉱山で採掘された銅製で金メッキが施され、モンゴル独立の象徴となっている。

ガンダン・テクチェンリン寺観音堂・右奥デチェン・ガルバ寺

ガンダン寺の観音菩薩・高さ２６ｍ、全長を金箔で装飾された、モンゴル国立の十一面観音像である。智慧の象徴である観音菩薩像は１９１１年の革命以前にはモンゴル人の信仰の中心であった。この観音像建立は、モンゴルの国家的事業として行なわれた。建立にはオチュルバトル大統領の肝煎りで１９９２年大統領発令で委員長にはエンカバヤール文化大臣が就任して、政府と国民が一体となり建立が進められた。

ラダック・アルチ寺の観音菩薩・（現在はインドカシミール州東部地方の呼称）嘗てラダック王国の仏教国で、チベット文化圏に属し、古チベット仏教のマンダラが残されている。アルチ寺の三層堂は、マンダラ壁画がラダックの文化遺産として紹介されている。菩薩像は塑像・赤色の弥勒・黄色い文殊・白い観音が高さ５ｍ、観音の腰に巻いたドーティ（腰布）にはさまざまな人物像や特定の場面が描かれている。①のガンダン寺の観音菩薩と安置のあり方はよく似ているので写真を載せてみた。

①ガンダン寺の観音菩薩（モンゴル観光局 HP より）

②ラダック・アルチ寺の観音菩薩（『チベットの仏教美術とマンダラ』森雅秀著）

ガンダン寺・仏塔

フレーツァム（仮面踊り）

フレーン・ツァム踊りを鳥瞰図で描いた絵図。中央に活仏の宮殿の広場でツァム踊りの演技、方角を護衛する人たち、忿怒護法神、土着民俗神、管弦吹奏楽の演奏家たち、観客、貴賓席に陣取った高位の人たちを描いている。フレーンとは、首都ウランバートルの旧都「フレー」に存在したズーン・フレー寺院において 1811 年から 1937 年まで行われていた「ツァム」のことである。一般的に仮面踊りのことを「チャム」（ツァム）といい、チベット仏教圏モンゴル、ブータン、ネパール、ラダック、内モンゴル、ブリヤード（バイカリ湖）「チャム」が存在する。又、ブータンでは「ツェチュ」、中国は羌姆・跳馬・跳舞・鬼神舞・金剛舞などという。

フレーン・ツァム踊りの絵画・1966 年・86 ㎝×120 ㎝・D、ダムディンスレン（ザナバザル美術館蔵）『フレーツァム』ハラガナ・ダシニャム・ガンガー著。『モンゴルの仮面舞儀礼チャム』木村理子著・風響社より

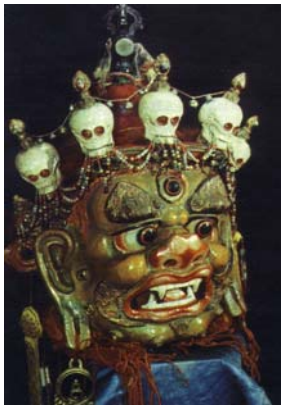
チャムはキリル文字表記により「ツァム」と称されるが、キリル文字表記以前にモンゴルでは「チャム」と称されていた。チャムの起源については、８世紀にインドからチベットに密教を伝授したバドマサンババが、チベットのサムイェー寺建立の地鎮祭と落慶式に鼓舞を取り入れ、悪魔退治を行なったのがその起源とされている。８世紀末までには、チベット人ラマ僧によってモンゴルを含むチベット仏教圏へと伝授されて行く。清朝時代には外モンゴルのハルハ（ハルハ河に

由来・外モンゴルのハルハ系部族、現モンゴル国民はハルハの子孫）の活仏（チベット仏教では高僧は菩薩の化身、僧侶の妻帯を禁じられているため、高僧が没すると４９日間に転生の子供を探がし出し教団に継承させる制度）は暦にのっとり継承を繰り返して、１９世紀半ばにウラバンバートルに定着した。２０世紀に入り、ソビエト化社会主義国家が建国されると、モンゴルは 1937 年―1939 年ラマ僧等が２５８２４人（ラマ僧６８％）の内、１４０００人余が銃殺刑に処せられた。モンゴルに７００ヶ寺以上の仏教寺院の内、５００種以上のツァムが行なわれていたが、革命期の粛清で、全寺院の破壊が及びツァムの伝統も消えた。現在、粛清をまぬかれた博物館等に展示されている仮面や衣装から再現する状態である。１９９２年ソ連邦からの分離独立後、外国人観光客を対象とした劇場等の「ツァム仮面踊り」が上演されるようになった。

ツァム踊り・は単なる仮面舞踊でなく伝法灌頂（優れた行者に阿闍梨の位を授ける儀式）を受けた僧が修行を許される密教儀礼である。現世利益を求める増益法・家内安全・延命長寿を願法・豊穣を願う請雨法・敵を倒す調伏法などの実践秘法が含まれている。そのためツァムは、口伝で継承される密教の秘儀であるため、寺院の伝統的ツアムを師から継承されて行くことになる。ツァム踊りは、身体を揺り動かしたり、頭を廻したり、跳んだり、足を踏みしめたり動作をして、心の活力で仏神たちと信仰を一般民衆との交信させる秘密の呪文の内容なのである。

初めは尸陀林主・ドゥルテッドダグワ・骸骨像2人が登場する

ドゥルテッドダグワとはモンゴル語で骸骨をいい、ホヒモイの意は「墓場の主」の意。ツァムが行なわれている間、登場者の出入り口に門番の様に立ち続ける。死後の墓場の番人。グゴルが黄色仮面と白色仮面が閻魔大王の通る道を払い清める脇役で仮面踊りを盛り上げる役目をする。



グルコ閻魔大王の露払い

尸陀林主・尸林とは墓場の意

仮面の写真は『フレーツァム』ハラガナ・ダシニャム・ガンガー著より

毘沙門天

吉祥天母護法神

マーヒ（種牛）

毘沙門天・は右手に標識、左手にネウレを持ちゴンカル護法神と共に出演する。財貨を豊かにし、貧困から救済する福神を指す。**吉祥天母護法神**・は健康で長寿生活を援助する神を指す。

マーヒ(種牛)・は閻魔大王の８人の女、の使者を代表して出演し、飛び廻り、角で突き、土地を掘り返す動作で踊る。人が健康で体力旺盛さを表現する。

ツァガーン・ウブグン(白い老人)・「国の長寿の神」と称されモンゴルのツァムだけに出てくる。仏教が伝来する前にシャーマン教から継承された土着の民俗の神とされる。白衣裳、帯に火打ち道具、小刀、タバコ入れ袋を差し、白髭、竜の飾り杖、仮面は微笑、絨毯の上に寝かされてツァム踊りに出演して、子供たちに悪ふざけされて老人を起こす。手足を伸ばし、酔い疲れたようなしぐさを演じて、観客の笑いを取る。

ダムディンチョイジル・閻魔大王・ツァム踊りで最も尊敬される中心的な役、ダムディンチョイジル・閻魔大王は最後に出演する。ダムディンチョイジルは黒青色で頭は種牛で三眼、炎の中におられる形態、忿怒相の仮面で現れる。閻魔大王は人間の生命、霊魂を保証する。死んだ人間界の主人であるツァム踊りの衣裳で飾り、頭蓋骨の血、骨の飾りをたくさん付けつけて踊る。

ダムディンチョイジルは、１０業(身の３業=殺生・偸盗・邪淫。口の４業=妄語・綺語・悪口・両舌。意の３業=慳貪・瞋恚・邪見)を裁き、１０善をとなえる守護尊として信仰されている。

ブータン国ではチャム踊りは３０種あり、その中の鹿踊は、鹿仮面の首を大きく廻して踊る様は、人間界の邪悪な悪霊を見出しそれを祓う。剣やつるぎもその武器としている。「生きとし生けるものが、幸せな世に暮らせるように」見ている人々の健康と平和に現世利益があるようにと、祈りながら踊る。仮面を被った瞬間から神になり、人々の利益を導く役目となる。仮面踊りは、仏さまに見られていることに帰結する。

ツァガーン・ウブグン(白い老人)　**ダムディンチョイジル・閻魔大王**　　**ブータンの鹿踊り**(西遊旅行社 HP)

(仮面踊り写真は『フレーツァム』ハラガナ・ダシニャム・ガンガー著より)

ツァム仮面踊りを・『チベット死者の書』から考えてみる

日本で言えば雅楽に近い。ツァム仮面踊りを理解するために、『チベット死者の書』河邑厚徳著・ＮＨＫ出版・1993・「仏典に秘められた死と転生」を引用する。輪廻転生について考える書である。『チベット死者の書』のチベット語で書かれた経典は『バルド・トドゥル・死者の書』という訳になる。この経典の語り(読経)は、僧侶が死に臨む人の耳元で、死の直前から語りを始めて、死後４９日間に渡って、延々と語り聞かせる、あの世に「引導」(死者の導き)を渡す読経である。チベット語の「バルド」(生と死の中間)状態を表し、「トドゥル」は耳で聞いて解脱するというよ

うな意味を持つ。『バルド・トドゥル』の読経では人が死ぬと「バルド」という別の状態に入って行くと説明している。「バルド」は中間、途中という意味であるから、死は終わりではなく一つのプロセスに過ぎない考え方である。人がそれぞれの肉体をもって生きているのは、一つの過渡的な状態にあり、生命とは、生と死を繰り返す大きな旅の途中であると説いているのある。

臨死における光の導き・『バルド・トドゥル』の経典は、死を迎えようとする人の枕元に僧侶が座り、耳元で声に出して、この経典を読みきかせる。死の前から読みはじめられたこの経典は、死者が荼毘にふされた後も、４９日間、毎日読み続けるのである。４９日間のタイムリミットの間で、チベット仏教では、解脱の最大のチャンスと捉え、死者が入って行くバルドの状態は中間的で、現世の条件にとらわれないので悟りを得やすく、解脱へ向わせる経典なので、僧侶が意識の無くなった人に大きな声で経典を読みはじめる。

「今こそ、あなたが道を求めるときです。まもなく、あなたの呼吸が止まるでしょう。そのときに、最初のバルドの強烈で美しい光が現れるのです。この光が、あなたの命を作っていた本質です。その光と一つにとけあうのです。」

――中略――

「あなたが動物として生まれ変わるのであれば、岩の洞窟、地面の穴、そして藁葺きの小屋に入ってはなりません。あなたが餓鬼として生まれ変わるのであれば、朽ち木や崩れかけた洞穴に入れば餓鬼として生まれ変わり、飢えと渇きによってあらゆる種類の苦しみを味わうことになるでしょう。したがって一歩も足を入れずに去ることを考え、断固として抵抗しなさい。

――中略――

１日目の幻影、ヴァイローチャナ=毘盧遮那あらわれ

２日目はヴァジュラサットヴァ=金剛薩埵あらわれ

３日目はラトナサムバヴァ=宝生如来あらわれ

４日目はアミターバ=無量光如来あらわれ

５日目はアモーガシッディ=不空成就菩薩あらわれる

と、最初の７日間は微笑をもった密教の５仏の明王が次々に現れる。８日目からは血をすする怒りの仏たち、忿怒尊の幻影がはじまるのである。

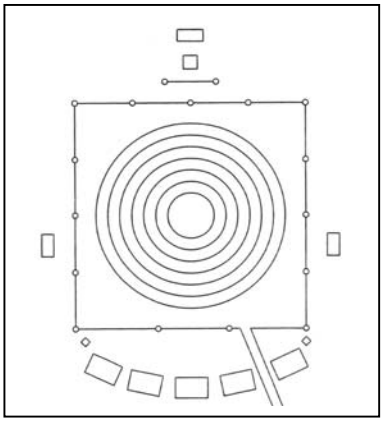
「彼を恐れてはなりません、怯えてはなりません、うろたえてはなりません。彼があなた自身の心の一形態であることを覚りなさい。彼はあなたの守護神なのですから恐れてはなりません。彼の真の姿は毘盧遮那男女両尊なのですから、怯えてはなりません。」

――中略――

「高貴なる生まれの者よ。あなたが覚ることがなければ、血をすする神たちすべてをヤマ王=閻魔王と見て、恐怖し、うろたえ、気絶してしまうでしょう。(略)これらを恐れてはなりません。現象の世界のすべては光の幻影として現れます。これらに現れたすべてを、あなた自身の心から発した光明と覚るべきです。そうすればあなた自身の光明が幻影と混ざり合い、あなたは仏となるでしょう。」と説き聞かせるのである。

『モンゴルの仮面舞儀礼チャム』木村理子著・風響社より引用させていただきます。「死後、魂は４９日間、「バルド」中有（死から転生する日間）をさまよい、その間、最初に菩薩たちと出会い、続いて、７日目から恐ろしい形相の忿怒尊と出会うとされている。外チャム会場の地面に描

かれる７重の円は、この４９日間バルドの中の忿怒尊と出会いまでの７日目を象徴している可能性があると考えている。たとえば、外チャムの冒頭、尸林(墓地)の主される骸骨の姿をした２名のドゥルテッドダグワが登場し、７重の円上を走り回り、その後、忿怒尊とその眷属(一族）が入退場する出入り口に門番のように立っている。ドゥルテッドダグワの立ち位置が死後の世界との境界線になり、７重の円が生の空間に顕現された死後の世界であることを示すものと推測される」と、説明されている。



右はフレーツァムの七重円を描く踊り

モンゴルの活仏の歴史・解脱した人は仏となって、この世の衆生を救うために、この世に転生してきた人をいう。すなわち活きた仏である。チベット仏教では僧侶の妻帯を許されていない。高僧は菩薩の化身であるので、何度も生まれ変わって衆生の救済にあたる歴史を１３世紀から続いている。高僧の死後４９日以内に、高僧の生まれ変わりの赤ん坊を青海省やチベットから捜し出し、教団が養育する。その子供が高僧の転生仏として、教団の財産を継承する。活仏転生制度は清末代までに２４３人の活仏が誕生していたという。

民間信仰・オボー祭り・オボーとはモンゴルの小高い山の上や峠に見られ、土地の守護神の宿る石が堆積されている所がある。オボーを祀るにはまず柳の枝を立てそれに絹の布(ハダグ)や馬の絵とチベット語の経文の印刷された布・チベットのルンタ(経文を印刷した魔除けと祈りの旗を結び付、飾りつけた後、ラマ僧が経を読み邪気を祓う。モンゴルの人々は、山や川には、それぞれの神様が住んでいて、その中でも一番偉い神様は天に住んでいるという宗教感を持っている。人々は天の神様に生贄を捧げる時、天の神様がわかりやすい目印に石を積んで小山にする。旅人はこのオボーを道標とし歩き、旅の安全を祈り、その時必ずやる祈りの儀式は、小石やお金、馬の鬣を３本引き抜いて、オボーの上に置き、そして厳かに、「オボーよ、大きくなれ、私の富も大きくなれ」と３遍唱えて「福」を招くのである。

峠のオボーで３回廻って祈願する

写真は峠のオボーで、草競馬に行く人たちが、旅の安全と、競馬でお金が増えますようにと、みなさん唱えていると、ガイドは説明してくれた。

ウランバートルから東北東へ５０キロテレルジ村にアヤバル寺院

アヤバル寺院のマニ車

マニ車の経文・マニ車に巻かれている経文は、真言の「オムマニペメフム・観音の信言、「パドマサンバワ・蓮華生」、「ジャムペーヤン・文殊菩薩」等がある。

ウランバートルから東へ約７０ｋｍ・テレルジ村寺の内部

チベットの風景・**ポタラ宮(布達拉宮)**

ポタラ宮(海抜 3700m)・紀元７世紀吐蕃(とぼん)(チベットの古称)のソンツェンガムボ王は唐の文化姫を花嫁に迎えるために宮殿(東西 400m)を築く。1959 年まではチベットの政教一致の統治中心であった。

大昭寺(ヂョカン寺)・ラサの中心にあるヂョカン寺は７世紀中頃に建造された。チベット人なら生涯に一度は訪れたいと願う寺で、ポタラ宮と共にチベット族の重要な信徒の巡礼の聖地となる。

大昭寺(ジョカン寺)

ジョカン寺巡礼者の五体投地

第8章・韓国編

朝鮮半島への仏教伝来は、中国に仏教が伝わってから３００年後となる。北の高句麗・西部の百済・東部新羅の三韓の時代(１－５世紀朝鮮半島南部に実在した馬韓・弁韓・辰韓)に始まる。まず仏教は中国から３７２年に高句麗へ前秦の王符堅が順道という僧を遣わし仏像と経文を伝えた時より始まる。次に百済へ１２年後に３８４年に東晋から胡僧の摩羅難陀が伝えた。百済第26代の聖明王(523－553在位)の時代に伝えられ、後、百済から日本へ伝えられた。新羅に仏教が入ったのは、第１９代訥祇王(417－457在位)の時代に、墨胡子(『海東高僧伝』(朝鮮古代三国の高僧の伝記)に阿道(朝鮮半島に4世紀に仏教を伝える)とあって、高句麗から新羅へ伝えたという。

高句麗の仏像・中国北朝の仏像の影響を受けている。朝鮮半島で最古の紀年銘を持つ「延嘉七年・539」銘の金銅造如来立像は円筒形の体躯で、かすかな微笑、左右対称に張った法衣、火炎文様の光背、６世紀初め高句麗仏像の美を明確に表している。(『世界美術全集東洋編10』より)

百済仏教・５４１年に百済は梁の武帝(中国皇帝)に朝貢して『涅槃教』などの経典と、工匠・画師を求め、梁を中心とする江南の仏教が伝えられた。百済時代の仏教芸術は、錦江河畔の扶余の定林寺址の石仏と五層石塔、忠清南道瑞山郡の磨崖仏三尊仏像(中国南北朝の様式・頁126)がある。百済仏教は戒律仏教で、599年には、殺生を禁じていた。

如来立像・高句麗539年・慶尚南道・銅造鍍金・高16、2㎝・国宝119号・ソウル国立博物館

新羅の仏教・新羅第３０代文武王は、唐の援軍を受けて高句麗(前 37－669)・百済(346－660)の両国を滅ぼし、半島統一したのは６６９年となる。仏教教学は唐の法相宗や華厳宗が入ってくる。新羅滅亡の９３５年頃は朝鮮仏教の興隆期となる。新羅(356－935)・高麗(918－1392)時代に華厳教は元暁(618－686)と義湘(625－702)の二人の高僧を輩出し共に入唐したが、元暁は途中で取り止めた。元暁は「疏」(経典の注釈)を著わし『華厳教疏』『大乗起信論疏』でも中国でも重要視された。彼は非僧非俗の生活して、妻帯し子をもうけ坐禅や念仏を広めた。これに対して義湘は６６１年に入唐して智儼(中国華厳宗二祖)に華厳を学び、６７０年に帰国して浮石寺を創建し海東華厳宗の初祖となる。朝鮮の仏教学の主流が長く華厳が続いたのは元暁や義湘の功績が大きいと云われる。

前期においては法相宗や華厳宗の哲学仏教が移植されたが、後期になると中国の南宗禅が本格的に流伝し、ここに実践を重んじる禅仏教が朝鮮仏教の主流を形成して行く。今日でもその仏教哲学の根本をなす、教義は利他(他人に利益となるように図る)・普済(布教)のためであり、禅は自力修行と解脱のために必要する実践的に努めている。

新羅の浄土教が一般庶民に浸透して行くのは7世紀なってからである。身分制度が厳しい新羅社会にあって、身分に関係なく西方浄土に往生できる教義によって信者を得た。7世紀後半、元暁の念仏踊りが民衆化に拍車をかけ、念仏と禅が双修された仏教が朝鮮半島に定着するに至った。現代も念仏と禅とが結び付いた仏教が朝鮮半島特有な形となっている。

(参考文献『仏教史Ⅱ』玉城康四郎編・山川出版社)

華厳宗・太白山浮石寺・慶尚北道・栄州市

白山信仰は満州ツングースの白山部という部族の白信仰である。朝鮮の金剛山の頂は「白峯」は死と再生の常世と冥界の出入り口となる。神仏習合の白山権現は古朝鮮の降臨神話の「太白山(江原道・慶尚北道)・小白山(忠清北道・慶尚北道)」信仰である。白山信仰は朝鮮名の白頭山・中国は長白山・２７４４ｍとなる。

奈良の東大寺は華厳宗の寺で華厳宗は唐の時代に成立した宗派である。日本に伝えられて東大寺が成立し『華厳経』の本尊は昆盧遮那仏である。昆盧遮那は梵語バイローチャナの音訳語で、その意味は「光明遍照」となる。真言宗では「大日如来」と訳す。太陽の光明をモデルとした仏教の中の最高仏名が、昆盧遮那仏となっている。

華厳宗開祖杜順（557－640）２祖智儼（602－668）３祖法蔵（643－712）４祖澄観（738－839）５祖宗密（780－839）は『華厳宗』よりも『円覚教』に多くの註釈書を書き、宗密の思想は中国でも重視されたが、大きな影響を与えたのは韓国仏教においてであった。(86 頁参照)

浮石寺無寿殿・高麗 13 世紀(『世界美術全集東洋編 10』)　**浮石寺の建設の妨害者を退治する**(観光局 HP)

韓国の栄州に太白山系の山の麓に華厳宗の浮石寺がある。浮石寺は新羅の時代に義湘大師が開いた寺で、義湘大師は唐に留学し、華厳宗の第二祖智儼に師事し華厳を学んだ。故郷新羅に帰国すると、国王の命をうけて華厳宗の根本道場を建てようとした。ところがこれに反対する僧たちが妨害し、その時、義湘を守っていた竜が大きな石に化けて空中に浮かび、反対する僧たちを押し潰そうとした。巨石が空中に浮かんだので、その因縁によって浮石寺という名称がついた。

巨石に化けた竜とは、実は、善妙という尼僧の化身であったのである。義湘が唐の都長安で修行中、一人の女性に恋され、義湘は祖国の王の命で華厳の教えを学ぶために唐に留学していることを伝え、自分はその使命を果たさなくてはならないので、あなたの愛を受け入れることはできないと断る。すると、その女性は出家して尼僧となり、義湘と共に華厳の教えを学んだ。ある日、国王から帰国命令が届き、義湘は善妙に帰国を伝えず長安をあとにした。善妙が三東半島の登州(山東省蓬莱市)の港に来た時は、義湘の船が岸壁から離れてしまっていた。善妙は絶望し、海に身を投げてしまう。すると善妙の体は大きな竜となり、義湘の乗った船を守るかのように並んで新羅の国に向かったのである。そして浮石寺を建立する時、巨石となって義湘を守ったと伝わる。

この悲恋物語を聞いた日本の明恵上人(鎌倉時代前期・華厳宗の僧・1173－1232)が『華厳縁起絵巻』を弟子と画工に命じて描かせた絵巻が、京都郊外の高雄の高山寺に伝えられている。絵巻は現在京都国立博物館秘蔵となっている。

浮石寺無量寿殿・浮石寺の背後に巨石があるのは、古代新羅において大きな石仏や石塔が数多く造られたことを考え合わせると、あるいは古代の巨石信仰と結び付きがあったのではないかという想像が掻き立てられるのである。

『華厳宗縁起絵巻』・京都国立博物館秘蔵

義湘絵第２巻より・善妙、義湘にに出会う

第３巻より・義湘の帰国を知り、善妙は贈り物を用意する

第３巻より・善妙、義湘の後を追って入水する

第３巻より・竜となった善妙、船を背負って行く

善妙神立像

善妙神立像・湛慶作（鎌倉時代）と伝わる。

高山寺華厳宗の守護神で善妙寺のために造られたものかどうか判らないが、尼寺にふさわしい可憐な木彫である。『明恵上人』白州正子著によれば、善妙寺建立は承久の乱の２年後、の貞応２年（1223）となる。この乱で夫を亡くした夫人たちが明恵上人を頼って高山寺に集まってきた。夫を亡くし、尼になった夫人たちの心を慰めるために

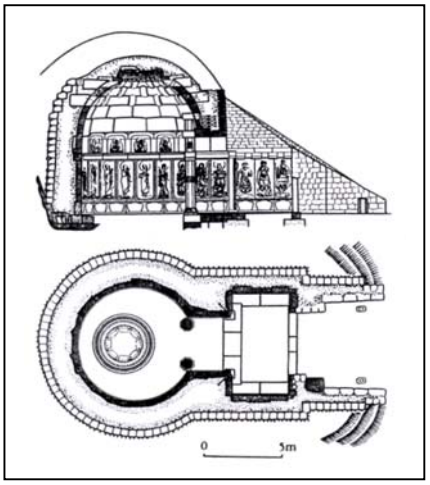
作ったものであろうか。明恵の父親は頼朝の挙兵に駆けつけ、平重国に父親を討たれた。１６歳の時に文覚(鎌倉時代初期にかけ武士・真言宗の僧)に師事、その辛苦の経験が人間味のある絵巻を描かせたものなのであろうか。両手に金色の蓋の宝篋(宝篋印陀羅尼を納める箱)をささげ、白色肌に緑や赤色の文様の唐衣をまとい目はきりりとし、朱唇の女性に作られている。高さ３１ｃｍ・

善妙神立像『明恵上人』白洲正子著より

韓国の石仏・磨崖仏

石窟庵・統一新羅時代・韓国慶尚北道慶州市

発見時の写真(Wikipedia より)



石窟庵の側面と平面図**『朝鮮を知る辞典』より**

石窟庵(ソックラム)・仏国寺の背後の吐含山頂にある石窟寺で、新羅景徳王１０年(751)宰相の金大城(700－774)が仏国寺の付属石窟として建造と伝える。内部は前室・扉道・主室の３室からなる。ドーム型の主室に本尊丈六(１丈６尺・４、８５ｍ)の釈迦像を安置し、周囲には浮彫をパネル状に円形に並べている。石窟庵の完成には２０年の歳月を要し、世界美術史上で最も偉大な作品が、侵略の歴史経てなお原形をとどめているのは奇跡である。

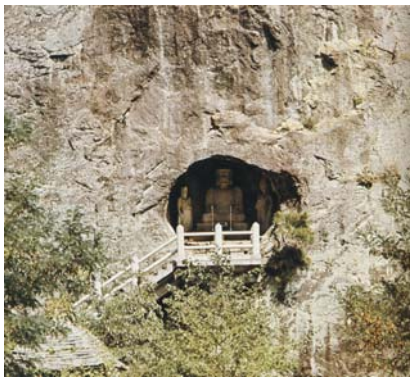
８世紀中葉の仏像の中で石窟庵の降魔触地印の本尊如来坐像は豊満な身体と、堂々とした姿勢、簡潔な衣襞(衣のヒダ)など、インドのグプタ様式(400 年頃に栄えた北インドの王朝・アジャンタ石窟寺院など)を反映した完璧の偉大な彫刻品の一つである。

１９０９年に郵便配達員が吐含山(霧と雲を含んで吐く)の峠で豪雨にあい、逃げ込んだ洞窟で偶然に仏像を発見した。韓国観光公社の説明によれば、石窟庵は新羅の景徳王１０年(751)に、当時宰相の金大城が建立、「石佛寺」と呼ばれた。石窟は前面が四角くて後ろは丸い。本尊佛を中心に菩薩像・羅漢像・居士像・四天王像・仁王像などが彫刻されている。花崗岩を加工して組み立て、洗練された彫刻技術で仕上げた傑作である。『三国遺事』に金大城が前世の父母のために建立したと伝える。

１９９５年に４km 離れた仏国寺とともにユネスコ世界遺産に登録された。仏像は韓国国宝・第２４号に指定されている。

石窟庵・如来坐像・751－775 年頃

軍威三尊石窟・三尊仏・７世紀・統一新羅時代



軍威三尊石窟外景

本尊像 2、88m・国宝 109　慶北軍威

慶尚北道軍威郡缶渓面南山里。自然の洞窟(深さ 4、3m・間口 3、8m・高さ 4、25m)につくられた石窟寺院であり、韓国石窟寺院史上重要な位置を占めている。７００年頃造営という。朝鮮半島古代の仏像は三尊像をもって単位をなしている。この軍威像の右立像の頭上に化仏(如来が出現までの仮の仏形)があり、左像の頭上には宝瓶(密教での灌頂の水を入れる器)があることで阿弥陀三尊仏であるという。八公山の巨大な岩壁に丸い洞窟に三尊仏が安置されている。1962 年に発見され第２の石窟庵とも言われる。(『仏像』韓国美術全集５より)

微笑する野仏・瑞山磨崖三尊石仏・百済７世紀

忠清南道瑞山市雲山面、瑞山はソウルの南西約１００ｋｍに位置する。瑞山磨崖仏は、７世紀に瑞山郊外の山の中腹に彫られていている。中国への交易路に重なり、交通の安全や商売繁盛の信仰とされていたのであろうか。いずれも微笑を浮かべた像は、本尊仏は高さ２、８ｍ、右に１、６６ｍの弥勒菩薩半跏思愈遺惟像があり、右脚を左手で抱えて坐している。左に１、７ｍの観音菩薩立像は両手に宝珠を持っている。この三尊像は「百済の微笑仏」と呼ばれ、百済の仏像の特色を示している。

『国宝』韓国 7000 年美術大系２の解説は、「中尊は温和な微笑を浮かべた円満な相好(仏の身体に備る特長)に、堂々とした体軀(体つき)を備えた立像である。宝珠形の頭光が極めて印象的で、耳・目・口・鼻がくっきりと表現されている。法衣を通肩に印相は右手が施無畏印を、左手は与願印を結んでいる。このような印相は三国時代に共通して見られる様式でもある。左右の脇侍菩薩像は共に頭部の周囲に蓮華文を陽刻した宝珠形の頭光を備えており、台座には蓮華台座が施されている。左は宝珠をつけた菩薩立像、右は半跏思惟像であることが特徴である。この三尊仏は三国時代最古の磨崖像の一つに数えられる。」とある。

百済・国宝８４号・三尊仏像

(『世界美術全集・東洋編 10』より)

伽倻山渓谷東面にある端山磨崖三尊仏

堀仏寺址石仏像・８世紀・慶北・慶州市

新羅全盛期、景徳王が都の北の山裾にある栢栗寺に行幸され時、地中から念仏の声が聞こえたので掘ってみると４面石仏が現れたと『三国遺事』に記されている。巨石の４面に仏を彫らせたのは新羅８世紀中頃と思われる。西面阿弥陀三尊を大きく刻み、左右の菩薩立像を別に彫刻されていて当時の信仰形式を知ることができる。宝物 121 号(『国宝』韓国 7000 年美術大系２より)

掘仏寺址・阿弥陀三尊・高さ 3、51m

南山七仏庵磨崖石仏・中尊像高 2、66m・脇侍 2,1m

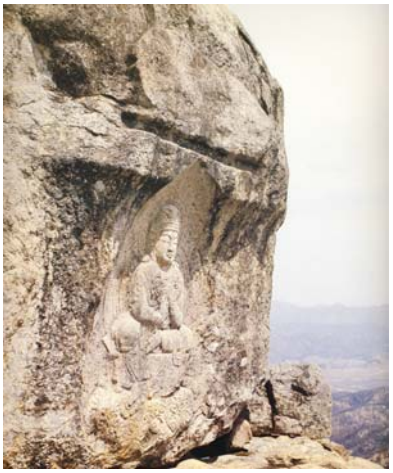
慶州・南山七仏庵磨崖石仏・統一新羅８世紀初期・宝物２００号・慶尚北道慶州市

『国宝』美術大系２の解説は「七仏庵は南山里渓谷の奥深い所に位置し、南東方をむいて三尊仏が浮彫りで刻まれ、その前面にある四面体岩の各面に、如来像が１軀(からだ)ごとに４軀刻まれている。三尊像は、８世紀初頭の中国唐時代の彫刻像などと密接関連性が見られ、優れた作品で８世紀に流行した降魔触地印の初期的様式を代表する作例である。三尊仏形式は中国では、７世紀後半から８世紀に「石造如来三尊像」としてあらわれ、これは７世紀後半、唐の求法僧たちがインドへ留学してインド彫像を見聞したことによると考えられる。」とある。

慶州・南山神仙庵磨崖菩薩半跏像・８世紀後半・宝物１９９号・慶州市南山洞山

本像は慶州南道にある七仏庵後方の高い絶壁の南東面に刻まれている。この像は舟形の龕形内に半跏の姿勢で座して、像の背面には３本の線で刻まれた円形の頭光と身光がある。頭部には三面宝冠を被り、顔面は豊満で慈悲に満ちた微笑を浮かべている。天衣は流麗に流れて台座を覆い、その下方には雲文が華麗で装飾的に表現されている。(『国宝』美術大系２より)

南山神仙庵菩薩半跏像 1、4m



同・雲の上に坐している様な菩薩半跏像

月城骨窟磨崖如来坐像・高４m

月城骨窟寺磨崖如来坐像・９世紀・宝物５８１号・慶州市陽北面安洞里

含月山の麓に位置する骨窟寺。骨窟庵は祇林寺に行く渓谷にある。仏坐像は浅浮彫で造ってあるが、石質が軟らかいためか、下半身と胸部が破損している。頭髪の肉髻(頭頂部に高く椀形のもとどり)が大きく盛り上がり、顔面には耳・目・口・鼻がはっきり表現されている。衣褶線が斜めの線が数本の規則的な平行線で刻まれ、両腕から垂れた衣褶線は柔らかいＶ字方をなしている。この磨崖仏は顔の古式な表現を根拠に、７世紀末頃と見られるが、衣褶線の表現等から見て、９世紀中頃以後の造像とも考えられる。(『国宝』韓国 7000 年美術大系２より)

韓国と日本の弥勒菩薩半跏思惟像について・(はんかし(ゆ)いぞう)

片足を他の片足の股の上に組んで座り、指を頬に軽く当てて物思いにふける釈尊の姿を表現したものという。人間の生老病死について悩み、瞑想にふける出家前の釈尊の姿を表現。釈迦は姓をゴーダマ(最上の牛の意)名をシッダールタ(悉達多・目的を達成する)王子が出家して、弥勒菩薩は修行している仏陀の姿を像にしたもの。日本へは、朝鮮の三国時代(高句麗・百済・新羅)に伝来、とくに新羅の仏像が７、８世紀に弥勒菩薩として制作された。ソウル国立中央博物館の半跏思惟像が、京都・広隆寺、奈良・中宮寺の半跏思惟像とよく似ていることで有名である。

①金銅弥勒菩薩半跏像

②同国宝８３号

③京都・広隆寺

④ガンダーラ・半跏思惟像

①②『韓国美術全集５仏像』より　③の写真「ウィキペディア」より　④松岡美術館蔵より

①金銅弥勒菩薩半跏像・７世紀・国宝７８号・高８０㎝・ソウル国立中央博物館蔵

新羅６－７世紀。国宝８３号と共に韓国の金銅造半跏像の最大傑作一つである。新羅６、７世紀にかけて金銅製、高さ８０㎝、この像の出土した場所はよく分らないが、忠清南道の僻村の説がある。像は頭上に華やかな宝冠を戴き、左右に宝塔を装飾している。右手で顎を微かに支え、左手は下にして半跏坐した右脚の上に置き、左脚は蓮華座を踏んでいるなど、典型的な半跏像の形式を備えている。素材の銅の厚みは２－４ｍｍ、優れた当時の鋳造技術がわかる。

②　銅勒菩薩半跏像・７世紀・国宝８３号・高９３、５㎝・ソウル国立中央博物館蔵

新羅７世紀。韓国仏像彫刻の中で最優秀作に数えられる菩薩半跏像である。頭部に三山形の宝冠を戴き、頚部に三道を刻み、円形の台座に裙が立体的に垂れて彫刻美を増している。この形姿は日本の京都の広隆寺像とよく比較されて来たが、近年の研究により、広隆寺像が新羅で造像された可能性が指摘されている。元来、半跏像は悉達多太子像(釈迦)としたもので、それが弥勒世界を造形化して思惟像として形式化されたものである。

③ 広隆寺の弥勒菩薩半跏思惟像

京都広隆寺にある飛鳥時代の作、我が国の国宝第１号彫刻で、創建当時は本尊と伝えられる。赤松の一本造りで高さ約１２４㎝。右足を左膝に乗せ、右手をそっと頬に当てて、物思いにふける半跏思惟像で、微かに微笑を浮かべた表情は、日本人に好まれる祈りの姿像である。又、韓国においても、半跏思惟像も好まれる信仰の形となる。

④ガンダーラの菩薩半跏思惟像・（松岡美術館蔵）

松岡美術館像のガンダーラコレクションの代表的な作品で、籐の台座に腰掛け、右足を左膝にのせ、左手に蓮華を持つその思索する姿は衆生を救済するべきか熱慮している姿だと云われる。

ガンダーラ地方の現ペシャーワル周辺に紀元前後につくられた像で、半跏思惟像仏教美術の伝播道はその壮大な歴史の繋がりを韓国や我が国に観ることができる。

朝鮮半島のシャマニズム・朝鮮のシャマニズムはシャーマンである巫覡（神に仕えて祈祷や神おろしをする者・女を巫（めかんなぎ）、男を覡（おかんなぎ））を中心とした呪術宗教的信仰で巫俗ともいう。古代において巫俗は国家宗教の位置を占め、新羅王は一種の巫王であった。新羅末期（９世紀）になると、仏教の影響を受けて巫仏習合化が進み、朝鮮巫俗の新しい展開となる。高麗時代には儒教が採用されて巫俗が抑圧されたが、国家的行事の祈雨祭や八関会（山・川・竜神に収穫の祭礼）は巫覡が司祭した。李朝では儒教を国教として巫俗を抑圧してきたが、巫俗は絶えることなく、儒教思想になじまない女性を中心とした信仰として続いていた。

巫覡は主に降神を得て占いやクッ（歌舞賽神）などの巫儀を行う宗教司祭者である。巫女のムーダン（巫堂）、男巫のムーダンはバスク（博士・占い師）と呼ばれる。ムーダンの概念は、巫病（シャーマンになる異常心理状態・トランス状態）を通して降神を受け、クッという巫儀を行い、いわゆる降神巫をさす。

「クッ」とは幸運、幸福を意味するウラル・アルタイ系言語に起原する朝鮮固有語で、巫が歌舞賽神を中心に行う除災招福のための宗教的儀礼である。賽神においては激しい歌舞を通じて憑依状態になって神おろして神託を述べる。クッには様様な種類があり、地方によって巫服、巫具、巫舞、巫歌、巫楽などの特色がある。その目的により財数クッ（祈福祭）、憂患（治病祭）、死霊クッなど個人の家で行なわれる家祭と、村や部落を単位の村祭がある。クッのそれぞれ異なる神を祭るコリ（巨里）という独立性をもつ祭次によって細分されている。コリは巫が降神を祈る巫歌を唱え跳舞して降神を受け、神託を語り、再び跳舞して送り神する。

「クッ」は扇と鈴を持って歌と舞とを神に奉納『朝鮮を知る辞典』平凡社より

クッの祭神は成造（家屋）神、帝釈（産）神、大監（屋敷）神、祖上（祖先）、山神、天然痘神など人間に関連した多くの神々である。広義の概念に学習によって経文を読み読経逐鬼をする。これらを巫は、多くは盲人で盲覡とも呼ばれ、盲人が先輩盲人から口伝で読経を習い、一人前になる過程となる。日本の恐山の巫女たちと同じ修行過程は同じ様で、平たく言えばクッは家内安全、無病息災を願い、死者の霊を依頼者に呼び寄せるために、巫女は歌い踊り、神さまを喜ばせるシャーマンの儀式する。派手な衣裳を着て、あの世とこの世の人の想いを橋渡しするのがクッ(巫女)である。

韓国古寺巡礼

月精寺（げっせいじ）・江原道平昌郡珍富面東山里

山号五台山・曹溪宗（戒律宗→教宗→曹溪宗）は韓国仏教界最大勢力となる。戒律宗の開祖である慈蔵律師（新羅僧・636 年入唐）によって６４３年に創建された。李氏朝鮮時代（1392－1910）に入り儒教が国教となり仏教は弾圧された。全国に１万以上あった寺院は 242 寺に限定された。

世宗の治世（1424 年）に７宗派が統合され、２派 88 寺院となる。この 88 の寺院から禅宗 18 寺、教宗 18 寺の 36 寺院となり、韓国の仏教は衰退したが、月精寺は生き残れた。

月精寺には高麗時代の仏教文化を見られる聖宝博物館と、仏舎利塔は高麗時代の八角九層石塔の国宝第４８号と、石造の薬王菩薩坐像がある。日本統治時代の１９１１年７月８日付けによって、朝鮮三十本山に指定されていた。後、朝鮮戦争によって全焼する。現在の建物は１９６４年以後に再建されたものである。ここ五台山は海抜 1563mの昆盧峰・虎嶺峰 1531m・象王峰 1493m・頭老峰 1422m・東台山 1434mの５峰が連なる所にある。

月精寺・戒律宗開祖慈蔵律師による 643 年に創建・月精寺八角九重石塔（国宝第 48 号）高麗中期１５、１５ｍ

李朝崇儒排仏・（李朝時代 1392 年―1910 年）

李朝になると崇儒排仏の政策をとったため仏教は衰退した。李氏朝鮮の文化政策は儒教の一派朱子学を尊重し仏教を弾圧した。太祖の李成桂（朝鮮李朝初代国王・在位 1392－98 年・李成桂は紅巾の乱、女真、蒙古、倭寇などの討伐に大きな功積をあげる）は仏教に帰依していたので弾圧はゆるかった。３代太宗の太宗７年（1407）から朝鮮半島の仏教寺院廃仏が始まり、国家統制下に置かれた。仏教を国家鎮護宗教の政策をとらず、朱子学国家の方針にしたことにより、朝鮮半島の仏教は著しく衰退した。

朝鮮半島の北東アジアへの仏教伝来考える・北東アジアの国々の盛衰をみる。

渤海国・（698 年―926 年）満州から朝鮮半島北部、現ロシアの沿海地方。日本との交流ある。

『新唐書』に、渤海は粟末靺鞨（ツングース系諸族、７部あり、中国側の呼び名）であり高句麗に従属していた。靺鞨は中国東北部にいた農耕漁撈民族、後に高麗遺民と共に渤海国を建国した南の粟末部（勿吉）と、後に女真族となり金朝、清朝を建国した北の黒水部（黒水靺鞨の外 16 部あ

り）と２つの部族があった。

契丹国(遼朝)・契丹族・内モンゴル（916 年―1125 年）・契丹は４－世紀から１４世紀にかけて、満州から中央アジア地域の半農半牧の民族。１０世紀初頭に建国した国号を「遼」と号した。

金朝・女真族・内モンゴル（1115 年―1234 年）・女真は満州の松花江一帯から外興安嶺以南の外満州から朝鮮半島北部にかけていたツングース系民族。１７世紀、満州と改称した。後の清朝。

元朝・外・内モンゴル（1271 年―1368 年）・元はジンギスカンの孫のフビライが、北京に都した中国のモンゴル王朝。1368 年、中国明朝に中国本土を追われ、モンゴル高原に撤退して、北元として再興をはかっていたが、1388 年に明軍に討たれ滅亡する。

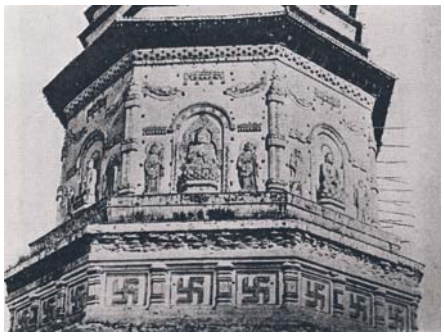
明朝・漢民族・南京（1368 年―1421 年）北京（1421 年―1644 年）

中京城内八角十三重塼塔・内モンゴル自治区東南部・赤峰市寧城県の中京城址

契丹国には五京（上京・中京・西京・東京・南京）と呼ばれる都市が存在し、それざれの地域での統治・防衛・交易の拠点となっていた。その中京城に民族学者鳥居龍は満・蒙に９回にも及ぶ調査を実施し、明治２８年から昭和１０年までの華北調査は実に４５年間にわたる。『鳥居龍蔵全集第六巻』朝日新聞社より、八角十三重塼塔抜粋で紹介します。

「遼の中京城内遺存の二石像考」昭和 25 年６月刊・燕京大学哈仏燕京学社・燕京学報第 38 期。

①中京城内八角十三重塼塔の全景



②同塼塔・中央（南面）は金剛界大日如来

現在の赤峰市寧城県の大塔

中京城大塔の注釈に次のようにある。《中京城内には、三基の塼塔がある。最大のものは城内の東壁に接近しており、第二のものは城内の中央にあり、第三は西の城壁外にある。後、城外のものは大半倒潰してしまったが、第一の大塔のみはなお完全なものとしてある。この塔は、遼代の塼塔の中でも最大のものということができる。この塔は十三層である。第一層には、金剛界大日如来、菩薩、明王などの像が彫刻されており『大妙金剛大甘露軍拏利焔鬘熾盛佛頂経』の意味を表示している。》と解説されている。

①の写真「塔下の蒙古乗馬隊は我が一行」とある。②の写真「大日如来左右の満州文字と下部の卍は後に入れたもの」とある。（①と②は鳥居龍三隊撮影による）

補足。大塔を最近の調査報告として、藤原崇人（ＡＡ研共同研究員、大谷大学）《密教世界としての契丹（遼）・2005－07 年調査」より大塔を補足赤峰市寧城県の中城址に在する大塔（通称大明塔）は八角十三層の密檐磚式、高さは 80、22ｍを誇る。初層八方壁面には、中央仏龕に主尊坐像を、その両側に脇侍立像を配置し、各壁面は、上層に八大霊塔名を、下層に八大菩薩名を陰刻した二層塔の浮雕をもって区切る。主尊は南壁が金剛界大日如来、他壁が螺髪形の一般的な如来、脇侍は四方壁が菩薩、四斜方壁が力士である。

四方壁の脇侍八菩薩像について、像容を分析した結果、西壁（左観音・右地蔵）、北壁（左虚空蔵・

右慈氏)、東壁(左金剛手・右普賢)、南壁(左除盖障・右妙吉祥)であることが判明し、南壁を正面として八大菩薩曼荼羅を忠実に再現していることを確認した。》と解説されている。

補足。八角十三層の密檐磚式・インドマディヤ・ブラデーシュ州のサンチー仏教遺跡に釈迦の最古とされる仏塔がある。円形の台座(基壇)の上にレンガ構造の半球形が釈迦の仏塔という。頂に傘竿に三蓋(３層がさね)があり、インド神話に卵形は宇宙の中心をさし、傘竿は天と地を結ぶとされる。その風習は今日でも高貴人に日傘を差し出す儀礼は残る。仏塔は釈迦の墓塔と共に大宇宙感を表すという。中国に伝播した北伝仏塔は中国建築と融合した密檐式塔(屋根型の檐の出が小さい)となり、遼朝・金朝の磚(レンガ・瓦)構造物の塔になった。隋唐時代は四角、遼金時代に六角・八角となる。

サンチー仏塔・四角枠内釈迦墓

仏舎利・タキシラ

遼代の八角十三重塼塔

成田山大塔の相輪（友人提供）

宝珠頭=疑宝珠=塔刹=相輪・・・中国では一般的に「塔刹」と呼ぶ。日本では「相輪」と呼ぶ。

塔刹は建築材を磚=レンガ・瓦・木・石・金属など。北魏洛陽の永寧寺九重塔は有名。仏塔は基本的に釈迦の墓、釈迦の骨を納める形、土饅頭の上に小さな傘を、仏教建築で表現したもの。

サンチーの仏教遺跡は、マディヤ・プラデシュ州の州都ボーパルから北へ約 40km、デカン高原を見渡す丘にある。サンチーには紀元前 2～1 世紀にマウリヤ朝のアショーカ王が建立した半球形の 3 つの仏塔である。インド最古の仏塔と云われ高さ 16.5m、基壇の直径が 37m の大仏塔は、釈迦の舎利（遺骨）を納めたとある。(サンチー仏塔『世界美術全集』小学館
仏舎利の写真はタキシラ博物館『ＴＡＸＩＬＡ』・八角十三重塼塔は「内蒙古旅行社」・新勝寺大塔・成田観光協会より)

中京城の石人・同『鳥居龍蔵全集６』の「遼の上京城遺存の石人考」73 頁に《(前文略)もしこの石仏が一人物であると推考すれば、すなわち必ず女性であって男性ではないということである。加うるに、石仏の足下には二つの蓮花を摘み、胸には瓔珞(珠玉の首飾り)を掛け、並びに素衣を被けていることである。(略)私は、この石人は観音菩薩であることは確かで

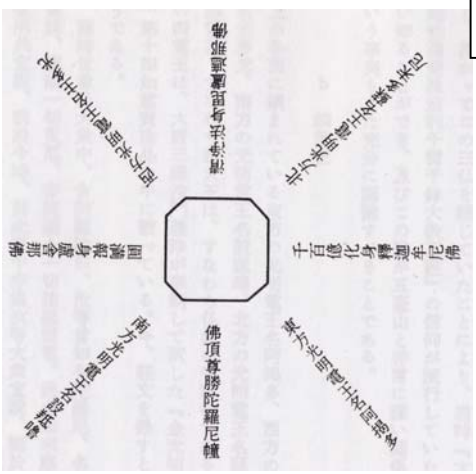
遼中京城内に残存する石人・左背面・右正面
『鳥居竜蔵全集６巻』朝日新聞社より

あり、疑いないこととあい信じ、並びに断定するものである。》と観音菩薩であると言っている。

同書注釈(104 頁)に《背後が中襟の下から裂開して腰部に垂れ下がり、前面は双肩に僅かに掛かっていることを知り得る。これを按ずるに、原物はきっと長くて底辺にまで至っているであろう。斗篷(茅などで編んだむしろ)の下の衣服は、胡服ではなく、一種の衣服であって、右袵(前えり)に合している。この服装は敦煌千仏洞第８４号洞の壁面中央の高貴な人物の服装とすこぶる似ている。》と注釈をつけている。

陀羅尼幢(幢=菩薩のしるし) 同著「遼上京城の南・伊克山上の遼代仏刹」２・岩上高所の陀羅尼(186 頁)より《今日、烏布爾古伊布爾交のラマ廟の背後の岩上に一基の陀羅尼幢が立っている。台座は四角形であり、その上部には円形の蓮台がある。蓮台の上には八角形の陀羅尼幢がのっており、中間の蓮台と陀羅尼との関係の有無については、なお疑問がある。幢と蓮台とは並びに不均整であり、蓮台の彫刻は非常によく、後日、他所から運んで来て配合したものであると考えられる。下部の四角形の台座は７８㎝×厚１３、３㎝、上部の陀羅尼幢は高さ８６㎝の八角形、上部がやや狭くなっている。八面の各面に文字が刻んである。》

東方光明電王名阿揭多・佛頂尊勝陀羅尼幢・南方光明電王名設羝嚕



ウブルグイブルジョウに残存する『佛頂尊勝陀羅尼幢』　　八面に彫られている(『鳥居龍蔵全集 6』より)

結論・この山には遼代当時、仏・菩薩があり、神聖な五台山と称すべき地であった。一つには鎮護国家のため、一つには遼朝の民衆の太平無事を祈祷するための大道場であったのである。

※鳥居龍蔵は終戦後(1945)すぐには日本に引揚ず、中国ハーヴァード燕京大学客員教授に招かれ、そしてやり残した遼・金朝の歴史研究に専念している。

ヌルガン永寧寺遺跡・現在のハバロフスク地方ウリチ地区ティル村(アムール川の下流域)

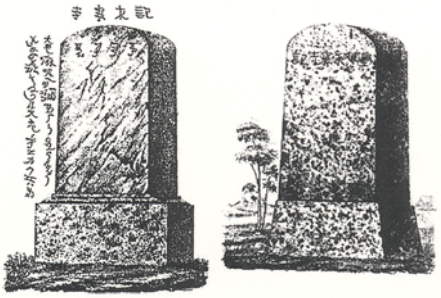
『ヌルガン永寧寺遺跡と碑文』アレクサーンドル・ルドリフォーヴィチ・アルテーミエフ著(極東諸民族研究)より抜粋で１５世紀の仏教寺院址と碑文を紹介する。歴史学・考古学・民族学者。

アムール川の河口から１５３ｋｍ遡ったアムール川の右岸(ハバロフスクから 850ｋｍ船で下る)、西からアムグニ川がアムール川に合流する地点のほぼ対岸にあるティル村の断崖の上に、１５世紀に建てられた仏教寺院の遺跡がある。その石碑は 1891 年にウラジオストークに運ばれアルセーニエフ記念沿海地方郷土博物館に保存されている。

永寧寺と二つの石碑・明朝(1368－1644)は永楽９年(1411)に奴児干(現在のティル村)の地に、この地方の軍事・行政を統治する拠点として奴児干都司という役所を置き併せてここに永寧寺とい

う仏教寺院を建立した。1413 年にその経緯と趣旨と統治の理念を刻んで建てた「勅修奴児干永寧寺記」である。永寧寺はその後、現地住民によって破壊された。明朝は 1433 年に再びその経緯と趣旨と統治の理念を刻み建立した。１５世紀後半になると明朝はアムール川下流域から撤退する。その後、奴児干都司は何処にあったのか忘れられてしまったが、1885 年に清朝の学者曹廷杰(清朝末期の地理学者)はティル村を訪れて、永寧寺碑文を拓本採った写真版が、長春の吉林省社会科学院に所蔵されている。1930 年に京都大学の梅原末治が採った拓本が、京都大学人文科学研究所に所蔵されている。2000 年、市立函館博物館から「重建永寧寺」の碑文の拓本が発見された。2007 年にも函館市中央図書館から「勅修奴児干永寧寺記」の碑文の拓本が発見された。これらの拓本は 1891 年、日露戦争後、函館商人がウラジオストーク出進の過程で採ったものと伝わる。

①ティルの断崖に永寧寺の寺院址がある



②左・「永楽年代碑」右・宣徳年代碑

③1858 年頃の仏塔

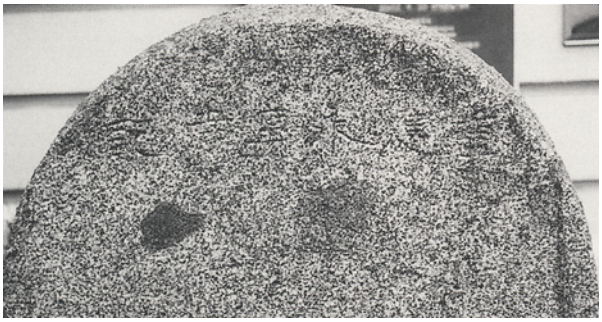
①ティル断崖・南からの眺望。1413 年と 1433 年に建立の観音菩薩を祀る永寧寺の寺院址。

②の左・漢字・モンゴル文字・女真文字で寺院建立の碑文が刻まれている永楽年代碑。

②の右・漢字で寺院建立の碑文が刻まれている宣徳年代碑。

③ティル断崖にあった 1413 年の永寧寺址にあつた仏塔図絵。西南西からの眺望。

「永楽年代碑」漢字で永楽寺記と読める

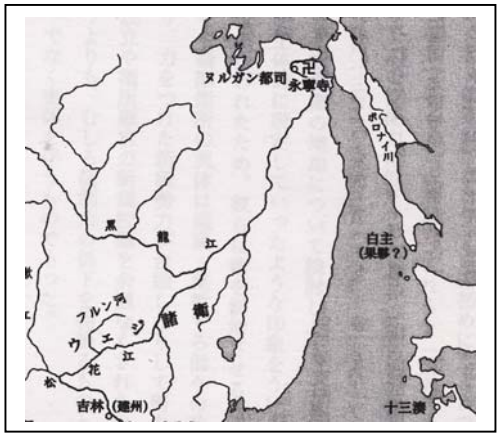


「宣徳年代碑」漢字で微かに宣徳永楽寺と読める

碑文に野人・吉列迷・苦夷の名がある・碑文によれば奴児干地方、つまりアムール川の最下流域には住民として野人と吉列迷、また海の外のサハリン島には苦夷が居住しているという。野人は野人女直、ツングース系の民族となる。吉列迷は迄列迷、吉里迷とも表記され、ツングース系の諸民族がギレミと呼んだ人たちで、ロシア人はこれをギリャークと呼び、今日のニヴフ(ニヴヒ)と呼ばれる民族である。このニヴフ民族は今日のアムール川の河口域やサハリン北部に住居している。1234 年女直の金朝はモンゴル軍に滅ぼされた。モンゴル軍はアムール川下流域に進出し、1260 年代に奴児干の地、ティル村に東征元帥府を設置、東方諸地域を征討するために、最高軍事司令部を置いて諸民族を服属させた。モンゴル軍に服属したニヴフ民族がサハリン島に居る骨嵬がニブフ民の領域を侵犯していると、元朝に訴えた。骨嵬とはサハリン島に住んでいるアイヌ民族で、北海道のアイヌ民族と同類である。モンンゴル軍は 1272 年から 1308 年まで間、暫時サハリン

島に侵攻して骨嵬を服属させた。骨嵬(樺太アイヌ)は元軍に毎年毛皮を貢納(税) することを課せられた。

骨嵬がアムール河口とサハリン島の交易をどのような活動を展開したのかは日本側の歴史書には何も記録はない。後、1413 年と 1433 年の２つの「永寧寺碑文」にサハリン島のアイヌ民族は再び「苦夷」の文字で登場する。日本の歴史では江戸時代に蝦夷錦を沿海州民から交易で得て、北海道アイヌ民から得た松前藩が豊臣秀吉に献上し「蝦夷錦・山丹錦」が日本に異文化の織物が登場する。鎌倉時代から室町時代の北海道アイヌ民と樺太アイヌ民を経由して大陸との交易でアムール河口の永寧寺の情報を得ていたかも知れない。道南のアイヌ民や十三湊の交易民達は、ティル村永寧寺仏塔の噂話は知っていたことは充分考えられる。



ヌルガン都司代の沿海州地図・『中世の北東アジアトアイヌ』高志書院刊より

「奴児干都司考」を抜粋『鳥居龍蔵全集６巻』昭和２２年・燕京大学哈佛燕京学社出版より

298 頁に《明代の初期に、黒龍江下流の特林に奴児干都司を設置し、附近一帯を管理するのみならず、遠く庫頁島(樺太島)に及ぶまで管轄したことは、明白な事実である。また、都司に建立された明代の永楽・宣徳二碑について、すでに多くの学者の論考があるが、ただこの奴児干都司がどこに存在したかのか、あるいはその遺跡の現状はどうであるのかについては、私が知るところでは、近年まだ実際の調査報告を見ないのである。とある。

摶塔について・(前頁③の絵図)同巻 330 頁、龍蔵は摶塔について、《今を距たること９２年以前、1855 年のペルミキン一行の描いた絵図によると、ここに嘗て一座の摶塔を建立していたことを知ることが出来る。しかし、その後惜しむらくは、この塔はロシア人の破壊するところとなったので、全く痕跡を見ることはできない。今日、僅かにその絵図によって、考察を加え得るのである。この摶塔は、考古学上よりこれを見ると、永楽のものでもなく、また宣徳のものでもない。まさに奴児干都司設置以前の遺物である。(略)京都大学の建築史の権威村田治郎博士(『満州建築』43 頁)は、上述の絵画によって「この塔は、中国式のものではなく、インド式の柱に類似するところが多く、明代の建築であると称するより、元朝代のものであると見るべきもののようである」といっている。和田清博士は、この塔に対して村田博士の意見を採用し、その著『明初の満州経路』(下)「奴児干都司」の条において、元代のものといっている。》

間宮林蔵はこの石碑をみている・間宮林蔵は文化６年(1809) ７月２６日にデレン(アムール川河口・清朝の仮府の交易所)からの帰途、船上からこのティル村の断崖の上に立つ２つの石碑を遠望して『北夷分界余話』に次のように記している。

《この日、通過して来たところにサンタンコエという名の場所があった。その昔、ロシア人は(西から)ホンコー川(アムグニ川を指す)を下って(アムール川に合流する)ここ(ティル村)に(アムール川下流域に進出する)拠点を築こうとしたが、(ここを支配下においている清朝の)満州人によって討たれ、敗走してロシア去ったという。その時ロシア人たちが建てたという黄土色の石碑が、ここの河岸の高い所に二つ立っている。自分は船上から遠くに眺めただけなので、文字が刻まれ

ているかどうか、知らない。》　間宮林蔵(1775－1844)幕府命により文化５、６にかけて、樺太西海岸を北上して樺太が島であることを発見する(間宮海峡)。樺太のニヴヒ族が清朝のデレン仮府へ朝貢に行くスメレンクル族(アイヌ族がニヴフ族のことを呼んだ名)に林蔵は同行する。

『ある老学徒の私記』鳥居龍蔵著・岩波文庫より。「第一回東部シベリア調査旅行」(大正 10 年９月)ハバロフスクから再び乗船、アムール河を下る。(略)私はまずここから日本の警備船を特別に出してもらい、もと船上から見たかのチール丘上奴児干都司の址を調べに行く。(略)我が国の間宮林蔵が文化年間に樺太のギリヤークの舟に乗ってアムール河を遡ってデレンまで行ったのは、実にこの辺であるから、私はかの『東韃紀行』と比較して調べた。デレンはソフィスク市の上流、アムール河とゴリン河との合流点から少し下流のアムール河右岸である。と著述している。

アムール川沿いデレンにあった清朝仮府(国会図書より)

ティル村の石碑を船上から間宮林蔵は見ている

余話・サハリン中部ノギリキの町へニヴフ民村を訪ねる

ニヴフ族の村・鮭の生干し・2012 年 9 月中頃尋ねる

遡上の鮭釣りの家族

左の写真はサハリン中部の町ノギリキより北へ 20ｋｍ、ニヴヒ族のウェニー村を訪ねる。冬に備えて鮭干しをしていた。右写真はティミ河口で刺し網と釣りをする家族。春一番はさくら鱒、次に樺太鱒、秋は鮭と銀鮭(ぎんざけ)が遡上するという。のどかな生活が思われる。

オホーツク文化・北海道のオホーツ海沿岸に５世紀から１３世紀に、沿海地方・樺太・千島方面から少数民族ニヴフ(ギリヤーク)が南下して、北海道に居住したという。このオホーツク文化に関心があったので、昨年の鮭の遡上する時期に合わせて訪問した。和人やアイヌ民とも異なり、豚を飼育して食用していたという。ニヴフ民族は、魚や海獣を捕らえ、犬や豚を飼い、礼文・利尻・稚内から網走、そして知床半島までオホーツク文化の痕跡を残している。その後裔の民が、サハリン中部地区やアムール河口にニヴフ民族が、現在でも４５００人位いるということである。ニヴフ語は、極東古アジア諸語の一つで、他に同系言語は見当たらないという。

第９章・日本仏教伝来

東アジア仏教東漸を概要

その１・仏教東漸という具体的な信仰の対象が登場するのは大乗仏教に至ってからである。大乗仏教と密接な関係のあるのがクシャーナ王朝(インド・中央アジア古代王朝)で、イラン系の言語を持つこの王朝は紀元１世紀にインド侵入して３世紀まで支配する。現在のペシャワールからヴァーラーナシー(ベナレス)にいたる広大な帝国である。その中のガンダーラ(アフガニスタンの東部からパキスタンの北西部を含む地域)の西部に位置する都市が、仏像が誕生させる重要な地理的条件と意味を持っていた。同時期、インドのマトゥラー(インド・デリーの南東１３５㎞)に仏像が出現したと言われるが、ガンダーラ地方が口火を切ったと推察されている。

母国インドの仏教徒たちは、当初ブッタの姿を人間と同じ姿像の表現することには、抵抗があった模様で、初めは石に彫った菩提樹・足跡・ストゥーパ(塔)などをブッタの姿して、暗示礼拝をしていた。この時代の仏塔を礼拝の形は、サーンチーの第一塔の門柱などにその暗示礼拝が彫られていることで判る。出現したガンダーラの仏像はギリシアのヘレニズム彫刻の影響を多分に受けていた。これに対しマトゥラーの仏像はインド古来の伝統技法で彫刻されていた。像とは似せることであり、当初ガンダーラ仏像は長髪像(古代王侯貴族像)として作られ、マトゥラー像は剃髪姿像で作られはじめた。やがて両所の釈尊の姿像は神格化され、頭部は「螺髪」(螺状の髪)の形に変化が現れ、髪の毛が巻貝状の形になることによって、仏像が智慧と悟りを具現化した像へと進化したのである。

釈尊の仏像は、大乗仏教の発展と共に北東へ向かって伝播し、現在のパキスタン、アフガニスタンへ、そして各地域民族のアニミズム等の宗教文化と混淆しながら、その民族がその国々の文化と融合して理解した仏教となり、そして次の諸民族国へ伝播していったのである。中央アジア遊牧民の伎楽が仏教に習合したことが、ギジル石窟、ベゼクリ石窟、敦煌石窟に見られるように、「飛天」(日本では古くは飛天菩薩)が仏国土を舞って仏の功徳をたたえ、歌舞音声(歌と舞・管弦と舞楽と人の声)の菩薩の空を舞う天女が、中国に伝わって天衣(天女の衣)や裳裾(すそ)をひるがえしながら浮遊感を美しく歌舞表現することが多くなって行くのである。

中国への仏教伝播時に於いて当初漢民族はこの仏教に当然の摩擦があった。例えば身体の髪を剃る行為は「孝」に反する。子供を育てて、後続者を設けるのが人の世の務めであるのに、妻子を捨て、出家することは人間の生活の道に反することではないかという理由は、これらの答えは仏教経典から理解したものでなく、中国古典の『論語』や『老子』の思想、道教の教えを通して、仏教を解釈した経緯となる訳である。中国人は現世利益としての仏教信仰として受け入れ、家内安全・長寿を得る宗教として容認したのである。７－８世紀にかけて東アジアは中国を中心に朝鮮、日本、渤海、ヴェトナムまで含む広大な地域が、律令制度国家と漢字文化圏が成立していた。更にその上に仏教文化共有圏として発展し、東アジア仏教圏の漢訳仏典は即ち中国仏教であり、その最も大きな特質は漢訳仏典にもとづいて成立した仏教になったことである。現在、中国仏教圏を形成する地域においては「読誦」(声を出して読む)経典はそれぞれの国々よって言語発音が異なるが、同じ中国経典から翻訳されたものなのである。

その2・朝鮮半島に初めて仏教が伝わったのは中国三国時代(３世紀魏・呉・蜀３国が鼎立)である。中国から高句麗に３７２年に、１２年後に高句麗から百済へ伝えられた。百済に３８４年、

インド僧摩羅難陀(東晋の胡僧)が来朝したのが百済仏教の始まりと伝わる。新羅は第１９代訥祇王(417－457)の代に、沙門(僧侶)墨胡子(モッホジャ)が高句麗から伝え、その後、百済仏教が日本に伝来した。日本の仏教は朝鮮仏教の影響を大きく受けているが、時代が下がると日本から遣唐使が派遣され、日本の留学僧は直接中国の長安で仏教を学び、日本国へ伝えた為に唐の仏教の影響を強く受けるに至る経緯となる。

その3・唐朝の高宗(唐朝３代皇帝 649－683)は６６６年に諸州に寺観(寺院)を置いた。これらの諸州に置いた寺観は国家の安泰を祈願し、皇帝の威徳を世に宣揚した。則天武后は大雲寺(則天武后が『大雲経』の附会に未来予言となり、その諸州設置がやがて日本に於いては国分寺となる)を置き、次いで中宗(唐朝４代皇帝 656－710)は「大唐中興」(衰えた世を繁栄させる)と名付け、仏寺と道観(道教の寺院)を、玄宗(唐朝６代皇帝)の開元２６年(７３８)には新国分寺ともいうべき「開元寺」(年号名称)が全国諸州に設置された。仏道二教を国家統制下におき、官立寺院は国家管理に大きな役割を果し、武周革命(690 年に唐の睿宗の生母である太后の則天武后が皇帝となって国号を「周」と改め唐朝を中断させる)の前後には仏教徒の官邸接近は著しく腹黒い高僧たちは仏教を利用して武后に取り入った例をこの時代に長安にいた日本の留学生の玄昉(奈良時代の法相宗の僧・717 に入唐)が見聞し、帰国後に宮廷に接近したのはこの朝廷政治を真似たもという。中国仏教史上最も宮廷に威力を与えたのは不空三蔵で、不空は６代皇帝玄宗、７代皇帝粛宗と１１代皇帝代宗の唐朝 3 代に仕えた。不空は金剛智に密教を学び、不空の弟子が恵果となり、その恵果(老死直前)が空海に真言密教を伝授した。この経緯は中国編西安の青竜寺で述べた。

唐代に最も中国的な仏教として発展したのは禅宗である。北魏末にインド僧菩提達磨を初祖として唐より宋代にかけて臨済・曹洞・潙仰・雲門・法眼の５派に分かれて栄えた。8 世紀の達磨・慧可・僧璨・道信・弘忍、この弘忍門下から北宗禅が生まれた。また 6 祖慧能は長江流域にあった禅宗を南方の広州地方にひろめ南宗禅が生まれた。中国の北宗禅は 8－10 世紀代に発展したが日本に伝わらず、日本へは唐晩期から宋代に南宗禅の臨済、曹洞などが伝わる。その南宗禅が鎌倉から江戸初期に曹洞宗、臨済宗、黄檗宗の３派が伝たわる経緯となる。(頁 111 参照)

その4・唐代仏教の影響を受けた日本における国分寺(741 年、国情不安を鎮撫するため聖武天皇が建立)の建立は、唐朝の政治、文化、法規、仏教を吸収すると同時に、西方ペルシアの文化も大量に摂取した。その後宋朝との貿易により大陸文化が日本に溶け込み大きな影響をあたえた。初期の仏教寺院の本来の目的は、仏法修行と読経の場を提供して社会の公共施設や音楽舞踊などの総合学舎の機能を果たした。仏教教典は、医療技術、天文学、暦法、動植物学、鉱物学、土木建築、音楽、舞踊、絵画、彫刻、工芸などに及び、寺院の役目は薬物を施し、疫病を治療し沐浴させる社会福祉施設の機関も伴っていた。これらのことを考え合わせると、行基の時代の行動は、衆上を救う大乗仏教の精神を実践していたことになる。

又西方のアジア文化も仏教と共に日本へ伝播が奈良東大寺正倉院宝物で見ることが出来る。「螺鈿紫檀五絃琵琶」は中国では文献にしか見られないこの琵琶は、インドに起源を持ち中央アジアと西アジアに伝えられ、４世紀に中国に入り８世紀に日本に伝えられた。正倉院に収蔵されているこの五絃琵琶は、ラクダに乗った胡人の図柄が描かれている。他にペルシア式の四弦琵琶は西アジア風の騎馬狩猟図があり、又弦楽器の阮咸(月琴はこれから派生した)新羅琴、堅琴などの弦楽器は西アジアのアッシリアに起源しイラン高原、中央アジア, 西域から中国朝鮮半島を経て

日本に渡って来たのである。(参考文献『仏教史』Ⅰ・Ⅱ山川出版社・『わかる仏教史』宮元啓一著)

東大寺と国家の関係・聖武天皇天平９年(737)に「国ごとに釈迦仏像一軀、挾侍菩薩二軀を造り、兼ねて大般若経一部を写さむ」という詔勅(天皇の意思表示の文書)や国毎に法華経十部を写し合わせて七重の塔を建てる詔勅が出される。そして天平１３年には東大寺を総国分時とする国分寺制度の詔勅が発せられ、その詔勅の中に、「去歳(昨年)にあまねく天下に釈迦仏の金像を造り、あわせて大般若経一部を写させたので、凶作、疫病は止み、春から秋の収穫までの天候も順調で、五穀も豊穣で、これ即ち功徳のいたすところである。」と。天下諸国に七重の塔を造り、金光明経と法華経の書写を命じ、天皇自らも『金字金光明最勝王経』(諸天善神による国家鎮護を説く経典 10 巻)を写して塔におさめ、その功徳により仏法明神の擁護を得て、大事業が無事に達成されることを命じている。総国分寺の東大寺に華厳の毘盧舎邦仏を祀ったのは、日本全土に毘盧舎邦仏の世界を実現させるためであり、同時に統制政治から見れば天皇の慈悲による平和国家の実現に意図したものである。即ち天皇を中心とした中央政府と国司と国民との繋がりに於いて、理想的な統一国家実現を仏教の精神文化によって達成しょうとしたものである。

軀=駆は仏像を数える。(『インド・中国・日本仏教通史』平川彰著・春秋社より)

盲目で来朝した鑑真・(688－763)７３３年に大和朝廷の命を受け遣唐船で来唐した日本僧の栄叡と普照が揚州(かっての江蘇省)の大明寺を訪ね、鑑真に向かって「今の日本には戒律を授ける指導高僧がいない。是非鑑真和上の高僧を推薦していただきたい」お願い出たが、弟子たちには命を賭して日本へ行く者はいなかった。鑑真は「だれも行かないなら、わしが行こう」となったが、日本の船は現れず、小船で４回挑戦したが失敗し、その４年後に再度出発したが、台風と荒波にあい遠く海南島に流され疲労で失明した。７５３年に日本の帰国船があって、その第１船には阿倍仲麻呂が乗船、ベトナムまで漂流し仲麻呂は日本へ帰ることができなかった。(88 頁参照)

伝わる話として、この第１船に鑑真は乗船を希望したが、藤原清河に反対され第２船に乗ることになった。その結果第１船は遭難、第２船に乗った鑑真は無事日本にたどり着いた経緯となる。

東大寺の建立完成を前にして、朝廷は鑑真を手厚くもてなした。天平勝宝６年(745)奈良に入り、東大寺の前に仮設の「戒壇」(僧尼に戒律を授ける壇)を築いて聖武天皇、光明太后（聖武の妻）らに菩薩戒(大乗の菩薩授戒の規律)を授けた。しかし鑑真の教義は日本側の仏教界との反応は必ずしも良くなかつたようである。７５８年鑑真は大和上の称号を与えられ、後、唐招提寺に移り住み、７６３年に７６歳の生涯を閉じた。鑑真が齎した天台宗の基本書籍は、若き最澄に影響を与えやがて天台宗開祖に繋がって行く。

何ぞ身命を惜しまんや。諸人行かざれば、我即ち去くのみ・・・鑑真

仏法を広めるためならば、自らの体や命を惜しんでなどいられるものか。誰も行かないのなら、私が行くだけだ。『唐大和上東征伝』７７９年成立。１２年の歳月を費やして、鑑真の波乱万丈の航海行歴が記述されている。晩年、愛弟子の祥彦の死を前にして鑑真は、祥彦の頭を西に向け「彦よ、彦よ」と泣き崩れたという。芭蕉は鑑真の辛い心にふれ、その涙の雫を拭いてあげたいと、鑑真の心をよむ。

若葉して　御目の雫　ぬぐはばや・・・・芭蕉(貞享５年・1688)

鑑真肖像・弟子の忍基作

鑑真を救った波間の烏蓋草・中央が鑑真（烏蓋草=イネ科の荻異名・唐招提寺蔵『仏教を歩く』より）

大明寺・江蘇省・揚州市郊外の西北の蜀岡にある。唐代の高僧鑑真大師(688－763)によって中興の律宗の道場となる。１９７３年１２月に鑑真和上遷化１２００年を記念して、奈良の唐招提寺の金堂を模して鑑真記念堂が造られた。国家事業としての奈良大仏の仏教が東大寺であれば、真の仏者の生き方を、身をもって示し、鑑真和上が住した唐招提寺こそが日本仏教の故郷と言える。

大明寺山門（絵葉書）

鑑真記念堂（絵葉書）

鑑真大師像（絵葉書）

我が国への仏教伝来(仏教公伝)の背景

日本への仏教公伝は国家が建造した伽藍・寺院で、国家鎮護を政治の政策とした。この時代、既に渡来人たちは自宅に「私宅仏教」が確立されていた。日本歴史に５５２年とする記録より、８０－１００年前から日本国土で信仰されていたと考えられる。その頃の帰化人たちは３世紀末に大和・河内・山城を抑さえ４世紀初め海外進出の拠点、北九州の小国群を支配下に置く。当時の日本人は鉄鉱や砂鉄から鉄を作る技術を持っていなく、そのため各地の豪族達は武器や農具を作る材料の鉄を強く求めていた。大和朝廷の大王達は北九州の耶馬台国の流れを組む鉄交交易の海洋族を活用し、武力を背景に強圧的な仕切りで加耶(朝鮮半島南東部)産の鉄を大量に大和へ持ち込んだ。

４世紀の朝鮮半島

今日の韓国の金海市周辺に金官加耶国という小国があった。５世紀半ば高句麗、百済、新羅で国家意識が急速に高まり、外交と事面で日本は後れをとり、朝鮮半島の全土制覇を目論む高句麗と、朝鮮半島南部の制圧をめざす百済との間で何度も戦いが繰り返していた。この戦いは高句麗の勝利で終り、百済は４７５年に漢城(ソウル)を失い南方の熊津(忠清南道八州市)に都を移した。

このため加耶の人々は百済側に付く者と、新羅に付く者達の激しい争いが起こり、この時に故郷を追われた多くの人々が、5世紀末に日本に渡って来た。金官加耶国の有力族長であった秦氏、東漢氏等である。秦氏は京都盆地の西部、東漢は奈良盆地を開発した。『日本書記』に、秦氏の民が７０５３戸(14万人)、この時の渡来人は10倍の１４０万人と推定される。当時の日本人口は５００万から６００万で、古代の日本人の４人に１人が渡来人ということになる。渡来系の秦氏や東漢は大和や河内の在来豪族からは技術集団として下位に追いやられていたが、やがて彼らは漢字を使いこなす史(書記)、医術(医師)や暦を用いて大王の身辺に仕えた。この渡来人の交流の中から、大陸に比べ日本文化の後れに気付いた豪族の蘇我氏がいた。蘇我稲目は２人の娘を欽明天皇の妻に差し出し、臣下としての最高位の大臣の役を務める。この欽明天皇代に稲目と百済の聖明王(百済２６代武寧の子)が仏像と教典を日本へ伝えた。

薬師塚古墳出土・小金銅仏・西光寺所蔵

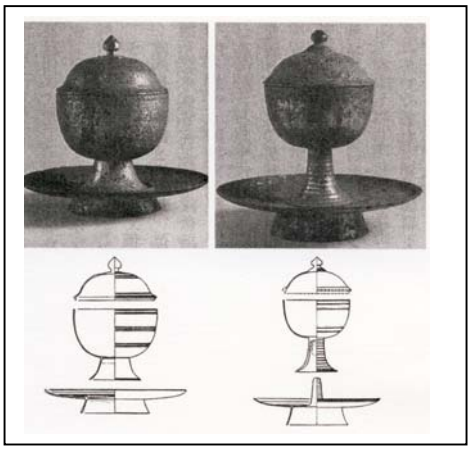
(仏教公伝・５３８年説・５５２年説がある) 稲目の仏教受容派と、大連の物部尾輿の猛反対派とが１０数年間の勢力争い繰り返したが、聖徳太子と曽我氏側の勝利となり、日本の進路への大きな先見性となる。

我が国は中国文化の急激な流入に恐れ、国防と国家繁栄の「鎮護国家」を完成させるために、聖徳太子は「漢字」を学ばせること、写経による仏国土を目指す国家、東アジア圏の中で倭国の未来進路に梶を切ったのである。聖徳太子のこの決断が、今日の我々はその事を振り返った時、漢字文化と帰化人の英知を取り入れたこの歴史的決断の大きさを思わざるを得ない。

極東アジア紛争の激動は治まらず「白村江の戦い」(663・はくすきのえの戦い・倭国・百済連合軍対唐・新羅連合軍の戦い、倭国は第１派１万余、第２派２万７千、第３派１万余将兵を送った)へと繋がったが行くが日本は大敗し国家の存亡の危機が迫って来た恐怖は想像を絶する緊張が高まっていた時代である。当時の聖武天皇の行動が、軟弱な天皇の歴史評価と一部の見られるが、倭国存亡の危機に、聖武天皇政権は八方手を打った形が、都が定まらない理由と考えられる。大陸から日本侵攻への恐怖が、やがて奈良の「大仏」建立へと立案し、銅像と金像を造営できる経済大国の力を東アジア圏に見せ付ける大仏であったのである。現代で云うところの抑止力外交としたことが充分考えられる。(参考文献**『古代東国への仏法伝来』増田修著・崙書房**)

418年倭国仏教伝来説

小金銅仏像の写真は群馬県西部箕郷町(2006年高崎市に編入)付近、井野川の流域に古墳の密集地が上流に保渡田八幡塚古墳(102m)、保渡田薬師塚古墳(68、4m)がある。この古墳は４世紀中頃―５世紀末に築造された。ここから出土した「小金銅仏」である。欽明天皇の時代に仏教が伝来したので「それ以前に仏像が存在するはずがない」という古代史の諸先生の判断があり後代に古墳に偽入されたものとなっている。『常陸国風土記』多珂郡飽田村の条に「国宰川原宿弥黒麻呂の時、大海の辺の石壁に、観世音菩薩像を彫造する今も在す。因りて仏の浜と号す」とあり後世彫刻と片付けられないだろう。



銅鋺・八幡観音塚出土・銅承台付蓋鋺
(『古代東国への仏法伝来』増田修著より)

銅鋺図は仏の供養儀礼に使用した出土品で、銅鋺は八幡観音塚古墳から、昭和２０年防空壕を掘る名目で発掘され、３０種３００点を超える副葬品が出土した。副葬品に付いては省略するが、銅承台付蓋鋺と銅鋺は金鈴塚古墳、武寧王陵（ムリョンワンヌン・韓国忠清南道）からも出土している。類似品は関東周辺に出土をみる。下段の銅鋺は埼玉古墳群の中で最も新しく、埼玉稲荷山古墳の南に所在する 101mの前方後円墳である。東国への仏教の伝来は、帰化人が関東へ入植と同時に仏教と一緒に持参したものであろう。また中小路駿逸氏（歴史学）は倭国（北九州）への仏法の伝来は、４１８（戊午）年の可能性が高く、百済から仏法が伝来したという「戊午年」は４１８年、近畿天皇家でなく九州王朝（倭国）に伝来していると考える。（『日本書記』は近畿天皇家への仏教文物初伝は５５２年欽明紀１３年冬 10 月条であり、仏法初伝は５８４年・敏達１３年秋９月条となっている）倭の五王の時代、中国、南朝の都建は中国仏教の中心であった。東晋・宋・斉・梁・陳は仏教に手厚い保護を加えた。東晋百年は仏寺１７６所、僧尼２４００人、梁代には建造だけでも寺院５００とある。百済においては、『日本書記』雄略天皇 5（461）年条には、武寧王（朝鮮三国時代・百済第 25 代）の出生譚があり、倭国と百済の深い政治的関係を提示している。

『日本書記』神功皇后の時、倭国と古代東国の政治関係は、①倭国は、上毛野君の祖荒田別・鹿我別を朝鮮に派遣し百済と共同して対新羅軍事行動に従事させた。②倭国は上毛野君の祖竹葉瀬を新羅に派遣させ、その弟田道間守（新羅の子孫）を派遣して新羅を征討させ、田道（『日本書紀』にみえる武人）は四邑の民を虜へて帰国するなど、上毛野君始祖伝承には朝鮮派遣伝承が多い。③天智 2（663）年の白村江の会戦には倭国の前将軍として上毛野君稚子も参戦している。

このような一連を考えると、百済と北九州と古代東国は直線ルートで結ばれていることが判る。後のことであるが、聖武天皇が「大仏建立」の詔を宣下すると、北九州の宇佐神宮より神仏習合・八幡大菩薩、八幡神が八百万の神を率いて神託をもたらし、聖武天皇を痛く感激させている。この深層に古代倭国の建国に渡来系の人々が重要な役割を果たしていることを知る。

仏教伝来の地・現地の解説板に《泊瀬川畔一帯は、磯城瑞籠宮、磯城全刺宮をはじめ、最古の交易の市、海柘榴市などの史跡を残し、「しきしまの大和」と呼ばれる古代大和朝廷の中心地でありました。そしてこの付近、難波津から大和川遇行してきた舟達の執着地で、大和朝廷と交渉を持つ国々の使節が発着する都の外港として重要な役割を果たしてきました。「欽明天皇の１３年冬１０月百済の聖明王は西部姫氏達率・怒唎斯到契等を遣わして釈迦仏金銅像一躯幡蓋若干、経論若干巻を献まつる」と日本書紀に記された仏教伝来の百済の使節もこの港に上陸しすぐ南方の磯城嶋全刺宮に向かったとされています。（略）私たちはこの地の歴史的由緒と、優れた日本文化を生み出す源流となった仏教伝来の文化史的意義を、広く永長く後世にとどめるため、ここに顕彰碑を建立しました。》とある。（幡蓋=幢幡と天蓋・供養具）

仏教伝来の地の碑（奈良県桜井市）

同所から見ると奥が難波津、大和川を上り泊瀬川へ結ぶ

神仏習合・天皇は在来の神祇信仰に依存した宗教的権威を有する存在で、本来は最高の祭祀建者として国々の人々に尊崇を受けその権威を通して国を統括していた。７世紀後半に唐の皇帝に倣って「政治権力者」としての存在意義を強くする政治統制に必要が生じると、祭祀権者以上の力、天皇自身が「神」の性格を有する国家最高の宗教的権威者として位置付けされた。仏教を国教化したが、天皇はあくまで外側にいる保護者であった。聖武天皇の即位後、仏教国家が樹立されたことは、唐の政治体制を則天武后の形態を取り入れたことにあることである。

年号を唐の天冊萬歳(武后治政下の元号)・萬歳登封・萬歳通天などの四字を用い、聖武・孝謙天皇は「天平感宝」「天平勝宝」「天平神護」「神護景雲」などの四字年号は武后の影響を受けていることが分る。武后が寺院や仏像を造り王室の近くに明堂(政治を行なう殿堂)を建て、高さ２９４尺、方形３００尺、銅鉄で天枠をつくり、大仏は乾漆像(塑土で原型を作りその上に麻布を漆液で張り固め乾燥後内部の塑土を取り除く)とそれを納める五層の天堂を造り労働人員は一日１万人となり完成は６年を費やした。その他、洛陽に大仏、敦煌に７１㍍の磨崖仏などを造像した。そして則天武后は華厳金獅子章(黄金の獅子像に譬えて華厳教の教義を解説)を宝蔵から学び華厳教学に深く帰依した。

極東アジアの緊張外交が高まり、朝廷は藤原氏一族との軋轢の政治問題や、全国に広がる天然痘への予防など、総合的に勘案すれば、極東アジアの国々に当時の何処の国にも無い強大な日本独自の青銅製の黄金大仏を造り鼓舞する事であった。鎮護国家大願の大道場として、朕(天皇)が知識となして森羅万象すべての民の福利を求め、唐をも超える仏国土の国家を目指したのである。聖武天皇は華厳教で説かれている華厳蔵世界を、我が国に華厳世界を実現するために、国を守る経典(「仁王般若波羅蜜教」略して「仁王教」と、金剛明経四巻・金剛最勝王教十巻、『金光明最勝王経』)によって国分寺を創建し、その国分寺を基盤として華厳経の東大寺を建立した。この世の蓮華蔵世界の国(極楽浄土)を造り上げることを目指し、国家予算の３倍の資金を使い朝廷国家の威信をかけての東大寺建設の大事業であった。般若波羅蜜とはサンスクリット語を音訳して「般若」とは、何物にもとらわれない、生き通して行く力、「般若波羅蜜」とは「智慧の完成」即ち、成道の実践的な智慧、衆生は力であり、大仏造営者たちは浄土楽土を目指したのである。

九州宇佐神宮・国境の神・八幡神(はちまんじん)・天平勝宝元年(749)１２月の末、九州宇佐(大分県)の地から八幡神が神輿に担がれて奈良の京に入って来た。この八幡神は、突然歴史の舞台に出現してきた新しい神であり、当時は奈良の京で名も知らぬ神であった。八幡神の出現した宇佐の地は、国東半島の付け根にあって国東とは古代の「国崎」「国前」「国東」と表記があった。『豊後国風土記』によれば九州に遠征した景行天皇は佐波津(防府市)から九州に向う時、前方に見える国東半島を見て、「かの見える所はもしや国の崎か」と尋ねた古事から「国崎郡」と呼ばれた。「クニ」とは天皇の支配地域、即ち古代ヤマト国家の先端であって、宇佐は古代日本国家の境界の地、関門海峡と豊後水道の線にあり、この両方を含む国が豊国であった。この国の南には隼人の国があり、筑紫(福岡)の国造、磐井が反乱を企てていたが、ヤマト国家の支配の及ばない化外の地域でもあった。八幡神の社が造られるのは７０８年―７１５年頃、大和律令国家が隼人の勢力を完全に服従させた時期と重なる。７０２年に薩摩の隼人の反乱が起こり、隼人征伐軍が派遣された。７１３年日向国(宮崎)大隈国が創設され、翌年には隼人の住民の教導として豊前国から２００戸(一郷５０戸)の入植し７２０年には８世紀最大の反乱、大隈隼人の反乱に繋がっていく。

隼人=はやひと、はいと、はやと・古代九州南部住み、風俗習慣を異にして大和政権に抵抗した種族。

薦枕・７１９年大隈隼人の蜂起、辛国城は攻撃され、豊前国国司宇奴男人辛国城の救援に入り、その時、豊前の兵士が奉じたのが「八幡」の神の御神託が出た。宇佐八幡宮の神官が作った「薦枕」を御神体として神輿に乗せ、宇佐八幡の仏教徒集団が加わり、７諸国の隼人城攻め落とし多くの隼人を殺戮した。宇佐八幡宮の御神体は、大分県中津市大貞の三角池に自生する真薦(イネ科の多年草)を刈り、これを束ねて枕に仕立てたものであった。(長野県の諏訪社の「御柱」・柱に神が降りたと考える現象と類似)この勝利により大和朝廷から国難の大乱を鎮める国家神として八幡神が認知されたのである。

宇佐神宮・神仏習合発祥の地・大分県宇佐市

祭神は八幡大神、神亀2年(７２５)。比売大神、天平５年(７３３)。神功皇后、弘仁１４年(823)の３柱である。宇佐の地方神であった八幡神が中央に大きく躍進したのは、天平１５年(７４３)に東大寺大仏建立に八幡神が協力宣言、即ち神託を齎したことである。神仏習合は、苦悩する神が、仏法の力で救いを得て仏になるという神身離脱が始まり、やがて神が仏教(国家)を守る鎮守神になって行くのである。本々の仏像のような偶像崇拝の無かった日本では、仏像伝来の影響を受けて、八幡神が仏教へ接近する理由付けとなった。

『続日本紀』(現代語要訳で)《左大臣橘諸兄は、「天皇の御命で神に申し上げます。去る辰年河内国大県郡の知識寺(大坂府柏原)に安置されている盧舎那仏を拝礼して、朕もこのような仏像を造り奉らんと思いましたけれども、なかなか造立できないので、豊前国宇佐郡に坐す広幡の八幡大神に申し上げたところ、神である私が日本の天神・地祇を率い誘いて必ず成し遂げましょう。熱い銅の湯でも冷水にするほどの霊力を働かせ、私の身を大仏造立のための草木土に交えても、何ら差し障ることはないでしょう。と神がおっしゃって完成したので、大変感激し神を尊いと思いました。尼社女に従四位下を授けます。東大寺には封４０００戸、奴１００人、婢１００人を施入します。」と八幡神に詔を読み上げた。》この八幡神入京は奈良時代では大仏開眼供養に次ぐ壮麗な祭儀であったのである。

この時期、豊前国は新羅系、百済系、高句麗系の多くの渡来民が確認されている。この地域に大和朝廷は在地性の薄い渡来人を入植させたことは、大和政府は隼人民との対抗馬として、その最前線に渡来人を置き、「隼人との戦いに勝利しないと、あなたたちの住む地はないですよ」と言わんばかりの意図が推察できる。八幡神の社が造られる 708 年頃、大和国家が隼人の勢力を完全に服従させる時期とかさなる。702 年の薩摩隼人の反乱、713 年には日向国から四郡を割いて大隅国が創設、翌年には隼人の民の管理として豊前国から 200 戸の入植が行われた。そして、720 年に 8 世紀最大級の反乱、大隅隼人の反乱が起こるのである。南の隼人国方向に向き、大和国家を守り、隼人を威嚇する位置に宇佐神宮は建っている。この八幡神は鎮西の国境の神、地方神が偶然に中央と結びついたものではなく、律令国家の成立と共に政治的に生み出された神ということになる。秦氏の「ハタ」は中国唐代に確立した軍隊の制度を象徴する「八幡・四鉾」制に由来している「幡」説があるが、何方も渡来の神となる。『託宣集』(全 16 巻は鎌倉末期の 1313 年に弥勒寺の僧神吽が編纂)によれば「辛国城に始めて八流れの幡と天降りて、我は日本の神と成れり」とあって八幡神は辛国城に出現して日本の神となった。713 年に日向国から四郡を割いて成立した大隅国にあった辛国城と考えられている。また日本で一番早い段階で仏教に遭遇したのは八幡神であろう。この事から私見であるが、後の将門の乱も「奇巫」の託宣、荒ぶる「神」は日本を揺るがす大事件が起きる刹那に現れ、歴史の深層部に渡来人の血が見え隠れするのである。

宇佐神宮上宮本殿（『宇佐神宮』神社紀行より）

神宮皇后　　比売大神　　八幡大神

これらの謎を握っている人物「法蓮」という僧侶で、宇佐八幡宮の境内に建設された弥勒寺の初代別当である。法蓮は実在の人物で、『続日本紀』に法蓮の記事が二箇所出ている。大宝 3 年(703)8 月 25 日条に「僧法蓮に豊前国の野 冊 町を施す。医術を褒むればなり」とあり、法蓮の優れた医術に対して褒賞として豊前国 40 町が与えられている。ここで法蓮と行基と結びつけたのは、法相宗の僧・道昭である。彼は唐朝より帰国後、飛鳥寺の一隅に禅院(南寺伝)を建て住でいた。道昭は唐で学んだ仏教哲学と政治学も２人に指南したことが、後の歴史をも大きく動かす２人となって行く。(※ 冊 は 40・卌は 30 という漢字)

大和朝廷合同軍は隼人の激しい殺戮した結果、この殺傷からくる伝染病が流行し朝廷はこの処理に苦慮していた。当時の仏教は医術を含む教法で、世の中の生業に就けなかったり、病にあえぐ人々を救済する福祉施設も兼ねていたことから、これらの隼人民を守ったことは充分考えられる。これが今日でも宇佐神宮で継承されている「放生会」(隼人の首 100 個を宇佐に持ち帰り凶首塚に埋めたところ、病気がはやり、隼人の祟りと取り沙汰された。この霊を慰めるために行われたのが放生会)は 8 月 15 日に蜷(巻貝)などを海に放つ会がある。後、歴史は八幡神が皇位継承の問題に巻き込まれる弓削道鏡事件や、聖武天皇没後の朝廷内の権力争いが続く舞台ともなる。

宇佐神宮から平成の御輿が参列・東大寺大仏開眼供養から 1250 年後に記念行事として 2002 年東大寺の転害会に合わせ宇佐神宮の東大寺参拝を偲ぶ御輿渡御が行なわれた。平成御輿は勇壮に境内を練り歩き、大仏と手向山八幡宮に参拝した。八幡神の奈良入りは、天平勝宝元年(749)以来の出来事で、宇佐あげての取り組みと関西県人会の協力で実現した。(神社紀行『宇佐神宮』より)

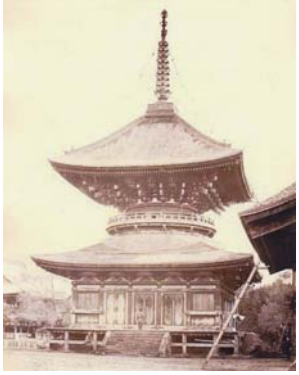
八幡三神像・鎌倉時代・三神の談笑

宇佐八幡神から東大寺大仏殿 1250 年神輿渡御参拝

本地垂迹説＝神仏習合・日本国有の神祇信仰(天津神と国津神)と伝来の仏教信仰との調和融合を図るために神と仏の関係を説くために編み出された理論が本地垂迹説。神の「本地」は「仏」であり、日本の人々を救うために仏が神として垂迹(仮の姿で現れる)した説。思想・儀礼・習俗面での融合現象に敏感だった神社では、境内に「神宮寺」(神社に付属寺院・明治初期まで続く)を建て、社僧による読経・加持祈祷を行い、神が仏の修業しながら衆生を救済しているという「神

仏習合思想」が生まれた。「本来は仏であるが、仮の姿として神となって現れる」ということになる。また、神は仏法を守護するという「護法善神説」もうまれた。**権現**「権」は「仮」は権の姿で現れること。天照大神の本地として「大日如来」、八幡神の本地は「阿弥陀如来・観世音菩薩」などの神々はそれぞれに本地は仏・菩薩を設定し、八幡大権現、春日権現、熊野権現、蔵王権現、山王権現などと神を権現名で呼ぶようになる。神社建築にも「権現造り」、大陸伝来の寺院建築の影響を受けた「明神系の鳥居と神殿」、日本古来の形を残す「神明系の鳥居」に分かれている。本地垂迹の思想を大きく受けている代表的神社としては、越前の気比神宮寺、若狭の神願寺、伊勢の多度神宮寺、常陸の鹿島神宮寺、豊前の宇佐八幡神宮寺が有名である。しかし、明治初年の「廃仏毀釈」によって、ほとんどの神宮寺が破壊されたのである。

余話・相模鶴岡八幡宮大塔・廃仏の対象になった身近な所では、現鎌倉鶴岡八幡宮は鶴岡八幡宮寺の名称であった。薬師堂、護摩堂、大塔、教堂、仁王門を取り壊し、鎌倉時代から続く鶴岡八幡宮寺は廃絶した。また、仏教と異なった修験道は大きな影響を受け、吉野、出羽三山は明治７年に全山神道化せよと命じられ、野仏まで谷間に投げ捨てられたという。一般では富士講の禁止など全国に土俗的な信仰は禁じられ野仏など山野に投げ捨てられた。(廃仏毀釈が無ければこの日本に国宝級の仏像が３倍は残されていた)この維新祭政一致政策の影響は戦後まで続いた。我々が現在見ている神社の景観は、神仏分離後の神社を見ていることになる。ある寺の宝物殿を案内してくれた住職が小声で「この仏像は〇〇からきた、この灯篭は上野寛永寺から来た」と教えてくれた。それは１４０年前の事件によって廃仏破壊から護るために仏像を他の寺院に隠した後、預かり忘れとなっているとか。年月が過ぎ返却には色々問題があるのかもしれない。鶴岡八幡宮裏の十二院の社僧達が神奈川県庁の布告を聞くと一人の反対者もなく、還俗した社僧達は自ら仏像や仏具を放棄し、社殿門前に「僧尼不浄の輩入る可からず」と掲示したと伝わる。彼らの言動は祖先を愚弄し、恩義を忘却しその身の振り方の急変振りにただ驚いたと伝わる。



鎌倉鶴岡八幡宮大塔・神仏分離以前の境内風景、元治元年(1864)撮影と推察、大塔の面積は１０間×１０間(約 18×18m)

ベアト撮影・写真家横浜開港資料館蔵・破壊される前の鶴岡八幡宮の大塔

(大塔は密教寺院の七堂の一つ多宝塔)・**八幡宮寺の大塔**

遣唐使の最後の寄港地・五島柏崎は「肥前風土記」に美弥良久の崎として登場し、遣唐使船最後の寄港地。この津より飲料水の井戸「ふぜん河」海路祈願の「岩嶽神社」等の遺跡が残る。

五島列島西端、奥は姫島、空海像碑に辞本涯(本涯を辞す)とある・８０４年に福江島三井楽の津から入唐する

日本に釈尊の遺骨がある

１８９８年、インドウッタル・プラデーシュ州の北の国境に近いピプラーワーという所で、古墳を発掘したところ、遺骨を納めた壺が発見された。紀元前数世紀の文字で「釈尊の遺骨」である旨が銘刻されていた。ゴーダマ・ブッダの真実の遺骨であることが判り、その舎利壺がカルカッタの博物館に厳重に保管されていが、後この遺骨を仏教徒であるタイの王室に譲り渡され、その一部が日本の仏教徒に譲られ、名古屋の覚王山日泰寺に納められている経緯となる。

覚王山日泰寺・愛知県名古屋市千種区にある超宗派の寺院である。タイ王国から寄贈された仏舎利(釈迦の遺骨)を安置するために創建された。「覚王」とは、釈迦の別名。また「日泰」とは日本とタイ王国をあらわしている。日本で唯一の超宗派の寺院であり、３年交代で住職を務めている。

覚王山日泰寺

『Wikipedia』より

釈迦の舎利壺

『佛像の起源』高田修著より

玄奘の霊骨が埼玉県岩槻へ分骨

昭和 17 年 12 月 23 日、当時南京に駐屯していた旧日本軍高森部隊によって、玄奘三蔵の頭の骨(頂骨)が発見された。部隊に稲荷神社を建設工事中(中華門外の丘陵)に石棺を発見した。石棺に文字が刻まれていた。原文は漢文、現代訳文で次のようになる。

《大唐三蔵大偏覚法師玄奘は、早(まえ)に黄巣の乱、長安占領 880 年頃》に因りて塔を発され、今、長干の演化大師可政が長安より伝えて此に之を葬ることを得たり。天聖丁卯(1027)2 月 5 日、縁を同じくせるもの、弟子唐文遇(その)弟の文徳、文慶と弟子丁洪審、弟子張靄玄奘法師の頂骨の塔は、初め天禧寺の東の岡に在りしなり、大明洪武 19 年(1386)菩薩戒を受けたる弟子黄福燈□□□□□普宝とが寺の南の岡、三(層)塔の上に是を遷せり。歳丙寅(同年)冬 10 月のことと伝え教うるなり。比丘守仁謹んで誌す。》(龍谷大学文学部教授・渡辺隆生氏訳)

(黄巣の乱=唐代末に黄河流域におきた民衆の反乱、唐朝滅亡の原因となる)

慈恩寺・玄奘三蔵の頂骨(頭蓋骨の皿状の骨)は演化大師とその弟子たちによって長安から南京迄運ばれ、２月５日天禧寺の東の岡に葬られて明の洪武１９年に寺の南側に遷されたことがわかる。世が乱れて皇帝御陵などでも盗掘にさらされることがあるので危険を察して遷されたと思われる。昭和１８年 2 月２３日に頂骨は南京政府(王精衛政権・親日派)に返還された。後に中国側から日本への分骨の提案がなされ「法師は仏教東漸史上の大恩人であるので中日両国の仏教徒は一意同心相共にこれを祭り永遠に法師の遺徳を鑽迎(仰ぎ尊ぶ)しよう」と日本仏教会会長倉持代表に手渡された。現在は埼玉県さいたま市岩槻区慈恩寺にある「慈恩寺」(坂東 12 番・慈恩寺観音)に昭和２５年にこの地に霊骨は納められた。又、奈良薬師寺にも昭和４６年に分骨さている。「慈恩寺は華林最上院ともいい、天長元年(824)に慈覚大師によって開かれた天台宗の古刹で、坂東３３ケ所観音霊場の１２番札所。境内の十三重霊骨塔には、中国の古典『西遊記』でおなじみの三蔵法師玄奘の遺骨が分骨され安置されています。」と説明がある。

玄奘塔（三蔵法師の霊骨塔）

平成８年建立・玄奘銅像

さいたま市岩槻区慈恩寺（慈恩寺 HP）

仏教と共に味噌・醤油が伝来している・臨済宗・鷲峰山興国寺

和歌山県日高郡由良駅下車、第八番・鷲峰山・興国寺（臨済宗妙心寺派）がある。古来より「関南第一禅林」と称されている。興国寺は通称「開山」とも呼ばれ、鎌倉３代将軍源実朝の菩提を弔うため家臣の葛山五郎景倫が建てたものである。景倫は実朝が甥の公暁に殺されたのを悼んで、高野山に登り出家し願性と改めた。尼将軍政子は彼の中心を賞て由良庄の地頭とした。願性は安貞元年（1227）この地に真言宗の西方寺を建立した。高野山・禅定院で心地覚心という僧に惚れこみ、覚心の入宋に援助したと伝わる。（臨済宗鷲峰山・興国寺案内書より）

法燈国師（心地覚心）・は承元元年（1207）信州神林村（現松本市）に生まれる。１９歳で得度、東大寺で具足戒（守るべく戒）を受け高野山に登り密教を学ぶ。建長元年（1249）宋渡し諸師に学び、無門慧開（仏眼禅師・南宋の臨済宗僧）より禅の印可を受け建長６年（1254）帰国。願性より請われて西方寺住職となる。永仁６年（1298）９２歳で入寂。（臨済宗鷲峰山・興国寺案内書より）

金山寺（径山寺）味噌・法燈国師の凄いところは、醸造技術を宋国で習得し、現和歌山県・湯浅地方へこの味噌・醤油の醸造技術を伝えたことである。その醸造技術は湯浅地方（広川町）の産業に受け継がれ今日に至っている。江戸初期の魚業・味噌・醤油業の湯浅地方の子息たちが、新天地を求め、千葉下総に地盤を築き、江戸庶民の口に合った濃口醤油・味噌味を製造した。食文化の上から見ると、味噌醤油の調味料は蕎麦や寿司などの食文化をこの時代に完成させている。料理研究家の説明では、江戸初期に江戸庶民の舌に合う濃い口醤油を醸造に成功し、その後の日本人はこの調味料超える味を生みだしていないと語る、あらためて凄いことを知る。

興国寺山門は高校生が掃除をしていた

興国寺

由良駅に看板がある

日本へ「茶」を伝えた求道僧たち・（『茶仏』宝迫典子著・校成出版社より）

平安時代、永忠(743－816)、最澄(767－822)・空海(774－835)らの留学僧たちによって、唐より持ち帰ったお茶が、嵯峨天皇を中心とする宮廷貴族に愛好された。当時の「茶」は蒸して、圧縮した餅茶の固定茶して遠方に運べる茶玉であった。この茶を日本人好みの緑茶製法に開発した祖先たちの努力は称えられる。公的な記録では在唐３０年の永忠のお茶、『日本後紀』に８１５年、「嵯峨天皇が琵琶湖西岸の近江唐崎(現大津)へ行幸の帰途に、立ち寄った梵釈寺で、僧の永忠よりお茶を献上した」記るされている。これが日本の茶の登場する最初の記録である。嵯峨天皇は、その２ケ月後に近畿諸国にお茶を植えることを命じた史実が残る。又、永忠と入れ替わりに遣唐使として唐に渡った最澄と空海は、お茶を持ち帰り嵯峨天皇との茶会の交流があったと伝わる。天台宗開祖の最澄が唐から持ち帰った茶を植えたとされる古茶園が、比叡山麓坂本の地の日吉茶園で、京阪石坂線・坂本駅前にある。１１９１年に、宋国より臨済禅・栄西禅師(1141－1215)が、お茶の実を持ち帰ったのが、後の佐賀県脊振山麓に蒔いた種が嬉野茶の始まりと伝わる。又、長崎県平戸市葦の浦に「富春庵」の裏山に種を蒔いたのが、後の彼杵茶に繋がるという。栄西は晩年、源実朝に『喫茶養生記』という茶の効用を説いた書を献上している。

明恵(1173－1232・華厳宗・栂尾山高山寺を開山)は栄西が住む建仁寺を訪ね、栄西に勧められて飲んだ茶事を明恵は、『栂尾明恵上人伝記』に「茶の徳を知った」と記している。明恵は叶わぬ天竺へ求道の夢を諦め、茶を飲みながら熱く栄西に語った事であろう。高山寺から始まった栂尾山産の「栂尾茶」は日本各地に広がった経緯となるらしい。宇治の黄檗山萬福寺の山前に明恵の碑文があって、「栂山の尾の　上の茶の木　分け植えて　跡ぞ生うべし　駒の足影」と刻まれている。その意は「栂山の尾の茶木を、馬の蹄跡くらいの間隙をあけてうえなさい」との教え、又、埼玉県の狭山茶も明恵上人が川越に茶の種を蒔いたことから始まると伝わる。

和歌山みなべ町へ白炭技術を伝えの弘法大師空海

備長炭を招来させたのは「空海」という伝承が、和歌山県みなべ町にある。８０４年、遣唐使一行と唐に渡り２年の留学の間に炭焼き技術を覚え、当時の最先端技術として白炭製炭技術を日本へ齎したという。その技術伝承が奈良の大仏の鍍金に、みなべ町産のウバメガシの炭火力によって大仏の胴周りに水銀を塗り、大量の金箔を貼り、炭火でこれを熱して鍍金がほどこされたと伝わる。（みなべ町備長炭の歴史から）

奈良大仏の鍍金は、聖武天皇・天平２１年(749)に百済王敬福（百済王系を称する帰化貴族・東漢系が奥州蝦夷地の経営に貢献）が宮城県涌谷町黄金神社・付近で、日本で最初の砂金から産金に成功している。大仏の鍍金技術に白炭の「ウバメガシ」を使用していることは、仏教伝来は渡来帰化人たちの高度技術と文化が共に伝来していることを示している。

余話・お茶・４年ぐらい前、ＮＨＫの健康番組を見ていたら、全国で一番医療費が低い所在地は、静岡県掛川市であると報道した。その理由を調査すると静岡茶所の掛川市の深蒸茶で、その茶の光明であることが解った。それならばと、筆者も俗に云う坐骨神経痛持ちなので、早速茶飲の日々を４年続けた結果、神経痛の痛みも取れ、通院治療も止めることができ大恩恵を受けている。

(参考迄・お茶飲法は茶をミルミキサーで挽き、挽いた抹茶を湯飲みに小さじ一杯、胃弱の人は少なめに、日／７―10 杯位飲む。茶の功能薀蓄は各自の感量で、小生は安価な田舎茶７、掛川深蒸茶３の割で。各自におかれましては熊笹茶・薬草茶等のブレンド茶道楽研究をお進めします)

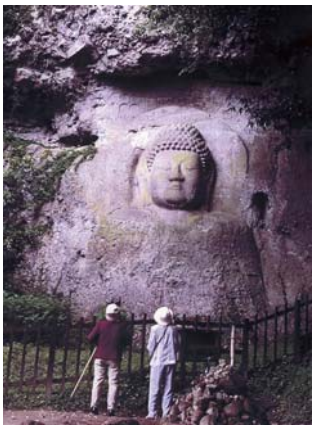
日本の磨崖仏

熊野磨崖仏・国の重要文化財・国東半島、豊後高田市平野

大分県は石を素材とする磨崖仏が８０数ヶ所を数える。旧豊後地方は阿蘇山の噴火によってできた凝灰岩地帯に、軟らかく加工に適した熔結凝灰岩に彫刻されている。熊野磨崖仏の古記録はないが、平安時代後期の造営と推定され、鎌倉初期代には大日如来や不動明王が存在していたようである。大日、不動信仰は天台信仰からの亜流で熊野信仰となり、末法思想などの密教が混淆して生み出されたらしい。豊後高田市の南端、胎蔵寺からさらに嶮し石段を登った台地に熊野大仏がある。大日如来像の高さ約８ｍの巨大なもの。刻字が磨耗しているため、曼荼羅の種類が確認できないが、理趣経曼荼羅、愛染曼荼羅、不動曼荼羅の諸説がある。１３ｍ西に不動明王像６、７ｍが刻まれている。この地方に於ける山岳修験の霊場にふさわしい山岳遺構となる。

（理趣経曼荼羅=理趣経は大日経・金剛頂経の密教の経典・真言宗各派出で読誦。愛染曼荼羅=愛染明王を本尊として描いた曼荼羅。不動曼荼羅=不動尊・動かざる尊者・大日如来の使者・空海が請来）

熊野磨崖仏大日如来（史跡・重要文化財）　大分県豊後高田市大字平野



熊野磨崖仏・高さ８ｍ背面に光背がある

不動明王・高さ６・８メートル・右手に剣

国東六郷満山霊場の拠点の一つであった胎蔵寺から、鬼が一晩で築いたという自然石の段を登って行く。かなりきつい石段登りである。自然石の階段を 300 メートルくらい登ると、大日如来と不動明王の熊野磨崖仏が一望となる。伝説では養老２年(718)となっているが、麓の胎蔵寺が記録に現

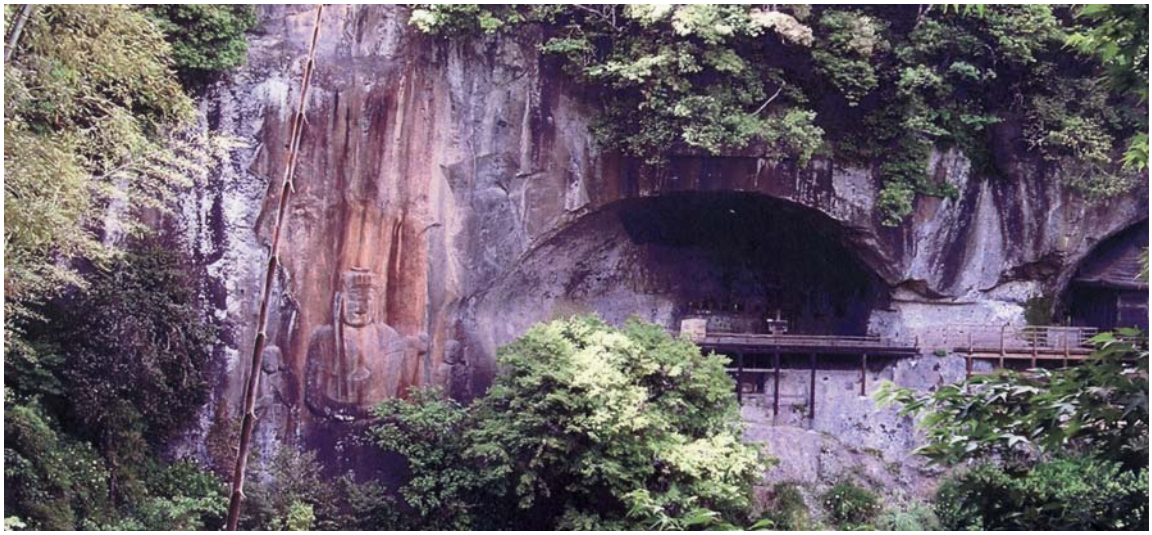
れるのは仁安３年(1168)なので、磨崖仏の建立は藤原末期と推定されている。

（熊野磨崖仏管理委員会の資料による。国東六郷満山=国東半島にある３３の寺院の霊場をいう）

普光寺不動三尊磨崖仏・県指定文化財・鎌倉時代・大野郡朝地町上尾塚・紫陽花寺

普光寺(アジサイ寺)の前の深い谷むこうに巨大な不動三蔵像はある。日本一の大きさを誇る磨崖仏大不動明王は高さ、坐高６・８ｍ、矜羯羅童子は５・４７ｍ、制吒迦童子は５・４３ｍとあり、磨崖仏では日本最大という。不動明王は日本密教で完成をみた仏像となり、土着の神々と混淆し、修験守護神の経緯の歴史を辿る。普光寺不動三尊磨崖仏は現世利益と死後の極楽浄土を求めて、山岳修験者(山に籠り修行する行者)の守護神として崇められた。

（矜羯羅童子=不動明王の従者八大童子の第７番目。制吒迦童子=同従者八大童子の第８番目。）



普光寺磨崖仏・大分県朝地町磨崖仏(左側の岩壁)

臼杵磨崖仏・平安時代後期から鎌倉時代に彫刻・大分県臼杵市臼杵川南岸

阿蘇熔結凝灰岩台地の山裾に広がり、４群大小５９体石仏群となる。平成 7 年に国宝に指定。平安時代に臼杵荘を開発した郷土豪族臼杵氏によると云われる。臼杵荘は、中央有力貴族、九条家に寄進され、都より木彫仏像師を将来させ、臼杵磨崖が造営されたと伝えられている。

国の特別史跡・臼杵磨崖仏・古園石仏(国宝)・中央の大日如来坐像２・８ｍ

古園石仏・大日如来・高さ２８０ｃｍ・その他１６１ｃｍから１８５ｃｍ・平安時代後期。大日如来を中心に、左右各６体の像が並ぶ。不動明王・多聞天・観音・勢至菩薩の４体の尊名は判明しているが、残りの像に関しては下半身が破損しているので確定できない。立体曼荼羅を表す。

ホキ石仏第二群第一龕(国宝)

ホキ石仏第一群第三龕(国宝)

第四龕・地蔵菩薩と十王立像

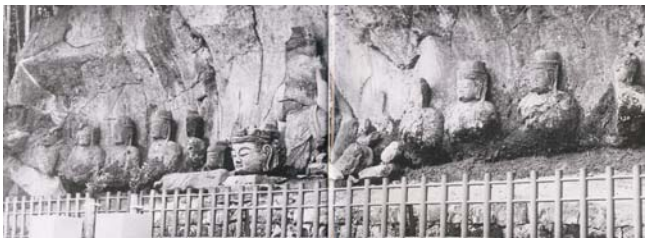
ホキ石仏第二群第一龕・阿弥陀如来２７９ｃｍ・右脇侍２６５ｃｍ・左脇侍２６３㎝・平安時代後期。奥行きが深く丸彫り像に近い状態の三尊は、中尊が丈六、両脇侍が半丈六の大作である。中尊は両手が破損しているが、本来は定印を結ぶ阿弥陀如来とされている。仏像台座は裳懸座で、箱型の丸と四角の穴は、願文・経文を納めていたという。

ホキ石仏第一群第三龕・大日如来９８ｃｍ・右如来６１㎝・左阿弥陀仏６０㎝・平安時代後期から鎌倉時代。大日如来像を中尊として、右脇侍に阿弥陀如来、左脇侍に如来像を配した三尊像。３体とも線刻された舟形光背を背負って結跏趺坐し裳懸座に坐している。

第四龕地蔵菩薩と十王立像・地蔵菩薩は仏教信仰対象の菩薩の一尊。一般的には「子供の守り神」として信じられる。偽教の『閻羅王授記四衆修生七往生浄土教』や『地蔵菩薩発心因縁十王教』によって中国道教と習合して成立した。地蔵菩薩が閻魔・十王尊が同一の尊主信仰が広まり、閻魔王は娑婆(この世)の縁を良く観ている地蔵菩薩を十王の中心に据え、死者の裁きをさせた。中国では地蔵菩薩は道教の十王思想と結び付き、閻魔王(仏教・ヒンドゥー教では地獄の主)が死者を裁くことから、地蔵菩薩と呼ばれ、死者の地獄からの救済する主尊として信仰された。

地面に据えられた仏頭の論争・崩落した古園石仏の大日如来の頭部は、まさに臼杵の顔であった。頭部を戻して復元するか否かは、市民県民のみならず全国的な関心を集め、４年にわたる論議の末、将来へ引き継ぐための最良の方法として、復元が選択されたのである。磨崖仏は深田の谷４カ所に分布している。年代は嘉応２年(1170)、承安２年（1172）の銘の五輪塔があるので、仏石との関連とみている。臼杵には比叡山ゆかりの日吉神社や天台信仰を示す名文をもつ五輪塔があることで、中国天台僧が石仏造営に関与した伝説が伝わることと、宇佐弥勒寺と同タイプの鎌倉初期の瓦が出土しているのでこの時代を想定している。昭和２７年国の特別史跡に指定され平成７年に国宝に指定された。

顔に彩色が残る大日如来の首



古園石仏・大日如来の首部復位前の写真

『石仏は何を語るか』宇佐美昇著より

菅尾磨崖仏・平安時代後期・国の重要文化財・大分県大野郡三重町大字浅瀬

菅尾磨崖仏はＪＲ菅尾駅から北へ３キロ、３万年前の阿蘇山の噴火によって出来た凝灰岩壁に５体の石仏が彫刻されている。千手観音坐像が主役、向かって右より、多聞天１・98m、十一面観音１・84m、阿弥陀如来１・78m、薬師如来１・74m、千手観音１・９１ｍとなる。平安時代後期に造営と推定、この時代の信仰に基づく生活の祈りが、千年という長い時代を継承された信仰の石像である。この磨崖仏は昔から、岩権現と呼ばれており、紀州熊野権現を勧請したという説がある。（三重町文化財保護委員会）現在の磨崖仏の姿は、鮮やかな朱色が塗られている。色彩の謎は、昭和３０年頃土地の老人が塗った説があるが、真相は不明。保存状態はよく、朱色もなかなか霊感を感じられ、不思議な魅力に包まれている。

菅尾磨崖仏・岩権現

左側２体石仏

右側２体石仏

磨崖仏・右端の多聞天を除き方形の台座に上に座している。多門天は仏世界の北方を守る神様。ここでも刀を持ち宝塔を左手に乗せており４体の仏を守護している形になっている。密教においては除災・招福・子育てを祈願すると言われており、１０００年間この地方の厚い信仰を受けてきました。とある。（現地の案内より）

緒方宮迫東磨崖仏・国指定史跡・豊後大野市緒方町

緒方町教育委員会の解説。「緒方宮迫東磨崖仏は中央に大日如来、右に不動明王、左は持国天がたっている。中尊は地元では大日如来と呼ばれている。方形裳懸座に結跏趺坐し右手は胸前で施無畏印の形で左手は膝上で世願印を結んでいる。衲衣(袈裟)は朱色で彩色されている。石仏の作風から平安後期とも、豪放な造形から鎌倉時代に造顕されたとも考えられる。」とある。

（裳懸座=坐像の着衣が長くひろがり台座を覆って垂れかかる形。結跏趺=両足の甲をそれぞれ反対の腿の上に乗せて押さえる形の座り方。施無畏印=右手の５指をそろえて伸ばし手の平を前に向けて肩の辺に上げる。世願印=手を下げて手の平を前に向けた印相。）

緒方宮迫東磨崖仏正面中央・大日如来　　印相から釈迦・阿弥陀如来とも　　昆沙門天・246㎝

（緒方宮迫東・西磨崖仏、地獄谷石窟仏、春日山石窟仏、大門仏谷阿弥陀磨崖仏、狛坂磨崖仏の写真は「石仏」写真集、河合哲雄氏のご提供による）

緒方宮迫西磨崖仏・国の指定史跡・豊後大野市緒方

緒方町教育委員会の解説。「向かって右から阿弥陀如来、釈迦如来、薬師如来の順に並び、三尊形式をなさず、平等並列の状態で彫られている。三如来とも、結跏趺座して、阿弥陀は定印、釈迦と薬師は右手を施無畏印、左手を与願印に結んでいる。肉身は代赭色、法衣は朱色や黒色で彩色されている。この宮迫西石仏の像顕時代は、大粒の螺髪や類型化した衲衣、単調な衣裳の表現から推察すると鎌倉時代とも考えられる。

緒方宮迫西磨崖仏・中央釈迦如来・左に阿弥陀如来・右に薬師如来・３体像が等しく並ぶ

頭塔・国の指定史跡（１９２２年）・奈良市高畑町

史跡頭塔保存顕彰会の案内解説に次のようにある。《**史跡頭塔**は東大寺南大門の南 950m、新薬師寺から西北西 700mの位置に築かれた方形七段の土塔です。奈良時代の僧玄昉(―745)の頭を埋めた墓との伝説もある。名の由来は土塔が訛って頭塔と呼ばれるようになったと思われます。神護景雲元年(767)に東大寺の僧実忠が土塔を築いたと古文書の記録にあり、仏舎利を納める仏塔と考えられます。**頭塔石仏**は第１・３・５・７の奇数段４面に各１１基ずつ総数４４基の石仏が整然と配置されていたと考えられています。そのうち２８基が現在まで確認され、２５基の表面

には浮彫や線彫で仏菩薩が表されています。奈良時代後期。》

頭塔・奈良県教育委員会・文化財保存課内　　浮彫如来及両脇侍二侍者像　　浮彫二如来及六侍者像

地獄谷石窟仏・国の指定史跡・奈良市高畑町

地獄谷石窟仏正面中央の釈迦如来坐像は高さ１４０ｃｍ(盧舎那仏・弥勒仏とも・奈良時代後期)左側は薬師如来、右側十一面観音といわれ、春日山石窟仏の中では最も古いといわれている。

解説文に《春日山ノ東方地獄谷國有林中ニ在り、凝灰岩ヲ切出シタル跡ト覚シキ石窟ヲ利用シテ佛龕(厨子)トナシ、其ノ壁面ニ刻線ト色彩トヨリ成レル佛菩薩等ノ像六躯アリ、平安朝末期ノ作風を存セリ》とある。(国指定文化財等データベース weblio 辞書より)

地獄谷石窟仏(聖人窟)中央釈迦如来・左如来立像・右十一観音立像　　中尊右手施無畏印・左与願印

春日山石窟仏・国の指定史跡・奈良市高畑町春日奥山・平安末期

春日山石窟仏は奈良市の春日山山中石切峠近くにある石仏の一つ。石切峠に近い南面に露出する凝灰岩の岩壁に龕(仏像を納める厨子)を開窟して、その壁面に仏像を彫り色彩を施して、東西二窟からなる。**東窟**は間口約５ｍ×奥行き２ｍ×高さ２・４ｍとなり、現在仏坐像(中央柱４面)４体、菩薩立像３体(東壁)、地蔵菩薩立像４体(西壁)、四天王立像２体(東・西壁)がある。**西窟**は間口約３・６ｍ×奥行２ｍ×高さ２・４ｍに、仏坐像５体，多聞天立像一体が破損状態で残る。

西窟壁面に久寿２年(1155)及び保元２年(1157)の年号が刻まれているから、東窟も相前後して開削されたと見られる。(『国史大辞典』吉川弘文館より)

解説文《春日山國有林中ニ在リ、凝灰岩質ノ山腹ニ石窟ヲ設ケ、其ノ壁面ニ佛菩薩等ノ群像ヲ半肉彫ニセルモノナリ石窟ノ一部ハ、既ニ崩壊シテ群像中破壊セラレタルモノ少カラズト雖、猶十八躯ヲ現存セリ、壁面に「八月二十日始之作者今如房願意」ノ陰彫ト「保元二年大歳丁丑二月二十七日佛造始四月二十一日」ノ黒書アリ》とある。(国指定文化財等データベース weblio 辞書より)

春日山石窟仏東窟・中央柱・顕教（けんぎょう）４仏が彫られている
（顕教=仏語、顕（あらわ）に判りやすく説き示した教え）

西窟・阿弥陀如来像定印を結ぶ

大門仏谷阿弥陀磨崖仏・京都府木津川加茂町

大門仏谷（だいもんほとけだに）阿弥陀磨崖仏は年代不詳。像形から見て平安後期から鎌倉時代初期か。仏谷にあって丈６（２・6m）如来坐像である。当尾（とおの）の石仏の中で最大の磨崖仏となる。

大門仏谷阿弥陀磨崖仏・高さ２６０㎝

当尾（とおの）地区最大の磨崖仏

狛坂磨崖仏・滋賀県栗東市荒張地先

石仏の造りが奈良時代後期説、平安時代初期説がある。花崗岩の塊に如来と両脇侍（きょうじ）が浮彫されている。栗東市南部に位置する狛坂磨崖仏があり磨崖仏の特徴から渡来人の造形説ある。朝鮮半島からの帰化人は「狛坂（こまさか）」は「高麗（こうらい）」の説が有力と思われる。

狛坂（こまさか）磨崖仏正面

中尊阿弥陀如来像の法衣まといは新羅の彫刻の影響が見られる

日本人庶民の信仰心・右の臼杵磨崖仏を見て癒しと感たり、いい風情と思われる人は、幸せの人生を送られた方と筆者は勝手に想像する次第ですが、日々の生活に感謝して手を合わせ、家内安全・商売繁盛・子宝に恵まれますようにと、寺や神社に祈願する日本人一般の庶民的な神仏信仰感覚ではいかと思う。

臼杵磨崖仏

日本人の仏教の受け止め方は、自己の心を仏さまに投影して、現在の自己の生活を振り返る。この様な信仰心が日本人の一般的な信仰のライフスタイルと思もわれる。信仰心の強い外国の人々から言わせると「日本人は信仰心がない」との話を耳にする。敬虔なキリスト教の信徒たちが驚き想うことは、信仰心の無い日本人は、神に死を導かれる死ではなく「自身で死を恐れずに自身を導くことができる」との話を聞くことがある。巷ではお年寄りが「そろそろ、おむかえがくる」という話をよく耳にする。おそらく日本古来の森羅万象からくる「物(もの)の哀(あわ)れ」と、豊な日本の自然環境の中で、自然崇拝・先祖崇拝と仏教が融合した信仰を日本民族は文化として持っている。その仏教文化の信仰が、自らの死を導き、死を納得させる思想を醸造させて来た歴史を我々は得ている。２０１１年３月１１日、東日本大震災に被災された方が、お墓参りをして「祖先があっての私たちですから」と語っているテレビ映像を見た。日本民族の深層に、祖先崇拝信仰が我々の身体に沁み込んでいる証と思えた。これが庶民の仏教感覚だと確信した次第である。日本人の高齢者たちが語るあの世とこの世の話は、人生を長く生きられたことに感謝の気持を表していると思う。しかしこの世は感謝の気持だけで人生を送れる方々ばかりではない。愛する人の死を認められない人、死を受け止める事ができない人も多々いる訳である。不幸にして幼児をあの世に送くらねばならなかった親御さんたちの「苦」を、仏教信仰はどのような形で心を和らげてきたのであろうか、そして、死をどの様に受け止めてきたのであろうか、青森県の恐山信仰をみる。

賽(さい)の河原・青森県むつ市・恐山

恐山信仰・恐山は死者が行くと信じられた山である。恐山という字を当てたのは地形の異常な風景は、火山のカルデラの跡から名付けられたものであるらしい。昔から下北半島の人々は死者の魂が、行き着く先は恐山、お年寄りは「死ねば恐山(オヤマ)へ行く」と信じられてきた。無限地獄、修羅地獄、畜生地獄など俗に１３６の地獄があって、赤い水を湛える血の池、幼児の魂が集るという「賽の河原」など冥界の霊場とされてきた。恐山は、山岳信仰や山岳仏教（密教）と仏教の地獄信仰が融合され恐山信仰となっていったと考えられている。

毎年７月２０日から２４日に「恐山大祭」が開催され、遠近の参詣人と観光客で賑わい、イタコの口寄せは春３月「ハナオロシ・花降ろし」、秋１０月「モミジオロシ・紅葉降ろし」と呼んでいる。恐山信仰は死者の霊を口寄せする巫女(みこ)(イタコ・イダッコ)は有名で、イタコとは盲目（民俗史なので了解の程を）の女性が巫女となり神降し・仏降しをしてあの世にいる死者の代わりに口説(くぜつ)をする。津軽南部のイタコの歴史は古いが、恐山の祭典にイタコが口説の参加するようになったのは、大正１１年の夏祭りからという。イタコは寺側とは無関係で、死者供養に参拝する遺家族たちの依頼に応じて死者を呼びだし、あの世の死者の気持を代弁して依頼者に伝える巫女の口寄せとなる。

恐山は、天台宗の慈覚大師開山したと伝えられる。(円仁は恐山に来ていない)その後、別当寺の円通寺が荒廃した堂宇を修復再興し、現在は曹洞宗の吉祥山円通寺が管理となる。元々の恐山信仰は、漁民(航海安全)や農民(五穀豊穣)の「神降し」「仏降し」の山岳信仰の聖地であったが、先の戦争で多くの戦没者の霊と、鎮魂の回向(死者の成仏を祈る)する人々が恐山登拝に集まり、夫や息子の仏降しをして、妻や母親がイタコの口寄せで死者の気持を聞いた。昭和３０年代、イタコの仏降しの様子がマスコミで報道されて以来、恐山信仰が世の中に広まった。現在の恐山は、戦後の時代が過ぎて戦没者の仏降しの雰囲気はあまりなく、病気や不慮の事故で不幸に見舞われた幼児の写真など、石積塔や供養に奉げたお地蔵さまが多く見られる。死を受け止められない親御さんたちの、幼児に語りかける祈りの言葉が添えられ、まだ癒えていない親たちの苦しみが伝わってくる。

賽の河原を過ぎると砂浜があって極楽の浜となる・正面は宇曽利湖

『西院河原地蔵和讃』・俗に空也上人作と伝わるが、室町時代の『富士の人穴草子』や『月日の御本地』などの物語に現れ、みどり子(嬰児)の石積の情景は、江戸時代初期から中期かけてこの『西院河原地蔵和讃』に取り入れられ、広く全国に広まったと考えられる。「西院」の河原の地蔵和讃は仏教的な歌で、和讃は和語の仏教讃歌、仏教の教義や仏・菩薩・高僧などの梵讃(仏の徳) 漢讃(徳を漢文)を和語で称え、七五調を一節とし、曲調をつけて詠ずる讃歌となる。

《これは此の世の事ならず、死出の山路の裾野なる、西院の河原の物語、聞くにつけても哀れなり、二つや三つや四つ五つ、十にも足らぬみどり子が、西院の河原に集まりて、父上恋し母恋し、恋し恋しと泣く声は、此の世の声とはこと変わり、悲しき骨身を通すなり、かのみどり子の処作として、河原の石を取り集め、此れにて廻向(死者の成仏を願う仏事供養)の塔を組む、一重組んでは父のため、二重組んでは母のため、三重組んでは故里の、兄弟我が身と回向して、昼は一人で遊べども、陽も入相のその頃は、地獄の鬼が現れて、やれ汝等は何をする、娑婆(現世)に残りし父母は、追善作善(冥福を供養)の勤めなく、ただ明け暮れの嘆きには、むごや悲しや不憫やと、親の嘆きは汝等が、苦患(地獄に落ちて苦しむ)を受ける種となる、我れを恨むること勿れと、黒鉄の棒を差し延べて、積みたる塔を押し崩す、その時能化(菩薩)の地蔵尊、ゆるぎ出でさせ給いつつ、汝等命短くて、冥途の旅に来るなり、娑婆と冥途は程遠し、我れを冥途の父母と、思うて明け暮れ頼めよと、幼きものをみ衣の、裳のうちにかき入れて、哀れみ給うぞ有難き、未だ歩

まぬみどり子を、錫杖の柄に取り付かせ、忍辱慈悲(慈悲深い)のみ肌に、抱き抱えて撫でさすり、哀れみ給うぞ有難き、南無延命地蔵大菩薩、真言、オン、カ、カ、カ、ビ、サンマ、エイ、ソワカ》とイタコは哀調帯びた声で依頼者に口説する。

地蔵菩薩・サンスクリット語クシティ・ガルバ、菩薩の一尊。クシティは大地、ガルバは胎内・子宮の意、意訳して「地蔵」。大地が全ての命を育む力となるように、苦悩する人々を大慈悲の心で包み込む。子どもの守り神として信仰され、「お地蔵さん」と親しまれる。子安地蔵・身代り地蔵・とげ抜き地蔵など、衆生に於いては身代り受ける地蔵となる。

恐山イタコの詠じ・『西院河原地蔵和讃』イタコの口寄せの歌は、イタコたちは口寄せを「商売」といい、中世より目の不自由な女性たちが、イタコ師匠に弟子入り修行、覚えた讃歌を、あの世の七五調の口説は、神懸りの「詠ずる商売」は、イタコの喋る方言は言霊である。

『西院河原地蔵和讃』・明治 17 年石川県・別宮又別宮又四郎(近代デジタルライブラリー・国立国会図書館より)

『日本民俗文化資料集成』第六巻より引用する。《(前文略)二つや三つや四つ五つ、十にも足らぬ嬰児が、賽の河原に集りて、父恋し母恋し、恋し恋しと泣く声は、この世の声とはことなかれ、悲しや骨身につきささる。青い雲走るは父にさがる(ぶらさがる)。白い雲走るは母にさがる。黒い雲走るは恋しい兄弟にさがる。我は先に立つ。(略)》とイタコは詠じる。

また別のイタコは方言で、《(前文略)わが父母様や、このところの地蔵様見だならば、わが父母、賽の河原の地蔵様見だならば、わが母と思ちおえでいるごとだば、赤鬼、青鬼にせめられで、汝らの幼子、てまえの父母、あわれだと言うて、赤鬼ほど、石積め、花積めと、積めば、くずさで、積めば、くずさで、十の指から血を流し働き積む、・・・(略)》と哀愁の感情を込めて語る。

三途の川で石積している幼児は、生まれてわずかな間であの世に行き、父母を悲しませた罪は重い。功徳を積まない幼児は三途の川を鬼たちは渡さないという。鬼の情けで、「石積ができたら川を渡してやろう」と幼児らに言えば、幼児たちは指に血を流しながら、一つ積んでは「父さんにあいたい」二つ積んでは「母さんにあいたい」といって石塔をつくる。見回りにきた鬼は「こんな積み方ではご功徳がない」だめだといって石積を突き崩す。それを聞かされた親御は幼児に代わって石を積み、賽銭をあげ、僧侶に読経してもらい、子らの責苦を少しでも軽くしてやりたいと恐山の登ってくるのである。恐山信仰は地蔵菩薩が衆生を確かに救っている。

賽の河原・位置する場所は、あの世とこの世の境界的な場所にあるという。三途の川を渡る手前であり、地獄の外側に位置することになる。賽の河原は地獄であって、地獄の境ということにな

る。親の胎内にいる間、親に苦しい思いをかけておきながら、幼くしてあの世に先立って行く罪を問われているのである。「西院河原地蔵和讃」で子どもが受ける苦患(地獄に落ちて受ける苦しみ)とは、鬼に崩されても崩されても石塔を積み続ける、何故、それは現世の親が嘆き悲しみ、子どもの追善供養を怠っているというのである。つまり、この理屈を裏返せば、現世の親が嘆き悲しむことを止め、しっかりと子供の追善供養をすれば、子供は賽の河原で苦患を受けずにすむ、現世の親が幼くして死んだ我が子を苦患から救いだす方法を諭しているのである。

三途の川・死者が冥界に入るまえに渡るとされる川の名。これを説く『地蔵十王経』(道教や仏教での地獄の審判の１０尊・頁 153 参照）は中国で成立。日本での成立『延命地蔵菩薩経』となり日本各地に敷衍(広げる)された「偽経」で三途の川の観念は仏教本来のものではない。

『定本柳田国男集』第２７巻の「賽の河原の話」、サイノカワラの根源は、サエノカミの祭場と通じるといわれる。サイノカワラの「サイ」は一般に「西院」「賽」の文字をあてるが、本来は「塞・ふさぐ」「障・さまたげる」にあてはまり、「さえぎる」という意味に解され広い意味の村境や山の峠などに悪霊や疫神などを防ぎ止めるために、石など積む習俗が伝えられており、古来よりのサエノカミや道祖神を祭る信仰と認められる。さまざまな地蔵のあり方をみると、それは特定の宗教の教義を越えて、日本人の深層の根底に繋がるものであると述べられている。

（参考文献・雑誌『国文学・解釈と教材の研究』「賽の河原の地蔵」大島建彦著・『東北の山岳信仰』岩崎敏夫著・『日本の民俗青森』森山泰太郎著・『地蔵の世界』石川純一郎著・時事通信社・『子どもの中世史』斉藤研一著・吉川弘文館より）他に源信撰『往生要集』・御伽草子『富士の人穴草子』・『矢田地蔵毎月日記絵』等がある。

庶民が読んだ山東京伝作の佐比の河原・山東京伝(1761－1816)作家・浮世絵師。文化６年(1809)に『本朝酔菩提』巻之一「跋羅駄闍尊者・善悪因果序品第一」に「佐比の河原の説経節」がある。香晒という女性が深い事情があって菌(きのこ)を煎じて飲んで、胎児を脱す話である。煎じ汁を飲もうととした刹那、折り戸の外から門説教(鎌倉、室町期仏教の経文等の経義を説いて衆生を導く・後の浄瑠璃)の修行者に助けられる物語である。佐比の河原の部分をみる。

《長柄の笠を打かけ、佛の教経文を、俗に聞かする説経の、篁の竹のサ々菩薩、節も唱歌も殊勝にて、いとゞ哀を添へにけり。

帰命頂礼世の中の、定め難きは無常なり。親に先達つ有様に、諸事の哀れを止めたり、一つや二つや三つや四つ、十より内の幼子が、母の乳房を放れては、佐比の河原に集りて、昼の三時の間には、大石運びて塚につく、夜の三時の間には、小石を拾いて塔を積む。一重積んでは父の為、二重積んでは母の為、三重積んでは西を向き、樒(梻・シキミ科・仏前草)程なる掌を合わせ、郷里兄弟我為と、あらいたはしや幼子は、泣々石を運ぶなり。手足は石にてすれただれ、指より出る血の滴、身上をを朱に染めなして、父上恋し母恋しと、唯父母の事ばかり、いうては其儘打ち伏して、さも苦気に嘆くなり。あら怖しや獄卒(悪鬼)が、鏡照日の眼にて、幼き者を邪睨附け、汝等が積む塔は、歪がちにて見苦し見苦し。斯くては功徳に成難し、疾々是を積直し、成佛願うと叱りつつ、鉄の搒笞(金棒・金砕棒)を振揚げて、塔を残らず打散す。あら痛しや幼子は、又打ち伏して泣き叫び、呵責に隙ぞなかりける。罪は我人あるなれど、殊に子供の罪科は、母の胎内十月の内、苦痛さまざま生れ出て、三年五年七年を僅か一期に先達ちて、父母に嘆きをかくる事、第一重き罪ぞかし。母の乳房に取附きて、乳の出でざる其時は、せはりて胸を打たたく。母

は是をも忍べども、などと報いのなかるべき。胸をたたく其の音は、奈落の底に鳴り響き、修羅の鼓と聞ゆなり。父の涙は火の雨となりて其の身に降りかかり、母の涙は氷となりて其の身を閉づる嘆こそ、子故の闇の呵責なれ。斯る罪科のある故に、佐比の河原に迷い来て、長き苦患を受くるとよ。河原の中に流あり。娑婆にて嘆く父母の、一念届きて影うつれば、のう懐しの父母や、飢を救いてたび給えと、乳房慕いて這い寄れば、影は忽ち消え失せて、氷は炎と燃え上り、其の身を焦がして倒れつつ、絶入る事は数知れず。中に賢き小児等は、色よき花を手折来て、地蔵菩薩に奉り、権呵責を免れんと、咲乱れたる大木に、登ろとすれど情なや、幼き者の事なれば、踏流しては此彼の、荊棘の刺に身を刺れ、総て鮮血に染りつつ、漸々花を手折来て、佛の前に奉る。中に這出る水子等は、胞衣を頭に被りつつ、花折る事も叶はねば、河原に捨てたる枯花を、口に咥えて痛しや、佛の前に這い行きて、地蔵菩薩に奉り、錫杖衣に取附いて、助け給えと願うなり。生死流転を放れねば、六趣輪回の苦は、唯是のみに限らねど、長夜のねぶり深ければ、夢の驚く事もなし。唯願はくは地蔵尊、迷いを給えかしとぞ唱えける。》

《山東京伝の注釈。「**門説経**」三味線に合わせて語る太夫等。「**佐比の河原**」山城国（京都府南部）紀伊郡に佐比の里有り。『三代実録』に貞観１３年閏(871) ８月２８日の条に、百姓の葬送ならびに放牧の地として、この下佐比里と上佐比里がしめされている。「佐比の河原にて小児小石を塔に積むという事」は『法華経方便品』に「乃至童子戯。聚レ沙為ニ佛塔一。如レ是諸人等。皆已成ニ佛道一。と見えたり。」とある。（跋羅駄闍尊者=釈迦の弟子１６羅漢の１番）

古く山城国紀伊郡の佐比の河原は、現、京都市南区の吉祥院の諸町に属し、天神川と桂川の合流点の一帯を指す。空也上人が念仏を巡回された承平天慶の乱の頃（931－957）、戦乱の明け暮れていた時代、死人は野晒しにされ、ましては餓死した子ども等は佐比の河原に遺棄され、その河原に響く、空也念仏の声明は正に地獄に仏、地蔵菩薩に見えたに違いない。

『本朝酔菩薩』有明堂書店・昭和２年より

むすびに

仏教は何故に母国インドで受け容れられなかったのか、矢張気になるので考えてみたい。平たく言えば、仏教は地味であり、日本人から観ればヒンドゥー教は派手である。日本の仏教は一般的に自身の心で自問する信仰の形が多い。ヒンドゥー教は日本人から観れば熱気の炎に身を任せる宗教、日本仏教は自身を静かに「仏」と向き合い自己を投影する形、ヒンドゥー教は神々の霊力に自らを導いてもらう形、ヒンドゥー信仰者感覚かすれば「仏教」は心気臭(しんきくさ)い宗教と感じるであろう。日本人から「ヒンドゥー教」を観れば、神々の霊力による現世利益要求が強い宗教にみえる。

仏の入滅後、仏教はインド国に於いて、時の為政者の為の政治統治教義と結びつく要素を持ち合わせていた。仏の覚者は人々に仏教教義を講義する僧、即ち領主の国家運営に協力して行く僧侶を輩出する宗教となって発展する。一般農民たちに仏教の信仰の集まらず、政府関係者・商業工業者・交易業者の人々を中心に信者が集ってゆく。仏教経義を共有する人たちは、国を司る人や交易者を中心とした人々で、後世の我々は釈迦供養者の名前を、石窟寺院等、石窟や壁画にその喜捨名が刻まれているので知ることができる。交易商人たちは商圏を安定させるために西域諸国や中国地域に、同じ価値観の信仰、即ち同じ仏教思想を共有することによって、商売繁盛に繋げてきた歴史を得ている。

時代が下って母国に於いては、仏教はヒンドゥー教と教義上の類似性が多く、インド風土での仏教は衰退の原因となる。インド人の宗教感覚に於いては、ヒンドゥー教最高神ヴイシュヌの９番目の化身が「ブッダ」(9 頁絵図) となっていることは、仏教はヒンドゥー教の一派ということを意味する。自己を糞掃衣(ふんぞうえ)に身に包み厳しく修行を求めるならば、裸身で禁欲修行思想のジャイナ教(ジナ教)が存在している訳で、インドの風土に於いては自己完成のみ求める仏教は、ヒンドゥー教亜流の修行宗派の一派と見なされる歴史的経緯を辿る。結論として、インド風土の人々は仏教を個人的な修行を目的とした教義には関心は薄く、強烈な密教思想から隔てた仏教は、ヒンドゥー教の魅力と霊力に圧倒されインド大地に飲み込まれてしまった。２００１年のインド国勢調査によれば、総人口１２億余人のうち、仏教徒７９５万５千人、総人口の０・８％となっている。

北インドから北東に伝播した仏教は、ガンダーラ・西域国々や中国を通過する過程に於いて、仏教は釈尊の教法から外れ、各民族のアニミズム風土文化と融合し、密教仏教として発展し伝播して行く。釈尊の教えは自己の成道の完成を目指したものであったが、伝播の過程で、その国々の成道の在り方が変わり、為政者の為の政治色の強い呪術的な祈祷宗教として発展した。一般民衆の仏教の受け止め方は、現世利益の信仰として繁栄し、中国の漢訳仏教は密教思想の仏教となり東漸していったのである。又、中国仏教の発展過程に於いて、最も独特の仏教として発展したのは禅宗で、農民と共に生き、作務衣を着て労務しながら慧眼(けいがん)(見通す智慧)する仏教、この禅宗こそが中国特有な仏教となる。禅宗が晩唐から宋代にかけて日本へ伝えられた禅宗は、貴族や武士階級に好まれ、鎌倉五山・京都五山に繋がって行くのである。

アジア全体の仏教を眺めてみれば、東アジア仏教圏の中核をなす中国の「漢訳仏教」、即ち経典は全て漢字の翻訳に因って広まった仏教であり、それは中国仏教にほかならない。

釈迦の教法から著しく異なった漢訳仏典は、アジア共通の漢字圏諸国に広まり、その大きな特質は漢訳経典に基づいて成立した仏教が、アジア全域に伝播した歴史経緯を辿る。現在、アジア

で読誦(どくじゅ)されている経典は、各国の言語に置き換えて翻訳され、各国の言語発音こそ異なるが、同じ漢訳経典を本(もと)にしている経典なのである。

我が国に於いては伝教伝来時、聖徳太子による日本国家鎮護と安寧を目指し、国民の漢字勉学と共々に経典を取り入れた大英断は、現代から振り返れば、聖徳太子の日本国家進路の分岐点であったことを知る。日本民族は古来より八百万(やおよろず)の神々の文化、祖先崇拝文化をもって中国仏教を理解し、民族の特性と感性を生かし神仏習合の日本流の仏教を作りあげた。日本へ伝来した大乗仏教は、釈尊の教法とも異なり、漢訳経典を日本民族の感覚に合わせた教法、日本の原始神道信仰・祖先崇拝信仰・中国から影響を受けた『論語』『老子』や道教などの文化教養で、日本民族は仏教を解釈し完成させた仏教なのである。

日本民族は古来より「呪術祈祷の宗教心」を持っていて、生者は死者の霊魂の実在を感じ取り、生者があの世の死者に語りかける民族文化を持ち、仏教の伝来時より仏教僧たちは神聖な山々に分け入り、霊気に触れて修行する習慣を得て、神聖な山中で仏教の修行方法を学び、日本古来の山岳信仰と仏教が混交した。仏教僧は死の穢れや悪霊に触れることを怖れず、歴史上に於いて横死の人々の死骸をねんごろに弔い、読経して悪霊をしずめた。死者の追善供養は日本人の祖霊崇拝の信仰とも結びつき人々の不安を鎮めた。後に神道と仏教の融合を辿り、神社境内に神宮寺の建立へと発展する歴史経緯となる。神道(神社)は古来より死穢(しえ)を忌み嫌う思想があり、神社構造物の朱墨、鳥居の朱色に蘇生・復活・永遠の生命力を暗示させる信仰となり今日に至る。

考察すれば、それは日本民族の神仏習合であったからこそ、否定する族(やから)も少なく、日本民族全体に受け容れられた仏教として発展した。釈迦の教えからは遠ざかり、仏教伝来時に於いては政治的な鎮護国家の先導教義の仏教であったが、やがて戦乱の世を通過する過程で、武士階級者達による生死哲学として一族の死者に供養しなければいられない運命感を持っていた。為政者は一族の寺院を建立し、供養と繁栄を願い建立したのが寺院の始まりとなる。大衆庶民は戦乱の世に巻き込まれれば、飢餓や死して野晒しとなったが、それでも家族を供養しなければ明日を生きぬくことができない民族性を持っていた。インド人はガンジス川で沐浴と死者を荼毘にふし、死者の灰をガンガーに流せば生者(しょうじゃ)の心の全てが修まる。自己の救済、輪廻転生なのである。日本人は愛する人の死を認め、死者の供養を滞りなく済ませば、生者は日々の生活を取り戻すのである。

我々は時には立ち止まり、仏教寺院への参詣で心の癒し、心の洗濯をし、明日の希望に向かって生きて行けるのは仏説を拠(よりどころ)にしているからである。

合掌

２０１３年　３月　雛祭り　　池田勝宣

歴史紀行や紀行物語に関心がございましたら、拙著の電子書籍、『義経不死伝説の声を聞く』、をお読みいただければ幸いです。関東から蝦夷地まで踏査、そしてモンゴルまでの紀行物語となります。こちらは有料となりますが下記の通りとなります。

自己紹介

池田勝宣（いけだかつのぶ）１９４２年神奈川県藤沢市生まれ。歴史研究会旧会員。